

# ◆◆◆◆◆ 目 次 ◆◆◆◆◆

## 巻 頭 言

福井県英語研究会を展望する .....	福井県英語研究会会長	松 田 新 一 .....	1
---------------------	------------	---------------	---

## 発刊に寄せて

.....	福井県英語研究会副会長	勝 木 博 一 .....	7
.....	福井県英語研究会副会長	水 谷 善 長 .....	9

## 平成29年度福井県英語研究会役員 .....

福井県英語研究会の沿革 .....	11
-------------------	----

## 平成29年度事業報告

1) 福井県英語研究会事務局 .....	事務局長	中 村 珠 美 .....	13
2) 県中教研英語部会 .....	事務局長	渡 辺 桂 子 .....	15
3) 県中教研英語部会都市部会 .....	各部会長	.....	32
4) 県高教研英語部会・県高文連英語部会 .....	代表理事	中 村 珠 美 .....	43
5) 企 画 部 .....	部 長	西 口 佳 光 .....	51
・高校英作文コンテスト委員会 .....	委 員 長	吉 川 長 利 .....	53
・高校英語弁論委員会 .....	委 員 長	青 山 秀 樹 .....	66
・中学校英語弁論委員会 .....	委 員	園 井 圭 介 .....	72
6) 放送テスト部 .....	部 長	加 藤 修 .....	77
7) 広 報 部 .....	部 長	稲 葉 芳 明 .....	82
8) 研 究 部 .....	部 長	辻 智 生 .....	83
・リーディングテスト委員会 .....	委 員 長	高 木 裕 代 .....	85
・リサーチ委員会 .....	委 員 長	水 木 毅 .....	87
・TEFL 委員会 .....	委 員 長	牧 野 剛 士 .....	88

## 第67回全英連新潟大会報告 .....

広 報 部	織 田 昌 宏 .....	89
-------	---------------	----

## 特別企画

・ 広げよう英語科の輪（越前市） .....	93
武生第一中学校、武生第二中学校、武生第二中学校坂口分校、武生第三中学校 万葉中学校、武生第五中学校、武生第六中学校、南越中学校 武生高等学校、武生高等学校池田分校、武生東高等学校、武生工業高等学校 武生商業高等学校、南越特別支援学校	

## 特別寄稿

「The Unbearable Ambiguity of Being ～カズオ・イシグロを読む～」 .....	大野高校	稲 葉 芳 明 .....	111
---	------	---------------	-----

## 資料

・ 岩崎賞受賞者およびタイトル一覧 .....	165
・ 第37回岩崎賞論文募集要項 .....	168
・ 英研総会講演者一覧 .....	169
・ 英語研究会歴代役員一覧 .....	173



# 福井県英語研究会を展望する


福井県英語研究会会長

松 田 新 一

この1年も(!)英語教育をめぐっていくつも大きな動きがあった。昨年3月には、小・中学校の新学習指導要領が告示され、小学校に外国語科が新設されたり、目標の記述が大きく変わったり、「話すこと」が「やり取り」と「発表」の2つの領域になったり等々、これまでになく大きな改訂であった。また、大学入試に関連しては、2020年度からスタートする「大学入学共通テスト」において、「話す」も含めた4技能を評価することになったり、そのために民間の資格・検定試験を活用したりすることが発表された。本県においては、県立高校入試で英語検定の取得級に応じて加点されるように入試制度が改定されたり、小学校で平成30年度から外国語科を先行実施し、6年生から順次行っていくことになったりと、英語科だけでなく小中学校全体を巻き込む大きな変革となっている。

そのような中、昨年11月に県英語教育研究大会鯖丹大会が「自分の気持ちや考えを生き生きと伝え合う生徒の育成」の研究テーマの下、朝日中で開催された。文部科学省初等中等教育局の平木裕視学官にご臨席いただき、内藤元彦教諭とALTによる2年生の公開授業、研究概要説明、そして平木視学官による講演が行われた。公開授業は、近々来日するALTの友人に、生徒たちが先日遠足で訪問した京都のおすすめの場所を紹介するというもので、ALTの友人からのEメールが動機づけとなって、自然な流れの中で、京都について生徒たちが持っている背景知識を活用しながら、ペアでのインタラクションを通して各自の考えを深めていき、最後にそれぞれの生徒が考えたおすすめの方法を提案するというものであり、当然のことながら授業全体が英語で行われていった。まさに、新学習指導要領で提示されている「具体的な課題等を設定し、生徒が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、コミュニケーションの目的や場面、状況などを意識して活動を行い」「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」「言語活動で扱う題材は、生徒の興味・関心に合ったものとし、…(中略)…学校行事で扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をすること」に沿った授業であった。授業後の平木視学官による講演では、新学習指導要領について詳しく解説されたが、その中でも直前の公開授業の場面場面が何度も引用されたし、当日の夜に内輪で行われた平木視学官との懇親会でも、これまで見てきた授業のベスト3の1つに入るので今後全国で紹介していきたい、という言葉は視学官からいただいたことから、その内容のよさがうかがえる。余談であるが、平木視学官が朝日中から帰られる際、わざわざ内藤教諭を呼ばれて、2人でツーショットをとらせてほしいと頼まれたのである。参加された皆さんも感じられたように、やはり本県の英語授業は全国をリードしているし、その礎を築いてきたのはこの福井県英語研究会であり、それが着実に次の世代に受け継がれていることを感じる。


振り返ってみると、私が教員になった頃は、中学校での英語の授業時間数が週4時間から3



時間に減った（しかも選択教科という位置づけであった）ことをめぐり、全国的に大きな議論が起こった時期であった。3時間ではとても指導できないので4時間に戻すよう強く訴えていくことに力を入れようという考え方と、3時間の中でどのようにして生徒に英語力をつけることができるか指導法の工夫に力を入れようという考え方に、大きく分かれた。もちろんどちらの考え方も大切であるわけだが、週3時間ではとてもやれないと言うだけで、指導法を4時間のままと同じにしてペースだけ早くした授業には、生徒はなかなかついていかなかったのは事実である。さらに、その動きとほぼ時を同じくして、全国的に中学校に「荒れ」が起こりだした。本県も例外ではなく、授業が始まってもなかなか教室に入ろうとせず廊下にたむろしたり、教室に入っても周りの生徒たちと私語を繰り返したり、横柄な言動で授業を妨害したりという状況があり、机に突っ伏しているのは授業を妨害しないだけまだましと言われるような残念な状況もあった。もちろん、多くの生徒たちは真剣に授業に臨んでいるわけだが、一握りの生徒たちのために授業がしばしば中断したり、授業が成立しなかったりしており、中でも英語科の授業は「できる」「できない」の差がすぐ開くこともあり、他教科よりも苦勞することも多かった。私の場合は、授業は何とか進められていたものの何かしらもどかしいものを感じており、教科書の単語や本文を繰り返し読ませたり、文法の説明をして問題を解かせたりするだけの授業に、我慢（！）しながらついてきてくれている生徒たちや興味なさそうにただ聞いているだけの生徒たちの姿に、これでいいのかなと思いながら日々授業を行っていたものである。何とかたった5分でいいので、この生徒たちの目を輝かせられないものかと思いながら授業を行っていた。


そのような時にめぐり合ったのがコミュニケーション・アプローチの考え方、つまりコミュニケーション活動を中心においた英語授業の指導法である。めぐり合ったというよりも、コミュニケーション・アプローチの考え方はそれ以前より提言されていたわけで、私と同じように日々の授業にもどかしさを感じていた仲間たち、週3時間の中で何とかして生徒に英語力をつけてやりたいと願っていた仲間たちが集まって授業について話していて、大学の先生からアドバイスを受けている中で、今の状況を打破するための鍵は「コミュニケーション活動」であるという共通の思いに達したのである。今考えれば、英語は言語であるのだからコミュニケーションできるようにする必要があるということは至極当然のことであるのだが、その頃は、英語の文章を読めるようになる（日本語で意味をとれるようにする）ことが大切という考えも強くあったし、旧来の指導法に疑問を感じていても、コミュニケーション中心の授業で英語の力がつくのかという声もあり、絶対力がつくはずだという思いと不安な気持ちとの狭間で授業を進めていったものである。そして、徐々に授業中の生徒たちの表情が変わり、ただ聞いているだけでなく参加している雰囲気が出るようになってきて、少しずつ手応えを感じるようになってきた。そんな中、コミュニケーションを中心とする授業やそれを評価するテスト等について、福井地区の中教研で発表する機会に恵まれ、それが思わずいい評価を受け、県の中教研での発表を経て文部省（当時）で発表することになったが、そこでも教科調査官からだけでなく他県の参加者からも高い評価を受け、発表後の質疑応答の時間だけでなく、休憩時間にまで多くの質問をいただいた。これらの経験を通して、コミュニケーションを中心において英語授業を進めていくことが英語力を育成することにつながると確信していった。





ところで、コミュニケーション活動を行う際、私が必ず意識していた3つの要素がある。それは、**information**、**motivation**、**situation** の3つであり、頭文字の I、M、S を必ず頭に置きながら、コミュニケーション活動を仕組んでいった。I は **information gap** に代表されるように、生徒間や生徒と教師間といった送り手と受け手の間に情報の差があるかということであり、言い換えれば、互いにすでに知っていることやわかっていることをやり取りするのではなく、知らないことやわからない内容になっているかということである。M の **motivation** は、生徒にその活動を行う動機づけがあるかということであり、I の質（内容や **gap**）がよければそれ自体が M となるであろうし、I が今一つ弱い場合には活動そのもの、活動すること自体が生徒の興味をそそるものであれば M となり得る。S の **situation** は、I と M があったとしてそこに入っていくための場面設定ができていくかということであり、例えば、昨日見たテレビ番組のことを互いにインタビューし合うというコミュニケーション活動を仕組んだとして、どんな番組を見たかは生徒によって違うので I の要素はあるし、友達がどんな番組を見たかは日常でも話題になるのだからそれを尋ね合うことにある程度 M もある。ところが、授業が始まってその日の天気や曜日のことをクラスでやり取り（これすら何の S もないのだが、昔はわからずにただ単純に行っていた）した後、いきなり、昨日どんなテレビ番組を見たかについて尋ね合ってみようと指示しても、多くの生徒はなぜ今そんなことを尋ねるのかという気持ちになってしまう。つまり、コミュニケーション活動と言っておきながら、現実のコミュニケーションでは見られないような **situation** になっているのである。そこでは、やはり **teacher talk** や日常生活についてのインタラクションを通して、自然な流れで昨日のテレビ番組のことに話題を持っていくことが大切である。これらの I、M、S については、ここでスペースをいただいて述べるほどのことではなく、今では英語授業を進める際には当然と考えられている要素であるが、私自身がコミュニケーション活動を中心において授業を進めだした頃は、この3つが活動に入っているかどうかでその成否を判断し、生徒にとっても重要であったと言える。そして、これらは生徒側の視点から見ると、大ざっぱには、I はその活動で自分の知らなかったことがわかるようになること、M はその活動をやってみようと思うこと、S はなぜその活動をやらなければならないのか疑問に思わないことと言え、そう思いながら新たなコミュニケーション活動を考えていると、あの生徒はこんな反応をするだろうとか、この生徒はこういう発言をするだろうとか、活動を行っている生徒たちの姿が頭に浮かんだものである。さらに、偶然ではあるが、I、M、S は私の名前 **Shin-ichi Matsuda** のイニシャルと重なっていることもあり、3要素を大事にして授業を進めようという気持ちは一層強かった。

さて、上の3要素の中で最も大切なものは I の **information** であり、この質（内容や **gap**）をよいものにするためにいろいろと工夫をする必要があった。その質を決定づけるのはメッセージ性ということであり、コミュニケーションして伝え合おうとしている内容にメッセージがあるかどうか、そもそも相手に伝えたいようなメッセージかどうかということである。メッセージ性がどうかを判断する基準となったのは、県英研研究部でリーディングテストを作成する際、何度となく教えていただいた「その英文にどんなメッセージがあるのか。」という、先輩の先生方からの厳しい指摘である。けっこう頭をひねり作った長文（英文素材）の一つ一つの英文に対して、どんなメッセージがあるのかを問われ、少しでもしどろもどろになるもの




なら、メッセージのない文は単に問題のための文でしかないと戒められたものである。同様に、授業にコミュニケーション活動を仕組む際、**information** にどれだけメッセージ性があるかどうかでその質が決まるのである。教師が仕組んだコミュニケーション活動に **information** があってもメッセージ性が低いと、そんなこと尋ね合っても何になるのかな、ということになってしまう。今でも、私が授業を参観させていただく時には、この活動にどのようなメッセージがどれだけあるのかを考えながら、見させていただいている。I は「I（自分）」であり、「愛」なのだから。

このようにして、I、M、Sを盛り込みメッセージ性を大切にしてコミュニケーション活動を行っていったわけであるが、どうしても活動を仕組むことに無理がある場合があった。考えてみれば当然のことであるが、すべての単元・UnitでI、M、Sのすべてが満たされるコミュニケーション活動を考えることはかなり難しかった、というよりも無理して活動を仕組まざるを得なかった。これは、コミュニケーション活動を中心においた授業と一緒に進めていた仲間たちも同様であったようである。そんな中、大学の先生から、英語授業の中で行っていることすべてがコミュニケーションであるという、ごく当然のことが提案され、そこに気づかされた。つまり授業そのものがコミュニケーションの場であるのだから、それをしっかりと生かしていけば、無理にコミュニケーション活動を仕組む必要がないというわけである。この考え方は、本当に目から鱗であり、授業に行って生徒と英語で対話を楽しむつもりでインタラクションしていけば、それ自体が英語でのコミュニケーションになっており、その積み重ねが生徒の英語力を向上させることにつながっていくのである。この考え方、発想の転換が **Communicative Class** へと発展していき、その取組の一端を全国からの参加者の前で披露する機会にも恵まれた。さらに、**Communicative Class** の実践を重ね、生徒と本当のコミュニケーションを行っていく中で、生徒自身にも意見や考えがあるという、これも当たり前のことに気づき、それを英語で表現させていながら英語力を育てる方法がいかに重要で理にかなっているかがわかり、そのための指導法を研究し、生徒の意見や考えを表出させるための発問を研究してきて、今に至っているのは皆さんご存じのところであると思う。

ここまで長々と英語授業の変容について、生意気にも私自身の取組に沿って振り返ってきたので、次にこの先のことについて考えてみたい。まずは、冒頭に述べたように、今は国全体の英語教育が大きな変革の真っ只中にあるのであるから、その流れをいつも注視しそれに乗り遅れないことが重要である。このことに関しては、これまで福井県の英語教育は、乗り遅れるどころか絶えず先々と歩んできており、本県が推進してきたことが国の方針に取り入れられることが何度もあったわけであり、これまでと同様、英語教育の本質を頭におきながら先を見据えて行けばよいと考える。前で新学習指導要領のことを述べたが、今回の大きな改訂点の一つに、「思考力、判断力、表現力等」という項目が設けられたことがある。その内容は、例えば、

「日常的な話題や社会的な話題について、伝える内容を整理し、英語で話したり書いたりして互いに事実や自分の考え、気持ちなどを伝え合うこと。」

と示されている。また、その箇所に関して、解説編では、




『伝える内容を整理』するとは、必ずしもいつも十分な準備をした上で言語活動をすべきということを意味しているわけではない。メモ書きなどの補助を利用しつつ、即興で話したり書いたりする活動を行い、その過程で相手からフィードバックを受けたり、同じタスクを相手や役割を変えながら複数回繰り返しながら学びを深めていくことも重要である。」

と解説されており、これらは、まさに昨年11月の県英語教育研究大会での公開授業そのもののことと言える。平木視学官が、今後全国で紹介していきたいと話された理由が十分領けるところである。今後、高校の学習指導要領の改訂が予定されているが、この流れに沿ったものになることは間違いないであろう。

ところで、流れに乗り遅れないように先を見据えると同時に、足下の部分を大切にすることも忘れてはならない。例えば、英語授業に関して言うならば、授業そのものを英語でのコミュニケーションの場としながら、その中で生徒の意見や考え、気持ち等を表出させていくようにする一方、それを支える基礎の部分（ここでは、単語や文法、音読等と考える）の指導もしっかり行わなければならないということである。最近授業を見させていただくと、この部分が少しおろそかになっているのではないかと感じることもある。生徒にいきなり、自分の考えを英語で表現してみようと言っても無理な話で、そこには表現するための文の作り方やある程度慣れることが必要である。ただ、基礎の部分はあくまで、意見や考えを表現させるための援助となるものであり、基礎の部分ができるようになることそのものが目標ではないし、ましてやどれだけ文法用語を覚えさせても意見や考えを英語で表現できるようにはならない、ということとは絶対忘れてはならない。英語でコミュニケーションできる生徒を育てる（新学習指導要領では「コミュニケーションを図る資質・能力を育成する」）ことを最終ゴールとし、そのために意見や考えを表現する経験を積み重ねる活動を行い、そこにそれを支える基礎の部分の指導をらせん状に絡めていくことが必要である。

話の視点を英語授業から県英研に変えたい。県英研（福井県英語研究会）の成り立ちや組織については、これまで何度となく示されてきているので、ここであらためて言及することは避けるが、この県英研がずっと本県の英語教育を推進してきていることは間違いなし、この組織なくして本県の英語教育を語ることはできない。公立私立関係なく中高の全教員が会員となって活動している組織は、他教科にはなく他県でも見られないものである。しかも、県英研は県教委とも連携しており、県教育庁や教育研究所の指導主事が特別評議員として名を連ねている上、さらに、本県教員のトップとも言うべき立場の学校教育幹をはじめ、課長や参事は皆、県英研のそれぞれの部署で活躍していた人たちばかりである。このように全国に誇る組織であるので、本県の英語教育の将来を考えた時、まず県英研の充実が大きな鍵となるであろう。

企画部、放送テスト部、広報部、研究部、そして事務局という組織については、これまで何度か見直しの動きが聞こえたこともあったが、やはりこの体制がやり易いということなのであろう、部内の見直しはあっても全体の組織は変わっていない。今後もそれぞれの部が一層充実していくことを期待する一方、英語教育全体のことを視野に入れると、小学校との連携について進めることが急務であると考え。冒頭でも述べたように、小学校に英語科が教科として導入されることになり、その内容を定める指導要領も告示され、しかもその内容たるや目標をは



じめ中学校の内容と重なる部分が多いことを見ると、中高英語科全教員の組織である県英研と小教研英語部会が別々というのはもったいない話である。県英研がこれまで蓄積してきた大きな知的財産、物的財産が、必ず小学校英語科の取組に役立つはずであるし、役立たせていただきたいところである。お気づきの人も多いと思うが、数年前から県英研の会員名簿の中に全小学校の英語活動主任の名前も記載しているし、今年度は、県英研と小教研英語部会の代表数名同士で連携・協力のあり方について何度か話し合いを持った。この原稿を書いている時点では、来年度からの大きな動きは難しいようであり、これまで以上に県英研の活動を小学校にお伝えして講演会や研究大会に積極的に参加してもらったり、各地域で授業を参観し合ったり時には実際に授業に参加したりして、小中の連携を一層深めていくことになっている。小学校英語科を指導していくのは必ずしも英語科教員（英語免許所有者）ではないことを十分理解した上でも、やはり県英研との連携・協力していくことは大切であるので、その実現に向けて来年度以降も是非努力する必要がある。

また、県英研が60年近く続いている中で、組織の表面には出てこないことだが、大学との連携も忘れてはならない。県英研の組織を見るとわかるように、授業実践に関わる部署が見当たらない。研究部の研究内容として取り上げたことはあるが、どうしても学際的な分野を扱うことになり、より実践的で、より広く、すぐにでも日々の授業に生かせることとなると、県英研では活動内容として取り扱ってこなかった。その代わりに、福井大学での「英語教育懇話会」があったのである。故茨山良夫先生（もちろん、先生も元々は県英研の会員であったわけだが）を中心に、月に一度、休日（昔は土曜日の午後）に自主勉強会（自主授業実践発表会。自主研究発表会とも言える）として行われ、代は変わっても今日に至るまでずっと続いている。夏と冬には「シンポジウム」と銘打って大々的に行われていることは、多くの人がご存じの所であろうし、時には県外からの参加者もおられた。私も若い時から、懇話会にもシンポジウムにも時々参加させていただき、毎回発表内容に感動し、早速に授業に取り入れたものであるし、何と言っても発表後に行われる意見交換や大学の先生からのアドバイス等が自分にとって大きな勉強となったし、悩み解決の場にもなっていた。この懇話会は、直接には県英研の組織には入っていないが、県英研のメンバーが中高（大学や高専も）関係なく日頃の実践を発表し、互いに意見を戦わせるというのは、全く県英研の活動と同じであり、それが国や県指定の研究発表や英語の研究大会につながったりしているのを考えると、県英研を支える会であると思えることができる。今後もこの懇話会がずっと継続することを願うとともに、より多くの参加者が集うようになることを願っている。

この原稿を書くに当たり、担当の広報部長から、思うところをすべて書けばよいと言われたのを幸いに、だらだらと支離滅裂なことを書いてきたことを皆様に深くお詫びしたい。私自身、これまで本当に県英研に育てていただき、また最後は会長という大役まで仰せつかったこともあり、自分のことや県英研の今後のことについて書かせていただいた。

最後に、県英研が、県内の小中高生の英語力の向上ならびに英語教員の資質・能力の向上に資するよう、そして、英語教育に対する期待の声に応えるために、一層充実・発展していくことを願って巻頭の言葉としたい。



## 発刊に寄せて

福井県英語研究会副会長


勝 木 博 一

昨年に続き、平成29年度も英語研究会副会長を仰せつかりました。加えて、今年は高教研英語部会長・高文連英語部会長をさせていただいております。高教研英語部会理事会では、高教研大会の英語部会研究会の在り方についての意見があり、学力向上要求のプレッシャーのなか、ますます英語科教員の負担感が増していると感じました。ただ、教師であれば、同僚や仲間と共に勉強することは、辛い時があっても続けなければいけないと思います。そのような状況下、8月の高教研大会では、先生方が日々生徒と積み上げてきた授業についての実践発表があり、参加された先生方の積極的な議論で会を盛り上げていただきました。

11月には全英連新潟大会に参加する機会を得ましたが、生徒たちのパフォーマンスについての感想を簡単に述べます。まず、開会に先立ち、新潟県立羽茂高等学校郷土芸能部の公演があり、郷土の伝統芸能をあれほどまで高いレベルでマスターし伝えていこうとする姿に、涙が出んばかりに感動いたしました。小学校授業実演では、担任教師の英語力はともかくとして、クラスメートが互いに励ますような学級作りができていて良いと思いました。中学校授業実演は、言語活動が真のコミュニケーションからはかけ離れ、あくまでもプラクティスの段階に留まっているある種なつかしい授業だと感じました。高等学校授業実演では、生徒が活発に英語で話し合い、積極的に自分の考えを発表するすばらしいクラスだと思いました。生徒たちの英語力レベルの高さに刺激を受けました。

さて、昨今、学校での働き方改革について機運が高まっていますが、英語科教員のさらなる多忙化につながると懸念されることがあります。そのひとつは、平成30年度の全国高校生英語ディベート大会開催の急な依頼を受けることになったことです。これまで県が主導し、子どもたちの批判的思考力や発言力を鍛えようと各校に参加を勧めてきた大会ですが、来年度は実行委員を募って福井県で開催することになります。高校の英語教師ががんばって取り組もうとしていることから、みんなで応援していきたいものです。他にも、英研シルバー会総会でも諸先輩の話題になっていた、学力検査における英検加算の問題があります。当然、中学校では英検対策の学習も取り入れているようですし、試験会場運営等もありますから、中学校現場での業務量が増えたのではないかと思います。

高校入試での英検加点が決まってから県議会により見直しを求める意見書が出されましたが、県では指摘された問題点をできるだけ解消するような調整がなされました。主な問題点として、まず、家庭の所得や地域性で塾通いに格差があると指摘されました。確かに家庭背景の影響を低減するのが学校教育制度の使命ですが、英検対策のために、塾通いする中学生が今よりさらに増えるのかは疑問です。これまでの福井新聞の記事には、「小学生のきょうだいが塾に通わずに準2級を取った」とか「塾は英検対策をしていないので…」などのインタビュー回答が



載っていました。個人的には、塾通いをするよりも、NHK ラジオ講座を聴いた方が英検対策としては費用対効果が上だろうと考えています。また、準２級、２級は中学校での指導外という批判について言えば、英検は語学力のレベルごとに試験問題が分かれているだけで、合格するのに満点が必要な訳でもなく、中学生が合格できないわけではありません。他の資格試験であれば同一問題のスコアで語学力のレベルを判定しており、難易度の高い問題があっても受験することになります。ただ、英語に苦手意識のある生徒が入試前に持ち点で差がつくことに不公平と感じるのは、分かる気がします。

教育改革に関する論議では、多くの人が曖昧な目標や方向性を提示するだけで、結果を測定できる具体的な目標を出していないと言われています。そういった意味では、仮に「福井県の子どもたち全員に英検準２級レベル（国際標準規格 CEFR では A 2 レベル）の英語力を身につけさせる」という目標を立てたとしたら、その達成状況を測定することが必要になります。英語の４技能、特にプロダクティブ・スキルを直接評価することは、使える英語力育成のための突破口になるかも知れません。将来英語が必要になる子どもは少ないだろうという見方もありますが、このグローバル化した社会、予測のつかない時代を生きていく子どもたちの可能性を狭めることはしてはいけないと思います。英語力だけでなく言語学習で培われるスキルや人間性特徴といったコンピテンシーも獲得させることで、新しい時代に適応できる多能な人を育てていきたいものです。



# 発刊によせて

福井県英語研究会副会長

水谷善長

昭和34年に発足し、58年間もの長い伝統がある福井県英語研究会の副会長を務めさせていただいておりますが、日々感じることは責任の重さです。自分自身、英語教員であり、企画部の中学校英語セミナー委員会や中学校英語弁論委員会の仕事をさせていただきましたが、これと言って大きな成果を上げた訳ではありません。しかし、誠心誠意、勤務校や所属ブロックで英語教育に尽力し、英語好きな子どもたちの育成と英語力の向上に努めたことにはある程度の自負があります。その経験を若手の先生方や本英語研究会の発展に生かすことができれば幸いに存じます。

さて、今年度7月に新学習指導要領が告示され、これからの英語教育が目指すところが明確化されました。「英語の知識や技能をどのように使い、どう社会や世界と関わり、より良い人生に生かしていくのか」、これが究極の目標であり、それを実現するために学校においては、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善が求められます。

具体的には、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を総合的に育成することを目指し、単元などのまとまりの中で、学習を見通し振り返ったり、グループなどで対話したりする活動をどこに設定するか、子どもたちが考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかなど、単元全体を見通した計画が必要になってきます。また、実践的なコミュニケーション能力を身につけさせる上で忘れてはならないキーワードは、「必然性」「十分な練習」「即興性」の3つです。英語の教員は授業の中で、英語を使う必然性を作り出し、言語材料を使って十分に練習させ、準備したものを読むのではなく、その場面や状況に応じて自分の気持ちや考えを表現する活動を設定することなどが大切になってきます。加えて、「英語の授業は英語で行われる」ことが益々当然のことと考えられ、我々英語教員の高い英語力も必須の条件になるはずです。

今後、選択問題の導入や英語検定の加点など、福井県の高校入試が大きく変わっても、そして大学入試が改革されても、上で述べたような指導に心掛けていただければ、十分に対応できる生徒が育つものと確信します。

将来、人工知能（AI）が飛躍的に進化を遂げたとしても、グローバル化が急速に進み多くの外国人が身近に暮らす環境になると、一部の業種や職種だけでなく、生涯的に様々な場面で英語によるコミュニケーションが必要になることが想定されます。そんな時、堂々と外国人とコミュニケーションができる日本人の姿を想像すると何だか胸が高鳴ります。そんな日本人を育てる使命が我々英語教員にはあり、それを支援できる団体が本英語研究会なのです。本英語研究会の様々な活動が、子どもたちの明るい未来に繋がることを信じ、今後とも本英語研究会に対し、深いご理解とご協力をお願いいたします。

# 平成29年度福井県英語研究会役員

(勤務先電話番号)

会 長	松 田 新 一	(進明中学校長)	(0776) 20-5128
副 会 長	勝 木 博 一	(嶺南東特別支援学校長)	(0770) 45-1255
〃	水 谷 善 長	(武生第三中学校長)	(0778) 23-1433
参 与	県立学校英語科校長		
〃	県中教研英語部会郡市部長		
企 画 部 長	西 口 佳 光	(丹生高等学校)	(0778) 34-0027
同 副 部 長	山 口 隆 子	(丹生高等学校)	(0778) 34-0027
放送テスト部長	加 藤 修	(三国中学校)	(0776) 82-1177
同 副 部 長	伊 藤 美智子	(敦賀高等学校)	(0770) 25-1521
〃	野 崎 恵 美	(社中学校)	(0776) 35-8310
広 報 部 長	稲 葉 芳 明	(大野高等学校)	(0779) 66-3411
同 副 部 長	鈴 木 秀 人	(羽水高等学校)	(0776) 36-1678
研 究 部 長	辻 智 生	(敦賀高等学校)	(0770) 25-1521
同 副 部 長	村 昭 信	(金津高等学校)	(0776) 73-1255
〃	水 木 毅	(武生東高等学校)	(0778) 22-2253
監 事	三田村 弘 美	(丹生高等学校)	(0778) 34-0027
〃	北 川 一	(金津高等学校)	(0776) 73-1255
特 別 評 議 員	岩 本 公 信	(教育庁高校教育課)	(0776) 20-0570
〃	上 田 外史彦	(教育庁義務教育課)	(0776) 20-0667
〃	澤 田 則 義	(教育総合研究所)	(0776) 58-2150
事 務 局 長	中 村 珠 美	(福井商業高等学校)	(0776) 24-5180
庶 務	伊 藤 仁 美	(福井商業高等学校)	(0776) 24-5180
会 計	石 田 洋 志	(福井商業高等学校)	(0776) 24-5180



# 福井県英語研究会の沿革

福井県英語研究会は、昭和34年（1959年）4月1日に発足した。

学習者に Living English を習得させることを目標にして、自主的、自発的研究のグループが創設されたことを始まりとする。事務局校は武生第一中学校におかれ、発足当時の会員数は296名（中学校188名＋高校108名）、会費は年間100円であった。

その後、組織づくりが進められ、多くの人の汗と創意工夫により、ますます洗練され、充実し、中高一体の全県組織として発展を遂げている。平成21年（2009年）には創立五十周年を迎え、3月に『五十年史』を発刊した。平成29年度現在の会員数は587名である。

本会は、中学校と高校の英語教員全員が会員となる全国でも類を見ない組織である。事務局（事務局長、会計、庶務）および企画部（20名）・放送テスト部（32名）・広報部（7名）・研究部（33名）の四部が中高連携協力して活動している。また、秋の英語教育研究大会では中学校と高校とが隔年で発表し、中高どちらかが担当する大会で双方から教員が多数集う。

## 〔企画部〕

企画部は英語弁論大会、英作文コンテスト、英語セミナーを企画、運営する。中学校英語弁論大会は全国大会出場者を、高校英語弁論大会は東海北陸ブロック大会出場者を選考する。英作文コンテストは高校生対象で、部門別・学年別に最優秀賞作品、優秀賞作品を選考する。高校英語セミナーは、コミュニケーション活動の場を生徒に与える。各地区の中教研主催の中学校英語セミナーを共催する。

## 〔放送テスト部〕

放送テスト部は中学・高校生用のリスニングテストを作成している。五十余年の歴史があり、発足当時はテープレコーダーも少ない時代だったので、NHK 福井放送局のラジオでテストを流したことが、部会名の由来である。現在、県内ほぼすべての中学校で採用されており、高校での採用数も5,000名を超える。中学校では各学年用を、高校では主に1年生の英語表現Ⅰの評価用として、それぞれ年3回発行している。

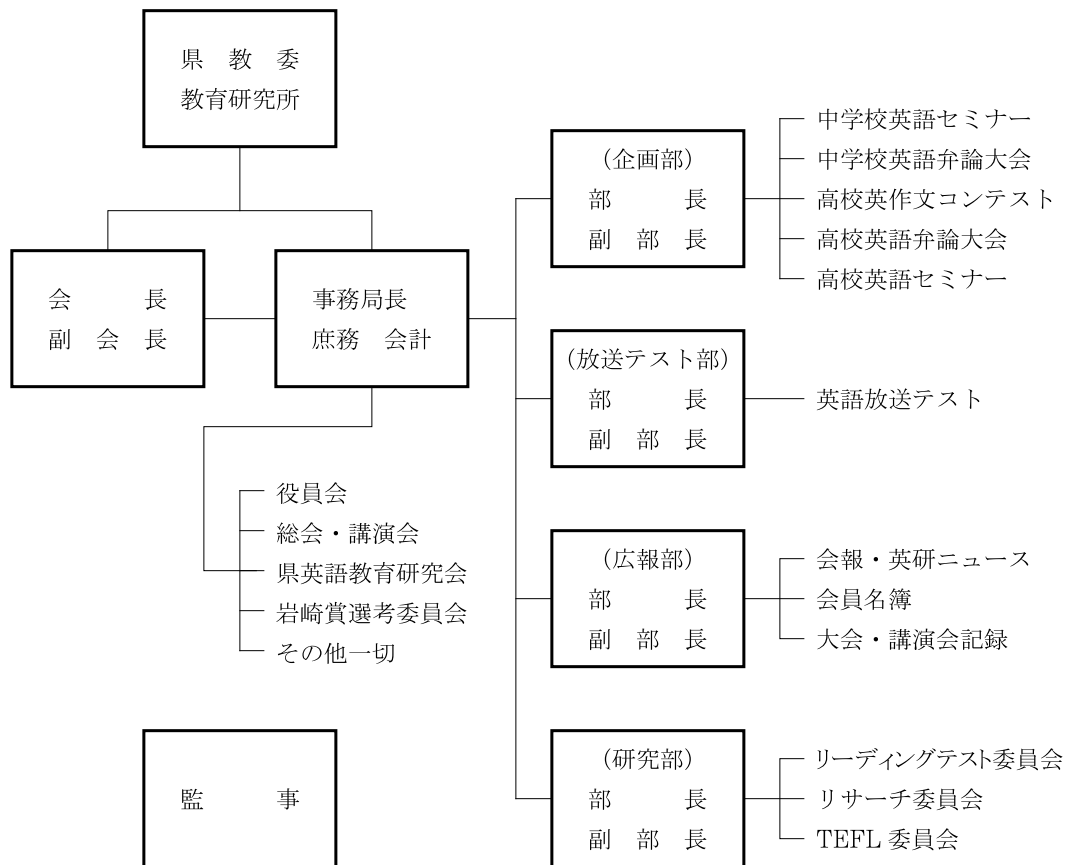
## 〔広報部〕

県英語研究会活動の広汎な活動を広報すると同時に記録することが、主たる活動である。具体的には、1 「会員名簿」の発行（6月）、2 「英研ニュース」の発行（9月）、3 「英研会報」の発行（3月）、4 研究大会・講演会等の記録、5 ホームページの管理——以上5つが活動の柱である。

## 〔研究部〕

リーディングテスト委員会、TEFL 委員会、リサーチ委員会の3つの委員会があり、英文読解教材の作成や授業の実践報告を行う。当部の教材には中学生対象のバラテスト「リーディングテスト」、冊子「LET'S READ」、高校生用のバラテスト「Reading For Message」、中高橋渡し教材「Bridging」がある。毎年発行する「研究部合本」には、これらの教材とともに、授業実践報告も掲載する。

福 井 県 英 語 研 究 会 (機 構)





## 福井県英語研究会事務局

事務局長 中 村 珠 美 (福井商業高校)

### 1. 第1回役員会

平成29年4月28日(金)、福井県国際交流会館で平成28年度会計監査および平成29年度第1回役員会を開催し、総会に提案すべき議事を審議しました。

### 2. 会員名簿発行

平成29年6月9日(金)の総会時に、平成29年度会員名簿を発行しました。平成22年度から会員名簿作成業務を広報部にお願いし、2年前より小学校の英語活動担当者も掲載しています。

### 3. 総会・講演会

平成29年6月9日(金)、福井県国際交流会館地下多目的ホールで福井県英語研究会総会および講演会を開催しました。議長は池田誠司先生(福井農林高校)が務められ、全ての議案が承認を得ました。

その後、岩崎賞の贈呈式が行われ、稲葉芳明先生(大野高校教諭)、三仙真也先生(藤島高校教諭)に岩崎賞と記念品の盾が贈られました。また、本会発展のために長い間御貢献いただいた、広瀬泰司先生(前企画部副部長・尚徳中学校教頭)に感謝状が贈呈されました。

総会終了後、神奈川大学 外国語学部 国際文化交流学科 教授 大島希巳江先生をお招きし、「英語落語の授業への活用法」と題して御講演をいただきました。

### 4. 全英連大会

第67回全国英語教育研究大会(全英連新潟大会)は、「新潟から世界へ!新潟から未来へ!」を大会コンセプトとして、平成29年11月22日(水)・23日(木)に開催されました。1日目はりゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館を会場として、総会、名古屋外国語大学 外国語学部 教授 太田光春氏を招いて、演題「コミュニケーション能力の育成をめざして～自律した学習者を育てる～」での講演会、昼食後、小学校・中学校・高等学校それぞれの授業実演が行われました。2日目は朱鷺メッセ:新潟コンベンションセンターを会場として、36の分科会が開催されました。また県英研からは、勝木博一副会長、堂埜真希先生(放送テスト部)が参加しました。

### 5. 平成29年度福井県英語教育研究大会(鯖丹大会)

- (1) 主 催 福井県中教研英語部会・福井県高教研英語部会・福井県英語研究会
- (2) 日 時 平成29年11月22日(水)
- (3) 会 場 越前町立朝日中学校
- (4) 研究主題 「自分の気持ちや考えを生き生きと伝え合う生徒の育成」
- (5) 日 程

公開授業 13:10～14:00

◆授業学校 朝日中学校 2年4組

◆授業者 内藤 元彦

(朝日中学校 教諭)

Fiona Kelemencky

(朝日中学校 ALT)

全体会 14:20～15:05

講演 15:15～16:25

◆演題 『新教育課程における  
外国語教育が目指すもの』

～中学校学習指導要領の改訂を中心に～

◆講師 平木 裕（ひらき ひろし）氏

(文部科学省初等中等教育局 視学官)



## 6. 全英連東海北陸地区英語教育協議会

平成29年12月25日（月）、石川県にて平成29年度全英連東海北陸地区英語教育協議会が開催されました。福井・石川・富山・愛知・岐阜・静岡・三重の7県から各代表が参加し、全英連新潟大会全国理事会の報告、平成30年度の日程などについて協議しました。松田新一会長が参加しました。

## 7. 第36回岩崎賞選考委員会

本年度は応募作品がありませんでした。

## 8. 第2回役員会

平成30年2月20日（火）、福井市進明中学校にて第2回役員会を開催し、平成29年度事業・決算中間報告、平成30年度事業計画等について審議しました。

## 9. 臨時役員会

英語研究会の会計の現状を踏まえて、今後の運営について協議するため、臨時役員会を3回（平成29年5月24日（水）、10月11日（水）、平成30年1月25日（木））開きました。少子化、印刷費の高騰などによる厳しい会計の現状をどのように乗り切るかについて協議がなされました。

## 10 小学校英語との連携のための特別委員会

小学校英語の教科化に向けて、小学校現場の現状を把握するとともに、現場は県英語研究会に対してどのような支援を望むのか、そしてどのような支援が可能なのかを検討するために、特別委員会が設置されました。水谷善長副会長（武生三中校長）を委員長に、小学校の英語教育の現状を踏まえ、今後どのような情報交換をすべきかについて協議するため、委員会が2回（平成29年5月16日（火）、10月30日（月））開かれました。

事務局長 渡 辺 桂 子 (進明中学校)

## 県中教研英語部会 平成29年度活動報告

今年度は、昨年度から取り組んでいる「英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養うための指導と評価の工夫・改善」の研究主題のもと、各ブロックや各郡市、各学校で研究実践に取り組んできました。以下に本年度の活動の概要を報告します。

### 〔県中教研関係〕

#### 1. 6月13日(火) 第1回英語部会郡市部長研究会 (ユアアイ・ふくい)

- ・平成28年度事業報告ならびに平成29年度事業計画について
- ・平成29年度県中学校教育課程研究集会、中学校英語セミナーについて
- ・平成29年度東海北陸公立中学校英語教育研究会三重大会について
- ・各ブロック間の情報交換

#### 2. 8月9日(水) 10日(木) 平成29年度第41回東海北陸公立中学校英語研究会三重大会

(四日市市総合会館)

- ・大会テーマ 「小学校文化を大切にした学びの接続  
～4技能を高めるアクティブ・ラーニングのあり方～」
- ・記念講演 「新小・中学校学習指導要領における、  
外国語活動及び、外国語の在り方」  
文部科学省初等中等局 教育課程課・国際教育課外国語教育推進室  
教科調査官 直山 木綿子 先生
- ・参加者 13名

#### 3. 8月10日(木) 福井県中学校教育研究集会 (県立大学)

- ・発表者 鋸谷 卓磨 教諭(社中)  
若林 京子 教諭(丸岡南中)  
細川 頼久 教諭(陽明中)
- ・英語部会参加者 42名

※発表内容の概要については、後ろに記載

**4. 10月18日（水） 第2回英語部会郡市部長研究会（ユーアイ・ふくい）**

- ・県英語教育研究大会 鯖丹大会について
- ・英語検定試験等の状況について
- ・H30年度県中教研英語部会研究主題について
- ・各郡市の取り組みについて

**5. 1月31日（金） 第3回英語部会郡市部長研究会（ユーアイふくい）**

- ・平成29年度事業報告ならびに平成30年度事業計画について
- ・平成30年度中教研発表について
- ・各郡市における活動状況と課題

**[県英研関係]**

**1. 6月9日（金） 県英語研究会総会・講演会（県国際交流会館）**

- ・平成28年度事業報告ならびに平成29年度事業計画について
- ・講演会 大島 希巳江 氏（神奈川大学教授）  
「英語落語の授業への活用法」

**2. 10月4日（水） 第60回県中学校英語弁論大会（鯖江市文化センター）**

参加者 55名

**3. 11月22日（水） 県英語教育研究大会 鯖丹大会（朝日中学校）**

- ・研究主題 「自分の気持ちや考えを生き生きと伝え合う生徒の育成」  
※研究概要については、次ページ参照
- ・公開授業 内藤 元彦 ・ Fiona Kelemencky（朝日中学校2年4組）
- ・講演 平木 裕 氏（文部科学省初等中等局 視学官）  
「新教育課程における外国語教育が目指すもの  
～中学校学習指導要領の改定を中心に～」

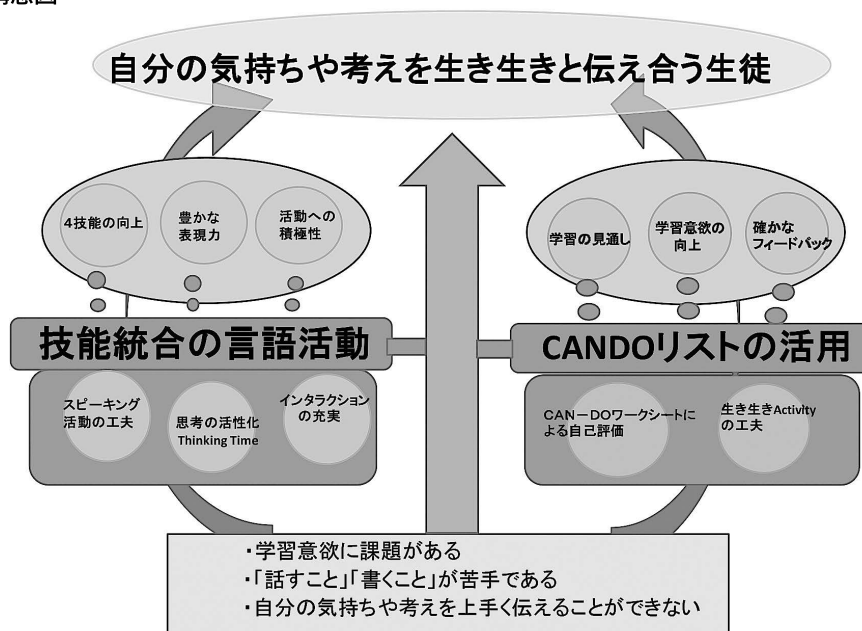
**4. 11月22日（水）23日（木）**

**全国英語教育研究大会 新潟大会**

今年度の県英語教育研究大会は朝日中学校を会場とした鯖丹大会でした。大会テーマである「自分の気持ちや考えを生き生きと伝え合う生徒の育成」のもと、鯖丹地区の英語科教員が協力し、研究を進めてきました。今後は、各ブロックとも自分の意見や考えを表現することができる生徒の育成をめざし、英語科教員の資質向上と授業力向上に向けて研究を進めていきたいと考えています。

# 県英語教育研究大会（鯖丹大会） 研究概要

## 研究構想図



## 研究テーマ

自分の気持ちや考えを生き生きと伝え合う生徒の育成

### 1. テーマ設定の理由

文部科学省は、平成32年の東京オリンピック・パラリンピックの開催を見据え、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を策定し、平成26年度より改革を推進している。現在、生徒（高校3年生）の英語力については、特に「話すこと」「書くこと」についての課題が大きく、また、英語学習に対する意識については、「英語が好きではない」と回答した生徒が半数を上回ることから、学習意欲においても課題があるとされている。

こうした国の動向や全国的な課題を注視しつつ、グローバル化に対応し世界の人々と自分の気持ちや意見・考えを伝え合える子どもたちを育てるために、本研究のテーマを「自分の気持ちや考えを生き生きと伝え合う生徒の育成」とした。「生き生きと伝え合う」というのは、積極的に自分の気持ちや考えを英語で伝え合っている様子や、課題に対して一人一人が真剣に考えたり、ペア・グループで協力して熱心に取り組んだりしている様子と捉えている。

自分の気持ちや考えを生き生きと伝え合うためには、生徒自身が「自分の気持ちや考えを相手と伝え合いたい。」と思えるような必然性のある言語活動を設定することが重要である。伝え合いた

いという気持ちが強ければ、生徒は自分の知っている英語表現を駆使したり、ジェスチャーを使ったり、相槌を打ったりして、お互いに助け合い、英語を使って生き生きとコミュニケーション活動を行うことができると考える。

また、現行の学習指導要領においては、自分の考えや気持ちを表現することについて繰り返し記述されている。この流れは、次期学習指導要領にも引き継がれ、更に重点が置かれている。単なる事実情報に比べ、相手がどのような気持ち、考えを持っているかを聞くことのほうが生徒の興味・関心は高い。「（この本を読んで）私は、とても嬉しい。」「私は、主人公の行動に賛成だ。」などといった気持ち、意見や考えは生徒間でそれぞれ異なる。そのため、事実情報を伝える活動に比べて、その指導は難しいが、生徒の英語力を高める上で効果的であり、教師にとっても挑戦しがいのあるテーマであると捉えている。

なお、本研究のテーマにおいては、「考えや気持ち」ではなく、「気持ちや考え」としている。（１）言語材料の配列が「I (don't) like ～. I'm happy (sad). It's fun.」などの気持ちを表す表現を「I (don't) think ～. I agree (disagree) ～.」などの自分の考えを表す表現より先に学習すること、（２）自己表現活動において、自分の意見・考えより気持ちの方がより表現しやすいこと、（３）感情表現から論理的思考につながりやすいということ、以上の３つの観点から、研究テーマを「自分の気持ちや考えを生き生きと表現する生徒の育成」と設定した。

## 2. 研究の内容

上記テーマの実現に向け、次の２つを重点項目として実践研究に取り組んだ。

- （１）CAN-DO リストの効果的活用
  - （２）技能統合の言語活動を取り入れた授業づくり

### （１）CAN-DO リストの効果的活用

#### ① 学年 CAN-DO リストの作成と活用

平成３３年度入学試験より大学入試改革が行われ、英語科においては、４技能の測定、外部検定試験の活用がなされる予定である。現在の中学３年生が、改革初年度に受験することになっている。小学校においては英語教育が早期化、拡充強化される。本県では平成３１年度から、すべての小学校で、３～６年生における外国語科と外国語活動の授業が開始される。この動きに伴い、中学校と高校においては、言語活動の高度化を進めていく必要がある。

中学校現場においては、小中高のスムーズな接続が求められており、その解決策の１つとして、CAN-DO リストの有効活用が一層重要となってくる。CAN-DO リストでは、中学校卒業段階の到達目標を明確にした上で、それぞれの学年終了時、学期終了時・・・と徐々に短いスパンで目標を設定していく。本研究でも、このような考えのもと従来の年間指導計画を見直し、各学年の CAN-DO リストを作成して活用した。そして、単元毎の CAN-DO と重点とする４技能、評価方法を具体的に示し、パフォーマンステストをどのように行うかを工夫した。



## ② 単元 CAN-DO ワークシートの作成と活用

本研究では、各単元の学習の全体像を生徒に示し、自己評価を繰り返しさせることで、生徒が、英語の学習に主体的、積極的に取り組むのではないかと考えた。そこで、各 Unit ごとに「CAN-DO ワークシート」（生徒の自己評価表）を作成した。

その内容は、「単元目標 → 各パートごとの目標や学習内容 → まとめの活動（メイントピックを取り上げた活動） → 生き生き Activity（Performance test）」の流れとし、各パートごとに生徒が自己評価を行った。単元全体で生徒に付けたい力を考え、そのために各パートでどんな課題を与えて、まとめの活動のメイントピックにつなげていくか、また、目標に迫るために単元末のパフォーマンステストをどのように行うかを考えた。このことは、まさに指導と評価の一体化である。

このワークシートを有効に活用するために、「授業の CAN-DO」の書き方と生徒の「自己評価」の在り方を試行錯誤した。その結果、（１）「授業の CAN-DO」は生徒に分かりやすい簡潔な表現にする、（２）生徒が目標達成度とコメントを書く、という２点に至った。特に（２）については、コメントを書くことで、生徒はしっかり振り返りをすることができ、また、そのコメントを授業のフィードバックに役立てることができると考えた。

（最初の CAN-DO ワークシート）「自己評価（理解度・参加度）を４段階で評価させた」

### Unit5 学校の文化祭の CAN-DO

Unit5 の CAN-DO :

自分が知らないものなどについてたずねることができる。

ものの性質や状態などについて話すことができる。

・ What is this? It is a block of curry.  
・ English is difficult, but I study it every day.

・ What do you have for breakfast? - I have toast and milk.  
What do you do in your free time? - I read a book.  
What sports do you like? - I like soccer.

ページ	授業の Can-do	自己評価（理解度・参加度）			
P58～59 Part1 それが何かをたずねよう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ What の意味・用法がわかる。</li> <li>・ What を使って、ペアと会話することができる。</li> </ul> <p>What is this? Is it a penguin? Yes, it is. / No, it's not.</p>	A (90%)	B (70%)	C (50%)	D (30%)
P60～61 Part2 感想を言おう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 名詞+be 動詞+形容詞の意味・用法がわかる。</li> <li>・ ある事柄（給食、勉強、部活動）について様々な形容詞を使って、自分の意見を言える。 easy, difficult, delicious, fun, interesting, hard, cool, cute.</li> <li>・ ペアである事柄（好きなもの、こと）について言え、理解できる。</li> </ul> <p>What is your favorite thing? I like video games. My favorite game is Mario. It is very interesting. I play it every day.</p>	A (90%)	B (70%)	C (50%)	D (30%)
P62～63 Part3 朝食は何かをたずねよう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ What do you～ の意味・用法を理解することができる。</li> <li>・ 朝食についてペアで聞きあい、その後クラスメイトに尋ねて、クラスの朝食について知る。</li> </ul> <p>What do you usually have for breakfast? - I have toast and milk.</p>	A (90%)	B (70%)	C (50%)	D (30%)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 疑問詞 what を用いて、ペアで質問し、理解できる。</li> </ul> <p>What do you do in your free time? - I read a book. What do you want for your birthday present? - I want a new pen case.</p>	A (90%)	B (70%)	C (50%)	D (30%)
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Unit の指定されたページを音読することができる。</li> <li>・ A L T に質問し、もっとも最適なプレゼントを選ぶことができる。</li> </ul>	A (90%)	B (70%)	C (50%)	D (30%)

Unit5 の生き生き Activity	音読テスト 自己紹介+Q&A	Question の例 : What is this? What is that? Do you like English? Is English difficult for you? What do you have for breakfast? What do you do in your freetime?
生き生き Activity を終えて・・・		

「CAN-DO ワークシート」を活用した授業実践例を2つ紹介する。

### 実践例1 「CAN-DO ワークシート」の活用とグループトーク

○単 元：1年 Unit 9 チャイナタウンへ行こう

○授業者：朝日中学校 内藤 元彦 教諭

○本時の目標

- ・音や背景知識から誰が何をしているか推測し、現在進行形 **be ~ing** の表現を用いて自分の考えを表現することができる。

○授業の観点

- ・現在進行形の表現を豊かにさせるために、音での導入やグループ活動、T-S インタクションは有効であったか。

○考察

前単元の「Unit 8 CAN-DO ワークシート」を活用して授業を組み立てた。前単元の「生き生き Activity」で先生紹介をしているため、学年の先生の住んでいるところや趣味、好きなものを生徒たちは前もって知っている。生徒たちはその情報を活かして、どの先生が何をしているか根拠を持って推測することができた。また、音から現在進行形の文を作ることで意見交換の必然性が生まれた。ペアトークからグループトークをし、最後にライティング活動につなげた。また、**Face time**でのやり取りは正に実況中継であり、生徒の興味、関心を強くひきつけただけでなく、現在進行形の使用場面の理解につながった。

### 実践例2 生き生き Activity (Performance test) に向けてのまとめの活動

○単 元：2年 Unit 2 A trip to the U.K.

○授業者：宮崎中学校 渡邊 喜代美 教諭

○本時の目標

- ・James 先生の両親に福井の旅行プランをたて、提案することができる。

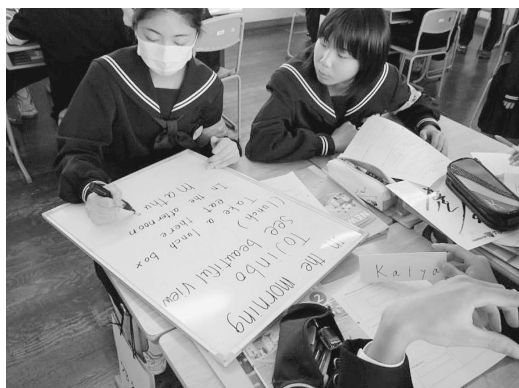
○授業の観点

- ・ペアやグループでのインタクションは、福井の旅行プランを立てる活動に有効であったか。

○考察

単元のまとめの活動として、本授業に取り組んだ。授業の前半で「福井の興味深い場所」についてペアで活動した。後半、James 先生の両親からのビデオレターを見て、夏休みに日本に来ること、福井でやりたいこと、興味があることを知り、グループでおすすめの福井の旅行プランをたてた。生徒たちは課題に意欲的に取り組み、どのグループも工夫したプランをたて、提案することができた。しかし、「旅行プランの例」の与え方や、ホワイトボードの書き方、発表の仕方などまだまだ不十分なところがあり、課題となった。

本時の後、生徒たちは熱心にスピーチの練習を行った。そして、次時の「生き生き Activity」(performance test)では、ALTの前で生徒一人ひとりがスピーチに意欲的に取り組んだ。



(グループ発表)



(グループで旅行プランづくり)

## (2) 技能統合の言語活動を取り入れた授業づくり

実生活のコミュニケーションにおいて、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4つの言語活動は、それぞれが独立して行われることは少なく、「聞いたことについて書く」「読んだことについて話す」など、複数の技能が統合されて行われることがほとんどである。高等学校においては、すでに技能統合型の言語活動に取り組んでおり、中学校においても段階的に導入し、授業改善を図る必要がある。

本研究でも、生徒たちが気持ちや考えを伝え合う際に、技能統合した言語活動を單元ごとに繰り返し行う授業を目指すことにした。そうすることにより、4技能がバランスよく向上し、アウトプットの質の向上や量の増加につながると考えたからである。アウトプットの質とは、「言語形式の正確さや複雑さ」「発話内容の一貫性や理解しやすさ」などを表す。目指す授業の実現のために、以下の3点が重要であると考え授業に組み入れることにした。

- ① インタラクションの充実
- ② 豊かなライティングにつながるためのスピーキング活動
- ③ 生徒の思考を活性化させる授業づくり

### ① インタラクションの充実

生徒の発話量を増やすためにペアやグループでのチャットを充実させたり、発話の質を高めるためにT-T、T-Sのインタラクションでモデルを示したりした。これらの活動を通して、生徒が自分の考えを広めたり深めたりすることができると考えたからである。さらに、インタラクションの際には、次の3つの技術を大切にしたい。

- Repeating ……相手の言ったことを繰り返す。
- Expressing ……自分の意見を表現する。(リアクション)
- Expanding ……質問して、会話の内容を広げる。

インタラクションを通して、生徒は「質問力」「コメント力」をつけることができ、そして、この力が、授業の表現活動につながり、表現を豊かにすると考えた。以下に、様々な形のインタラクションを取り入れた授業実践例を紹介する。

### 実践例3 生き生きスキット作り

○単 元：1年 Daily Scene 6 ちょっとお願い

○授業者：鯖江中学校 吉田 慎吾 教諭

○本時の目標

- ・ Can I～? や Can you～? を用いて許可を求めたり、依頼したりすることができる。

○授業の観点

- ・ Can I～? や Can you～? を用いたスキット作りと発表は、生徒のスピーキングに対する意欲の向上に効果的であったか。

○考察

導入の「What am I ?クイズ」では、ALT→S、S→ALT、S→S インタラクションへとつながるように活動が組み立てられていた。その後の ALT と JTE のビデオが効果的でスキット作りの意欲を大いに高めた。ペアでスキットを考える時に、最初に場所と登場人物、キーフレーズを考えた。そのことがスキット作りの時間短縮につながり、その後の練習・発表へとスムーズに流れることができた。また、発表の前の評価の3観点を示す教師の実演が分かりやすく、発表への意欲を高めることができた。「ICT を 活かす」「ALT を活かす」「生徒の発言を活かす」「題材を活かす」こと ができた正に『生き生き授業』であった。



( ALT→S インタラクション )



( S→S インタラクション )

#### ② 豊かなライティングにつながるためのスピーキング活動

充実したインタラクションにより、生徒は自分の考えを広げたり深めたりすることができる。その後にライティング活動を行うことにより、内容においても言語形式においても質が高く、量が多いアウトプットを引き出すことができると考えた。以下に、スピーキング活動後にライティング活動を行った授業実践例を2つ紹介する。

#### 実践例4 効果的なモデルやペア・グループ活動後のライティング

○単 元：2年 Unit 3 Career Day

○授業者：東陽中学校 岸下 茉希 教諭

○本時の目標

- ・不定詞の2つの用法（副詞的用法・名詞的用法）を用いて修学旅行の希望案をグループで考えることができる。

○業の観点

- ・マインドマップを用いて意見を書くことは、英語の表現力を高めるための手立てとして有効であったか。

○考察

3年生の修学旅行のスピーチがとても良いモデルとなり、生徒たちはその後の活動の“*What do you want to do on a school trip?*”に意欲的に取り組んだ。授業が良く組み立てられていて、ペアからグループでのシェアリング活動では、マインドマップを効果的に使い、自分の意見を広げたり深めたりすることができた。これらの活動がその後のグループプレゼンテーションにスムーズにつながり、最後の活動では、一人ひとりが自分の希望案を書くことができた。



(マインドマップづくり)



(グループプレゼンテーションにむけて)

#### 実践例5 グループトーク後のライティング

○単 元：2年 Presentation 1 将来の夢

○授業者：越前中学校 水野 俊子 教諭

○本時の目標

- ・自分の将来の夢について、4文以上のまとまりのある英文を書くことができる。

○授業の観点

- ・教師や友達の夢を知ったり、自分の夢を紹介したりすることは、ライティング活動への意欲付けや表現力を高める手立てとして有効であったか。

## ○考察

導入で身近な先生の中学校時の夢を知ること、自分の夢を発表する意欲が高まった。マインドマップを見ながらグループ内で発表したり、質問したりする活動を十分行った後にライティング活動に入ったので、ほとんどの生徒が4文以上書くことができ、目標を達成することができた。

活動の途中で、どんな質問をしたかを全体で共有して質問の幅を広げたり、答え方を練習したりしながら、生徒たちは自分のスピーチを徐々にレベルアップすることができた。このように、インタラクションで内容を広げたり深めたりして、最後のライティング活動が深まった。この授業では、質問力にこだわったが、発表に対して即興でコメントする力をつけていくことが課題となった。



(グループ内での発表と質問する活動)

**Presentation** *My Future Dream* Class 1 Name \_\_\_\_\_

● **Reasons**

★ **My Future Dream**

\_\_\_\_\_ I want to live in America.

\_\_\_\_\_ I like to speak English.

\_\_\_\_\_ I want to see the Statue of Liberty.

\_\_\_\_\_ I like American food.

\_\_\_\_\_ I am interested in American people.

\_\_\_\_\_ I am interested in American movies.

\_\_\_\_\_ I study English.

4 sentences ... Good!

3 sentences ... Very Good!

2 sentences ... Great!

1 sentence ... Wonderful!

(最後のライティング)

## ③ 生徒の思考を活性化させる授業づくり

授業づくりの際に生徒が生き生きと活動するためには、活動のつながりとそれぞれの学習形態を考えることが重要であると考えた。また、その活動の中に生徒の思考が活性化する「Thinking time」を意識的に取り入れることが、豊かなアウトプットにつながると考えた。

課題に対する自分の考えを整理したり、グループやペアで話し合って課題に迫ったりする時間は、まさに生徒の思考が活性化する生き生きとした時間であり、その結果、「Thinking time」の後の表現活動が豊かなものになると考えた。

以下に、「Thinking time」を効果的に取り入れた授業実践を2つ紹介する。

## 実践例6 活動への意欲づけを意識した学習形態の工夫

○単 元：1年 Unit 3 わたしの好きなこと

○授業者：中央中学校 三國 寿之 教諭

○本時の目標

- ・ like や play などの一般動詞の文の形・意味・用法を理解し、表現できる。
- ・ 自分の好きなことを周りの人に伝えることができる。

○授業の観点

- ・ 本時の活動は、like や play などの一般動詞の文の形・意味・用法を理解し、自分の好きなことを周りの人に伝えるのに、適切であったか。

○考察

「クラス対抗自己紹介発表会」に向けて生徒に意欲づけをし、評価の4項目（Contact Attitude Pronunciation Memorization）を明確にして、一人ひとりが自分の課題を持って、small step で練習しながら自己紹介をレベルアップしていた。まず、教師のモデルがとても分かりやすかった。その後、個人・ペア・グループと学習活動形態を変えながら、何度も練習し、自信をもって生き生きと自己紹介をしていた。また、ペア活動では、ジェスチャーをしたり、相槌やリアクションを入れたりしながら、笑顔で取り組む様子がとても良かった。



（ペア活動を楽しむ生徒たち）

## 実践例7 中高連携を活用した丹生高校教員とのチームティーチング

○単 元：2年 Unit 5 Universal Design

○授業者：織田中学校 佐々木恵子 教諭

○本時の目標

- ・ 与えられたトピックに対して、意欲的に考え、英語で伝えようとする。
- ・ I think (that) ～ の文を用いて自分の考えや理由を英語で表現することができる。

○授業の観点

- ・ 本時の課題や手立ては、生き生きと表現活動に取り組ませるために効果的であったか

## ○考察

丹生郡内中学4校は丹生高校と連携しており、毎年丹生高校の教諭とティームティーチングを中学2年生全クラスで行っている。まず、織田中学校で研究授業を行いその後3校で同じ授業を実践した。

「丹生高校交流会」についての問いかけから授業をスタートさせ、2年生の京都研修・ALTの来日後の旅行の話・丹生高校の修学旅行の話をもとに、「ALTにお勧めする旅行先」を班毎で考え発表した。T-T、T-S、S-S インタクションを多く取り入れ、メイン活動の「ALTにお勧めの場所を紹介しよう」では、個人の思考からグループの思考に流れ、一番の場所を絞り込んだ。生徒は「聞く」「書く」「話す」を統合させて発表にまでつなげることができた。生徒の思考の流れに寄り添った学習の流れであった。「生き生きと」の定義が問題になり、生徒がどのように表現することが「生き生きと表現する」ことになるのかについて話し合いを深めた。

また、各自の案をグループの中でどうやって1つに絞らせるかという点が課題として挙げられた。宮崎中学校では、ALTの好みを生徒に質問させて「Thinking time」を与え、その答えに合うように各班の案を修正させるというやり方を加えて、授業を行った。



(丹生高校の教員との TT)



(グループでの Thinking time)

## 3. 研究の成果と今後の課題

### (1) 成果

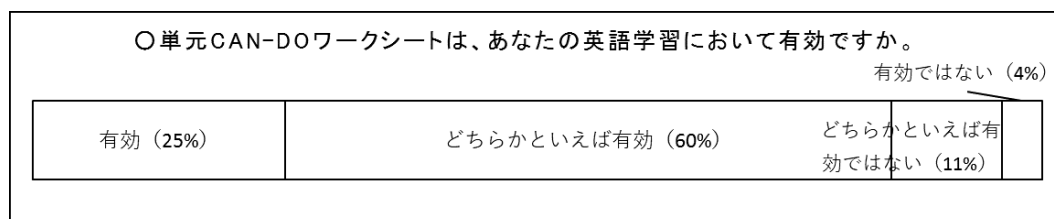
教師側の成果は2点ある。まず、鯖丹地区の全英語教員で、テーマや重点項目を共有しながら研究を進めることができた。そして、鯖丹地区全中学校で計画的に研究授業を行いながら、実践を重ねた。その結果、研究授業・研究会の回を重ねる毎に、教員間のテーマに関する共通理解が深まり研究が進んでいくことを実感できた。

2つめの成果は、学年 CAN-DO リストと単元 CAN-DO ワークシートを活用することができた点である。生徒につけたい力を3年間のスパンで考え、その後それぞれの学年の到達目標を設定することで、従来の学年 CAN-DO リストの見直しを図った。また、各学年の評価方法を検討することによって、どの時期にどんな方法で評価をするとより効果的かを考えながら、様々な評価方法を取り入れることができた。



また、単元 CAN-DO ワークシートの作成・実行により、各単元で生徒につけたい力を明確にして、「生き生き Activity」(Performance test) を考え、それに向けて各パートや授業の活動を組み立てることができた。単元 CAN-DO ワークシートの作成の際には、ALT にも協力してもらい、「生き生き Activity」を工夫することができた。

単元 CAN-DO ワークシートに関する生徒アンケートの結果は、次のようになった。



85%の生徒が「有効である」と回答した。その理由の主なものとして以下のようなことが挙げられた。

- ・学習の見通しがつきやすい。(50%)
  - ・毎回の振り返りを行うことで自分の理解度や達成度を知ることができる。(36%)
  - ・その単元やパートのゴールがわかることで、目的を持って学習できる。(31%)
  - ・パフォーマンステストを示されることで、意欲が増す。(18%)
- (複数回答)

このアンケート結果からもわかるように、単元 CAN-DO ワークシートは、生徒たちが英語学習を進める上で効果的であったといえる。単元 CAN-DO ワークシートを活用することにより、生徒たちは学習の見通しがつき、英語学習への意欲の向上につながった。また、教員にとっても単元の見通しを持ったり、授業のフィードバックをしたりする上で役立ったといえる。

また、「生き生き Activity」(Performance test)を終えた生徒達の感想では、次のようなことが挙げられた。

- ・緊張したけれど、目を見てスピーチできたので良かったです。  
(1年 Unit 3 : ALTに自己紹介をしよう)
- ・福井のよいところを紹介して、自分も行きたくなった。  
(2年 Unit 2 : おすすめの旅行プランを紹介しよう)
- ・I can enjoy 生き生き Activity. 今回の Unit はとても楽しむことができ、自分の力になった。  
(2年 Unit 2)
- ・I'm going to～を使って伝えることができ、うれしかった。(2年 Unit 2)
- ・to 不定詞の難しい表現でも、自分なりに頑張って書くことができた。  
(2年 Unit 3 : 将来の夢)
- ・いろいろなパターンの to 不定詞をつかえた。(2年 Unit 3)

これらの感想から、「生き生き Activity」によって、文法事項が定着したり、アウトプットの質が高まったりしたことがわかる。生徒達は達成感を味わうことができ、英語学習への意欲向上につながった。教員側としても、「生き生き Activity」を意識した授業に取り組み、その後、「生き生き Activity」を行うことを繰り返すことによって、生徒のアウトプットの質が高まり、量も増加してきたことを実感している。

また、Performance test を行った ALT から、「生き生き Activity を行うごとに生徒のモチベーションがあがっている。」や「英語が苦手な生徒が Performance test に頑張って取り組み、苦手意識がだんだんなくなってきた。」などの感想が挙げられた。

技能統合の授業に関しても生徒に次のようなアンケートを行った。結果は以下のとおりであった。

**○自分の気持ちや考えを伝え合う活動は好きですか。**

嫌い (5%)

好き (20%)	どちらかといえば好き (44%)	どちらかといえば嫌い (31%)	
----------	------------------	------------------	--

好きと答えた生徒の理由

- ・友だちのことや自分のことを楽しく伝えあえるから。
- ・相手の意見を聞いたり自分のことを知ってもらえたりするから。
- ・間違っていると教えてもらえるから。
- ・使える表現が多くなったから。

○自分の気持ちや考えを表現する活動において、工夫していることは何ですか。

- ・話が続くようにしたり、話を広げようとしていたりしている。
- ・リアクションをたくさんする。
- ・習った表現をたくさん使うようにしている。
- ・Eye contact と Big voice を意識している。

このアンケート結果から、自分の気持ちや考えを伝え合う活動を取り入れた技能統合の授業を行うことによって、生徒たちはインタラクションの工夫をしたり、楽しく伝え合えるようになったことがわかる。また、次のような質問も行い、その結果は以下のとおりであった。

**○1年生と2年生を比較して4技能で特に高まったと思う力は何ですか。(複数回答)**

Speaking		(45%)
Reading		(50%)
Listening		(38%)
Writing		(52%)

インタラク션을充実させ、自分の気持ちや考えを伝え合う活動を継続して行っていくと生徒の4技能はほぼバランスよく高まっていくことがわかった。

授業中、生徒の英語力が高まっていることが実感できる場面も多く見られるようになった。インタラク션において話す量が多くなったり、内容が充実したりしてきた。教員が、授業中にインタラク션을意識して取り入れることにより、最初は2、3文の発話だったペアチャットがだんだん長く続き、その内容が広がったり、深まったりすることができるようになった。今後ともインタラク션을活かした活動をつなげて、自分の気持ちや考えを伝え合う活動を継続していきたい。

## (2) 課題

各学年全 Unit で CAN-DO ワークシートを作成し、鯖丹地区で共有した。最後の活動である「生き生き Activity」に向けて単元や授業を組み立てていったが、その Performance test を行う時間がなかなかとれないという声が多かった。各学校裁量で ALT と話し合いながら、CAN-DO ワークシートの改良を加え、Performance test を継続していくことが大切であると考え。さらに、いつどこでどんな評価をするかを確認しながら、よりよい CAN-DO ワークシートにしていきたい。

研究授業においてよく課題として挙げたのは、「インタラク션の深め方・広め方」であった。Repeating や Expressing に関しては、生徒たちは抵抗なく楽しく取り組んでいたが、Expanding に関しては、なかなかうまくできなかった。そこで、まず生徒の質問力をつけることが課題となった。質問力をつけるには、時間がかかる。また、質問力だけではなく、即興で自分の気持ちや考えが言えるコメント力も必要である。T-T や T-S でモデルを示しながら、繰り返し指導することが大切であると思う。自然なインタラク션ができるように地道に取り組んでいきたい。

技能統合の授業に関しては、インタラク션을活かして活動をつなげ、本時のねらいにいかに向けることができるかということが課題になった。本時のねらいに向けるための small step をどのように積み上げていくか、どの技能をどのような学習形態で組み入れていくかについての研究をさらに進めなければならない。

## (3) まとめ

研究テーマ「自分の気持ちや考えを生き生きと伝え合う生徒の育成」に向けるために、「CAN-DO リストの効果的活用」と「技能統合の言語活動を取り入れた授業づくり」の2本柱で研究を進めてきた。

「CAN-DO リスト」では、「生き生き Activity」で何を評価するか、「技能統合の授業づくり」では、インタラク션을活かした活動をどのようにつなげて、いかに本時のねらいに向けるかということが研究の中心になった。

私たち鯖丹地区の全英語教員が、それぞれの実践で得たことを今後の授業に必ず活かしていけると実感している。そして、このことは「グローバル化に対応する生徒の育成」に必ずつながっていくと確信している。

# 県中教研研究発表の概要

## 1. 研究主題

○英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養うための指導と評価の工夫・改善

## 2. 発表の概要

### (1) 細川 頼久教諭（大野市立陽明中学校）の発表について

英語への苦手意識がある生徒も主体的に参加できる授業を目指した。書く活動では、マインドマップ作成やパラフレーズを通して、生徒に表現したいことを既習英語で表現させ、「My 辞書」という形で様々な表現を保存させた。音読活動では、ゲーム性を持たせ多読を促し、話す活動では、教科書の対話の一部を自身に置き変えて読ませ、自己表現につなげた。評価方法として、インタビューテストや単語テストを導入し、こまめに生徒の学習到達状況を把握した。さらに、3年生では習熟度別編成を行い、教師の日本語の使用量を変え、習熟度に応じた授業を行った。研究成果として、生徒の英語に対する苦手意識を軽減でき、より多くの生徒が授業に主体的に参加できた。今後、生徒の英語使用量や活動の質をどう向上させるのかを検討する必要がある。

### (2) 若林 京子教諭（坂井市立丸岡南中学校）の発表について

生徒たちの「やりたい」という学習意欲を喚起するための取組を行っている。必然性のあるトピックを提示し、ペア・グループで協力して課題に取り組ませたことで、生徒の対話的・協働的な学びの場が設定でき、学習意欲の向上につながった。また、「めあて」「まとめ」と書かれたカードを黒板に掲示し、授業の見通しを持たせ、授業後に CAN-DO リストに対応した振り返り表を記入させたことで、生徒が1時間の学びを確認することができた。さらに、英語科メディアセンター（オープンスペース）に生徒の作品や、英語係が企画・作成した掲示物を掲示し、学びを学校全体に広げた。しかし、グループ内における代表生徒のみの発表の解消や「めあて」を提示するタイミングの検証が課題として残った。

### (3) 鋸谷 卓磨教諭（福井市社中学校）の発表について

生徒たちの学習意欲を向上させるために、生徒たちが「できた！わかった！」という成就感・達成感を味わうことができるような授業づくりを協働で行っている。書く活動では、英語が苦手な生徒が取り組み易いよう、①マインドマップ②穴埋め式英文作成のようにスモールステップを踏ませた。また、スピーチ活動や、新出語彙、教科書の内容理解の場面では、ペアやグループを組ませ、お互いにアイデアを出し合ったり確認し合ったりすることで、生徒全員が授業に参加できるよう工夫した。研究成果として、英語が苦手な生徒でも授業に参加し、「表現できた！」という達成感を味わえた。一方で、生徒のコミュニケーション能力を評価する方法を工夫・改善することが必要である。

### 3. 協議の概要

協議テーマ：「英語学習・授業への動機づけについて」

- ① ALT を積極的に活用し、英語を用いる必要がある場面を設定する。実際にメールで ALT を大会に誘ったり、福井県の名所を紹介するガイドブックを ALT の家族にプレゼントしたりする。
- ② オピニオンギャップを生かした活動を通して、生徒の話したい意欲を喚起する。日頃から教師—生徒のインタラクションを通して、生徒との人間関係、学習関係の構築が不可欠である。
- ③ メッセージを伝えようとするあまり、使用する英語の正確さに欠ける部分があるので、授業後に教員がフィードバックを返すことが必要である。その際に、文法や単語だけでなく、内容にも注目すべきである。

### 4. 成果や今後の課題

- ・ALT を効果的に活用し、ペアやグループで、協働で学ぶことができている。評価についても、アンケートや観察を通して丁寧に生徒たちの学習状況を把握できている。
- ・「めあて」について、言語材料ではなく言語活動を提示するとよい。授業の冒頭に「めあて」を確認する授業があるが、いつ、誰が「めあて」を提示するのかによって生徒の学習意欲が変わる。
- ・英語の授業における動機づけについて、活動そのものに対する内発的動機だけでなく、活動を通して英語が上達することに対する内発的動機があることが大切である。
- ・「英語の授業は英語で行う」とあるが、生徒たちに、実際に海外にいるような英語で自己表現をする場を教師が設定することが大切である。そのためにも教師—生徒、生徒—生徒間のインタラクションを英語で行い、英語を使おうとする雰囲気を作る必要がある。



## 平成29年度県中教研英語部会郡市部長名及び活動報告

部	部長名	活 動 報 告
福井市部	松田 新一 (進明中)	<p>福井地区中学校教育研究会英語部会は、県の中教研集会の発表に向けての授業研究ならびにブロック内の前期・後期の授業研究を中心に活動してきました。また、独自の組織である授業づくり委員会を中心に、授業参観、効果的な授業づくりについての情報交換や授業実践における意見交換などを行いました。</p> <p>【平成29年度活動報告】</p> <p>4/14 第1回中教研福井ブロック英語部会主任会〔至民中〕</p> <p>6/21 福井ブロック中学校教育研究集会〔進明中〕 (社中 鋸谷 卓磨 教諭)(司会：棗中 記録：進明中)</p> <p>7/11 前期福井ブロック内授業研究会(高嶋 和代 教諭)〔安居中〕</p> <p>8/2~3 福井市英語サマーキャンプ(事務局：明道中)〔福井市少年自然の家〕</p> <p>8/10 福井県中学校教育研究集会(発表：社中)〔県立大学〕</p> <p>8月~3月 授業づくり委員会(5回程度)〔明道中〕</p> <p>11/22 福井県英語教育研究大会(鯖丹大会)〔朝日中〕</p> <p>12/ 1 後期福井ブロック内授業研究会(桑原 ゆうき 教諭)〔清水中〕</p> <p>3/ 9 第2回中教研福井ブロック英語部会主任会</p>
吉田郡部	稲葉 雄治 (松岡中)	<p>吉田郡教育研究会の事業として、夏季休業中には郡内中学校のそれぞれの校区ごとに、中学校の英語教育と小学校の英語活動の現状や課題について情報交換を行い、共通して取り組むことを確認し小中の連携を深めた。また小中それぞれの英語の授業を参観し、授業研究会などで活発な意見交換ができた。</p> <p>【平成29年度活動報告】</p> <p>5/24 第1回授業研究会 中学2年英語(授業者 松岡中学校 山内清美教諭)</p> <p>6/8 第2回授業研究会 小学5年外国語活動(授業者 吉野小学校 河合佳江教諭)</p> <p>6/30 第3回授業研究会 中学3年英語(授業者 永平寺中学校 南部和子教諭)</p> <p>7/27 永平寺町小中学校連携研修会を開催 小学校と中学校の学習内容などの情報交換を行った。</p> <p>10/27 第4回授業研究会 中学1年英語(授業者 松岡中学校 稲葉雄治教諭)</p> <p>H30 1/13、1/20、2/3、2/17、3/3の日程で英語研修会を開催した。研修会の内容は3/16~3/22の日程でアメリカ・ワシントン州シアトル市に派遣される吉田郡内の中学生17名の事前研修である。</p>

部	部長名	活 動 報 告
坂井ブロック (坂井市・あわら市)	佐藤 昌康 (春江中)	<p>4/10 坂井地区中教研総会英語部会 (春江中学校)</p> <p>5/9 第1回英語科主任会 (春江中学校)…今年度のスケジュールの検討等</p> <p>5/24 第1回英語セミナー委員会 (丸岡中学校)</p> <p>6/22 第2回英語セミナー委員会 (丸岡中学校)</p> <p>6/28 坂井地区中教研集会 (春江中学校) … 発表者 丸岡南中学校 若林京子 教諭</p> <p>7/11 第3回英語セミナー委員会 (丸岡中学校)</p> <p>7/28 坂井地区英語セミナー (高棕コミュニティーセンター) … 担当校 丸岡中学校</p> <p>8/10 県中学校教育研究集会 (県立大学)</p> <p>10/26 第2回英語科主任会 (春江中コミュニティーセンター) … 学力診断テストや特別研究会について</p> <p>11/22 県英語教育研究大会 (鯖丹地区 朝日中学校)</p> <p>1/25 坂井地区英語科特別研究会 (坂井中学校) … 担当校 坂井中学校</p> <p>2/ 第3回英語科主任会 (春江中学校) … 本年度の総括や次年度に向けての課題等</p> <p>毎月 授業研究会 (春江中コミュニティーセンター)</p> <p>地区中教研集会では、丸岡南中学校の若林京子教諭に、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養うための指導と評価の工夫・改善 ～「やりたい」を喚起する手立てと工夫～ をテーマに実践報告をしていただきました。①ペア・グループを通して「やりたいを喚起する」では、リアルな場面設定により、ALT におすすめの献立を意欲的に考え、話し合う様子が、②授業に見通しをもたせて「やりたいを喚起する」では、効果的な「授業の冒頭で、目標を示す活動」・「授業の最後に学習を振り返る活動」が、③メディアセンター・英語係で「やりたいを喚起する」では、メディアセンターでの生徒のふれあいと楽しさを感じる空間の様子が、それぞれ紹介されました。生徒の授業の満足度も非常に高く、意欲をもって、自ら考え活動することが何よりも力になっている興味深い実践内容であり、活発な質疑応答や意見交換がなされました。</p> <p>次に、英語セミナーには、約50名の生徒が参加し、12名の ALT と25名の JTE の指導の下、会場となった高棕コミュニティーセンターにてグループ活動を行いました。午前中は、しりとりやジェスチャーゲームなどの5つのゲームをローテーション形式で実施しました。また、午後には、クラフトに挑戦しました。各グループがそれぞれ割り当てられた国の代表的なものを与えられた材料で作成しました。それぞれの場面で、ALT の説明を聞いたり、ALT に質問をしたりと英語によるコミュニケーションに積極的に取り組む姿が見</p>

部	部長名	活 動 報 告
坂井ブロック	佐藤 昌康 (春江中)	<p>られました。最後には作成したクラフトについてのプレゼンテーションを行い、互いに多くの国の文化について学びあうことができました。</p> <p>また、今年度より毎月1回の授業研究会を坂井地区中学校英語科教員の自主研修として行っている。平成31年度福井県英語研究大会坂井大会の開催に向けて、平成29年度福井県英語研究大会鯖丹大会及び2017年度全英連新潟大会の視察報告会を行うなど、坂井地区中学校英語研究会の今後の研究の進め方について、活発な協議がなされている。</p>
大野市部	久保 俊岳 (陽明中)	<p>○第1回大野市学校教育研究会（学びの里「めいりん」） 4月13日 分科会結成、研究主題および研究計画、当面する課題についての意見交換</p> <p>○第2回大野市学校教育研究会（尚徳中学校） 5月9日 分科会長会、分科会予算配分等</p> <p>○中学校教育課程奥越ブロック集会（勝山中部中学校） 6月16日 研究授業および授業研究会を通した研究主題の追及</p> <p>○夏季英語セミナー運営研究会（陽明中学校） 6月21日 夏季英語セミナーの企画運営全般についての協議</p> <p>○奥越中学校夏季英語セミナー（勝山市体育館「ジオアリーナ」） 7月25日 奥越地区の中学校全学年を対象にした英語活動の実施</p> <p>○第3回大野市学校教育研究会（開成中学校） 8月1日 県中学校教育研究集会のプレ発表会</p> <p>○県中学校教育課程福井県研究集会（県立大学） 8月10日</p> <p>○大野市学校教育研究会英語部会研究会（陽明中学校） 11月8日 県学力診断テストの結果に基づいた市内中学生の到達度の分析</p>
勝山市部	久保真理子 (勝山中部中)	<p>文部科学省の「英語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、今年度が4年目の最終年度となる。今年度は、全ての学校で年間1回の公開授業及び研究会が行われた。中学校の公開授業には他の2校や高校から授業や研究会に参加、小学校の公開授業には校区の中学校が授業や研究会に参加、また、高校の授業にも参加し、小中高連携を図りながら、お互いの授業力向上を目指している。基本的に授業を英語で行い、生徒とインタラク션을しながら授業を進めるスタイルを推進している。</p> <p>○勝山市学校教育研究会英語部会</p> <p>4月21日 年間活動計画、英語教育強化地域拠点事業を受け、今年度の役割分担と取り組みの確認</p> <p>5月19日 授業研究会 於：勝山中部中学校</p> <p>6月16日 中学校教育課程奥越ブロック研究集会 於：勝山中部中学校 ・研究授業および研究討議 (授業者：勝山中部中学校 嶋田一仁教諭)</p>



部	部長名	活 動 報 告
勝山市部	久保真理子 (勝山中部中)	<p>6月21日 奥越英語セミナー運営委員会 於：陽明中学校</p> <p>7月25日 奥越ブロック夏季英語セミナー 於：勝山市ジオアリーナ</p> <p>8月10日 県中学校教育課程研究集会 1名参加 於：県立大学</p> <p>1月中旬 第15回スペリングコンテスト</p> <p>生徒の学習意欲の向上と、市全体の基礎力アップを図るため、市内3中学校が学年毎に共通の問題（100問）で、同時期に実施し、成績上位者には英語部会から賞状を出している。冬休みに出題リストを配り、冬休み後にテストを行う。</p>
鯖江市部	飛田千登枝 (鯖江中)	<p>今年度も昨年度に引き続き、平成29年度の福井県英語研究大会（鯖丹大会）の研究発表に向けて、研究テーマ「自分の気持ちや考えを生き生きと伝え合う生徒の育成」のもと、丹生郡の英語部会と連携を密に取り協力しながら、中身の濃い研究実践に取り組んだ。また小学校からの英語教育の強化に伴い、今年度も市内三中学校の英語教員による出前授業を、それぞれの校区の全小学校で実施する等、小学校との連携のさらなる強化に努めた。</p> <p>(1) 研究実践</p> <p>①鯖丹地区英語部会授業研究会の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回授業研究会（鯖江市英語部会 授業研究会を兼ねて） 6／21 東陽中学校 岸下 茉希教諭・ALT</li> <li>・第2回授業研究会 7／13 越前中学校 水野 俊子教諭・ALT</li> <li>・第3回授業研究会 10／17 朝日中学校 内藤 元彦教諭・ALT</li> <li>・事前授業研究会 11／16 朝日中学校 内藤 元彦教諭・ALT</li> </ul> <p>②鯖丹地区合同主任会・各研究部会による共通理解・連携の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成29年度研究大会運営及び研究実践についての協議</li> </ul> <p>③学習到達目標（CAN-DO形式）一覧とCAN-DOワークシート作成</p> <p>(2) 福井県英語教育研究大会 11／22 朝日中学校</p> <p>①公開授業 授業者 内藤 元彦教諭 Fiona Kelemencky ALT</p> <p>②全体会</p> <p>③講演会 文部科学省初等中等教育局 視学官 平木 裕氏 「新教育課程における外国語教育が目指すもの」 ～中学校学習指導要領の改訂を中心に～ 中学校学習指導要領の改訂を受けて、今後の日本の外国語教育の方向性や授業改善等について考える大変有意義な大会となった。</p>

部	部長名	活 動 報 告
鯖江市部	飛田千登枝 (鯖江中)	<p>(3) 小中連携</p> <p>①小中における授業研究の案内を、市内全ての小中学校に送付し参観を呼びかけ、率直な意見交換をしたり、中学校英語教員による小学校での出前授業を実施したりするなど小中連携を強化し、小学校から中学校へのよりスムーズな移行がなされるよう努めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校の外国語活動授業研究会への積極的な参加 11/2 鳥羽小学校 鳳 万寿弥教諭</li> <li>・6年生対象に中学校英語教員による出前授業の実施(学期に1回) (3学期は、5年生対象に実施)</li> </ul> <p>(4) 丹南地区英語セミナー(担当 鯖丹地区) 8/21 鯖江文化センター 各活動の見直し・当日の運営等に関して、鯖丹地区の教員が協力し、より質の高いセミナーの実施をめざした。当日は、とても和やかで活発なセミナーとなった。</p> <p>今後も、丹生郡と鯖江市の英語研究部会の横の繋がりを大事にしながら、研究大会に向けての授業実践で得たことを生かして、授業の質と教師の指導力の向上、生徒の英語力の向上に努め、授業研究を地道に進めていきたいと考えている。</p>
丹生郡部	浅井 裕規 (織田中)	<p>丹生郡英語研究部会は、郡(越前町)内の4中学校の英語科教員で構成されている。特に今年度は、11月に開催された福井県英語教育研究大会(鯖丹大会)に向けて、研究テーマ「自分の気持ちや考えを生き生きと伝え合う生徒の育成」のもと、鯖江市の英語科教員との連携をとりながら研究を進めた。また、中高一貫教育を進める丹生高校や、郡内の小学校とも連携をとりながら研究を行った。主な活動については以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 丹生郡学校教育研究会英語部会 郡内4校の英語科教員11名全員が参加し、年間事業について協議した。 ・4月17日(月) 朝日小学校</li> <li>2 英語科主任会等 鯖丹地区合同で主任会等を定期的に行い、福井県英語教育研究大会(鯖丹大会)に向けて研究を推進した。 ・第1回: 4月25日(火) 織田中学校 ・第2回: 5月30日(火) 朝日中学校(合同研究会) ・第3回: 7月27日(木) 朝日中学校(臨時主任会) ・第4回: 8月24日(木) 朝日中学校 ・第5回: 9月20日(水) 朝日中学校 ・第6回: 10月 3日(火) 朝日中学校(合同研究会) ・第7回: 10月25日(水) 朝日中学校</li> </ol>

部	部長名	活 動 報 告
丹 生 郡 部	浅井 裕規 (織田中)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第 8 回：11月13日（月） 朝日中学校（合同研究会）</li> <li>・第 9 回：11月16日（木） 朝日中学校（大会実行委員会）</li> <li>・第10回：11月21日（火） 朝日中学校（大会実行委員会）</li> </ul> <p>3 授業研究会</p> <p>鯖丹地区合同で授業研究会を開催し、福井県英語教育研究大会（鯖丹大会）に向けて研究を推進した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回： 5月19日（金） 宮崎中学校 渡邊喜代美 教諭、ALT</li> <li>・第2回： 6月21日（水） 東陽中学校 岸下 茉希 教諭、ALT</li> <li>・第3回： 7月13日（木） 越前中学校 水野 俊子 教諭、ALT</li> <li>・第4回：10月17日（火） 朝日中学校 内藤 元彦 教諭、ALT</li> <li>・第5回：11月16日（木） 朝日中学校 内藤 元彦 教諭、ALT</li> </ul> <p>4 福井県英語教育研究大会（鯖丹大会）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・期 日：11月22日（水）</li> <li>・会 場：越前町立朝日中学校</li> </ul> <p>(1) 公開授業</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業者： 内藤 元彦 （朝日中学校教諭） フィオナ・ケレメンスキー（朝日中学校ALT）</li> <li>・授業学級：朝日中学校 2年4組</li> <li>・研究テーマ：自分の気持ちや考えを生き生きと伝え合う生徒の育成</li> </ul> <p>(2) 記念講演</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・講 師：平木 裕（文部科学省初等中等教育局視学官）</li> <li>・演 題：新教育課程における外国語教育が目指すもの ～中学校学習指導要領の改訂を中心に～</li> </ul> <p>5 中高連携教育</p> <p>中高一貫教育英語研究部会を定期的に開催し、郡内4中学校と丹生高校とが連携して、中高6年間を見通した教科指導法についての研究協議を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・丹生高校の授業力向上公開授業に参加した。（6月、11月）</li> <li>・郡内4校の2年生を対象に、丹生高校の教員が訪問授業を行った。（10月）</li> </ul> <p>6 丹南ブロック中学生英語セミナー</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・期 日：8月21日（月）</li> <li>・会 場：鯖江市文化センター</li> <li>・対 象：中学2年生</li> <li>・事業担当：鯖丹地区</li> </ul>

部	部長名	活 動 報 告
越 前 市 ・ 今 立 郡 部	水谷 善長 (武生三中)	<p>1 活動概要</p> <p>○授業研究会は年3回あり、今年度は、越前市では武生五中と武生六中、南条郡・今立郡では今庄中で実施された。全英語教員が1回以上参加し、公開授業と研究会を通して授業力の向上を図った。</p> <p>○夏季休業中には、英語教員研修会を実施し、「バックワード・デザインによる指導案の改善」に関する講義と指導案づくりの演習を行い、授業力向上に繋げた。</p> <p>○本年度は、鯖丹ブロックが英語セミナーの実行委員長と事務局を担当した。事前の準備会議から前日の打ち合わせや準備、当日の運営など、鯖丹地区と南越地区の英語教員が協力して企画・運営を行った。当日はALT約20名、生徒約130名と、例年より多くの生徒の参加を得て開催され、最初は少々緊張気味であったが、ゲームや劇などで楽しみながら英語を使う姿が多く見られ、交流を深めていた。</p> <p>2 活動実績</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・4月19日 第1回英語科主任会（武生三中）</li> <li>・6月 9日 県英語研究会総会・講演会（国際交流協会）</li> <li>・6月20日 第1回英語科授業研究会（武生五中 廣嶋教諭）</li> <li>・6月22日 中教研鯖丹・南越B研究集会（南条中）</li> <li>・7月25日 南越地区中学校英語科夏季研修会（武生三中30名参加）</li> <li>・8月10日 県中教研集会英語部会（県立大）</li> <li>・8月21日 丹南地区英語セミナー（鯖江市文化センター）</li> <li>・10月4日 県中学校英語弁論大会（鯖江市文化センター）</li> <li>・10月5日 第2回英語科授業研究会（武生六中 松村教諭） (同時開催：第2回英語科主任会)</li> <li>・11月22日 県英語教育研究大会（鯖丹大会）（朝日中）</li> <li>・平成30年2月8日 第3回英語科主任会（武生三中）</li> </ul> <p>3 成果と課題</p> <p>研究主題としては「互いに気持ちや意見を伝え合い、考えを深めようとする生徒の育成 ～4技能を総合的に育成する指導の工夫～」を掲げて研究を進めたが、授業研究会の担当校とそれ以外の学校との温度差が少々感じられた。</p> <p>年3回の授業研究会では、研究主題をより具体的に焦点化し、特に「会話活動とライティングを如何にリンクさせて、より自然なコミュニケーション活動にするか」について意見交換し、マインドマップの活用法等の成果が得られた。</p> <p>今後も、定期的に地区内で研究テーマに沿った授業を公開することとし、全英語教員の資質向上と授業力向上に努め、コミュニケーションな授業を通して英語を使える生徒の育成を目指していきたい。</p>

部	部長名	活 動 報 告
南 条 郡 部	檜尾 基司 (河野中)	<p>南条郡は、授業研究会や研修会、また丹南ブロック夏季英語セミナーなど南越ブロックで活動している。南条郡独自では、平成29年度南越地教委連管内英語教育研修会が今庄中学校で行われ、「基礎・基本の確実な定着と英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」をテーマに授業研究をした。2年生のUnit 6で“<b>There is</b>” “<b>There are</b>”を扱う授業だった。越前市からもALTを含む多くの先生方が参加され、授業後の研究討議も活発に進められた。</p> <p>6月20日 第1回南越地区授業研究会（武生第五中）  6月22日 中教研鯖丹・南越ブロック研究集会（南条中）  7月25日 南越ブロック英語科夏季研修会（武生第三中）  8月10日 県中教研集会（県立大学）  8月21日 鯖丹・南越ブロック夏季英語セミナー（鯖江市文化センター）  10月 5日 第2回南越地区授業研究会（武生第六中）  11月 2日 南越地教委連英語科授業研究会及び南越地区授業研究会（今庄中）</p>
敦 賀 市 部	木原 茂子 (角鹿中)	<p>敦賀市英語研究部会は、市内5校の英語科部員で構成されている。今年度は、敦賀市小教研英語活動部会との連携を重視しながら、教員の教科指導力の向上と生徒の英語力向上を目指す研究を進めることができた。主な活動については、以下の通りである。</p> <p>1 活動概要</p> <p>(1) 授業研究会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業者 気比中学校 西尾知愛教諭 ALT Jenny Lin</li> <li>学年/単元 2学年 Unit5</li> </ul> <p>市内小学校英語活動部会所属の教員も参観し、自分の意見とその理由を含めてのやりとりを重視した授業の在り方について研究討議をすることができた。</p> <p>(2) 二州地区中学校英語セミナー開催</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・敦賀市南公民館にて、中学3年生49名、ALT 15名、JTE15名が参加。①名刺交換 ②ALTによるプレゼンテーション ③クラフトタイム ④Show &amp; Tell ⑤クイズの5つの内容で活動した。ALTとの英語によるコミュニケーションに楽しく取り組む姿が見られ、会場は和やかな雰囲気に包まれた1日であった。</li> </ul> <p>(3) 小中連携での授業参観および授業についての討議</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校英語活動部会との連携により、各中学校校区毎に公開する小学校の外国語活動の授業に、中学校の教員も参観し、合同で研究討議をした。(10月～1月)</li> </ul>

部	部長名	活 動 報 告
敦賀市部	木原 茂子 (角鹿中)	<p>2 活動実績</p> <p>4月10日 第1回中教研部会 「年間活動計画協議及び部会組織や行事の役割分担」〔中央小学校〕</p> <p>5月15日 第2回中教研部会 英検についての取組〔角鹿中学校〕 4 技能向上のための授業づくり研修 (講師：敦賀市教育委員会 竹田ひとみ指導主事)</p> <p>6月19日 第3回中教研部会 英語セミナーの計画 〔角鹿中学校〕</p> <p>8月 2日 二州ブロック英語セミナー〔敦賀市南公民館〕</p> <p>8月10日 県学校教育課程研究集会 3名参加〔県立大学永平寺キャンパス〕</p> <p>10月16日 第4回中教研部会 授業研究会指導案検討〔角鹿中学校〕</p> <p>11月20日 第5回中教研部会 敦賀市教研一斉授業研究会〔気比中学校〕 4技能向上のための授業づくり研修会 (講師：お茶の水女子大学附属中学校 中島義和氏)</p> <p>12月19日 ALT によるクリスマス キャロリング〔市内中学校〕</p> <p>1月16日 第6回中教研部会 学力向上について 〔角鹿中学校〕</p> <p>2月19日 第7回中教研部会 「反省とまとめ、来年度への課題と提言」 〔角鹿中学校〕</p>
三方郡・三方上中郡部	堀口 尚敬 (美浜中)	<p>【平成29年度 活動報告】</p> <p>4 月 中高連携授業打ち合わせ (美方高・美浜中・三方中・上中中) 三方中、美浜中に美方高校より乗り入れ授業開始</p> <p>5 月 町内小学校外国語授業参観 (三方中)</p> <p>6 月 小中連携公開授業 校内公開授業 (三方中)</p> <p>7 月 美方高校英語科教員 三方・美浜・上中に出張授業実施 (2年生)</p> <p>8 月 中高連携授業打ち合わせ (美方高・美浜中・三方中・上中中) 県中学校教育研究集会 参加</p> <p>9 月 中学校授業力向上研修会 (美浜中・三方中・上中中) 校内公開授業 (美浜中) 小浜市中学校英語授業づくり研修会 参加 (三方中)</p> <p>10 月 県中学校英語弁論大会 参加 校内公開授業 (美浜中)</p> <p>11 月 校内公開授業 (美浜中) 校内公開授業 (三方中) 町内小学校外国語授業参観 (三方中)</p> <p>12 月 中高連携授業打ち合わせ (美方高・美浜中・三方中・上中中) 郡小学校英語活動研修会 参加 (美浜中央小) 校内公開授業 (三方中)</p> <p>1 月 小中連携会議 (三方中・みそみ小・三方小)</p>

部	部長名	活 動 報 告
三方郡・三方上中郡部	堀口 尚敬 (美浜中)	<p>校内公開授業（三方中）</p> <p>2月 英語科・英語活動先進校視察研修（美浜町）</p> <p>中高一貫クラス 英語研究発表会（三方中・美浜中・上中中・美方高）</p> <p>校内公開授業（三方中）</p> <p>小中連携 小学校外国語授業参観（三方中）</p> <p>地域の特色である中高連携に力を入れながらも、来年度より小学校で先行実施される英語科に向けて小中の接続を強化することができた。中学校では、英語科全教員が公開授業を行った。他にも、小学校英語活動部が開催する研修会にも積極的に参加し、連携を深めた。授業力向上のため、嶺南東ブロック3中学校（美浜、三方、上中）で指導案作成・公開授業・研究協議を行うことができ、中中の横のつながりを強化することができた。</p>
小浜市・三方上中郡部（上中地区）	中島 正二 (小浜中)	<p>【平成29年度 活動報告】</p> <p>4月17日 小浜市教育研究会（英語部会）①</p> <p>4月26日 小浜市英語授業作り研修会</p> <p>6月 5日 小浜市教育研究会（英語部会）②</p> <p>7月25日 小浜市英語授業作り研修会</p> <p>8月16日 若狭ブロック英語セミナー事前打ち合わせ・準備</p> <p>8月18日 若狭ブロック英語セミナー（小浜市食文化館）</p> <p>9月15日 授業研究会（小浜第二中学校）</p> <p>10月 2日 小浜市教育研究会（英語部会）③</p> <p>10月17日 授業研究会（小浜中学校）</p> <p>2月 5日 小浜市教育研究会（英語部会）④</p> <p>2月22日 小浜市英語授業作り研修会</p> <p>1年を通して、中中・小中・中高連携授業研究会を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各小学校の授業研究会に中学校の教員が参加した。</li> <li>・各中学校の公開授業に小学校や高校の教員も参観し、研究会を実施した。</li> <li>・高校の公開授業研究会に中学校の教員が参加した。（若狭高校・若狭東高校で実施）</li> </ul> <p>また、今年度も部員の研修のため、研究会や研修会へ積極的に参加した。大飯郡との交流など、小浜・三方上中研究会の発展に部員一同取り組んだ。</p>

部	部長名	活 動 報 告
大 飯 郡 部	仲野比佐代 (内浦中)	<p>【活動内容】</p> <p>①授業力向上について</p> <p>若狭地方教育委員会連絡協議会主催の「授業力向上推進委員会」の計画に基づく研修において、指導案検討と、以下の通り授業公開・事後研修を実施した。</p> <p>日時 平成29年10月26日（木）</p> <p>会場 大飯中学校</p> <p>単元名 Unit 5 Living with Robots -For or Against</p> <p>本時の目標 仕事における人とロボットの特徴を考え英語で表現することができる。</p> <p>②英語セミナーについて</p> <p>小浜市・三方上中郡と合同開催で、以下の通り実施した。</p> <p>日時 平成29年8月18日（金）</p> <p>会場 若狭おばま食文化館</p> <p>参加人数 生徒：28名、ALT：11名、JTE：8名</p> <p>主な内容 （１）Activity(Self-introduction and Games) （２）Cooking （３）International Time(ALTs introduce their culture)</p> <p>【成果と課題】</p> <p>①授業力向上について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導案の検討や事後研修において、授業で効果のあったアイディアを出し合ったり、心がける点を確認したりするなど、具体的な実践を交流し合うことができた。</li> <li>・会員が少人数のため、授業での課題や悩みなどについて率直に話し合い、各自の授業を振り返ることができた。</li> <li>・郡内での授業交流が１回しかできなかった。</li> </ul> <p>②英語セミナーについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ALTと一緒に調理をするという活動を設定することにより、必然性のあるコミュニケーション活動を行うことができた。</li> <li>・ALTによるプレゼンテーション(International Time)は、実物やPCなど効果的な準備がなされており、分かりやすかった。</li> <li>・参加者が少ない中学校もあった。他の行事と重なる場合も多いので、決まった日程を早めに連絡して、可能な限り２年生が参加しやすいようにしていく必要がある。</li> </ul> <p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・４校での情報交換や協力体制をさらに進めていきたい。</li> </ul>





## 県高教研英語部会・県高文連英語部会

代表理事 中 村 珠 美

### 1. 平成29年度高教研・高文連英語部会役員

部 会 長 勝木 博一（嶺南東特別支援学校校長）

副部会長 竹内 定太郎（大野高等学校定時制教頭）

代表理事 中村 珠美（福井商業高等学校教諭）

※ 高教研英語部会は、加盟校英語科主任の先生が理事となっています。

庶 務 伊藤 仁美（福井商業高等学校教諭）

会 計 石田 洋志（福井商業高等学校教諭）

事 務 局 福井商業高等学校

〒910-0024 福井市乾徳4-8-19

TEL：(0776)24-5180 FAX：(0776)24-5181

### 2. 予算執行

〔高教研〕 本部より英語部会に325,000円頂き、高教研英語部会理事会・高教研英語部会総会・県英語研究大会の運営費や、『会報』の印刷費等に充てました。

〔高文連〕 本部より英語部会に186,000円頂き、高校英作文コンテスト（93,000円）・高校英語弁論大会（93,000円）の運営費に充てました。

### 3. 高教研英語部会理事会

平成29年5月26日（金）、福井商業高校セミナーハウスにて開催しました。議長は足羽高校山田和宏先生が務められ、平成28年度事業報告・決算報告、平成29年度事業計画および予算案、2023年2024年の高教研大会発表校を審議しました。また、英語教育研究大会の高校の担当校について、ブロック制ローテーションの事務局原案について審議がなされました。2018年は奥越・坂井地区、2020年は嶺南地区、2022年は南越地区、2024年は福井市の学校が担当することになりました。2026年以降については保留となりました。その地区内の主任による話し合いで、どの学校が担当するかを決めることになります。

### 4. 高教研英語部会総会

平成29年6月9日（金）、福井県国際交流会館にて開催しました。議長は福井農林高校 池田誠司先生が務められ、平成28年度事業報告・決算報告、平成29年度事業計画および予算案、2023年、2024年の高教研大会発表校を審議しました。また、英語教育研究大会の担当校の案は承認を得ました。総会后、奥越・坂井地区の主任の先生が話し合い、2018年の秋の英語教育研究大会は丸岡高校で開かれることになりました。

## 5. 福井県高等学校教育研究大会 英語部会

期 日	平成29年8月23日（水）
会 場	手寄地区市街地再開発ビル（AOSSA）・福井県民ホール
大会主題	問題の発見と解決に向けて主体的に学ぶ生徒を育てるための教科・科目の指導はどのようにすればよいか。
部会主題	グローバル社会において英語で他者と情報や考えを伝え合い、実生活における課題を積極的に解決しようとする生徒を育てるための英語科の指導はどのようにすればよいか。
部会役員	司会者：伊藤 美智子（敦賀高校教諭 福井県英語研究会 放送テスト副部長） 助言者：岩本 公信（高校教育課指導主事） 澤田 則義（高校教科研究課主任） 発表者：大橋 恵梨香 大橋 夕紀（若狭高校教諭） 松村 結奈（敦賀工業高校教諭） 記録者：野村 希美子（足羽高校教諭） 坪川 郁子（坂井高校教諭）

## 発 表 の 概 要

### 平成29年度福井県高等学校教育研究大会 英語部会 記録

【発表1】 福井県立若狭高等学校 大橋 恵梨香 教諭、大橋 夕紀 教諭  
テーマ 若高流！「深い思考力」と、「主体性を持ち多様な人々と協働する態度」  
を育むための英語科としての取り組み

#### 1. はじめに

##### 1) 学校の紹介

創立120周年を迎える伝統校だが、新しいことに挑戦している学校。文理探求科2クラス（2年次より理数探求科・国際探求科に分かれる）、普通科5～6クラス、海洋科学科2クラス編成。地域資源を活用した探求学習による、地域と世界を結ぶ科学技術人材の育成を目指している。第1学年【探求の基礎段階】第2学年【探求の実施段階】第3学年【探求の進化段階】

##### 2) 学校独自の取り組み

教育目標：「異質のものに対する理解と寛容の精神」を養い、教養豊かな社会人の育成を目指す。



全体研究テーマ：一人ひとりが深く学ぶための授業づくり

～深い思考へと誘う問いとは～

研究主題：グローバル社会において英語で他者と情報や考えを伝え合い、実生活や実社会における課題を積極的に解決しようとする生徒を育てるための英語科の指導はどのようにすればよいか。

### 3) 英語科としての取り組み

「主体性」を持った生徒、「理解力・寛容さ」を持った生徒、「発信力」のある生徒、「深い思考力」を持つ生徒の育成を目指し、取り組んでいる。取り組み例として、ワンランク上のプレゼンテーション力の育成、自分の意見を伝える力・手法、外部試験の積極的な活用と受験、教科の枠を超えた英語活動がある。

## 2. 実践内容

### 1) 取り組み①

基本的なプレゼン力に総合の時間を通してのナンバリングやラベリング活動をたすことで、ワンランク上のプレゼンテーション力の育成を図り、表現力を向上させる。活動例：FUKUI TOUR PROJECT、スキットコンテスト、レシテーション

### 2) 取り組み②

論理的思考力に効果的な伝え方をプラスして、自分の意見を伝える力や手法を向上させる。  
活動例：英語ディベート、オーラルテスト（ディベート編）

### 3) 取り組み③

外部試験を利用して、個々の基礎英語力を向上させるとともに、客観的に自分の英語力を計る。活動例：英検プロジェクト

### 4) 取り組み④

教科の枠を超えた英語活動。校外、海外の人々と関わる実体験を通して、英語運用能力とコミュニケーション力を身に付ける。活動例：（理科とタイアップして）サイエンスダイアログ、マイクロプラスチックの研究

## 3. 今後の課題

- ・評価の仕方を考える必要がある。多様なアウトプットに対する共通の評価基準が必要である。生徒にもわかりやすい評価基準も考えていく必要がある。
- ・3年間を見据えた縦のつながりを考える必要がある。段階を踏まえた若狭高校プランを考えていく。

### 【質疑応答】

Q：英検プロジェクトについて…模擬試験と実際の検定試験とには、どのような相関関係がありますか。（敦賀高校）

A：英検プロジェクトを実践した年は、全ての級において合格者が増加している。

例：昨年は、3級に38人、準2級に77人、2級に44人、準1級に3人合格

Q：スキットコンテストに関して、準備時間を含めて工夫していることは何ですか。また、生徒達が実に楽しそうにスキットコンテストやプレゼンテーションに参加しているようですが、

スキットコンテストやプレゼンテーションの指導で工夫していることは何ですか。

(武生東高校)

A：スキット作成の前に、定型表現の input に 4 時間あてている。script を書くために 2 時間 (ALT も指導に加わる) をあてる。話のおちを考えておもしろい発表にすることや、Base になる話はよく知られているものにするのを伝える。発表の場が、英語以外にも要所要所にあるので、見せることを恥ずかしがらない雰囲気作りに心がけている。

Q：若狭高校の実践を通して、生徒のどのような変化を感じていますか。また、生徒の変容を見るために、評価基準を考えていますか。(藤島高校)

A：1 年生から 2 年生になると、自信をつけて、発表が上手になっていると感じる。

評価基準に関しては、どの生徒に対しても同じ評価基準が必要だと感じている。パスポートみたいなものがあるといいのかもしれない。自分も他人もわかる共通の評価基準をどう作るのかを考えている。ALT に oral で評価してもらうことも検討中。CEFR や Can-do List も見直しをしようと考えている。自分も他人もわかる評価基準をどう作るのか、生徒自身が自分の成長を確認することができる手段が必要だと思う。生徒用の Can-do-List も加えたいと考えているが、まだ形になっていないのが現状である。

Q：1 年生の 1 学期にディベートをする理由は何ですか？(藤島高校)

A：2 年生の 1 学期からの間違い。ディベートは、やりたいという気持ちを持った生徒が 1 年次から挑戦している。よって、ディベートに慣れて、できるようになるのが 2 年次 1 学期かと考えている。

**【発表 2】** 福井県立敦賀工業高等学校 松村 結奈 教諭  
テーマ 生徒の「英語基礎力の定着と向上」をめざして

1. はじめに

1) 学校の紹介

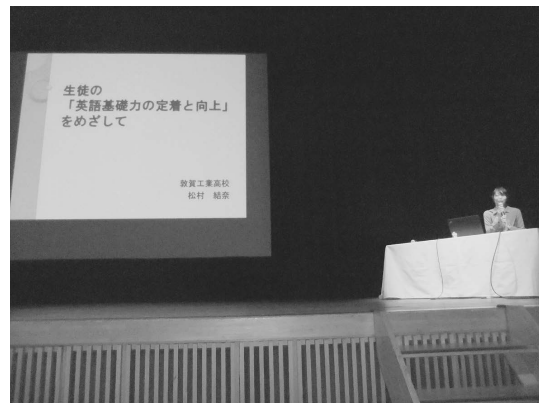
電子機械科、電気科、情報ケミカル科、建築システム科の 4 学科から成る工業高校。在籍数 350 名 (内女子 43 名) で、英語科教員は教諭 2 名、非常勤講師 1 名、ALT 1 名。

2) 生徒の学力・進路について

60 種類以上の専門の資格取得をめざしており、資格取得率は県内高校の中でもトップクラス。28 年度卒業生の就職者の割合は約 75%。本校求人倍率は県平均求人倍率と比較してかなり高い。一方、大学進学者の大半は私立大学に進学しているが、大学入学後、学力面で心配な生徒が多い。

3) 敦賀工業高校独自の取り組み

①専門知識の定着と地域連携。資格取得に励むだけでなく、小学校へ出張授業や敦賀駅のイルミネーションなど地域貢献にも取り組んでいる。



②国数英の基礎力定着と向上をめざして、敦工タイムを昼食・休憩後15分間取っている。

1・2年生は **Benesse** のマナトレ、3年生は **SPI** 問題を使用している。

③進学者対象模試として、**Benesse** 進路マップを年6回利用している。

#### 4) 英語科の単位数について

1年次コミュニケーション英語基礎2単位、2・3年次コミュニケーション英語Ⅰ2単位、4年制大学進学希望者対象に英語Ⅰ（選択）2単位。選択以外の授業では、週1回ALTとの **Team Teaching** を実施している。

## 2. 実践内容

### 1) 敦工タイム

**Benesse** のマナトレを使用。基礎学力の低い生徒が多いため、1年生では中学校での既習事項の復習から取り組んでいる。一定の効果は見られるが、他教科と比較しても英語基礎力の定着率は低い。授業と連携し、基礎の定着を確実にすることや、よりわかりやすい授業の工夫が必要。

### 2) 1年生少人数クラスの編成

1年生の授業では、週2時間のうち1時間ALT1名+JTE2名での **Team Teaching** を実施。あとの1時間はJTEのみで授業を行うが、クラスを半分の人数にして、中学校の既習事項確認プリントを使って基礎力定着を目指している。

### 3) 選択英語（4年制大学進学者対象）

ALTと協力して、1学期は **Writing** と **Presentation** に取り組んだが、必ず **Writing** をしてから **Presentation** を行った。内容は、"If I had 10 million yen..." "What I want to do after graduation" "Things to a deserted island" など。**Presentation** は、はじめはALTと1対1で、次にペアで、最後に全体の前で、というようにステップを踏んで行った。また、**Presentation** で留意すべき点は、生徒たちに考えさせてそれを板書した。2学期は **Debate** を実施する予定。

## 3. 今後の課題

- ・1年生では、中学校の既習事項の確認から行っているが、定着率は低い。使用頻度を増やし、フィードバックを与えて自己表現のための英語としてインプットしていく必要がある。覚えるだけの英語ではなく、伝えるための手段として英語を使用する機会を与える。
- ・3年選択英語の **Presentation** では、自己評価の基準を明示し、自分で自分の **performance** を再確認する機会を与える必要がある。
- ・英語の学習に対してモチベーションの低い生徒や苦手意識が強い生徒に、どうアプローチしていくのが効果的かを考えながら、まずは、英語を楽しめる環境と、英語が身近に感じられる環境づくりをすることが、今後の課題。

## 【質疑応答】

Q：年6回の **Benesse** の進路マップの利用について。大学に進学して要求される英語力と生徒の現状の英語力のギャップをうめることが目的ととらえたが、それでいいでしょうか。

（福井農林高校）

A：大学で必要とされる英語力とのギャップを、生徒にわかってもらうために実施している。受

験する生徒は進学希望の生徒なので、生徒にとっては自分の位置を知るいい機会になっている。わからないことを質問に来る生徒も出てきた。

Q：敦工タイムの導入に際して、学力向上に向けての全職員のコンセンサスはとれたか。

(福井農林高校)

A：敦工タイムは平成27年度から行っている。年々、大学を受験する生徒の学力が下がってきているので、基礎学力を向上させるため実施している。英語科だけでなく、他教科の先生方全員で基礎力を向上させようと取り組んでいる。

Q：1年生に対するALTとのTTの授業の中で、どのような活動をしているか。また、他学年も含め、どのような活動で反応がよかったか。前向きな取り組みが見られたのはどのような活動か。(奥越明成高校)

A：今のALTはコミュニケーション中心の授業をしたいので、英作文活動が多い。例えば漫画の吹き出しにセリフを入れる活動では、想像力豊かな生徒が楽しんで取り組んでいた。ALTが一番おもしろかったものを選んでprizeをあげた。この活動は生徒の反応がよかった。

また、敦賀を知ろう！という場面設定をした英作文活動は、書きやすく、楽しんで取り組んでいた。「もしALTがデートに行くならどこのお店がいいですか？」とか「先生を連れて行くならどこに連れていくか？」など、提案・勧誘系のテーマは生徒が積極的に取り組んでいた。

#### 【助言者からの講評】

(岩本先生)

両校とも、日々の教育活動の中、研究発表資料の作成等、御苦労様でした。

平成29年7月13日付け文部科学省通知「大学入学共通テスト実施方針」によると、移行期間として平成35年度までは現行のマークシート式が併存するが、英語には民間の資格・検定試験が導入され、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能を評価する英語教育がやっと実現することになる。例年12月実施の高校3年生「英語力調査」でも、「話すこと」「書くこと」に課題がある。「話す」「書く」ことに重きを置きご指導していただきたい。

#### ・若狭高校の発表について

「自分の意見を効果的に伝えることができる生徒」「他者の意見や状況を踏まえ自分の意見を再構築できる生徒」を育てたいという若狭高校英語科のビジョンは、「話す」「書く」ことに焦点を置き、かなり評価できるものだ。また、実際の取り組みとそのビジョンとの関連がしっかりできている点も評価できる。しかし、活動と目標を生徒と教師がしっかり共有できているかという点については、少し疑問が残る。

3年間を見据えた縦のつながりにも関連するが、H34年度から始まる次期指導要領に向けて、今から、指導・評価について「生徒は何ができるようになるのか」ということを考えて、CAN-DOリスト形式の学習到達目標および年間指導計画の見直しを図り改善することが重要になってくる。このことは、若狭高校だけでなくすべての学校で、議論、検討することが必要不可欠で、学力の3要素、つまり「知識・技能」の教科学力、思考力・判断力・表現力の「リテラシー」、主体性・多様性・協働性の「コンピテンシー」を中心に、指導内容・評価を構造化していくことが重要であると考え。

・敦賀工業高校の発表について

「英語を使える人材育成」が課題で、モチベーションが低く苦手意識が強い生徒が英語を楽しめる環境と、英語が身近に感じられる環境づくりを目標に、非常に単位数が少ない中で努力されていた。正規の教員2名で工夫しながら授業をされており、昨年初任研で訪問した際にも、生徒が生き生きと活動に参加している姿が印象に残っている。

敦工タイムでは Benesse のマナトレを使用し指導しているが、英語の定着率が低いことが課題としてあげられていた。やはり授業内容との結びつき、教科書の内容との関連性が低いのではないか。指導のあり方として、学年、学期での大きな目標、日々の授業の小さな目標があって、生徒は授業によって「～ができるようになった」という達成感を味わう。そしてテストで確認することにより更なる満足感を味わう。この一連の学びの流れが起きて、定着および「使える」つまり「話す」「書く」ことができるのではないか。昨年度からの取り組みということで、今後更なる改善が求められる。

これからの時代には、自分の思考内容を明確にし、それを論旨明快に相手に伝える方法の一つとして、「話すこと」「書くこと」を中心にした英語力を身につけることが肝要である。生徒の「話す」「書く」ことに重点を置きながら4技能を伸ばすという点では、教師がどのような英語教育を提供できるかが重要になってくる。日々先生方にチェックしていただきたい点は、次の4点。

① 授業のやり方

教師と生徒がそれぞれ英語で言語活動をしている時間を計り、生徒より教師の方が長く話している授業では、生徒の「話す」「書く」という4技能の学習に対応できていないと考えていい。また、ノンネイティブの日本人の教師が、間違いがあっても果敢に英語でコミュニケーションをとる姿を生徒に見せることも重要。

② 使用している教科書・副教材について

文法問題が羅列されていたり、英語よりも日本語が多く書かれていたりする受験参考書を使用している学校では、生徒の4技能を伸ばすのは難しい。適切な教材を見極め、教材のダイナミックな活用をしてほしい。読解で四苦八苦せず、内容的に生徒が発信する余地が残っていること、世界標準として認められている第二言語習得理論に沿った展開になっていること、聞く・読む・話す・書くことをバランスよく、かつ多量に行うことができることに着目してほしい。

③ 定期試験の問題について

定期試験の問題が日本語訳や文法問題ばかりであると、結局それらをいちばん勉強させていることになる。測定しようとする力が明確になっている設問か、授業で扱った英文をそのまま出題していないか、確認すること。

④ 伝え合う言語活動の習慣化

毎時のウォームアップにおいて、日常的话题について伝え合うこと。教材内容に関連した自分だけが持っている情報やリサーチした結果などを伝え合うこと。批判的思考力の育成のため、聞いたことについて必ずQ&Aを行うこと。ディベートやディスカッション等をクラブ活動とせず、通常の授業にできるだけ多く取り入れること。このような言語活動を取り入れた授業を行ってほしい。

先生方は、ファシリテーターとして、英語の授業を「共同の学びの場」とし、生徒の英語力向上に努めていただきたい。

(澤田先生)

- ・若狭高校の発表について

様々な取り組みをされていて素晴らしい。ふるさと創生ハイスクールで、敦賀を紹介する探検ツアーを企画したことも大変よかった。OECD のプログラムへの参加や校内でのさまざまな活動に対する努力が成果として現れていたが、話にオチをつけるなど地域性に恵まれていることも、生徒のモチベーションをあげることに繋がっている。

また、人から学んで自分を高めることは、生徒にとって効果的だ。若狭高校では、人の発表を見て自分の発表を直すとか、動画を撮って見せ合うとか、ペアをかってディベートを何度もするなどの活動をしていることが、大変よいと感じた。

大阪大学の情報学の教授は、思考力について次のように述べている。思考力とは、慣れ親しんでいない文章を読み取る **Reading** → 読んで得た情報から結びつきを見いだす **Connection** → 活動を通して何かを見つける **Discovery** → 推論 → 判断し **Compare, Judge** する力 → 表現力という過程である。若狭高校はこれらすべてを実践していて素晴らしい。今後も生徒のモチベーションをくすぐってください。

- ・敦賀工業高校の発表について

プレゼンテーション等の活動をたくさん取り入れて、辛抱強く指導されており、心強い。生徒のモチベーションを高めることは大変だと思うが、生徒のモチベーションをくすぐり、成功体験を積みせてほしい。先日、ふるさと創生ハイスクールという事業で、敦賀市を紹介するプレゼンテーションを見たが、生徒は生き生きと活動していてすばらしかった。教育困難な学校でも、シチュエーションを設定し成功体験を積みせることが、モチベーションを高めることにつながるのではないかな。

NHK プレ基礎を担当されている粕谷先生は、週2時間しかない小学生には音声シャワーで、と割り切る指導もあると講演の中で話されていた。高校生でも学力の低い生徒には、音声シャワーが効果的ではないか。また教室内では、リアルな英語、つまり本当に正しい意味での英語を使わせてほしい。





部 長    西 口 佳 光 (丹生高校)  
副部長   山 口 隆 子 (丹生高校)

## ●高等学校

行 事 名 ・ 会 場	委 員
<b>第 5 6 回高校英作文コンテスト</b>  期日：9月23日（土） 参加：合計502名 （校内予選を含めると816名） 共催：高文連 後援：県教委・福井新聞社	委員長：吉川 長利（勝山高）  中井 慶子（大野高） 伊藤美智子（敦賀高） 梅田 武幸（若狭高） 稲葉百合子（仁愛女子高） 田中 操（敦賀気比高） 黒瀬 洋子（武生東高）
・コンテスト会場を各高校にさせていただきました。ご協力有り難うございました。 ・各校の参加者数を制限させて頂いておりますが、それより参加希望者が多い場合は校内選考をされている学校もあります。その際には採点をお願いしておりますが、ご協力に大変感謝しております。	
<b>第 5 7 回高校英語弁論大会</b>  期日：9月30日（土） 会場：福井県国際交流会館 参加：1部27名・2部12名・3部5名 共催：高文連・ライオンズクラブ 後援：県教委・福井新聞社・福井テレビ	委員長：青山 秀樹（福井商業高）  西尾 康弘（道守高） 笠松佳代子（丸岡高） 高崎久美子（丸岡高） 吉田 充宏（高志高） 山口 隆子（丹生高） 森 三穂（丹生高） 永田乃理子（丹生高）
・第1部の1位と第2部の1位が、第11回全国高等学校英語スピーチコンテスト東海北陸ブロック大会（石川大会）に出場しました。 ・ライオンズクラブによる海外派遣生選考会も兼ねています。各部入賞者の中の派遣希望生徒に面接選考会を後日おこない、3名を決定しました。	

## ●中学校

行 事 名 ・ 会 場	委 員
<b>第 6 0 回中学校英語弁論大会</b>  期日：1 0 月 4 日（水） 会場：鯖江市文化センター 参加：5 8 名（4 9 校） 後援：県教委・読売新聞社 協賛：コカコーラ	委員長：谷口 賢次（武生第二中）  古市 恵三（大安寺中） 和田 祐樹（鯖江中） 園井 圭介（武生第一中）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・上位 3 名が高円宮杯全日本中学校英語弁論大会に出場しました。</li> <li>・今年も多数参加いただきました。熱心な指導を有り難うございました。</li> <li>・審査結果が出るまでの時間を利用し、ゲームなどを通して参加者が交流しました。</li> </ul>	

## 中学校英語セミナー

各ブロックが主催する中学校英語セミナーに対し、企画部から活動の補助を行っています。各地域の特性を生かしたセミナーを実施しています。

主催：福井県中学校教育研究会英語部会

共催：関係市町教育委員会、関係市町中学校教育研究会英語部会、福井県英語研究会

後援：福井県教育委員会

## ◆高校英作文コンテスト委員会

### 第56回福井県高等学校英作文コンテスト

委員長 吉 川 長 利 (勝山高校)

去る9月23日、本年も無事にコンテストを終了することができました。各校とも二学期中の何かとご多忙な折、おかげさまで今年も大勢の生徒に参加していただくことができました。各学校の先生方をはじめ、関係者の皆様方にまずは心より感謝の言葉を申し上げたいと思います。

さて、今年も語彙力の差によらない生徒一人一人の個性、創造性、独創性で訴えられる作文を書いてもらえるような出題内容に努めました。高校生らしい素朴で素直な視点と日常生活の中の豊かな体験に基づいた作品が数多く見受けられたように思います。

出題形式別にA部門から振り返ってみますと、“My future dream.”と“My motto”の課題については、どちらも生徒にとって身近な話題であったため、自分たちの将来の目標を明確に定め、それに向かって日々努力している様子がいきいきと綴られていました。「ロボットを使えらしたらあなたは何をしてもらいたいですか」の課題については、日頃自分たちが困っていることを挙げ、それをロボットに肩代わりしてもらいたいという展開が多く見られました。宿題や家事等日々の日課となる事柄に混じり、シングルマザーである母親を助けたいという親思いの作品もあり、心温まる気持ちになりました。

B部門は、今年も読んでいて楽しく、奇抜な発想と豊かな創造力が発揮された優れた作品が数多く寄せられました。与えられた2つの絵のうちBの絵を選択した生徒が多く、薄暗く寒々とした絵の雰囲気が生徒のインスピレーションを刺激したのではないかと考えられました。2匹のモンスターに捕らわれて絶体絶命の危機に陥った主人公が、間一髪ところで無事脱出するというハッピーな内容のもと森の掟を破ったために二度と再び森から出ることができなくなるといった悲しい内容のエンディングのものに分かれました。

C部門においては、3つの課題のうち「異文化理解を進めるために修学旅行を海外にすべき」という考えについて意見を述べさせる課題を多くの生徒が選んでいました。社会のグローバル化を意識した話題であり、日頃から触れたことのある課題だったのか、まとまりのある作品が多く寄せられました。書き慣れた話題である反面、語学力や異文化理解の必要性を挙げるに留まると、他の作品との差別化が難しくなりがちでした。そのためある程度スタイルを崩してもよいからもう少しダイナミックな作品にも挑んでほしかったとの意見もありました。3部門を通しての感想として、自分の思いを読み手にわかりやすく伝えるためには、ある程度しっかりとした文法力が必要となるということがあります。このため今後一層4技能の指導に力を注ぐということを今後の課題として挙げたいと思います。

コンテストの開催におきましては、各校の英語科の先生方には準備の段階から実施、発送にいたるまで多大なるご協力をいただいております。開催の過程で些細なことでもお気づきのことがございましたら、事務局までご連絡ください。今後ともコンテストの発展のためにより一層のご指導をお願いして今年度の報告にかえさせていただきます。

# 〈実施要項〉

主 催	福井県高文連英語部会 福井県英語研究会
後 援	福井県教育委員会 福井新聞社 NHK福井放送局
協 賛	財) げんでんふれあい福井財団
趣 旨	本県高等学校生徒の英語力の向上を図り、その発表力を高めることを目的とする。
日 時	平成29年9月23日(土) 午後1時30分から4時まで
会 場	県内各高等学校

# 〈実行委員〉

【委員長】	吉川 長利(勝山高)	
【実行委員】	中井 慶子(大野高)	伊藤美智子(敦賀高)
	稲葉百合子(仁愛女子高)	田中 操(敦賀気比高)
	黒瀬 洋子(武生東高)	梅田 武幸(若狭高)
	Simon Woodgett(県教育委員会)	Anton Antonov(武生工高)
	William Moore(武生商業高)	Roxana Daliana(明倫中)
	Angela Hinck(足羽中)	Matt Hufana(成和中)
	Linda Zhang(今庄中)	Sarah White(織田中学校)
	Jake Gertz(勝山高)	

# 〔入賞者一覧〕

		最優秀賞受賞者	優秀賞受賞者
A 部 門	1年	山 口 佳緒梨 (武生商業)	植 坂 芽 生 (福井商業)
	2年	和 順 大 (坂 井)	山 口 唯 (丹 南)
	3年	竹 田 小 夏 (科学技術)	吉 村 衛 人 (科学技術)
B 部 門	1年	青 山 遥 紀 (武 生 東)	風 呂 樹 (若 狭)
	2年	ハッシュマイ スェンシー (武 生 東)	手 賀 梨々子 (藤 島)
	3年	五十嵐 也 珠 (仁 愛)	田 中 美 穂 (武 生 東)
C 部 門	1年	高 崎 千 実 (藤 島)	大 宮 和 奏 (仁 愛)
	2年	中 田 萌 奈 (福井商業)	松 村 風 斗 (丹 生)
	3年	齊 藤 未 耶 (勝 山)	安 田 南 (大 野)

[参加者数一覧]

会場	1 A	2 A	3 A	1 B	2 B	3 B	1 C	2 C	3 C	合計	校内選考会 を含む数
勝 山				3	6		8	9	4	30	135
大 野					6			2	4	12	12
藤 島				2	2		4	1		9	9
羽 水						1			33	34	34
福 商	10				3			17		30	48
北 陸				2	5					7	7
仁 愛				3		3	8	2	6	22	22
三 国					3		2	18	14	37	37
金 津					6		1	8		15	15
坂 井	1	9								10	10
丸 岡				1	4	2	2	13		22	22
科 技			18							18	18
足 羽				11			20			31	31
鯖 江						2		3	11	16	16
丹 南		31								31	43
丹 生					5			11	14	30	48
武 生					1		1	1		3	3
武 生 東				5	6	4	7	6	9	37	198
武 商	20									20	20
敦 賀	1			4	1		4	10		20	20
美 方					2		2	13		17	17
気 比				9	5		4	3		21	21
若 狭				7	9			14		30	30
合 計	32	40	18	47	64	12	63	131	95	502	816

勝山、福商、丹生、丹南、武生東は校内選考会を実施している。校内選考会を含む数とは校内選考会に参加した生徒全員の数

[各部門最優秀作品]

1 A部門最優秀作品

## Things I want a robot to do

Kaori Yamaguchi

Takefu Commercial High School

If I have a robot, I want a robot to do three things.

First, I want a robot to take care of my grandmother. There is one grandmother in our family. On weekdays my grandmother is usually at home alone. My grandmother always wants a person to talk so if I have a robot, it'll be my grandmother's talker. If my grandmother can talk with someone, my grandmother smiling face will increase. Her smiling face makes me happy.

Second, I want a robot to help housekeeping. For example cooking, wash clothes, dry, fold, cleaning, and so on.

Especially, I want a robot to cleaning. When the dish falls on the floor and cracks, it is dangerous for humans to clean. It may hurt when cleaning. Robots are stronger than humans. If I have a robot, a robot can cleaning up dirty areas, I think a robot is helpful to my mother. When a robot cleaning up dirty areas, my mother can have time to rest. Time to rest make her relax.

Third, I want a robot to help field work. Recently, summer temperature is rising and people who became heatstroke are increasing. Working in a field when it is hot will cause heat stroke, and working in a field when it is cool, it gets stabbed by mosquitoes. I do not like mosquito very much. The robot does not become a heat stroke and it is not stung by a mosquito. If I have a robot, field work is fast.

From these things, if a robot comes my home, our life will be very useful. I do not care too much so I want to be careful.

## My motto

Hiroshi Wajun  
Sakai High School

I have two mottoes. They have helped me to go to the right way in my life. They have given me the strength when I am in a difficult condition. I want to write about those 2 mottoes.

First motto is "Look ahead." I put this word on the wall in my room. When I am in trouble, I always say this word to myself. For example, when I study hard to take qualification of computers, I often feel I want to give up. However, when I see this word on the wall, I feel motivated and I can work harder.

Second motto is "Never give up." Last month, the baseball team of my high school won the first prize in Fukui prefecture and took part in the Koshien tournament. This word was the motto of the baseball club. I was very excited to see them playing in the Koshien stadium and I was really moved by this word. I belong to the bicycle race club and I often want to give up the hard practice. However, in such a case, I always remember this word and try hard to win the race.

These two words have encouraged me not to hard work. I will try harder to study and do the club activities with the words from now.



## My Future Dream

Konatsu Takeda  
Kagakugijutsu High School

My future dream is to become a carpenter. Among them I long to be a shrine carpenter. Shrine carpenters handle tradition buildings. Itsukushima Shrine is wonderful and the fruit of such techniques of skilled shrine carpenters. A shrine carpenters work for temples and shrines include repairs and wood sculptures.

Shrine carpenters have a rule. It is to never build anything that is not a shrine and temple. Metal is not used at all. They're using traditional paper and wood. That is gave me. Even though are old techniques, high skill levels are a necessity. One must train himself for at least 10 years. I was moved by the existence of buildings made only of woods. This technique and skill has been inherited from the Asuka period. This is something that Japan can boast about to the world.

However, unfortunately there is one problem. It is lack of successors. Data and skills were not left behind. What we do know has been passed down verbally by one's predecessors. It is necessary for a number of workmen to play an active part. It is for this reason that there are estimated to be fewer than 100 such craftsmen remaining in Japan whereas it was said that there were once several hundred. Japan is slowly losing this treasure.

I want to be a successor shrine carpenter to keep these unchanging technologies in this changing period. I want to become like these wonderful workmen.



## Two Monsters

Haruki Aoyama

Takefu Higashi High School

Once upon a time, there lived two monsters. The Monsters wanted to be human, so they asked for God, "We want to be human." God said, "Sure. If you do this job properly, I will make you human." The job was to take the dead's spirit. "You have to take 400. But if you drop it, I will never make you human." The Monsters answered OK.

The next day, the Monsters started the job. It was very easy. Just put spirit into cage and took it. So they worked properly. But there was something bothering them. It was so many spirits. The spirits spoke to the Monsters. The Monsters were very surprised, because it was the first spirit. The spirit told of language. The Monsters understood. After the 100th spirit, they found what the sounds were. They were the crying, apologizing or calling son's or daughter's name. All voices said sad things. The Monsters felt that the humans were in pain.

When it was the time of taking the 200th spirit, it was spirit of biologist. The spirit told monsters of how beautiful the natures and the animals are. There are nothing like those in the monster's world so the story was very interesting. The Monsters did their best in the job.

When it was the time of taking the 300th spirit, it was suicide spirit. The spirit told monsters of how scary the humans are. The spirit committed suicide because of bullying. The spirit dislike human. Monsters felt human could hurt again and decided to be kind to other human. Monsters did job properly. And the time came.

They wanted to be human and took 399 spirits. The Monsters can be human finally. They were happy.

When the time came to put the 400th spirit came into cage, the Monsters heard a voice of child. "Mom...where is mom..." It can be heard from spirit. "Where... I want to meet..." It made monsters sad but they wanted to be human. That's why they put it into cage. The voice didn't stop. A monster stopped and said, "I want to help the child." Another monster said, "Me, too." They dropped it on the ground. They couldn't be patient for hearing the voice. They couldn't be human...

Then Monsters went to God. And said "Sorry. We dropped it." God said, "Not sorry. Only human can think and can be kind for others. You did it right? You are already human. Look at your body." They looked at their bodies. There were two human's bodies. They understood what human is and to be human. After that, they enjoyed human life and were kind to others.

## A Big Cage

Hatchmai Nualsri  
Takefu Higashi High School

Every night I would dream of the same thing again and again. I see myself, looking sad sitting in a big bird cage carried by two ugly Giants. I don't know where we are going or what we are going to do. The only thing I only remember is that I heard one of the Giant says "Everything will be fine!" Then I will start crying and wake up in my bed. At first I thought I just watched too many scary TV programs and made it up myself. But after my 5th time of dreaming it, I was getting real scared. I told my mother many times about this, but she wouldn't believe me and said it's because I watch too many scary TV programs. I don't have any friends and my mother won't believe me so I always end up talking to my pet, a parrot. We bought him 5 days ago from the pet shop. Because I'm the only son and my parents are always busy. They thought I might feel lonely so they bought a talking animal for me. They said they don't want me to play outside. It is dangerous. I should be inside, study and be a doctor like they want me to be in the future. My mother always says, "Just trust mother, and everything will be fine." I trust her. But sometime I just want someone to talk with like THIS TIME. So here I am, in front of the parrot cage.

"Hi Buddy". His name is Buddy. He is a green, fat parrot. Every day I would say the same thing to him so he can remember the words and talk back. But it never happened. Maybe because he is too young to understand human words.

I told him my dream and asked him what I should do, even I know he can't answer. And as I expected, he just made a weird sound and moved his wings like he doesn't care. I sighed and was about to go back to my room when I heard something. "Hi! FINE! BUDDY! FINE!" He can talk! I ran back and held the cage. "Buddy! You can TALK." "BUDDY! HI!" He said it again so this time I brought my mother to see him. But something strange happened. When Buddy saw my mother he stopped talking and cried out aloud. "What's wrong Buddy?" Say it again. Hi!" But he continued crying. "What is this son? This is nonsense! If you have that much free time you should go study!" Mother got angry. But this time is different, I got angry, too. "You never listen to me mother!" I always listen and trust in you! But do you, mother?" "Don't talk back to me!" "You want me to be a doctor and never let me play outside like the other kids. Do you know what I really want to be? One thing for sure. I don't want to be a DOCTOR!" I cried and ran back to my room.

Now I know why I always dream of the same thing every night. After the first time of seeing Buddy in the cage. Somewhere inside me has realized. Buddy is just like me. Being locked in a cage, can't go anywhere or do anything we want. In that dream I am Buddy. The two ugly Giants might be a father and a mother. They 're carrying me to the future that I don't want and I cry. I know they are doing it for me. They thought if I could be a doctor I would get lots of money and my life will be happy. But what is the point of having money but can't do anything I want? Don't have freedom. Just like being locked in a big cage for all of my life.

## The Spell

Narumi Igarashi

Jin-ai Girls' High School

"It was not my fault." Nick says this phrase every time he couldn't manage his tasks to finish, or had an argument between others. He was an extremely cynical man. No one felt comfortable with him, because once he opened his mouth, he would start to speak ill of people. He didn't have any friends. Unfortunately, he has an animal allergy so he couldn't get any fluffy friends. In short words, he was lonely and a solitary person.

One day, Cynical Nick found a cat in his apartment. He had completely forgotten to close the window that morning, so the cat could come into his room and sleep on the soft bed. Nick was on edge. He is terribly allergic to cat's fur. He grabbed that cat at once and put it on the tree branch nearby his room's window. He was on edge so he didn't realize that the cat was becoming weak, and because he put it on the branch, the cat died falling off from it.

Nick awakened to a terrible smell and rolling of his bed. Strangely, he could catch the sound of deep woods like the barking of beasts and cries of birds. "What!?" He cried out, but the roll of his bed and awful sounds and smelly air didn't go away. "Gosh. It should be dream. I was in my room! Hey!! Where are you going!? Why are you guys taking me somewhere in such a small cage!? Who are you!? You smell awful, you should take a shower more often." He asked lots of questions the two men who were taking him. His eyes were accustomed to seeing objects in the dark as time passed, then he realized that two trawls are carrying him. He couldn't believe what he saw.

Trawls carried him to a mansion which was in the depths of the forest. "Here we are, we took the human you need. Here is a last man who killed a cat!" One trawl whose color was like a pimple shouted out for gate. Nick thought they would certainly not be able to speak, so he was surprised and disgusted with its dreadful smell of breath. The gate opened pompously, then a voice of a woman echoed through the forest. "Come in." "Trawls, you shouldn't come with him, because you guys are smelly and ugly."

Nick met up with a beautiful lady, who introduced herself as "Georgie, I'm a witch." He had not believed in such fantastic icons, so he thought that someone is trying to scare him, like a silly TV program. "Don't be silly." He shouted. However, soon Georgie closed his mouth by spell, it finally made sense that he is in dangerous situation.

Georgie is just a person who is in that mansion. However, she was acting like living with a man who she loves in that place. At first Nick thought that she is a crazy lady. It's because the man who is loved by her is not real. He was in the elaborate from and on the wall of dining room. Yes, he was a prince in the portrait that looks like drawn in 17th century!

"I need a man who killed at least one cat today," to make him real." Georgie said such a phrase with cute smile that Nick has never seen before. "You are the ingredient of my spell." They were

looking at the prince's portrait together, however Nick got scared of her pure smile so he started to run away. "Why? Why should I get in such trouble!?" Nick was in panic. He is a cynical and lonely man. No one loves him because of his personality, but it can't be the reason to give up his life. He doesn't like anyone, only himself. So, he couldn't understand why Georgie does such an outrageous thing on him. He was running through the many paths. Nick went up and down hundreds of steps. He was completely lost in Georgie's mansion. "Why are you running away? Don't trouble me about chasing you." Pretty voice like a princess one have to his mind directly. He moved his legs as fast as he could, then he reached the room, which has spells on its walls, floor and ceiling. He thought that he was running away, however it was wrong. He was dancing in her strategy. Georgie came into the room with the portrait, then casted a spell on Nick and the portrait that she had in her arms.

The spell showed Nick old visions of a girl who has thick black hair and freckles on her face. She spoke to Nick again and again. Sometimes with excited face, the other day with delight smile. The next day she sang a song to Nick not only to speak to him. He could tell her love sharply. Nick became confused about the girl - Georgie's love. He didn't know the goodness and happiness of being loved by others. That's the reason why he had got such troublesome personality. He was lonely, he spent too much time by himself and that was long enough to lose reasonable desire. Nick, finally awarded of his will that to be loved by others and desire against happiness. He thought that "I want to be this man, who is loved by this girl", throughout watching Georgie's efforts to be beautiful for the prince and make the spell to spend life with him.

Once Georgie finished casting the spell, Nick's figure was completely reformed to the prince. He doesn't feel any loneliness and hunger among someone's love any more. He is no longer the cynical man, because he could know the amazingness to love others. Georgie called the prince's name. Then, he answered , "Georgie, I wanted to meet you."

## To change the minds

Kazumi Takasaki  
Fujishima High School

"Why must we study English? I'm not going to visit foreign countries. I'll stay in Japan forever. I won't have chances to communicate with people from other countries. I can't understand why we have to learn about other countries!"

Some of my friends often say so. I think this is very serious problem. Now, world is becoming smaller and smaller because of globalization and we will have many chances to work or communicate with foreigners in the future. Thus, understanding other countries and getting interested in them is quite important for us. Then, how can we change their opinion? I think going abroad on school trip is the best way. I explain two reasons with my precious experience in the U.K.

First, we can get courage to communicate with foreign people by going abroad. I visited the UK last year. I stayed with a wonderful family, Williams for a week. At first, I was afraid of talking with them in English because my English is not very good and I assumed them to be quite different with us. Nevertheless, the idea soon disappeared. Sometimes, I had great difficulty to tell myself to them in my poor English, and I felt very sorry them. However, my host family tried to listen to me carefully and comprehend me as exactly as possible. It made me relaxed and we came to understand each other. I learned that we mustn't worry about our English ability. It is natural we make many mistakes because we're not native speaker.

Even if we can speak only awkward English, no one will despise us. Like this, going abroad let me realize that the warmth of people in the world and the importance of trying to communicate with eagerness.

Second, we can know the reality of foreign countries, without preconception about it. I had heard that the meals in the UK are the worst in the world before I visited there. However, almost every food I had in the UK such as lasagna, pizza, sushi, fish and chips and so on was so yummy. Ordinary people have prejudice to other countries like this and they are sometimes wrong. It is quite difficult to get rid of them without visiting there for ourselves. Therefore, school trip overseas is effective to understand the truth of other countries.

Visiting abroad gives us a lot of valuable experiences even if it is short time. I'm sure that it will encourage us to be active to people from abroad and tell us the truth of foreign countries. If all students go abroad on their school trip, it will help them a lot and they will get interested in the world. My friends that I wrote the beginning will change their minds surely if they visit abroad on their school trip!

## Good Way To Learn Many Things

Mona Nakata

Fukui Commercial High School

I agree the opinion that we should go abroad on our school trip. I have three reasons.

First, we can broaden our field of vision. Most people usually don't leave their home countries. Then they keep taking a narrow view of things. However, if we go abroad and experience new things, our view will become wider and wider. Especially, it is good for us to go to foreign countries when we are young. That's because young people acquire new knowledge sooner. To experience various things in foreign countries when we are students leads us to think things deeply and have more knowledge.

Second, we can realize good and bad points of home country and foreign countries. We can find many differences between our mother land and overseas countries by going abroad. For example, in Japan people say "Itadakimasu" and "Gochisousama" before and after a meal. Whereas in Australia people don't do this. We learn many differences such as food and culture and it helps students to think about home country and foreign countries.

Third, we can add to choice of our dream. Though the students have to decide what they want to do in their future, many of them can't decide it soon. By learning new things in foreign countries, we may discover what we like or what we want to do in the future. It may be until we go abroad that I find our strong field. To go abroad gives us many choices of dream.

In conclusion, going to foreign countries on school trip has many good impacts on students. By going abroad, we can get more knowledge and think about our future. It becomes possible that we learn and think more about foreign countries. It will lead us to be interested in international events and problems. To go abroad on school trip is good and effective way for us to learn many things. So I think we should go to foreign countries on our school trip.

## The need for going abroad on a school trip

Miya Saito

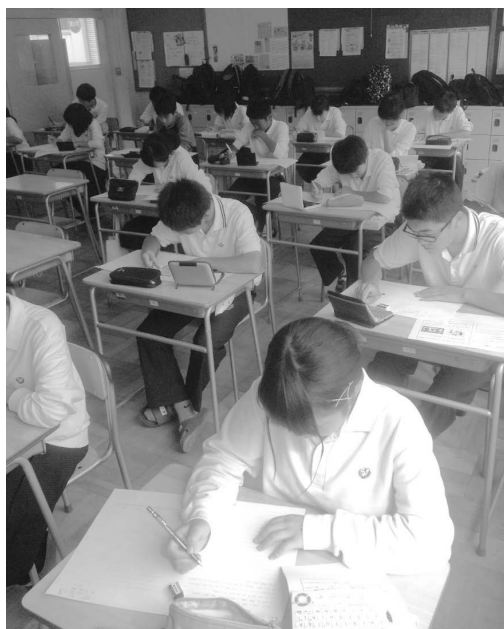
Katsuyama High School

I agree with the idea that students should go abroad to learn about a different culture on their school trip. I have two reasons to support my opinion.

First, students will be able to get an opportunity to go abroad. Japan is surrounded by sea and we can't come into contact with different cultures easily. If we want to go abroad, we have to use planes or ships. That costs a lot and it is difficult for students. Therefore, through going abroad on a school trip, students can get a chance to learn about other cultures. It is necessary for school to give students a chance to understand and learn about different cultures.

Second, by visiting foreign countries as a school event, students can come into contact with the local people and learn about the culture more than if they go abroad with their family. It is because school trips are school events, so the purpose of the trip is to study. By getting some assignment about a different culture from teachers, students can learn about it on their own or cooperate with their friends. Doing something on their own is important for students. If they go abroad with their family, the purpose of the trip may be sightseeing and the chance to learn about a different culture may decrease. Also, they will count on their family and they will not act on their own initiative.

In conclusion, it is essential for students to learn and come into contact with various cultures. Therefore, I think students ought to visit foreign countries on their school trip.



## ◆高校英語弁論委員会

### 第57回福井県高等学校英語弁論大会報告

委員長 青 山 秀 樹（福井商業高校）

県高校英語弁論大会が平成29年9月30日（土）、福井県国際交流会館にて開催されました。県大会の第1部、第2部の参加資格は全国大会に合わせています。第1部は主に英語圏での生活経験を十分に持たない生徒を対象とし、第2部は一定期間の英語圏での生活経験を持つ生徒も参加できる部門となっています。東海北陸大会へは、第1部と第2部の優勝者各1名が出場します。また第3部は福井独自の部で、職業系学科生徒を対象としています。

全国大会にならった部門構成で行われた今大会には全体で44名の参加を頂き、例年にも増して白熱したコンテストになりました。そろそろ部門の分け方が各学校に浸透してきたと思われますが、改めて各部門の出場資格と結果をご紹介します。

第1部に参加できる生徒は、全国大会に準じ下記（a）～（c）のいずれにも該当しない生徒となっています。

（a）満5歳の誕生日以後に、通算1年以上または継続して6ヶ月以上、英語圏（英語を第一言語、または公用語、または公用語に準ずる言語として使用する国、地域）に居住した者。（英語圏詳細については全英連ホームページ参照。）（b）日本国内、海外を問わず、6ヶ月以上、英語以外の教科に関し、実態として英語による教育を行っている学校（アメリカン・スクール、インターナショナル・スクール、または授業科目の半分以上を英語で教育を行っている学校を含む）に在籍し、その教育を受けたことのある者。（c）保護者または同居親族に、英語を母語とする者、もしくは英語圏出身の者がいる場合。

第1部には16校から27名の参加がありました。優勝した福井商業高校、佐藤さんのタイトルは「Why Do They Die?」でした。社会問題となっているペットの殺処分に対する考えを自分から社会に対する提案を交え、切々と訴えかけていました。Contentにオリジナリティーがありました。

第2部は全国大会に準じ、出場資格に制限のない部門となります。実質的には英語圏での生活経験を持つ生徒による競技と言えます。しかし、各部に参加できる1校あたりの人数が決まっているため、校内の選考で1部に参加できなかった生徒がこの2部に参加しています。入賞者の顔ぶれをみると、必ずしも英語圏における生活経験や長期留学経験を持つ人だけが入賞しているわけではないのが心強い限りです。6校から12名の参加がありました。優勝した仁愛女子高校、齋藤さんのタイトルは「Don't Leave Your Tools Behind」でした。平均寿命が51歳という国、シエラレオネの子ども兵士たちが持つことができる道具は武器だけだ。これはその国だけの問題ではなく、世界の問題だ。子どもたちを社会に戻そうとする団体の活動の重要性を広めるとともに、自分たちは自分が選んだ道具を離さないようにしようという話でした。スピーチを聞いて初めて知った情報が多くあり、自分も日ごろから世界のニュースに目を向けなければいけないと考えを改めました。

第3部は県独自の部門で、卒業までの英語の必修単位数の合計が12単位以下の生徒を対象としております。3校から5名の参加がありました。優勝した福井商業高校、丹野さんのタイトルは「Smiling Gives You Confidence」でした。自分自身が高校に入っていかに変化していったかをおして smile の大切さを訴えていました。私も眉を上げ、目を大きく開き、口角を上げる練習を鏡を



見てしようと思いました。3部はいつも参加者が少ないです。英語の単位数が12単位以下の学校の先生方は是非、生徒を積極的に参加させるようにお願いします。県大会の入賞の可能性が一番高く、お得感がいっぱいです。

今年度は平成29年11月12日（日）、石川県で東海北陸ブロック大会が開催されました。この大会に、上記の佐藤さん、齋藤さんが出場しました。二人ともに奨励賞を受賞しました。

今年も県大会を無事に、そして盛況のうちに終えることができましたのは、各校先生方の日頃からの熱心なご指導と大会運営に対するご理解ご協力のお陰と深く感謝いたしております。今後ともさらなるご指導ご鞭撻をよろしくお願いします。

1. 大会要項

第57回福井県高等学校英語弁論大会

1. 主催 福井県高文連英語部会 福井県英語研究会  
ライオンズクラブ国際協会334-D地区5R
2. 後援 福井県教育委員会 福井新聞社 福井テレビ
3. 日時 平成29年9月30日（土）午前9時30分より
4. 会場 福井県国際交流会館
5. 委員・審査員  
委員 ◎青山 秀樹（福井商高） 永田乃理子（丹生高） 笠松佳代子（丸岡高）  
西口 佳光（丹生高） 西尾 康弘（道守高） 山口 隆子（丹生高）  
森 三穂（丹生高） 吉田 充宏（高志高） 高崎久美子（丸岡高）  
審査員  
1部 紺渡 弘幸（仁愛大学教授） Simon Woodgett（県庁）  
長岡 亜生（福井県立大学准教授） Fiona Kelemencky（朝日中）  
2部 吉田 三郎（福井高専教授） Peter Clynes（陽明中）  
野本 尚美（仁愛短大教授） Devon Smith（三国中）  
3部 長岡 亜生（福井県立大学准教授） Simon Woodgett（県庁）  
Fiona Kelemencky（朝日中）

6. 本年度（平成29年度）参加者数

部 門	参加人数	参 加 校
第1部	27	丸岡、足羽、羽水、高志、藤島、仁愛女子、福井商業、道守、福井特支、鯖江、丹生、武生、武生東、敦賀、美方、若狭 16校
第2部	12	足羽、藤島、福井商業、仁愛女子、武生東、若狭 6校
第3部	5	福井商業、敦賀、若狭 3校
合 計	44	

7. 表彰

第1位	賞状、トロフィー
第2位	賞状、トロフィー
第3位	賞状、トロフィー
優良賞	賞状

※優良賞 各部門参加者の半数程度

## 8. 海外派遣生

- ・入賞者の中から若干名、ライオンズクラブが海外派遣生を選びます。
- ・派遣は来年度の夏休み中約1ヶ月の予定です。
- ・地域によって年齢条件が異なります。

## 2. 入賞者

部門	賞	氏 名	学 校	学年	演 題
第1部	1位	佐藤 優佳	福井商業	2	Why do They Die?
	2位	濱田 眞子	藤 島	2	The Feeling of being Helpful
	3位	上見ヒロミ	足 羽	2	Cellphone Dependency
	優良賞	荒井 咲栄	武 生	2	Family First
	優良賞	村中さくら	福井商業	2	The Way to Become Equal
	優良賞	田中彩姫子	藤 島	1	In Defense of Online Fair Trade
	優良賞	松宮明日美	若 狭	1	What dreams are they dreaming?
	優良賞	加藤 敏明	高 志	2	The Value of Lives Versus Research
	優良賞	齊藤 愛蘭	羽 水	1	The Way We Look at Each Other
	優良賞	長嶋天之介	道 守	3	When a Flower Doesn't Bloom...
	優良賞	増永 静奈	鯖 江	2	Is The World of Golf Fair?
	優良賞	吉田 朝美	武生東	2	English, Use It or Lose It
	優良賞	水谷 桜子	仁 愛	1	The Impact of SNS
	優良賞	田中 優光	若 狭	2	Friend or Foe?
	優良賞	松本 彩聖	丸 岡	2	The Only Old Sister in the World
第2部	1位	齋藤 帆那	仁 愛	3	Don't Leave Your Tools Behind
	2位	藤井 メイ	足 羽	1	The Difficulty I Have Overcome
	3位	堀江 優衣	福井商業	2	Coming to Terms with the Reality
	優良賞	城戸明日香	藤 島	1	Finding the Pages
	優良賞	廣部寿美恵	武生東	2	No Vote is Useless but It's Useless to Not Vote
	優良賞	東谷 瞳	仁 愛	3	It's Now Time to Push Your Golden Buzzer
	優良賞	山田萌々子	福井商業	2	The Way of the Family
第3部	1位	丹野 歩美	福井商業	2	Smiling Gives You Confidence
	2位	田倉 優美	福井商業	2	I am Here
	3位	行壽 優衣	福井商業	2	The Magic of Sound
	優良賞	宇田 まい	敦 賀	2	My Future Dream Of Being A Wheelchair Referee
	優良賞	松原 絃爾	若 狭	1	For Better Understanding in other cultures

### 3. 優秀作品

#### 第1部第1位

## Why do They Die?

SATO Yuka

Fukui Commercial High School

15,800. This is the number of dogs that were killed in Japan in 2015. That year, over 46,000 dogs were gathered in public veterinary centers around Japan. Two thirds of them were lucky enough to go back to their owners, or find new families. The rest of them had no choice but to be confined in a room, where they breathed carbon dioxide, and were put to death.

Why did they have to be taken to such centers? How come they had to be killed? One of the main reasons is that some people have terrible excuses for abandoning their pets. "They are not adorable anymore." "They have an illness, and the treatment is expensive." "My new landlord doesn't permit animals." I don't want to hear people say such irresponsible things.

I myself had a dog. His name was Moca, and he came from an adoption center. When we first met him, Moca wore an old collar, and was tied to a building with rusty chains. We welcomed him into our house. At first, he seemed scared. I think he was afraid of being abandoned again. My family loved him, and spent a lot of enjoyable and gratifying time with him. As time went on, his face gradually changed. He realized that he would never again be left behind. The reason that my family went to an adoption center is that my father is opposed to buying pets. He said, "Each animal in a pet shop has a different price. The price of a bulldog is higher than that of a toy poodle. Why? The price changes according to their breed or age. I think it is ridiculous. All lives should have equal value. People mustn't put a price tag on life."

Take a look at the situations of countries such as Germany, India, and Taiwan. In these countries, animals are euthanized only under absolutely unavoidable conditions. Also, these rare situations require permission from several doctors, and many official documents, so the process is complicated and difficult. Therefore, Japan should look to these countries for inspiration.

There is one example of progress in Japan. In 2011, Hiroshima prefecture was recorded as the worst offender when it came to the number of culled dogs every year. However, in September, 2013, a project was started. Participants in this project raised money from Japanese taxpayers, and built shelters, clinics, and trimming rooms, and increased the number of staff who look after rescued dogs. The result of this story is that, from April 2016 to now, zero dogs have been put to death in Hiroshima.

Let me tell you about my idea. If I were the Prime Minister, I would make a law to protect poor dogs. I would send them to elementary schools. There are over 20,000 elementary schools in Japan, and usually schools have animals, such as rabbits and chickens. Children would take turns looking after the school's dog during the daytime. At night, they would take the dog to their home, rotating from student to student each week. During long vacations, each school would recruit host families to accept the dog until school starts again. If each elementary school in Japan adopted one dog, no dogs would need to be killed.

Animals are not pieces of jewelry or fashion items that make you look better. Only people who have a strong will should keep pets. As my father said, all lives should have equal value.

## 第2部第1位

# Don't Leave Your Tools Behind

SAITO Hanna

Jin-ai Girls' High School

What "tools" are you holding? For me, my most important tool is English, one I've been learning for a long time. A dictionary, speech contests, and my school help me improve my English skills. I could choose English as my tool because the freedom of choice has been given to me. What's more, I honestly enjoy the time I spend using it. I've got my own tools for my own future and I always carry them with me. But, do all young people in the world have tools like me? No, they don't. Their tools are left behind.

A country called Sierra Leone in Africa is known for its world's shortest life expectancy of 51 years. In 1991, when a civil war broke out, the Revolutionary United Front, a rebel army, kidnapped and forced children from seven to fourteen to fight. Brainwashed by violence and drugs, thousands of child soldiers were forced to implement torture and even execution of their own families. What tools did these children have? A study subject like me? No, they weren't even allowed to get a tool. All they had was a weapon, which took away their freedom to choose what they really wanted to do in their future.

What about us Japanese? Well, in contrast, our childhoods are future oriented and we are free to choose the tools we use to shape our lifestyles. Child soldiers could not choose. They were forced into fighting actual life or death battles. In their hands were weapons of destruction rather than tools for their future. Unlike English, which will improve my future prospects, it's hard to see any benefits that will accompany their struggles. How can we begin to address the problems of those children? What tools can we use to fix it?

First, the world must recognize that the tragedy of child soldiers is not just Sierra Leone's problem, but it is a world problem. All children need the freedom of choice. Their own choices make their own future, not the ones forced by other people. Children without tools for their future trigger the loss of our world's potential.

Second, what tools can we give to the child soldiers to reintegrate into society? An organization called "Child Soldier International" is helping to end the military exploitation and harm of children. They return vulnerable child soldiers to their families and communities, and allow them to participate in positive community activities. This gives them a valued social role, which will enhance their recovery and help them obtain tools for their future.

Third, what tools can we use to prevent a situation like this happening again? A program called "Red Hand Day" was initiated by children and teenagers around the world. This campaign collects many red hand-prints to present to the United Nations once a year. This led the UN secretary, Ban

Ki-moon, to recognize the issue and stamp it out. Those children and teenagers used their tools to help other children obtain theirs. Like them, I can use my tool, English, to help child soldiers. One way to carry it out is to tell the world these facts which have been passed unnoticed. It's not a big step, but if everyone uses their tools, that can be a giant leap for us all.

Now, do you have your own tools? If so, what are they? They could be just about anything. A pen you use every day to become a scholar? A computer you own to invent something revolutionary? The tools you select must be unique because they are of your own choosing. But, one thing is common for everyone. Because you freely chose your own tools, your future is now in your hands. So, don't leave your tools behind.

### 第3部第1位

## Smiling Gives You Confidence

TANNO Ayumi

Fukui Commercial High School

Do you have confidence in yourself? I have confidence in myself. I have had many things to worry about throughout my life. For example, my family situation is not the same as other Japanese families. However, I can say that I have confidence, and that I am proud of my family and myself.

When I was an elementary and junior high school student, I was ashamed of myself because my father is Japanese but my mother is Filipina. My friends always asked me questions about my background. I did not like these questions because I knew that my friends were curious about me just because I was different from them. My skin is dark, and I knew then that nothing is wrong with that, but I did not want to talk about my family and myself. These questions made me feel different and isolated.

When I entered high school, I joined JETS, which is our high school dance team. I enjoyed dancing, because when I was dancing I did not have to care about my skin color or my family. Dancing helped me forget everything that annoyed me. I was not good at dancing, but I made an effort to catch up with the other members, and I tried to smile. However, sometimes I had difficulties with dancing. Our dance teacher encouraged me, saying, "Day by day, you are getting better. Your smile is the best." One of my friends said to me, "You have lots of good points. You are perfect as you are. Show your smile to us."

Thanks to my teacher and my friends, I gained confidence in myself. I had to quit the dancing team because of my family's financial difficulties, but the spirit I learned from the JETS is still in my mind and always encourages me.

When we make a mistake, we tend to lose confidence and we hate ourselves. But now I know how to recover from such a bad situation. We should smile to gain confidence. I am going to teach you how to make a perfect smile. You should stand in front of a mirror. Raise your eyebrows. Open your eyes wide. Raise the corners of your mouth. Then finally, say in a big voice, "I am the best. I love myself." Try this, and I am sure you will gain confidence.

## ◆中学校英語弁論委員会

### 平成29年度福井県中学校英語弁論大会報告

委員 園 井 圭 介（武生第一中学校）

去る10月4日、無事に第60回福井県中学校英語弁論大会を終了することができました。各校ともに学校祭や秋季新人大会によりご多忙な中での校内選考や発表準備となったと思います。おかげさまで今年も参加人数を58名に伸ばし、過去最多の参加となりました。また、男子生徒の参加人数も11名と、英語弁論に対する意識の高さ高まっているように感じます。各校の先生方をはじめ、関係者の皆様にもまず、心より感謝の言葉を申し上げたいと思います。

さて、今年の発表者の内容について見ると、社会的な時事問題を扱うものから個人的な主張まで、生徒一人一人の個性、創造性、独創性で訴えかけるような作文が多く見受けられたように感じます。また、英語のみをとってみても、年々流暢さに磨きがかかっているという印象を持ちました。その理由としては、早期英語学習やALT増員による話す時間の確保が挙げられるかもしれません。

優勝を勝ち取った池田中学校、長谷川さんの発表では、生まれ育った池田町の豊かな自然と人々の温かみとそれを誇りに生きている彼女の強い思いが伝わってきました。

2位となった武生第三中学校、野原さんは圧倒的な英語力を十分に発揮してくれました。内容は悩める思春期の中学生が抱く思いと個性の伸長についてでした。型にはまりがちな日本の中学生へエールを送っていました。

同じく2位の三国中学校、平野さんの発表では、沖縄の海の象徴である珊瑚が死んでいっている悲しい現実について触れ、これからの私達の行動について言及するものでした。三国に住み、ダイビングを趣味とする彼女だからこそ熱く訴えかけることができたのだらうと思います。

この他にもユーモアに溢れ、会場の雰囲気をも明るくしてくれた発表も多く、関わっていた先生方のご尽力が伝わってきました。審査に時間が長くなり、お待ちいただくこととなりましたことをお詫び申し上げます。また次年度への課題としていきたいと考えております。入賞者3名は11月24日に行われた高円宮杯全国大会英語弁論大会に参加しました。

英語弁論大会の運営にご協力頂き、ありがとうございました。

#### 【入賞者】

優勝	長谷川 朋香（池田中学校）	What The City Taught A Country Girl
2位	野原 菜々子（武生第三中学校）	Take One Step Forward
2位	平野 佳瑚（三国中学校）	To Save the Coral

# What the City Taught a Country Girl

Ikeda Junior High School

Tomoka Hasegawa

Can you imagine living in a town with no conbini? No train station? No shopping center? And only one traffic light? Well, that's my hometown, Ikeda, and I'm extremely proud of it, but I haven't always been. My pride for Ikeda grew only after visiting one of the most modern cities in the world, Tokyo. But before I talk about this trip, I want to introduce you to my beautiful hometown.

Ikeda is a small town in Fukui prefecture. The two things that make it special are its nature and people. No matter where you are in Ikeda, you will always see its majestic mountains, glowing rice paddies, and rich greenery. As for the people, there are only 2,700 in my town, and they are all so kind. Every day on my way home from school, I hear people greet me with "Okaerinasai", which means 'welcome home'. Wild boars, bears, and monkeys sometimes also greet me on my way home, but I'd like to think they're friendly too.

I know what you're thinking, "Poor girl! Her town has barely anything!" And you're right; however, I didn't know that because I thought this was what everyone experienced. It was the only thing I knew. I was born and raised here and so were three generations of my family. But I started to view Ikeda differently after talking to two of my teachers.

My school's nutritionist moved to Ikeda from Nagoya after joining a tour to study organic vegetables. She was immediately attracted to Ikeda's beautiful nature and good food. Now, she is a member of the Ikeda family. The other person is my ALT. Every day during class, she would stare out the window and say, "Wow! The view in Ikeda is beautiful!" I would look out the same window, but I couldn't understand why she was so amazed. I see these mountains, rice paddies, and trees every day.

Then, in May, I went to Tokyo for the first time. And I was so surprised. Tokyo looked nothing like Ikeda. Instead of mountains, I saw tall buildings. Instead of rice paddies, I saw subway stations. It looked like a different world, but soon my shock turned into happiness, because unlike Ikeda, Tokyo had many large, shiny stores. My favorite was the anime shop. Needless to say, I bought many things that day. When night came, I couldn't sleep because of all the excitement. I looked up at the night sky for the stars that always greeted me in Ikeda, but I couldn't find any. Suddenly, I felt sad.

Although Tokyo is great, this trip taught me that my heart is in Ikeda. I learned that I prefer the mountains and rice paddies over the tall skyscrapers. I learned that I prefer living in a small community, rather than living in a large city. I learned that I'm proud of Ikeda not because it is better than Tokyo, but because it is different. Now, I understand that my two teachers are probably very

proud of their hometowns too, but they're not afraid to travel and try new things. I want to be like them, because doing what is familiar, just like staying in Japan, is very comfortable. But, we will not grow, as a person or nation, if we do not learn from others and appreciate each other's differences.

So, this is what the city taught, me, a country girl : trying new things not only helps us grow, but it also helps us learn about what we are proud of. And pride is not about believing that we are better than others, but rather, that we are different.

## Take one step forward

Takefu Daisan Junior High School

Nanako Nohara

I'm a 15 year old junior high school girl. I study, read books, watch movies, and love new fashion and music. Do you think junior high school students enjoy their lives at school?

The answer is complicated. Most teenagers worry a lot about what other people think. We put everyone else ahead of ourselves and try not to stand out from the crowd. We answer yes or no, even when we may think the opposite. We can also be envious, jealous, or ask the impossible of ourselves. We'll change to fit the expectations of others, and sometimes, even forget what we're really capable of. I learned this lesson from my own experiences.

In the fourth grade, I moved to Fukui from Osaka and entered a new elementary school. I felt welcomed and I got along well with my new friends. I was enjoying my life at school. I never imagined what was waiting for me the following year.

When my classes changed I began to realize that some things around me were different. At first, I didn't let it bother me, but things slowly started to get worse. Suddenly, some students weren't accepting of me and gave me the cold shoulder. They also started talking about me behind my back, which upset me very much. I felt alone and lost confidence in my class.

My thoughts about school changed and I started to look elsewhere to find my world. Having a chance to reconnect with some old friends from Osaka had a good impact on me. We had a class reunion and my friends made me realize that I had changed. My light had gone out, and I had lost sight of myself. From that day, I decided to be outgoing and passionate again. I determined that I would try my best to shine and show my inner light. So I resumed ballet lessons and became active in my local community with students from other schools. Learning values from my hobbies and accomplishments made me a stronger person. I realized that many people have things in common outside of school, and I could develop fruitful relationships with them. However, these values have led some people to criticize me. Fortunately, not everyone thought this way. Some of my friends and



teachers understand me and accept me as I am and I have been supported by them.

Everybody has limitations. People often seem to focus on others' weaknesses rather than their strengths. I'm not good at playing sports, but other people are great at it. Being different is not wrong and is not something to be ashamed of. At school, though, we are all told to wear the same uniforms, eat the same lunch, and take the same classes. This can lead students to feel like they need to hide their true personalities in order to fit in. I believe that school is a place to learn how to become an individual. If we recognize each other's unique personalities, our lives will be richer. We need a good balance between our experiences and knowledge. Nobody is perfect, and by sharing our unique perspectives we can all grow.

What I really want to say is that it's okay to be different. Don't be afraid to get heart, the things that you experience will make your heart stronger. If someone is critical of you and you are upset by what they say, then simply try to broaden your horizons. Any kind of method is okay. In my case, I've looked outside of school and formed new relationships with people around me. Also, these days, social networking is global, so it's not difficult to find a strong ally somewhere in the world. You just need to take the first step forward on your own.

Now, I 'm asking all of you, especially the teenagers like me, let's set off on a journey to find our own place to shine.

## To save the coral

Mikuni junior high school  
Hirano Kako

I love the sea. However, I was born in Tokyo. There was not a beach near my house in Tokyo. I always looked forward to visiting my grandmother in Mikuni every summer vacation to enjoy swimming at the beach. When I was 9 years old, I moved to Mikuni to live with my grandmother. In Mikuni, I enjoy free diving and seeing many kinds of fish, for example, Puffer fish, Mullet, and Sea slugs. My father knows a lot about sea creatures, so he often teaches me when I am diving with him. After I came to Mikuni, I was moved every time I saw the sea from my house or my school. I thought to myself, 'I want to go to the beach every day during the summer.'

Last summer, I went to Okinawa with my family, it was my third time visiting. For the first and second visits, we enjoyed free diving there. However, on our third visit we wanted to go scuba diving. Scuba diving is different from free diving because you have to use an air tank. So, I had to take a three-day-course to learn how to use an air tank and develop my diving skills. Then, I got a scuba diving license!

While scuba diving, I went into a cave under the sea in Okinawa. The mysterious rays of light

penetrating the darkness of the sea made me very excited. I was also attracted to the beautiful coral reefs which looked just like a flower garden. The sea in Okinawa is more transparent than the sea in Mikuni. There are many kinds of tropical fish such as Anemone fish, Palette surgeonfish and Butterflyfish. I have never seen fish like those or such colorful coral in Mikuni.

However, when I stayed Okinawa, I heard that the coral reefs are dying. Many kinds of fish live there. If the coral dies, the fish will also die. The coral plays an important role as a breakwater to protect our lives. It is essential for not only marine organisms but also people. So, I asked my father's friend about this problem. She lives in Okinawa and is a scuba diving guide. She said, "The problem is coral bleaching".

Coral live symbiotically with zooxanthellae, a kind of algae, which makes the beautiful colors of corals. Coral and algae help each other to live. Coral bleaching means that the corals lose their color because of the loss of the zooxanthellae within them. Coral cannot move by themselves. So, if there are not any zooxanthellae, the coral will die. What causes the algae to die? Scientists say that there are three reasons. First, global warming, second, water pollution, and finally, natural disasters.

Humans can do something to save the coral. Unfortunately, the occurrence of natural disasters can never be managed by humanity. However, how about the other two? We can take care of global warming and water pollution. What can we do to save the coral reefs? We can remove all the garbage from beaches and never litter there again. We can stop draining dirty water into the sea to keep the water clean. Lastly, we can reduce carbon dioxide to keep the clean air. I had heard the term "global warming" before, and I could learn about coral bleaching to get a scuba diving license. I want to tell many people this story because I want to protect coral and the Earth.

I love the sea. I love fish. I love coral. I hope that we can see a great view of the ocean from now on and forever. And lastly, my name Kako comes from the kanji for coral.

# 放送テスト部

部長 加 藤 修 (坂井市立三国中学校)

日頃より英語放送テスト部の活動に対しまして、先生方からの温かいご理解とご支援をいただき、心より感謝申し上げます。今年度は全中学校と、高校の生徒を合わせて約23,000人の生徒のために放送テストをご採用いただきました。ありがとうございました。

さて、英語放送テスト部は、今年度4名の新規部員を迎え、32名のメンバーで活動をしてきました。昨年度と同数のメンバーで活動ができていることは幸せです。今年度は、問題作成と録音の会議を午後に設定することで、会議参加と会議費用の両方の負担を軽減することができました。多忙を極める中で会議等に参加してくださった部員の方々のおかげで、今年度分の作成が全て終了いたしました。ありがとうございました。

また、これまでの問題作成につきまして、常に完璧な作業をしていただいているリンク・コーポレーション（印刷担当）さんと名響社（録音・CD作成担当）さんには、厚くお礼申し上げます。今後とも放送テストをよろしくお願いいたします。

以下、本部会の平成29年度の活動につきましてご報告します。

## 1. 平成29年度 各問題の出題範囲・発行回数・発送日

種別	対象（発送日）	第1回（5月12日発送）	第2回（11月7日発送）	第3回（1月9日発送）
A	中学1年生	P. 4 Hi, English 1 ～ P. 45 まとめと練習 2 1回のみカラー印刷	P. 46 Unit4 ～ P. 83 Daily Scene 3	P. 84 Unit 8 ～ P.121 Unit 11
B	中学2年生	(NH1) P.122 Daily Scene 7 ～ (NH2) P.49 Presentation	P. 50 Let's Read 1 ～ P. 79 Daily Scene 5	P. 80 Unit6 ～ P. 109 Unit7
C	中学3年生 移行措置期間 高校1年生	旧教科書（2年） P. 86 Multi Plus 3 ～ 新教科書（3年） P. 33 Daily Scene 2	P. 34 Unit3 ～ P. 81 Daily Scene 5	P. 82 Unit6 ～ P. 111 Let's Read 3
D	高校1年生 高校2年生	※H29年度より、D問題を発行しない。 ※D部会の活動として、Dの過去問題集を作成する。		

## 2. 平成29年度 会議実施（一部計画）

・問題形式や活動方針に関する全体会議	3回（6月、11月、2月）
・問題作成会議	12回（夏季・冬季休業中）※今年度は『午後開催』
・録音および校正会	6回（録音会議は9月、11月、3月の土曜日 ／校正会議は各録音会議の3週間後）
・結果検討会議	1回（正答率の低い問題について検討）
・チーフクラス方針会	4回（必要に応じて随時）

## 3. 問題作成について

これまで放送テスト部会は、進化・変化し続ける英語教育や試験等への対応も含めて、対話のターン数の増加、問題の語数の増加、推論発問の導入などに取り組んできました。今年度は、中学生用の問題については、新教科書の採用に伴って語彙や使用場面のバリエーションも増えたので、様々な視点からの新しい問題を作成していこうと努めてきました。今後は、生徒が様々な種類の問題形式に対応できるよう、長文問題に記述式（日本語の穴埋め形式）問題を付加または、形式そのものを変更することも考えています。形式を大きく変更することになると、問題作成や印刷、結果検討などにも大きな影響が出るのが予想されるので、部会で協議を重ねながら準備をしていきたいと思っています。

さらに、昨年度からの引き続きとなりますが、小学校での英語の教科化への対応として、小学生を対象とした問題作成について、文部科学省からの新教材である『We can!』の内容も参考にし、他の教材や小学生の現状、問題形式などについても協議しながら、準備を進めていきたいと考えています。

## 4. 過去問題集について

昨年度より、主に高校教員で編集委員を組織し、D問題の過去問題集の販売に向けて、校正などの準備を進めているところです。発行日などは未定ですが、しばらくお待ちください。

## 5. 結果検討について

本部会は問題を作るだけでなく、その後に正答率やIDI（上位25%と下位25%の正答率の差）の統計を算出し、正答率が低かった問題については部内で検討しています。今年度も3月末に結果検討会議を開き、問題改善に向けて正答率やIDIなどのデータをもとに検討会を行ないます。合本については、昨年度と同様に、データは掲載しますが、正答率の低い問題についてのコメントは掲載しません。

## 6. 平成29年度 部員および役割分担

No	名 前	学校名	問題作成	その他の役割
1	嶋田 晃士	明倫中学校	B	校正・結果検討
2	松田 祐樹	光陽中学校	C	校正・結果検討、校正アシスタント
3	兼井 智加	進明中学校	A	校正・結果検討
4	高田由紀子	成和中学校	A	校正・結果検討
5	河合 創	大東中学校	A	録音チーフディレクター、校正アシスタント
6	ハート真由美	大東中学校	B	校正・結果検討
7	窪田 聡美	川西中学校	C	校正・結果検討
8	栗田由紀枝	森田中学校	—	校正チーフ
9	鋸谷 卓磨	社中学校	B	校正・結果検討
10	桑原ゆうき	清水中学校	C	校正・結果検討
11	吉田 広視	芦原中学校	B	問題作成チーフ、校正・結果検討
12	林 智世	三国中学校	C	校正・結果検討
13	若林 京子	丸岡南中学校	B	校正・結果検討
14	斉藤 洋輔	坂井中学校	A	校正・結果検討
15	上塚 大貴	中央中学校	C	校正・結果検討
16	木村 友美	中央中学校	A	校正・結果検討
17	高松三七子	朝日中学校	C	校正・結果検討
18	福田 泰子	朝日中学校	C	校正・結果検討、アナウンスアシスタント
19	太田 萌	万葉中学校	B	校正・結果検討
20	窪田乃里子	池田中学校	A	校正・結果検討
21	堂埜 真希	三国高校	(C)	校正・結果検討、チーフアナウンサー
22	田川真理子	金津高校	過去問	校正・結果検討
23	田嶋 由美	丸岡高校	過去問	校正・結果検討アシスタント
24	林 淳子	福井商業高校	過去問	校正・結果検討
25	大村 昭友	武生高校(定)	—	校正・結果検討チーフ
26	内田 冬萌	丹生高校	過去問	校正・結果検討アシスタント
27	森 一生	武生東高校	過去問	過去問作成チーフ、校正・結果検討
28	松宮 利絵	敦賀高校	(C)	校正・結果検討
29	奥野信太郎	敦賀高校	過去問	校正・結果検討、録音アシスタント
30	加藤 修	三国中学校	(事務局)	事務局(部長)
31	野崎 恵美	社中学校	(事務局)	事務局(副部長・会計等)
32	伊藤美智子	敦賀高校	(事務局)	事務局(副部長・文書発送等)

部員一同、福井県の生徒のためにがんばります。

部員一同、福井県の生徒のためにがんばります。

長年にわたりまして皆様にお使いいただいている放送テストですが、今後も、様々な要望に応えながら発展していきます。ぜひその一翼を担ってみたいと思う方は、三国中の加藤、またはその他の放送テスト部員までご連絡ください。そして放送テスト部員となっただき、持っていらっしやる能力やセンスを、福井県の子どもたちのために発揮していただければと思います。今後も、現場の先生方からのフィードバックを参考にしながら問題の改善を図っていきますので、ご意見をお聞かせください。よろしくお願いします。

## 7. 部員よりひとこと

最後に、部員の方々から寄せられた放送テスト部会の活動などについてのコメントをお読みください。

○毎年思うのは英語って難しいですね。ネイティブチェックでも驚き、作成会議でも驚き…。何年やっても毎回新しい発見と驚きの連続。勉強になります。(光陽中 松田祐樹 先生)

○この部会の会議に参加しているときが一番英語を使って、指導内容などを考えられる時間だと感じています。一つの問題を作るために、集って話し合うことは自分のスキルのためにも、学校の中に限られたところからの息抜きにもなります。ただ、教員の働き方が問われている今、これまで通りに全てを行うのは難しいな、と感じます。(森田中 栗田由紀枝先生)

○高校入試での英検合格者の加点措置についてです。授業で習う内容以上のものを点数化するのって、中学校の先生方や生徒さん、保護者の方の反応はどうなのでしょう。定時制高校の場合、他の高校を中退して編入してくる生徒が、中学校でなく他の高校在学中に英検取得した場合、加点するのかなど…。学校長判断で高校によってマチマチ、という問題が出てきています。それによってどこの定時制高校を受験するのが有利か、という問題も出てきそうです。(武生高校 大村昭友 先生)

○放送テスト部員として6年が経ちました。この6年でも、若手の先生の割合が大きくなったように思います。その分、放送テストの英語の質の担保が確保されることが大切だと感じます。ベテランの先生に教えていただきながらも、自分でしっかりと問題を作成できるように、英語力の研鑽に努めなければならないと思います。(大東中 河合創 先生)

○年々学校の業務が増え、放送テスト部会への参加も難しくなってきました。部員の先生方には本当に頭の下がる思いです。問題を練って、良いものが完成したときの喜びは本当に大きいです。今の時代は連携、連携です。何十年も前から中高が連携して問題作りをしてきた放送テスト部会に所属してきたことは私の誇りでもあります。微力ながら、できる限り続けることができたらいいなと思っています。(朝日中 高松三七子 先生)

○やはり会議に参加すると、とても勉強になるなと改めて感じております。1人でも会議の参加

者が多いと心強いです。少しの時間だけでも、より多くの先生方に参加していただけるとありがたいですね。  
(社中 野崎恵美 先生)

○学校での業務が本当に厳しく、他の学校からも多忙だという心の叫びをよく聞きます。もっと軽やかに作成会議に出て来られるような職場環境になるといいなと思います！

(敦賀高校 伊藤美智子 先生)

○今年度は業務が重なっていてあまり問題作成会議に出られなくて申し訳ありません。来年度からは復活できるように、学校での業務が減ることを祈ります。(三国高校 堂埜真希 先生)

○いつも先生方の深い洞察で勉強させていただいています。これからもよろしくお願いします。

(敦賀高校 奥野信太郎 先生)

○放送テスト部員の皆様、いつも本当にありがとうございます。年間通じてお仕事に邁進していることと思いますが、たまには休息をとっていますか。学習指導要領が改訂され、英語科にも更なる変革の波が、例外なくやってきています。その中で、子どもたちのために確かなことをやっていきましょう。原案作成、作成会議、録音、校正、印刷、配送、テスト実施、結果検討、省察、その他の事務仕事などなど、多くのパートで多くの方々にお世話になっております。お互いに感謝の気持ちをもって、このような実りあるお仕事をさせていただいていることに感謝しつつ、これからはがんばっていきましょう。よろしくお願いします。(三国中 加藤修)



## 広報部

部長 稲葉 芳明 (大野高校)

日頃より広報部の活動に暖かい御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

3年前の『会報 第73号』で大幅リニューアルを試みて以来、先生方により一層熱心に読んでいただけるようになったと感じており、部員一同深く感謝致しております。

今年度は、従来の広報部活動を充実させるべく努めてまいりました。

県小教研英語活動部会と県英研（県中教研英語部会、県高教研英語部会）がより密接に連携活動を行えるよう、本年度も『会員名簿』に県内全小学校の英語活動担当主任名を掲載致しました。

『会報』では第73号から「英語科紹介」コーナーを復活して、第73号で奥越地区、第74号で坂井地区、第75号で丹南地区（Part 1）の英語科を御紹介しました。今年度は丹南地区の学校紹介 Part 2 を掲載致しました。

今後も、会員の皆様の御協力のほど宜しくお願い申し上げます。

### 1. 平成29年度事業報告

- 1) 福井県英語研究会会員名簿発行（6月9日、650部）
- 2) 福井県英語研究会総会講演会記録
- 3) 『英研ニュース 第40号』発行（9月、650部）
- 4) 『会報』第76号発行（2018年3月、650部）
- 5) 福井県英語研究会ホームページ管理運営

### 2. 平成29年度広報部員

部長	稲葉 芳明 (大野高校)
副部長	鈴木 秀人 (羽水高校)
部員	森谷 町子 (大野高校)
	島田 敏宏 (金津高校)
	織田 昌宏 (大野高校)
	木下 弥 (奥越明成高校)
	川田 裕貴 (開成中学校)





## 研究部 活動報告

部長 辻 智 生 (敦賀高校)

日頃より研究部の活動に対し、ご理解とご協力をいただき誠に有り難うございます。本年度も、中学生用読解教材『リーディングテスト』、問題集『Let's Read』、高校生用読解教材『Reading for Message』、問題集『Let's Read for Message』、および中高橋渡し教材『Bridging』を多くの学校でご利用いただきました。改めてお礼申し上げます。

リーディングテスト委員会では、これまで通り教科書テーマや言語材料に関連したリーディング教材を作成してきました。市販問題にはない内容の面白さ、濃さ、英文量であると自負しております。作成の際は、昨今の入試問題の傾向に対応してやや語数を増やすとともに、設問に工夫を加えて思考を必要とするような問題を作成してきました。生徒の力試しに使用していただいたり、ポストリーディングとして使用して頂いたりなど様々な活用法が考えられます。『Let's Read A,B,C』も例年通り改訂を加える予定です。週末課題としてや長期休暇中の課題、もしくは授業の最初5分に使用していただくなど、様々なご活用いただけると思います。

また、リサーチ委員会の方では例年通り Skimming、Scanning、Guessing の3種類のリーディング技能養成問題（バラテスト）を作成しました。毎回先生方が創意工夫を凝らして作成しております。生徒の課題として、教材としてご活用下さい。冊子の『Let's Read for Message』は全面的に改訂し過去3年間に作成したバラテストの中から選りすぐりの作品を種類別に集約しました。どちらの教材も生徒が意欲的に取り組めるものができあがったとの評価を多くの高校の先生方からいただいております。

TEFL委員会では、まず Bridging に関して若干の修正を加えました。また授業研究にも取り組みました。フォーカス・オン・フォームの考え方に基づいて授業を展開することを目標として研究をして参りました。特に時制、比較、仮定法、関係詞の定着を目指したワークシートを作成しています。まだまだ手探りであり、全ての授業についてフォーカス・オン・フォームに基づく授業を行うのは難しいと感じていますが、ある程度の方向性は見えてきたと考えています。次年度中に発行される合本を是非お読み下さい。

『研究部合本』については、本年度も発行が遅れたことをお詫び申し上げます。今年度は、昨年度作成したリーディングテストおよび『Reading for Message』の問題／解説解答の他に、TEFL委員会において改訂した Bridging の改訂の趣旨やサンプルページを記載しています。是非ともご覧いただき、研究部の活動をお知りいただくとともに、勤務校での指導などにお役立て下さい。

最後に、研究部の活動はほとんどが夜間ですが、作問能力の向上や、授業実践についての省察、悩み事相談、仲間の輪を広げるなどたくさんのメリットがあります。より多くの先生方にこの仲間に加わって頂くことで活動も活性化されます。少しでも興味がおありの方はお近くの研究部員までご連絡ください。よろしくお願いいたします。

以下、本年度研究部の先生方です。みなさんお忙しい中、熱心に活動していただきました。

平成 2 9 年度研究部 部員名簿

研究部（オフィス）

	職	名前	学校名
1	部 長	辻 智生	敦賀高等学校
2	副 部 長	水木 毅	武生東高等学校
3	副 部 長	村 昭信	金津高等学校

リサーチ委員会

	職	名前	学校名
23	委 員 長	水木 毅	武生東高等学校
24	委 員	清水 慈昭	羽水高等学校
25	委 員	堀口 伸介	足羽高等学校
26	委 員	鏑村 明	武生東高等学校
27	委 員	近藤久美子	藤島高等学校
28	委 員	橋本 千宙	藤島高等学校

リーディングテスト委員会（嶺北）

	職	名前	学校名
4	委 員 長	高木 裕代	足羽第一中学校
5	副委員長	土田 衛	丸岡高等学校
6	委員(A)	宇原 弘晃	至民中学校
7	委員(A)	永田乃里子	丹生高等学校
8	委員(A)	源藤 里佳	灯明寺中学校
9	委員(A)	漆崎 智子	進明中学校
10	委員(A)	谷口 広憲	明道中学校
11	委員(B)	原田 真理	足羽第一中学校
12	委員(B)	嶋田 剛久	藤島中学校
13	委員(B)	林 納理子	金津高等学校
14	委員(B)	山内 翔太	殿下中学校
15	委員(C)	澤田 亜紀	足羽中学校
16	委員(C)	森本 浩司	藤島高等学校
17	委員(C)	進士 祐介	高志高等学校
18	委員(C)	江南 梓	鷹巣中学校

T E F L 委員会

	職	名前	学校名
29	委 員 長	牧野 剛士	敦賀高等学校
30	委 員	大橋 夕紀	若狭高等学校
31	委 員	青山 真弓	藤島高等学校
32	委 員	三仙 真也	藤島高等学校
33	委 員	百田 忠嗣	松陵中学校
34	委 員	山口 貴美	敦賀高等学校

リーディングテスト委員会（嶺南）

	職	名前	学校名
19	委 員	安井 智子	美浜中学校
20	委 員	水谷 友梨	若狭高等学校
21	委 員	山口 貴美	敦賀高等学校
22	委 員	松村 結奈	敦賀工業高等学校

## ◆リーディングテスト委員会

委員長 高 木 裕 代（足羽第一中学校）

### <委員の先生方の活躍>

今年度、リーディングテスト委員会は、問題作成者に新たに4名の先生をお迎えし、スタッフ5名、問題作成者17名（嶺北13名、嶺南4名）、計22名でリーディングテストの作成に取り組んでいます。嶺北リーディングテスト委員会の主な活動時期は、5月～7月、10月～12月、1月～3月で、この期間中、2週間に1回のペースで検討会議を行っています。嶺南リーディングテスト委員会は、7月末より月1回のペースで、敦賀高校の会議室等をお借りして、検討会議を行っています。各グループ（A：中学1年生、B：中学2年生、C：中学3年生）とも、チーフの先生を中心とし、会議は終始和やかな雰囲気が進められています。委員の中には、鋭い視点で素晴らしい問題を作成してくださる先生が多くいらっしゃいます。また、どの先生も、書籍やウェブサイト、ご自身の経験などから、生徒が興味を持ちそうなトピックを取り上げ、よりメッセージ性の高い問題を作成してくださっています。

すべてのグループに、中学・高校の先生、経験年数の長い・短い先生が交じっており、検討会議の場は、校種を超えた貴重な意見交換の場にもなっています。リーディングテスト作成の技術は、英語教員に欠かせません。どの先生方も自己研鑽を兼ねて、リーディングテスト作成に尽力してくださっています。リーディングテスト作成に興味のある方、校種・時期を問わず、いつでも大歓迎です。

### <リーディングテストについてご存知ですか？>

リーディングテストを作成するにあたり大切にしていることは、読み手である生徒に送るメッセージです。生徒に興味を持ってほしいこと、考えてほしいこと、気づいてほしいこと、学んでほしいこと、などを伝えられるような問題作成を心がけています。そして、更に、これらのメッセージの読み取りを期待して、設問を作成しています。設問については、以下のようなものが多いです。

- ・本文に書かれた情報を整理するもの（語彙や新出の言語材料を理解しているか確認）
- ・ストーリーの流れを推測するもの（文字情報からその後の流れを推測できるか確認）
- ・述べられている状況を絵で選ぶもの（文字情報から場面をイメージできているか確認）
- ・メッセージを読み取るもの（筆者や登場人物が英文を通して伝えたいことをつかめたか確認）

また、現場で活用しやすくするために、各回のテスト範囲を、Unit ごとに設定しています。テスト範囲のページ番号を各テストに記載してありますので、授業の進度に合わせて利用しやすくなっています。また、今年度より「全範囲」という範囲をなくし、テスト範囲をより細かく設定したことにより、現場ではより使用しやすくなったのではないかと思います。

### <リーディングテスト採用のお願い>

読む活動は、コミュニケーション活動の一つであり、書き手のメッセージを読み取り、さらにそれについて話したり、書いたり、他技能と関連付けることができます。また、読みの力をつけるためには、既習の言語材料や語彙と何度も触れる必要があります。そこで、まとまった英文を読むことにより、できるだけ早いうちから慣れさせることが大切です。そのためにも、ぜひリーディングテス

トの採用をご検討ください。授業後の復習（考査前に・家庭学習に・自習課題用に）や、授業中の活動（Reading から Writing へ・Reading から Speaking へ）として活用することもできます。

また、リーディングテスト委員会では、過去のテストを冊子にした Let's Read (A~C) を作成しています。毎年改定を行っており、教科書改訂に伴う新出語句や文法事項の配列、トピックの精選にも気を配っています。ぜひ、採用をご検討ください。

最後になりましたが、今年度リーディングテスト、Let's Read を採用していただいた先生方に御礼申し上げます。来年度もよろしくお願いいたします。

#### <リーディングテスト委員から一言>

○他の学校の英語の先生から情報を得られたり、普段のテスト作りのヒントがもらえたりと、とても学びの多い委員会でした。様々な先生からアドバイスをもらえ、1年を通して、長文問題の作り方を学ぶことができたように思います。  
(殿下中 山内翔太)

○Let's Read に自分の作った問題が載っているのを見たとき、そしてその問題を一生懸命生徒たちが解いているとき、そして「へえ」「この話おもしろい」と読み終わった生徒たちが言ってくれたとき、『よし、また頑張ろう!』と思います。年々、アイディアを出すのが苦しくなってきましたが、自分に刺激を与えてくれる仕事だなあとと思っています。  
(足羽中 澤田亜紀)

○若い先生方と一緒に問題作成をしていると、新しい考え方や価値観が伝わってきて世の中の流れを感じることができます。また会議自体もいろいろな中学、高校の先生方とお話をするのが楽しく、いい意味で息抜き&研修ができています。問題作成は頭と心をバランスよく使う作業で決して簡単ではありませんが、多くの先生方のご尽力で楽しく活動させていただいています！

(藤島高 森本浩司)

○リーディングテストを通じて、生徒たちの視野が広がったり、新しい知識を獲得できたり、心が揺れ動いたりして欲しいと思い、作成に励んでいます。多様な考え方を共有しながらテストを作成するのは本当に楽しいです。  
(至民中 宇原弘晃)

○問題作成には試行錯誤していますが、いかに生徒が読みたいと思えるような問題にするかが、難しさでもあり楽しみにもなっています。問題作成の技術向上だけでなく、自分の英語力も向上しているのが感じられます。  
(鷹巢中 江南 梓)

○部会の先生方の熱心な下調べや、生徒の思考を先読みした問題の設定など、参加するたびに勉強になります。なかなか忙しさに気持ちが勝てない時もありますが、福井県の生徒のためという思いがなんとか頑張るエネルギーになっています。  
(藤島中 嶋田剛久)

○昨年度からリーディングテスト作成に関わっています。複数の先生方と議論をすることで、自分ひとりでは気づかなかった発見が多くあり、回を重ねるごとによい文章・設問になっていくことを感じています。これからも勉強していきたいです。  
(若狭高校 水谷友梨)

○Making tests for the eighth grade students was a big challenge. However, thanks to the wonderful members and advisers, I really enjoyed it.  
(足羽一中 原田真理)

○今年初めて参加させていただきました。問題の作成にはとても苦労しますが、毎回先生方からたくさんアドバイスを頂き、とても勉強になります。参加させていただく度に新しい知識や視点を得ることができて、よい刺激の場になっています。  
(敦賀工業高 松村結奈)

## ◆リサーチ委員会

委員長 水 木 毅（武生東高校）

リサーチ委員会では、本年度も高校生向け読解スキル育成プリント教材“READING FOR MESSAGE”を作成し、SKIMMING・SCANNING・GUESSINGを1組として、7月・9月・12月の年3回お届けしました。お陰様で8校 1,179部のご採用をいただきました。以下は本年度の各教材の概要です。

### ◇SKIMMING

- I 愛犬ルーシーとの出会いと別れ（953語）
- II どんどん快適になる？自転車（958語）
- III 兄に待ち受けている運命とは（1,232語）

### ◇SCANNING

- I 宇宙旅行提供会社のホームページ
- II おいしいフィッシュアンドチップスの作り方
- III おすすめの映画の紹介

### ◇GUESSING

- I
  - 1. 語の説明からの語の推測（記述式）3題
  - 2. 笑い話の状況理解（4択）3題
  - 3. 文章中にある難語の意味類推（4択）2題
- II
  - 1. 語の説明からの語の推測（記述式）3題
  - 2. 笑い話の状況理解（4択）2題
  - 3. 文章の要旨理解（4択）1題
- III
  - 1. 語の説明からの語の推測（記述式）3題
  - 2. 笑い話の状況理解（4択）3題
  - 3. 文章中にある難語の意味類推（4択）2題

本年度も、プリント教材の他に過去問を精選して作成した冊子“READING FOR MESSAGE”を発行し、6校893冊のご採用をいただきました。各校からの情報によると、冊子は2、3年生を対象に、授業中に読ませたり、週末・長期休業中の課題にしたりしている学校が多いようです。また、プリント教材と同様に、扱っている題材やクイズ感覚で取り組める問題の面白さを評価いただいています。市販の問題集ではまず目につくことのないオーセンティックな英文を提供していると自負しております。また、前回の改訂から3年が過ぎましたので、2年前に再改訂を行いました。全問題が新しい内容となりました。今後とも、よりよい教材作りを目指していきますので、プリント教材・冊子共にご愛顧のほどよろしくお願いいたします。

## ◆TEFL 委員会

委員長 牧 野 剛 士（敦賀高校）

今年度の TEFL 委員会では、「コミュニケーション活動を用いた 4 技能統合型英文法指導の在り方（Focus on Form）」をテーマに、活動を進めています。学習指導要領が改訂されて以来、「英語の授業は英語を用いて」行うことが原則となり、英語によるコミュニケーションを重視したカリキュラム改革、教材開発は進んできてはいるものの、文法指導に関しては、従来型のドリルを中心とした暗記・詰め込み式の授業が続いているという話をよく聞きます。また、従来型の文法指導によって生徒に文法項目が定着しているかという点、必ずしもそうでない現状もあります。そこで、TEFL 委員会では、知識としての文法ではなく、活動を通していかに文法項目を使えるようになるかに焦点をおいて研究していくことに決めました。今年度は、特に「時制」「比較」「関係詞」「仮定法」の 4 つの文法項目に絞ってワークシートと指導案を作成し、それらを用いて授業を進めれば目標言語を使えるようになることができるものを目指し、各委員が研究を進めていきました。様々なレベルの学校に対応したものというわけにはいきませんが、作成資料から、指導の理念をお伝えできればと考えています。合本原稿で発表しますので、文法を教える際の参考にしていただけたら、と思っています。コミュニケーション活動を通して目標言語の定着を図りたいと思いながらも、なかなか一歩を踏み出せないでいる先生方の一助になれば幸いです。

Bridging については、昨年度大幅に改訂を行いました。今年度は、昨年度改訂したものを一部修正し、発刊する予定です。Bridging がより良いものとなるよう、Bridging に関してご意見等ありましたら、どんなことでも委員のメンバーもしくは委員長あてに言っていただけると幸いです。

TEFL 委員会は、嶺南を中心に、比較的若いメンバーで活動しています。中学校教員も参加しており、中学校教員側のアイデアもうまく融合させながら研究に取り組んでいます。自らの日々の教育活動に TEFL 委員会活動の内容をフィードバックするとともに、合本を通して福井県の英語の先生方に少しでも有益な研究内容を報告できればと考えています。

〈2017年度 TEFL 委員会（50音順）〉

青山 真弓（藤島高校）	大橋 夕紀（敦賀高校）	三仙 真也（若狭高校）
牧野 剛士（敦賀高校）	百田 忠嗣（松陵中学校）	山口 貴美（敦賀高校）

# 第67回全国英語教育研究大会(全英連新潟大会)参加報告

広報部 織田 昌宏 (大野高校)

今年度の全英連大会は「新潟から世界へ！新潟から未来へ！」～交流・喜び・成長あふれる英語教育の推進～をテーマに、グローバルマインドを持つ自律した学習者を育成する英語教育の在り方を示すことを目標に、様々な授業実践報告などが行われました。

## 記念講演

演題 「コミュニケーション能力の育成をめざして～自律した学習者を育てる～」

講師：名古屋外国語大学 太田光春 氏

「授業は英語で行うことを基本とする」ことの重要性を、スキーマの指導法に置き換えて説明するところから講演が始まった。1つ目は教師の指導を聞いたり、本を読んだりする。2つ目はスキー場に行き、教師のお手本を見る。3つ目は生徒に滑らせる。この例えから英語の授業において我々が何をしなければならないかは明らかである。文科省の調査では、授業の半分以上を英語で行っている割合は2010年の14.8%から2016年には52.6%に上昇しているが、まだまだである。また、講演の中で授業作りのポイントが多数挙げられたので、以下に3点紹介したい。

### 1. 親和関係をつくる

親和関係が成立することによって教室から過度の緊張がなくなり、誤りが受け入れられる雰囲気生まれ、生徒は言語習得に必要な Risk-taking が安心してできるようになる。

### 2. インタラク션을軸にして展開する

コミュニケーション能力の育成を目指す授業では、インタラク션을軸にして授業を展開する方がうまくいく。生徒を自律した学習者へと導いていくためには、伝えたい、伝える必要のある事柄について、音声や文字を用いて伝え合う言語活動を中心に据える必要がある。

### 3. 教師の役割の変化

“From A sage on the stage to A guide on the side.” これはアメリカの大学の学長 Mondenhall の言葉である。ツアーを考えてみると、ガイドはツアーの中心にいるのではなく、脇にいて旅行者が楽しむことができるように必要な情報や助言を与えるのである。

この3点は、あたりまえのことにように思えるが、あたりまえのことをあたりまえにできるようになるには、かなりの努力が必要である。親和関係の構築、これがすべてにおいて基本となるように思えた。

## 小学校授業実演

相手意識をもって、やり取りする児童の育成

発表者：新潟市立上所小学校 村上大樹 教諭

助言者：文教大学 金森 強 氏

留学生とのやりとりを想定した児童同士の練習が公開された。新潟のおいしいものを知りたいというリクエストをうけ、主菜・副菜・デザートของกลุ่มに分かれ、それぞれが新潟グルメを調べ、何をどのように伝えるか、相手意識をもってコミュニケーションを図らせるものであった。

授業の最初に、「留学生のみなさんが○○○な気持ちになるように△△△をしよう」とゴールを明確にし、児童の練習が始まった。紹介役と留学生役に分かれ、紹介役の児童は、紹介する食べ物の写真を使いながら、留学生役の児童に説明をしていく。その際に相手にわかるように、相手の気持ちになって伝えようとしていた。うまくいかない場合には、教師と一緒に発話するなどの手助けをしていた。一通り終わると、中間評価として振り返りが行われた。児童からは、「ジェスチャーがわかりやすかった」「はきはきしゃべっていてよかった」などの肯定的な意見がたくさん出ていた。発表に対して、クラス全体から「せーの、Good Job!」などのレスポンスをするといった発言を促す工夫が見られた。

小学生の授業とは思えないほど、英語が飛び交う授業であった。失敗を恐れずに話す姿勢が児童全員に見受けられた。また他者の意見を尊重する雰囲気がクラス全体にあふれていた。そのような関係性がこれまでの授業を通して作られているからこそ、児童全員が自信を持って発表できている今回の授業実演につながっているに違いないと感じた。

## 中学校授業実演

「やりとり」を通して、自分の考えを伝えることができる生徒の育成

発表者：新潟市立小針中学校 中川久幸 教諭

助言者：上智大学 和泉伸一 氏

相手意識を持ち、「やり取り」を練習する活動が公開された。新潟大学の留学生から、「中学生の将来の夢についてインタビューをして、生の声を聴きたい」との依頼があり、それに答えるという設定であった。帯活動として、メモをもとに自分の考えを整理して伝え、相手の考えを確認しながらレポーティングする活動を行っている。

前時において、相手からの質問に答えられず会話がストップしてしまうという場面が見られた。それを改善するために、「仲間からの多くの質問を受けて、+1の情報を付け加え会話を続ける」という目標が掲げられ、活動がスタートした。留学生と「やり取り」することを意識させ、生徒役、留学生役を決め練習に取り組んだ。3人でグループを作り、質問する側（2人）は、できるだけ多くの質問を考え、メモを取り質問をしていた。

タスクの繰り返しによって、他の生徒からの情報収集であったり、自身の発話の内容や正確さを向上させたりすることをねらいとしているとのことだったが、実際に練習を繰り返すうちに、初めは大人しかった生徒達が、徐々に自信をもって答えることができるようになっていく姿が見られた。また、示されたいくつかの会話パターンに従うことで、どの生徒も活動に参加できた。留学生との



本番での「やり取り」に向けて英語に磨きをかけることができていたように思う。

## 高等学校授業実演

生徒が自己表現活動を楽しむ授業作りと教師の役割

発表者：新潟県立新発田高等学校 根立望 教諭

助言者：名古屋外国語大学 太田光春 氏

教科書を読み終えた後の **post-reading** 活動が公開された。クラスメートと協力をして、自分の意見を交換することを目標に置いていた。「教室は英語を使う場所であること」、「コミュニケーション能力を育成するためには傾聴姿勢と相手に伝わる英語で話したり、質問をしたりすることが大切であること」を理解させ、言語活動中心の指導をされている。

**Warm-up** でのペアワークでは、活発に意見交換が行われ、その後一人の生徒が司会を務め、数人の意見をクラス全体でシェアしていた。司会の生徒も慣れた様子であり、他の生徒から出てきた意見をまとめながら進行を務めていた。生徒が発表する際は、自発的に自ら手を挙げ、意欲的に答える姿が見られた。授業展開においては、教師と生徒との **interaction** が中心に進み、意見交換を通してながら内容理解を深めていった。その際に、難しい語彙や本文は **paraphrase** しながら読み進めていたのが印象的であった。

普段の授業において、即興でのやりとりを帯活動に取り入れている。また、生徒と教師との親和関係構築にも重点をおいて取り組まれている。そのような日々の取り組みが生徒の自信につながり、自ら意欲的に授業に参加し、課題解決のためにクラス全体で協力できる現在の姿へとつながっていると感じた。

## 分科会 1

生徒が自己表現活動を楽しむ授業作りと教師の役割

発表者：新潟県立新発田高等学校 根立望 教諭

助言者：名古屋外国語大学 太田光春 氏

5年前の学習指導要領改定を受け、授業スタイルをどのように変えてきたのかを話してくださった。「生徒が自分の考えを伝えることやクラスメートの考えを聴くという『自己表現活動』を中心に据え思考力と表現力を高める」ことを重視している。

自己表現活動を中心にした授業づくりのポイントとして、次の7点を挙げている。

1. 親和関係をつくる
2. 授業規律を共有する
3. インタクションを軸にして展開する
4. 情報や考えを伝える言語活動をさせる
5. できるだけボランティアを募る
6. 音声形式や言語活動への気付きを促す
7. 動機付けとなるフィードバックを与える

自己表現活動の根底には、「生徒－教師」間、そして「生徒－生徒」間に親和関係とコミュニケーションに対しての肯定的な態度と動機付けが必要であるとのことであった。

## 分科会 2

「チームワーク」で英語力を伸ばす！ 生徒が自律した学習者になるための具体的な指導法

発表者：新潟県立長岡高等学校 涌井知恵 教諭

助言者：宇都宮大学 渡辺浩行 氏

生徒が互いに励まし助け合いながら学び、自律した英語学習者に育つことをねらった実践報告がなされた。また、生徒だけでなく、教師もチーム英語科として指導をしている。

### ・生徒間のチームビルディング

学びあい・助け合い・励まし合いを重視したコミュニケーション活動では、全員が同じ目標に向かって努力し、互いに教えあうことによって生徒が生き生きと活動に取り組む様子が窺えた。たとえグループ内で英語の能力に差があったとしても、リーダーとなった生徒の成績は伸びていることが実証された。

### ・教師間のチームビルディング

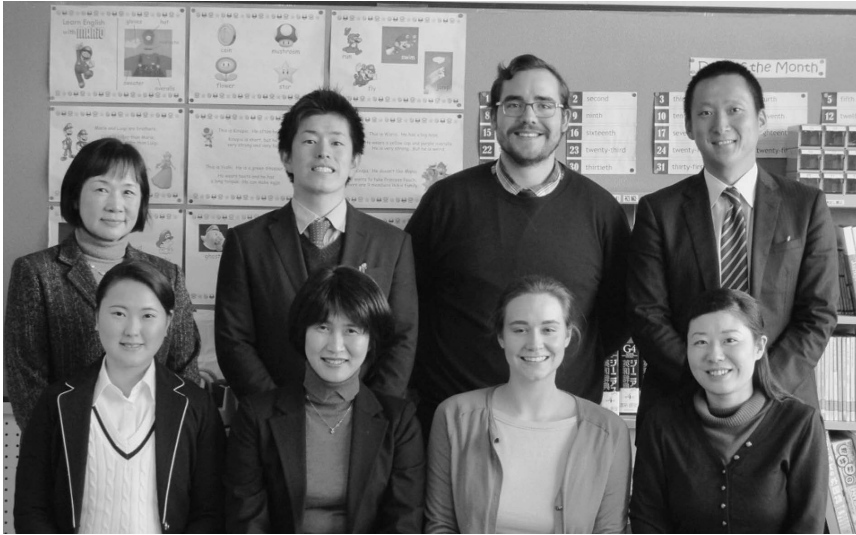
生徒に「お互いを尊重しよう」「協力しよう」という前に、まずは教員から良いチームになるということを意識していた。英語科として、「ゴールの共有」、「授業ルールの共有」をし、チームとして学年全体を指導している点が印象的であった。“Schools are more successful when teachers care about each other and enjoy sharing our working experiences.” 涌井教諭の言葉より。

## 特 別 企 画

### 広げよう英語科の輪（越前市）

#### 武生第一中学校 英語科

武生第一中学校の英語科はチームワークがよく、いつも和気あいあいと頑張っています。ワークシートのシェアリングや情報交換などを通して、英語科全体で指導力の向上を目指しています。



（後列左より） 永田、鈴木、Geoffrey、園井  
（前列左より） 竹澤、中村、Eileen、 中尾

#### ●メンバー紹介（名前、①授業で大切にしていること ②趣味 ③語学のブラッシュアップ方法

中 村 香 織

- ①生徒との楽しいインタラクション
- ②読書
- ③ALT との世間話

園 井 圭 介

- ①生徒が話しやすい雰囲気づくり
- ②サーフィン、野球
- ③友人と話をする

鈴 木 迪

- ①生徒が自然と顔を上げるような授業づくり
- ②洋画鑑賞、遠出をする
- ③洋楽を歌う

中 尾 公 美

---

- ①生徒の素敵な面を見つけること
- ②ウィンドーショッピング
- ③ALT と話す

竹 澤 沙 貴

---

- ①生徒とやりとりをしながら進めていくこと
- ②スキューバダイビング
- ③英語で動画を見る

永 田 義 子

---

- ①「なるほど」という気づき
- ②映画鑑賞
- ③English Journal を聞く

Geoffrey Palmer

---

- ①Make English fun!
- ②Brewing beer, Bungee jumping
- ③Practice, practice, practice

Quinn Eileen

---

- ①Have a real conversation in English
- ②Writing, Cooking
- ③Practice speaking with Japanese teachers!

## 武生第二中学校 英語科 (坂口分校含む)

武生第二中学校英語科は本校に4名と分校に1名、そして2名のALTで構成されています。本校には国際部があり、アイデア豊かで研究熱心なALTの指導の下、保育園で英語を教えたり、県外の英語弁論大会に出場したりするなど色々な活動を行っています。県内唯一の分校、坂口分校は本校から車で20分位山を登ったところにあり、教科会など英語科の活動は本校と一緒にしています。毎



(後列左より)  
(前列左より)

年2年生は学年でスピーチコンテストを行っています。このコンテストを経験すると、どの生徒も表現力がぐっと伸びます。今年度も3月に“My favorite thing”をテーマに実施予定です。

## ●メンバー紹介

坪 田 紘 子

---

二中勤務は3年目、年齢的にも中堅と呼ばれるようになってきました。今年は3年生担任ということもあり、英語の実力アップを目指して生徒たちと格闘中です。家庭との両立は大変ですが、有能な英語科のみなさんに助けられて何とか毎日やっています。

和 田 重

---

新採用3年目の勤務でまだまだ戸惑うことが多いですが、すばらしい生徒達と先生方に恵まれて、忙しくも充実した毎日を送ることができています。今年度は初の1年生担任ということで、英語は積み重ねが大切だということを実感しています。

山 田 恵 莉

---

今年度新採用で二中に赴任しました。周りの先生方にはご迷惑をおかけすることばかりですが、少しずつ仕事の楽しさを感じ始めてきています。教材研究や授業研究をし、授業の質を上げていけるよう努力していきたいです。

伊 藤 文 彦

---

子どもたちが英語を好きになってくれるよう、子どもたちに英語の力が付くよう、日々の授業や教材研究を頑張っていきたいと思っています。子どもたちと一緒に英語でのコミュニケーションを楽しみたいです。

網 田 友 紀

---

坂口分校は幼小中併設で、私の周りにはかわいい子供たちがたくさんいて、いつもかわいい笑顔に癒やされています。小学校との兼務なので小学校の外国語はもちろん家庭科、図工にも入り、時々幼稚園にも英語を教えに行きます。校舎内外のお花の世話にも挑戦中です。

Alex Grimes

---

During my time at university learning foreign languages, I always appreciated the native speakers that would help me improve. Now, I want to give back. I came to Japan to help motivate students to learn English and help them learn.

Travis Brown

---

This is my second year as an ALT at Nichu. I still have a lot to learn, but the support of my coworkers and students gives me strength and makes each day bright. This year, I hope to study Portuguese as well as Japanese to help me connect with my students.

## 武生第三中学校 英語科



(後列左より) 八田 朝倉 向当  
(前列左より) Michael Renee

### ●メンバー紹介 (名前、①授業で大切にしていること ②行ってみたい国、場所 ③2018年の目標)

八 田 秀 樹 \_\_\_\_\_

- ①習得と活用のバランス
- ②ヨーロッパの国々 (フランス、イタリア etc.)
- ③健康第一で、元気に生活すること

朝 倉 由 花 \_\_\_\_\_

- ①英語を通して生徒達がコミュニケーションできること
- ②カナダ、ハワイ
- ③子供と得度する

向 当 麻 由 \_\_\_\_\_

- ①生徒にとっても自分にとっても楽しい授業づくりをすること
- ②香港 (香港のディズニーランドに行きたい)
- ③筋力が無いので、今年こそ体を鍛えたい！！

Renee Russell \_\_\_\_\_

- ① I try hard to help the students enjoy English. I try to create a good environment, fun activities and opportunities to make the children smile while they study English. I think that if they enjoy English, then they won't think it's so difficult.
- ② I want to go to France. I want to see beautiful artwork and buildings there. I also like sweets very much, so I want to try French desserts.
- ③ My goal in 2018 is to find something to be happy about every day. I think laughter is a good medicine. So if I am happy every day, I will be healthy too!

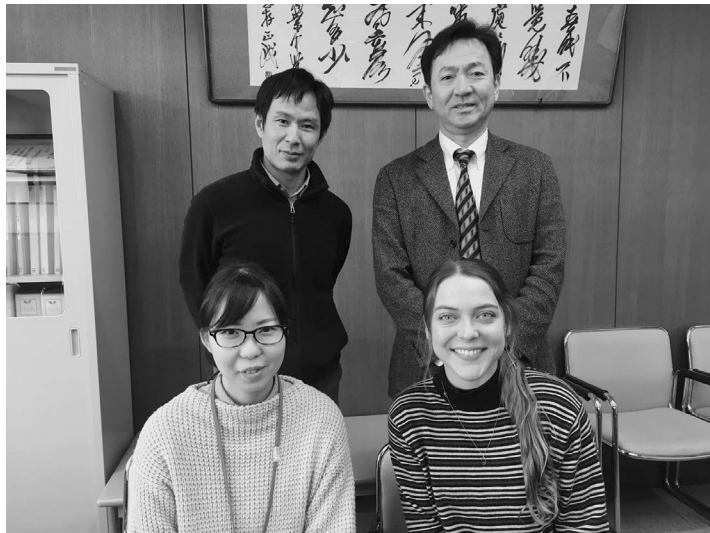
Michael Fisher

---

- ① I try to create a fun and enjoyable environment for my students. If I have fun teaching English, then my students will also have fun learning it.
- ② I want to go back to Canada to visit my family. However, I also want to go to Korea.
- ③ My goal in 2018 is to learn more Japanese.

## 万葉中学校 英語科

越前市の仁愛大学の隣にある、山や田んぼに囲まれた自然の中にある学校で、のびのび(?) 過ごしています。英語科は教員3名、ALT 1名のスタッフで構成されており、日々頑張っています。



(後列左より) 橋本 小林 (前列左より) 太田 Marissa

それでは、英語科スタッフを紹介します。

(①趣味・特技 ②英語を教える際、意識していること ③今苦労していること ④何か一言)

小 林 直 彦

---

- ①ギター、ピアノ演奏、囲碁 (英語だけに)
- ②母国語をマスターするようなアプローチで、ゆっくり急ぎ足 (笑) でバランスを意識しながら30年以上やってきています。
- ③教科書の進度が速く、ついて行くのがシンドいです。
- ④The mediocre teacher tells.  
The good teacher explains.  
The superior teacher demonstrates.  
The great teacher inspires.

By William Arthur Ward

橋 本 秀 徳

---

- ①お風呂（温泉）・カフェ巡り
- ②基礎・基本を大切に、高校生になってから自信をもっていけるだけの英語力を身につけさせること。
- ③家庭学習と授業をうまく組み合わせること・生徒の心に火をつけること
- ④海外にしばらく行けていないので、来年度はどこかへ行きたいな～♪

太 田 萌

---

- ①LINE、長電話、睡眠、食べること！
- ②生徒が英語をたくさん使うことができるような活動をすること。
- ③空き時間をいかに効率よく使うか、ということ。
- ④たくさん色々な英語の授業を見て、勉強したいと思っています。仕事もプライベートもさらに充実するように、頑張るぞー！

Marissa Herman

---

- ① I like painting, and going on hikes!
- ② I want to encourage my students to take risks when using English. Mistakes are important, and communication should be fun! ^o^
- ③ Sometimes I miss being far from home, but the people of Fukui have been as kind as family to me. So far, the hardest thing has been driving on the snowy roads! >o<
- ④ I love Japan because there is always something brand new to see and experience. My goal is to visit all the best art museums in Kansai!

## 武生第五中学校 英語科

コウノトリが空を飛び、山々に囲まれた自然豊かな環境にある武生第五中学校。今年度の生徒数は33名。よって、英語科の教員はたった一人です。しかし、2学期からALTの先生が週に2回来て下さり、英語の授業環境はかなりよくなっています。2人で生徒が英語を楽しみながら学ぶことができる授業作りに心がけています。



Sarah

廣嶋



●メンバー紹介（名前、①英語の授業で心がけていること ②趣味 ③2018年の目標）

廣 嶋 祥 代

---

①生徒が興味を持てるように題材を提示し、目標を持って楽しみながら学べる授業。

②料理、旅行

③弱音を吐かずに、positive に生きる。

Sarah White

---

①This is my first time working with students, and it's extremely rewarding! I enjoy finding new ways to engage classes with English, and I am very fond of the students I work with.

②Some of my hobbies are reading, watching TV, and travelling.

③In 2018, I hope I can continue to make a lasting impact on students' lives and grow as both an ALT and a person overall.

## 武生第六中学校 英語科

英語のスタッフは3名ですが、チームワークを大切に日々がんばっています。今年も焼肉キングに行きましよう。



松村

Carrero

佐藤

●メンバー紹介（名前 ①好きな英語の言葉 ②英語の授業で心がけていること ③趣味）

佐 藤 義 信

---

①English can change you

②生徒の個性が生きる授業 達成感のある授業

③趣味 映画鑑賞 読書

松 村 万紀子

---

- ①I'm not concerned that you have fallen. I'm concerned that you arise.
- ②英語の授業で心がけること 活動に変化をもたせる。 時間を管理する。  
生徒同士の活動を多くする。
- ③おいしいものを食べる 作る サーチする。

Carrero Kimberly

---

- ①Even a small star shines in the darkness.
- ②I try to make at least one student laugh even if it means embarrassing myself.
- ③Dancing. I joined a hip hop studio in Fukui City, and it's amazing!

## 南越中学校 英語科

明るく元気なメンバーで、生徒や他の先生方との楽しい会話を通し、日々実践的コミュニケーション能力を磨いています。生徒が英語をが学びたくなるような授業を目指しています。

(※注 写真はテンションが高いのではなく、全員跳んで撮影しました。足が切れてますが…)



(左から) 川上典孝 Dana Anderson 高畑真理 杉本貴子

### ●メンバー紹介 (①好きな言葉 ②わたしの癒しスポット)

杉 本 貴 子

---

- ①Once-in-a-lifetime opportunity Once-in-a-lifetime experience 【一期一会】
- ②ふくい健康の森 (ウォーキングに最適です♡)

川 上 典 孝

---

①It is easier to do something than worry about it 【案ずるより産むが易し】

②☆\$コーヒー

高 畑 真 理

---

①It's never too late to be who you might have been.

【なりたかった自分になるのに遅すぎるということはない】

②窓からの景色の良いカフェ

Dana Anderson

---

①virga 【木漏れ日】

②Key West, Florida

## 武生高等学校 英語科



(後列左より) 磯野 松田 吉村 野村 真柄 羽生 鈴木  
(前列左より) 橋本 川北 笹本 笠嶋 中野

こんにちは。武生高校英語科です。毎日、忙しく過ごしています。本校英語科を紹介するにあたり、各先生方から、ひと言ずつ寄せていただいたので、それをご紹介します。

- ・長年に渡って培われた伝統の上に（standard）先生方の個性が咲く（diversity）アットホームなチームです。
- ・武生高校の英語科のよいところは、風通しがよく疑問や相談があればお互いに親身になって相談し合えるところです。人の為に時間を使うことを厭わないその本質がよい授業として形となり、

生徒に還元できていると感じております。

- ・本校英語科のチームワークの良さは自慢できます。日々様々な問題が起こりますが、みんなで相談し、知恵を出し合い乗り越えています。
  - ・目の前の仕事にもめげず、ALTのザック先生も交えて食事会や旅行を楽しむ前向き(?)な私達です。
  - ・忙しい毎日ですが、チームワークで乗り切っている私たちです。
  - ・研修旅行(国内)では、外国人向けのツアーに参加するほど勉強熱心です(でした?)。
  - ・いろいろなハプニングが起こる中、協力し合いながら様々な困難を乗り越えてきました。(乗り越えていきます。)
  - ・おかげさまで、皆、熱心に勤めております。
  - ・何かと慌ただしい毎日を、英語科一丸となって乗り越えています。
  - ・驚・怒・悩・・・いろいろありつつも何とか「協」「笑」でがんばってます。
  - ・多忙の中、共に協力して共に苦労をわかり合える、温かい居場所です。
  - ・元気な生徒たちと一緒に、元気に(?)教員も授業を楽しんでいます！
- 以上、紹介を終わります。これからも、武生高校英語科をよろしくお願いします

## 武生高等学校池田分校 英語科

福井県立武生高等学校池田分校、英語科の川端です。  
本校は生徒数が1年生10人、2年生16人、3年生14人の計40名です。教員数は自分1人と週に1度武生工業高等学校から来られるAnton先生とで日々の授業を行っています。

本校の生徒達の多くは、中学時代の基礎的な知識がまだしっかりと身についていない生徒達も多く、教科書を進めるのにも非常に苦勞する点も多いのですが、少人数ということもあり、一人一人に丁寧に指導し、少しずつ内容を身につけさせています。元から英語に対する苦手意識が高かった生徒や、将来的に進学を考えていないので勉強に対するモチベーションが低い生徒などが多いのですが、教科書以外にも洋楽の歌詞や映画のセリフなどを利用して、生徒の英語に対する興味・関心を高めていくように日々努力しています。

本校は現1年生が最終学年となります。2年後生徒10人だけの学校とはどのようなものになるのかまだ想像もできませんが、生徒一人一人に合わせた英語学習をできるように心がけていきたいと思います。



川 端

## 武生東高校 英語科

- メンバー紹介 (名前、①英語のブラッシュアップ法、②趣味・特技、③お勧めの本・映画・TV番組・ネットなど、④休日の過ごし方、⑤訪れたい国や場所など、⑥その他何でも)



(後列左より) 山崎、鏑村、Endara、DeLaurentis、山本、伊藤、水木  
(前列左より) 黒瀬、水嶋、森、谷崎、濱野、小泉

Family name のアルファベット順に

Saskia DeLaurentis (サスキア デ ローレンティス)

- ① I brush up my English skills every day by just talking to people! My first language is Dutch, not English. So every day I learn new words and grammar just by talking to my friends and colleagues.
- ② I do tea ceremony, because I want to be a tea ceremony teacher in the future. I love making jokes that use English and Japanese.
- ③ The Hunger Games series (book), Stranger Things (TV-series) and Interstellar (movie).
- ④ Traveling and going to K-pop concerts
- ⑤ I have been to America, England, Ireland, Belgium, Germany, France, Spain, Portugal, Italy, Austria, Hungary, Japan and Vietnam. But I recommend going to the Netherlands! It's an amazing, wonderful little country. And of course, I recommend traveling around Japan, because it's gorgeous.
- ⑥ Similarity is boring, differences are wonderful.

Gustavo Endara (グスタヴォ エンダーラ)

- ① I speak English every day. I always try and read as many books as I can in the different languages that I don't use every day. I also listen to bilingual podcasts so I can listen to real people who are native speakers speaking English, Spanish, French and Japanese.
- ② I play the koto and travel as much as possible.

- ③ Harry Potter, The Hunger Games, イッテ Q
- ④ Studying and School activities
- ⑤ Australia, Canada, Ecuador, China, Korea, Philippines and Mexico are all places I have been and recommend. I also recommend that people travel around Japan. It's a beautiful country and you would be a waste if you don't see more of it.
- ⑥ Let's enjoy together many beautiful nature.

濱 野 則 子

---

- ①録画の再生速度を1.5倍にして聞く。
- ②テレビ鑑賞。
- ③1 番最近泣いた映画は『ラストレシピ』。
- ④録画した番組を見ながら作業をする。ただ見ていると眠ってしまうから。
- ⑤ロンドンで古着屋巡りをしたい。
- ⑥いつか、たまってる録画や本を消化したい。

伊 藤 琴 絵

---

- ①スーパードラマ TV。
- ②旅行。
- ③イギリス毒舌日記、Sherlock、Elementary。
- ④他人の旅行ブログを読んで旅行した気になる。
- ⑤スペインでバルをはしごしたい。
- ⑥健康第一でがんばります。

鏑 村 明

---

- ①海外映画・ドラマを英語で鑑賞したり、洋書や英語の雑誌を読んだりしています。
- ②旅行、読書、映画鑑賞 etc.
- ③海外ドラマでは Friends、洋書では Sherlock Holmes や Agatha Christie です。
- ④旅行、読書、映画鑑賞 etc.
- ⑤ドイツ、チェコ、オランダです。
- ⑥これからも宜しくお願い致します。

小 泉 宗 昭

---

- ①インターネットの海外メディアニュース。
- ②書。
- ③綾瀬はるかの「精霊の守り人」。
- ④家内外の整備。
- ⑤カナダ・モントリオール在住の友達宅。
- ⑥健康が一番ありがたいね。

黒 瀬 洋 子

---

- ①CNN News を聞くこと。
- ②茶道（裏千家）、金魚との communication。
- ③村上春樹の本、Sherlock Holmes の映画、報道2001。
- ④ひたすらボーとすること。
- ⑤ベトナム、オランダ、フィンランドなどまだいったことのない国。

⑥Seeing is believing. Let's enjoy our lives.

水 木 毅

---

- ①海外のドラマや映画の視聴
- ②旅行 全都道府県制覇しています。海外は11ヵ国に行きました。
- ③今季のおすすめは何と言っても「陸王」です。TBS 日曜9時枠はいいですね。
- ④1週間分のたまった新聞をじっくり読んでます。
- ⑤イタリア、ドイツ、スペインなど行ったことのないヨーロッパの国々。
- ⑥ニュージーランドは本当にいい国ですよ。

水 嶋 俊 光

---

- ①英検・TOEIC 受験、英字新聞購読、ラジオ講座。
- ②旅行・読書。
- ③竹岡広信先生の英語本、藻谷浩介氏の経済や人口問題等の本、映画はたくさんありますが、黒澤明の作品や、DIE HARD シリーズ、最近の邦画では『ジャッジ』がよかったですね。
- ④なるべくいろんなことをして、いろんな人に会うようにしています。
- ⑤中欧や常夏の島がいいですね。
- ⑥一生、どんな形でも英語に関わって、少しでも教えることが続けられたらいいなあと思います。

森 一 生 (かずお)

---

- ①年間に映画・DVD を100本（繰り返し見るのも含め）を目標にしている。台詞を覚えるくらいまで鑑賞すると、英語で夢を見ることもある。

英語研究会 英語放送テスト部会に20年以上在籍、現在に至る。録音会議の前に、ALT 同士がナチュラル・スピードで議論している間に割り込んで、こちらの要望を伝えるのが何ともスリリング。オット、平成30年度に、高校1年生を対象とした『過去問集（仮称）』を販売します。放送テストC（中3）とD（高1・2）の中から良問40題を編集し直し、豪華CD 2枚付です。現在、鋭意校正中。乞うご期待。

- ②幼い頃から多趣味。広く、浅く、しかし凝るととことん突き詰め、ある程度まで達すると飽きて止めるパターン。その中でもまだ続けているのは、Mac 派25年以上（漢字Talk7以降、Photoshop やDTP に凝る）、カメラ Canon 派20年以上（EOS630、EOS5でボジ・ネガ→EOS D30でデジタルへ→現在、EOS5D Mark IIにLレンズ3本）ぐらい。また、休日出勤（月100時間以上の超勤）が特技。またまた、マジックにはまっているらしい。

- ③4年ほど前に Millennium I, II, III の英訳版を一ヶ月で読み切った。IV はまだ読んでない。人間の心の闇や欲望にまみれた物語だが、展開が速いので読むのが苦にならない。まさに page turner。ただし、オススメできる内容ではありませんので、絶対に読まないでください。

NHK 総合の「これでわかった！世界のいま」は世界情勢を知る上でお勧め。以前の「週間こどもニュース」の大人版。

- ④休日は学校にいるに決まっていますよ。
- ⑤世界の紛争地帯に行き、人間はなぜ殺し合うのかについて考える。パレスチナ、シリア、旧ユーゴスラビア、クリミア半島、グルジアか。戦場ジャーナリストが次の仕事。また、ベガスでマジック・ショーを開催する予定。
- ⑥異動してやっと三年目。もうそろそろ本校に慣れてもいいのだが、忙しいなあ。My future jobs の技量向上に余念がない。

谷 崎 重 人

---

- ①海外のニュース番組やドキュメンタリー番組の視聴。
- ②体を動かすことや読書。
- ③カズオ・イングロの作品。
- ④家族と遊ぶ、スポーツ、農作業。
- ⑤ラオス。
- ⑥1週間程度の家族旅行に行きたいなあ。

山 崎 泰 代

---

- ①車の中で Harry Potter のオーディオ版を聞いたり、家事をしながらラジオ講座を聴いています。
- ②趣味はなんちゃってガーデニング（草むしり）。
- ③NHK BS の「世界ふれあい街あるき」です。ナレーションだけで番組が進むので、自分が旅行しているような気になります。
- ④もっぱら家でのんびりしています。
- ⑤イギリスとタイ。住んでいたところに戻りたくなります。
- ⑥旅行に行きたい！！

山 本 千 佐 子

---

- ①英語の勉強仲間とネイティブの方のお宅でおしゃべりを楽しむこと。
- ②ショートテニス、ジョギング（学生時代にホノルルマラソン完走しました）。
- ③Anne of Green Gable、「インパラの朝」。
- ④ジョギング、録画した番組を見たりしています。
- ⑤ドイツ。
- ⑥新しい勤務先で、今は慣れることに精いっぱいですが、英語を学ぶ楽しさを忘れずにがんばりたいと思います。



## 武生工業高等学校 英語科

武生工業高校英語科スタッフは、赤星・瀧波・本好・武田（非常勤）とイケメンALTアントンの計5名です。生徒は大変素直で、授業はほのぼのとした雰囲気で行われています。

授業では、英語に対する苦手意識を持った生徒でも、楽しみながら基礎力を身につけられるような工夫を心がけています。1、2年次（コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ）では授業の始めに歌でWarm-up。誰でも年間で5曲、卒業までには10曲英語の歌を口ずさめるようになります。教科書で基礎力を定着させながら、各レッスンのトピックにあわせて場面を設定し、自己表現の機会を設けています。また、ペアワーク、グループワークを多く取り入れて、Team Teachingの時間に行われるインタビューやプレゼンテーションにつなげています。

本校の大きな特徴として挙げられるのが、検定への取り組みです。卒業までになるべく多くの生徒が検定を取得できるよう、英語科だけでなく、時には学年団とも協力して授業を行っています。

1年次では実用英語検定、2年次ではリスニング検定、工業英検という工業高校ならではの検定を全員で受検します。英語で工業用語を聞いたり、読み取ったり、単語を覚えたりすることはとても大変ですが、本校生徒は専門教科に関する検定に取り組むことに慣れているためか、学習への姿勢が大変前向きです。全員で取り組むことで「英語は苦手」な生徒でも無理なく目標に向かうことができています。先日実施されたリスニング検定でも多くの生徒が合格を手にし、「やればできる」と自信につながっています。

3年次の選択（英語表現Ⅰ）では教科書で基本的な表現を学びつつ、学科、学校行事（学校祭）、課題研究をテーマに学校生活を表現し、授業でプレゼンテーションを行う一方、その原稿を校内に掲示しています。

入学時には英語が苦手だった生徒たちが、卒業時に「英語は楽しい」と思えるように、そして社会人となってから自信を持って英語を使おうとしてくれるようになることを目指してがんばっています。



（後列左より） 本好、アントン  
（前列左より） 瀧波、赤星、武田

## 武生商業高等学校 英語科

One tall handsome ALT, two beautiful JTEs and two good-looking JTEs work together here at Tekefu Commercial High School. In two years, this school and Takefu Technical High School are supposed to become one school. Anyway, all the members enjoy English classes with nice and polite students every day.



向かって左側から、小松 ・ 馬場 ・ Will ・ 松田 ・ 山森

日々の課題として感じる。コミュニケーション英語の授業中の本文の読みとり活動がアクティブにならないこと。授業の最初に単語をチャンツで覚え、大西泰斗先生をお手本にワードオーダーの例文暗唱。会話練習して教科書へ。本文に合わせたスライドを作り、新出単語を学習。ここまでは、生徒はノリ良くやるのですが、本文のQ&Aに入ってくると、ぴたりと手が止まり自分の頭をフル活動させて、答えを探そうとしない。さあ、これをどう改善しよう？と日々勉強中です。

(馬場泰子)

「何言ってるかわからん!」「あ、なーんや、そういうことか!」と言葉でも表情でも正直な反応を返してくれる、素直で伸びやかな生徒たち。英語が得意でなくても授業や課題に一生懸命取り組む姿に元気をもらっています。

年齢はかなりのところまできましたが、今年でやっと10経年。がんばります。(小松めぐみ)

自動翻訳機の精度が完成段階にきているそうです。アプリを使えばほぼ完璧に翻訳できるようになってきています。特に海外旅行レベルの英会話なら、アプリさえあれば全く問題ありません。もちろん英語が話せればそれはそれで便利ではあるのでしょうか。そうなる和我々は何のために英語を勉強するのか。授業で生徒に何を身に付けさせていくのか。ますます考えていかなければならないと感じています。

(松田拓己)

授業で英語の音楽を使うことがあります。素敵フレーズを数個。"The past is in the past." (トトロジーが心地よいです) "You've got to lose to know how to win." (納得させられます) "Some dance to remember, some dance to forget" (たった11音節で) "I could stay awake just to hear you breathing" ('you'は恋人？妻？わが子？)

いい仲間と、『かみくだいたり』『つきはなしたり』の毎日です。

(山森義弘)

I think I have been very lucky to have been given the opportunity to teach English in Japan, I feel I have been even luckier to be placed at Takefu Commercial High School. Although English is not at the forefront of learning at this school I still find the students to be engaging and interested in speaking to me, often screaming "HELLO!" at me from the other end of the corridor and inviting me to join in with their club activities. Interacting with such interesting and energetic students makes working here a joy. Hopefully I can continue to teach the students here and I'm sure they will teach me new things along the way too.

(Moore, William)

## 南越特別支援学校 英語科

越前市の味真野地区にある南越特別支援学校です。今年、創立13年目の学校です。

知的障害、肢体不自由、病弱のお子さんを対象とした総合的な特別支援学校で、小学部、中学部、高等部合わせて100名余りの児童生徒が通っています。校訓は『元気に やさしく 輝いて』。プチ自慢は、小椋佳さん作詞作曲の美しい校歌です。

英語の授業は、中高の知的クラス、病弱クラスで行っています。毎週水曜日は、丹生高校で勤務をされている、ALTのダニエル・メイガン先生が訪問校としてやって来てくださいます。

みんなメイガン先生の授業を心待ちにしています。歌ありゲームあり、毎回楽しい役に立つ話題で、授業が終わってからも英語が飛び交うほど、楽しく学んでいます。またメイガン先生は、英語以外でも音楽や生活単元学習、各学校行事にも積極的に入って下さって、自然な形で子どもたちと交流されています。メイガン先生にこの学校の様子や良いところを、お伺いしてみました。



メイガン 今村

## What do you do with students at Nanetsu Special Needs School?

I teach basic English to junior high school students with songs and games. I attend various classes with elementary school students, and do such things as provide English songs for music time, help children do activities, and help clean up. My high school classes are only in the spring. I teach English at a slightly more advanced level from how I teach my junior high school students, and but my teaching methods and goals are very similar. In addition, I do special one-on-one classes with a few students who are interested in English. I also volunteer at school events.

## **What are the good points of Nanetsu Special Needs School?**

Without a doubt, the best point of Nanetsu is its very friendly and relaxed atmosphere. There are no chimes, high stakes tests, and super competitive club activities, so the students have very low levels of stress. In addition, students are much freer to pursue their own interests than in normal schools, so students are generally very happy. Another good point about this school is its sense of community. Though everyone has differences, everyone treats each other kindly and with mutual respect. Together, these points create a very safe and nurturing environment.

以上、南越特別支援学校でした。

# The Unbearable Ambiguity of Being

## ～カズオ・イシグロを読む～

福井県立大野高等学校 教諭 稲葉芳明

### はじめに

遠い異郷の地英国から、若き日々を過ごした長崎に思いを馳せる女性。己の信念と戦後の新しい価値観の狭間で揺れながら、次女の縁談に気を揉む老画家。時代とともに失われつつある古き佳き英国を回顧する老執事。演奏会に招聘され目的地に到着した直後から、悪夢のような状況に翻弄され続けるピアニスト。両親が謎の失踪を遂げた事件を、自ら解決すべく上海を再訪する名探偵。全寮制の学校で青春を過ごし、今は介護人として暮らす女性。人生の夕暮れに直面して、心揺らす人々たち。アーサー王亡きあとのブリテン島で、失われた記憶を取り戻すべく出立する老夫婦。

カズオ・イシグロが今までに発表した7つの長編と1つの短編集を概観すると、題材がこの上もなく多様であることにまず気づかされる。また手法的にも、リアリズム的回顧録、カフカの不条理、探偵譚、SF的ディストピア、音楽と夕暮れをめぐる短編群、古代ファンタジーとこれまた多彩であり、とりわけ *The Remains of the Day* 以降毎回スタイルを変えてくるカメレオンの千変万化ぶりには、多くの人が驚いたり戸惑ったりしてきた。筆者もそういう一人であったが、*The Buried Giant* 刊行を契機に再度イシグロ作品を丹念に読み返してみたところ、彼がデビュー作から現在に至るまで向き合ってきた主題は人間の存在と記憶の曖昧さであり、愚直なまでに一貫して同一主題を繰り返し変奏してきたと云う事実、に、遅まきながらようやく気付いた。

この「存在の耐えられない曖昧さ」をキーワードとして、イシグロ作品を丹念に読み直して分析を試みたものが本稿である。表層的プロットの深奥に光を当て、刊行時・刊行後に発表された review や criticism を参照しながら、点と点を繋げるように個々の作品を読み解いていくと、一体どんな作家像が浮かび上がってくるか——イシグロ・ワールドに分け入る巡礼の旅を、今から始めてみたい。

なお、本稿の執筆および引用にあたっては、*The Buried Giant* 以外は全て Faber and Faber のペーパーバック版を定本とし、作品からの引用箇所には頁を付記した（*The Buried Giant* のみ Knopf 版ハードカバー）。それ以外の引用については、本稿最後に Notes としてまとめて記載してある。

Memory, I realize, can be an unreliable thing; often it is heavily coloured by the circumstances in which one remembers, and no doubt this applies to certain of the recollections I have gathered here.<sup>1</sup>

——Etsuko, in *A Pale View of Hills*

## 1 石黒一雄から Kazuo Ishiguro へ (1954-)

Kazuo Ishiguro は、1954 年 11 月 8 日、石黒鎮雄・静子の長男石黒一雄として長崎市新中川町に生まれた。生後間もなく、海洋学者である父が英国国立海洋研究所主任研究員として英国に招かれ、6 歳の誕生日を迎える前の 1960 年 4 月には、両親や姉とともにサリー州ギルドフォードに一家転住する。当初は 1 年間の滞在予定であったが、現在までずっと英国暮らしを続けている。

1966 年にウォーキング・カウンティ・グラマースクールに入学し、1973 年に卒業。卒業後のギャップ・イヤー中に、北米やヨーロッパをヒッチハイクで放浪する。一時はシンガー・ソングライターを志すものの挫折し、1974 年から 1978 年にかけてカンタベリーのケント大学で文学と哲学を学ぶ。大学卒業後は、グラスゴウとロンドンでホームレス支援の仕事に就き、この時に現在の妻ローナ（スコットランド人 Lorna Anne MacDougall）と出会っている。1979 年、25 歳にして作家を目指すことを決意し、1980 年にノーフォーク州イースト・アングリア大学大学院修士課程に入って、批評家・作家のマルカム・ブラッドベリやアンジェラ・カーターの指導の下、創作活動を始める。

1982 年、長編第 1 作 *A Pale View of Hills* を Faber and Faber 社から発表。イシグロ 28 歳の時であり、彼はこの年イギリスに帰化している。この時期のことを、イシグロは後にこう語っている：‘I’m certainly aware that at least part of the reason for my success has to do with the unusual nature of my profile. When I published my first novel, in 1982, that was exactly the time when people in the literary world were looking for a different kind of young writer. Salman Rushdie had just broken through as the Booker Prize winner. People had started to read writers like Kundera and Marquez. Everyone was hungry for young writers who had an international flavor about their writing – and, if possible, about their person.’<sup>1</sup>

これ以降の作品歴は、以下に示す通りである。

*An Artist of the Floating World*. London: Faber and Faber, 1986.

*The Remains of the Day*. London: Faber and Faber, 1989.

*The Unconsoled*. London: Faber and Faber, 1995.

*When We Were Orphans*. London: Faber and Faber, 2000.

*Never Let Me Go*. London: Faber and Faber, 2005.

*Nocturnes Five Stories of Music and Nightfall*. London: Faber and Faber, 2009.

*The Buried Giant*. London: Faber and Faber, 2015.

30 数年余の作家経歴で長編 7 作と短編集 1 作しか発表していないというのは、かなり寡作の部類に入ると言えるが、それだけ個々の作品を時間をかけてじっくり熟成し、納得のいくまで何度でも推敲して完成させているようである。

## 2 Memory, an Unreliable Thing (1982- )

### 2.1 Nagasaki Mon Amour: *A Pale View of Hills* (1982)

エツコは夫ジローと別れ、まだ幼い娘ケイコを連れて渡英する。ケイコは英国での暮らしに馴染めず、アパートで独り暮らしを始めるものの引きこもり状態となり、遂には縊死を遂げてしまう。娘の自死で自分を強く苛むエツコは、ロンドンから訪ねてきた次女ニキに慰められながら、長崎での暮らしや、そこで知り合ったサチコ・マリコ母娘のことを回想する――。

“処女作にはその作家の全てがある”とよく指摘されるように、*A Pale View of Hills* を今読み返してみると、後のイングロ作品の特徴となる主要素の殆どが萌芽していることに気づく。

まず、narrative 内の精緻な時間処理。エツコの一人称一視点で語られる回想（物語）は、過去の中に過去が幾層にも重なり合い、リニアではなくスパイラルに進行して行く。また、語られている場面の多くは薄暮に包まれたように、現実と記憶の境界線が朧げになっている。

次に、記憶の曖昧さ。冒頭第1章だけとってみても、“I am not sure now how it was we first met.” (13)、“As far as I remember, that was the first occasion I spoke to Mariko.” (16)、“As far as I remember, that was all that took place between us that morning.” (17) と、自分の記憶の信憑性について繰り返し言及し、第2部第9章では主観によって変わり易い記憶の不定形さについてエツコにこう語らせている：

Memory, I realize, can be an unreliable thing; often it is heavily coloured by the circumstances in which one remembers, and no doubt this applies to certain of the recollections I have gathered here. For instance, I find it tempting to persuade myself it was a premonition I experienced that afternoon, that the unpleasant image which entered my thoughts that day was something altogether different – something much more intense and vivid – than the numerous day-dreams which drift through one’s imagination during such long and empty hours. (156)

三つめは、異なる価値観・観念の相克と衝突。此处では戦争に加担した教育（者）の責任を巡り、エツコの義父オガタさん（大過去）と戦後民主主義教育を推進するマツダ（過去）の対立が在る。戦争責任批判は、次作 *An Artist of the Floating World* では重要モチーフとして一層激しく直截的に扱われることになるが、イングロは完全な戦後世代であるにも関わらず、価値の転換期に遭遇した人間が「過去」とどう向き合いどう清算すればよいか逡巡する時代背景として太平洋戦争を取り上げている点が、大変興味深い。

イングロは Krider とのインタビューで、作家が歴史や史実を正確に書くことを求められている点については ‘I’m not sure that I ever distorted anything major, but my first priority was not to portray history accurately. Japan and militarism, now these are big, important questions, and it always made me uneasy that my books were being used as a sort of historical text.’<sup>1</sup> と答え、また Mason とのインタビューでは、‘I’m probably more influenced by Japanese movies. I see a lot of Japanese films. The visual images of Japan have a

great poignancy for me, particularly in domestic films like those of Ozu and Naruse, set in the postwar ear, the Japan I actually remember'.<sup>2</sup> と述べている。日本での記憶（実体験）が生まれてから渡英するまでの僅か5年間であることを鑑みると、本書で描かれた「ナガサキ」は、幼少時の靡げな長崎の記憶と、小津安二郎や成瀬巳喜男の映画から得たヴァーチャル追体験、そして文学的想像力を混交して造型したものであったろうと推察される。

作品を一読すると、エツコが暮らしていた頃の長崎をリアリズムで描き、そこにオガタさんとマツダに象徴させた二つの日本——旧価値観が支配する太平洋戦争以前の日本（大過去）と、戦後の民主主義日本（過去）——を対比させた小説のように思われる。しかし Shaffer が、'[T]he focus of Ishiguro's first novel is more on individual psychology – specifically, on the way in which people use other people's stories to conceal yet, paradoxically, to reveal their own – than it is on national history and the role individuals play in public affairs'<sup>3</sup>と主張するように、本作の主眼は、今英国に暮らすエツコの物語が、エツコの追想に挿入されるサチコ・マリコ母娘のエピソードと時空を超えて次第に重なり合い、曖昧かつ韜晦的なエツコの記憶の中から〈真実〉が垣間見えてくるプロセスを描くことにある。

日本を去ってから長い間長崎の記憶を封印していたエツコは、自宅近くで女の子がブランコに乗っているのを見かけたことを契機にして、過去を追想し始める。しかし、前夫ジローとの離婚理由や英国人との再婚の経緯には一切触れず、その代替のように、サチコとマリコについてのみこと細かく語る。そのうち読者には、エツコの真意——サチコ母娘の物語を語るのは、ケイコの自殺について自ら再検証するのが目的であること——が、少しずつ見えてくる。それを端的に示す例として、サチコとマリコが口論してマリコが突発的に家を飛び出し、私（エツコ）もマリコを探しに行こうかとサチコに言う場面をみってみる：

“Should we go and look for her now?” I said.

“No,” Sachiko said, still looking out. “She’ll be back soon. Let her stay out if that’s what she wants.”

I feel only regret now for those attitudes I displayed towards Keiko. In this country, after all, it is not unexpected that a young woman of that age should wish to leave home. All I succeeded in doing, it would seem, was to ensure that when she finally left – now almost six years ago – she did so severing all her ties with me. But then I never imagined she could so quickly vanish beyond my reach. (87-88)

“Let her stay out if that’s what she wants.” と “I feel only regret now for those attitudes I displayed towards Keiko.” の間には一行分の空白が挿入されているが、この「空白」の中にナガサキからロンドンへの空間移動があり、十数年分の時間の推移が内包されている。ヴァージニア・ウルフをその典型とする ‘stream of consciousness’、あるいは丸谷オ一『笹まくら』イシグロ版と捉えることも出来るだろうが、この「空白」(reticence)の意味と意義こそ本作品の精髓であると、筆者は考えるものである。この点については、Wong も以下のように分析している：‘Ishiguro’s deceptively simple manner of presenting Etsuko’s retrospective narrative is complicated by the determination to let silence itself speak. In turning toward the dreaded past, Etsuko conveys a tale that is the disclosure not of a tangible secret, but of a private shame associated with the memories now on the verge of becoming public.’<sup>4</sup>



エツコとケイコ、サチコとマリコの二組の母娘は、エツコの回想が進むにつれてどんどん同心円的に重なっていき、物語の終盤に一つの象徴的な場面が出てくる。サチコが愛人フランクとアメリカに行くと言ったので、以前からフランクを嫌っていたマリコは家を飛び出してしまう。エツコはその後を追いかけて、マリコをこう教え諭す：

“You mustn’t speak like that,” I said, more calmly. “He’s very fond of you, and he’ll be just like a new father. Everything will turn out well, I promise.”

The child said nothing. I sighed again.

“In any case,” I went on, “if you don’t like it over there, we can always come back.”

This time she looked up at me questioningly.

“Yes, I promise,” I said. “If you don’t like it over there, we’ll come straight back. But we have to try it and see if we like it there. I’m sure we will.” (172-173)

“if you don’t like it over there, we can always come back.”以降、本来は‘you’と言い表すべきところをエツコが‘we’と言い間違えている——しかも5度も——のは、マリコと交わしている回想中の会話の中に、ジローと別れてケイコを英国に連れてきた時の体験が混入しているからである。つまりナガサキでの〈記憶〉にケイコの縊死という〈事実〉が介入し、エツコは〈記憶〉を書き換えることでケイコへの贖罪を果たそうとしていることを象徴しているのである。イシグロはこの場面にについて Mason とのインタビューで、次のように述べている：‘[T]he meanings that Etsuko imputes to the life of Sachiko are obviously the meanings that are relevant to her (Etsuko’s) own life. Whatever the facts were about what happened to Sachiko and her daughter, they are of interest to Etsuko now because she can use them to talk about herself. So you have this highly Etsuko-ed version of this other person’s story; and at the most intense point, I wanted to suggest that Etsuko had dropped this cover. It just slips out: she’s now talking about herself. She’s no longer bothering to put it in the third person.’<sup>5</sup>

しばしば挿入される現実とも幻想ともつかない眩惑的場面が十分に機能していなかったり、オガタさんの物語がメイン・プロットに上手く繋がってこない点に不満を覚えつつも、筆者は以下に紹介する Milton の評に賛同し納得している。

A delicate, ironic, elliptical novel, *A Pale View of Hills* means much more than it says....The two women mirror each other’s ambivalence about having abandoned the accepted modes for Japanese wives and widows. The images of kittens being drowned, a rope twisted around Etsuko’s sandal, a girl dangling from a swing, the reappearing phantom of a long-dead woman who has killed her baby and the haunting absence of the lives and customs blown away by the war reverberate and multiply, suggesting by repetition a scale much larger than that implied by any individual image.<sup>6</sup>

## 2.2 Late Autumn: *An Artist of the Floating World* (1986)

戦時中、日本精神を鼓舞する画風で名を成したオノ・マスジ。かつては多くの弟子に囲まれ、尊敬を集める地位を謳歌していたが、戦後は戦中の国威発揚的活動が糾弾の対象となり、現在は隠居生活を送っている。次女ノリコの縁談が進まないのも戦中の活動が影響しているらしく、オノは過去の栄光と現在の没落との狭間で当惑の日々を過ごす――。

物語の一番外枠にあるのは、次女ノリコの縁談話に気をもむマスジと長女セツコの物語。骨格だけ取り出すと――長女の名前をセツコにしたことも含め――正に小津映画そのものだが、この枠内に過去や大過去が何層にも織り込まれ、前作 *A Pale View of Hills* とよく似た構造で展開していく。ただ、主人公が一人称一視点で語っていく点は同じだが、*A Pale View of Hills* に影を落としていた幻想眩惑的要素は皆無であり、記憶の曖昧さは、主人公のアイデンティティの揺らぎを反映する形で懐疑的に提示されている。

物語の核は、絵画制作に情熱を燃やす主人公が正しいと信じてきた方向と戦後の民主主義的価値観が衝突し、オノがそれにどう折り合いをつけていくかにある。例えば物語前半、次女が以前交際していたミヤケにオノが偶然出くわした時、ミヤケは会社の社長が戦争中の責任をとって自死したことに言及し、責任逃れをしている人間をこう痛罵する：“[T]hese are the men who led the country astray, sir. Surely, it's only right they should acknowledge their responsibility. It's a cowardice that these men refuse to admit to their mistakes. And when those mistakes were made on behalf of the whole country, why then it must be the greatest cowardice of all.” (56)。オノが戦時中にどんな芸術・政治スタンスをとっていたのかは最初は詳らかにされないが、周囲の発言や彼自身の回顧によって次第に明らかになってくるので、ミヤケの言葉は予兆的な響きを内包していたことが分かる。

一方、ノリコは別の青年と新たに縁談が進む。両家の見合いの席で、戦時中の過ちに対してオノは自ら言及し、先方の父親（サイトウ博士）から芸術活動に不満を抱いていたのですかと問われてこう答える：“My paintings. My teachings. As you see, Dr Saito, I admit this quite readily. All I can say is that at the time I acted in good faith. I believed in all sincerity I was achieving good for my fellow countrymen. But as you see, I am not now afraid to admit I was mistaken.” (123-124)。どうやらオノは、伝統的日本美を基調とする師匠モリヤマ・セイジの画風・芸術観に飽き足らなくなってプロパガンダ的作風に転向したようであり、その方向転換が明らかになるのがモリヤマに向ってこう宣言する場面である：

“I have learnt many things over these past years. I have learnt much in contemplating the world of pleasure, and recognizing its fragile beauty. But I now feel it is time for me to progress to other things. Sensei, it is my belief that in such troubled times as these, artists must learn to value something more tangible than those pleasurable things that disappear with the morning light. It is not necessary that artists always occupy a decadent and enclosed world. My conscience, Sensei, tells me I cannot remain forever an artist of the floating world.” (179-180)

オノが言う ‘an artist of the floating world’ とは、社会的理念や使命感から乖離した一種享樂的唯美主義を批判した言葉と受け取れる。しかし、後にオノが時流に合わせて芸術的姿勢を変えた——変節迎合した——事実を鑑みると、オノが師匠に対して吐いた批判的言辞はそのままオノにはね返っていくものではないか、と読み手は思わずにいられない。

旧世代の価値観が敗戦後に批判の対象となるのは、*A Pale View of Hills* で主人公の義父を巡るエピソードにもみられたが、此处では一層生々しく描かれている。では本作の主題が社会批判なのかというとその見方には賛同しかねるし、主人公が「浮世の画家」から離脱して芸術理念・芸術論を開陳する物語なのかというと、そうでもない。主人公が自分の軌跡を回顧しながら時には反省し、時には再肯定し、今だに迷っている在り様をそのまま見せる——客観的評価や解釈はあくまで間接的・暗示的に提示するのにとどめる——ことで、〈真実〉の発見は読者に委ねようというのがイシグロの意図だと、筆者には思われる。

物語終盤、古くからのオノの友人で今は体を悪くして屋敷に逼塞しているマツダに会いに行くと、マツダはオノにこう語る——“Army officers, politicians, businessmen,” Matsuda said. “They’ve all been blamed for what happened to this country. But as for the likes of us, Ono, our contribution was always marginal. No one cares now what the likes of you and me once did. They look at us and see only two old men with their sticks.” He smiled at me, then went on feeding the fish. “We’re the only ones who care now. The likes of you and me, Ono, when we look back over our lives and see they were flawed, we’re the only ones who care now.” (201)

人間の矜持やアイデンティティと自己呵責が相克する様を、小津的ホームドラマの枠組の中で芸術論を絡めながら展開した小説——表層(プロット)を辿ればこのように要約することが出来るが、この奥に潜むものをもう少し掘り下げて考えてみたい。

*A Pale View of Hills* でも感じられたことだが、イシグロの文体・筆致は古風で穏やかな品の良さを湛えている。柴田元幸氏は、「英語を母語としない作家というのはたいてい素朴な英語を使うか、あるいは逆にナボコフやコンラッドのようになぜかものすごく凝った文体で書くかの両極端なのに、カズオ・イシグロはそのどちらでもない。ほとんど不器用とも思える“律儀な”文章という感じがしました」<sup>1</sup>と述べており、イシグロ自身も Mason とのインタビューで以下のように語っている：‘[Ono] is supposed to be narrating in Japanese; it’s just that the reader is getting it in English. In a way the language has to be almost like a pseudotranslation, which means that I can’t be too fluent and I can’t use too many Western colloquialisms. It has to be almost like subtitles, to suggest that behind the English language there’s a foreign language going on. I’m quite conscious of actually figuring these things out when I’m writing, using a certain kind of translationese. Sometimes my ear will say: ‘That doesn’t quite ring true, that kind of language. Fine if this were just English people, but not here.’<sup>2</sup>

本作は舞台が日本であり時代的にも戦中戦後を扱っているので、*A Pale View of Hills* と相通ずる点が多々見られるのだが、実は *A Pale View of Hills* 以上に次作 *The Remains of the Day* との強い類似性が見出される。主題、主人公の造形、物語構成、文体等々、本作は *The Remains of the Day* への助走

でありプロトタイプであると思ふことも可能であろう。この点については、Scanlan がオノと *The Remains of the Day* の主人公 Stevens を対比してイシグロの narrative を分析した論考が示唆に富んでいる：「[Ishiguro's] narrators, both old men looking back from the postwar period to their involvement with fascism in the 1930s, in some ways resemble the unreliable narrators of older fiction. But Ishiguro uses them to explore the extent to which identity is socially constructed, and the consequent instability of selves formed in a traditional culture when that culture dies. Identity in these novels is not an essence but instead depends on a social context that has changed so radically as to leave characters floating in an unfamiliar world. Through his first-person narrators, Ishiguro dramatizes the connections between public history and an 'I' dependent for definition on its circumstances, suggesting that the unconfident and marginalized self of the posthumanist world view is drawn to find authority in totalitarian politics.<sup>3</sup>

オノは戦時中に国家主義的理念に加担し、愛弟子だったクロダを密告するなど倫理的に許し難い行動をとったわけだが、その一方で自分の影響力を過大評価している。この過去への強い罪悪感と誇大妄想気味の自己過信は、*A Pale View of Hills* のエツコの「語り」「記憶」とはまた違った意味で、語り手の認識の相対性・信憑性に関するイシグロからの問いかけである。ただ、*A Pale View of Hills* と決定的に異なっているのは、前者がエツコの内奥的苦悩に収斂していったのに対し、*An Artist of the Floating World* では、オノの外部世界から有無を言わさぬ「証拠」が突き付けられることである。物語の大詰め、オノに対して長女セツコがこう言い放つ：

“I am not too proud to see that I too was a man of some influence, who used that influence towards a disastrous end.”

My daughter seemed to consider this for a moment. Then she said:

“Forgive me, but it is perhaps important to see things in a proper perspective. Father painted some splendid pictures, and was no doubt most influential amongst other such painters. But Father's work had hardly to do with these larger matters of which we are speaking. Father was simply a painter. He must stop believing he has done some great wrong.” (192-193)

オノが誇りとし自分のアイデンティティの証明としてきた「影響力」など、実は内部が空洞化した張子の虎に過ぎなかった事実を、セツコの言葉は残酷なまでに露呈している。オノがかつて師匠モリヤマに向って吐いた ‘an artist of the floating world’ という言葉は、セツコの口から “Father was simply a painter.” という形でオノに戻ってきた。有為転変の無常観を感じさせる、鮮やかで残酷な場面である。

### 2.3 Pride and Preoccupation: *The Remains of the Day* (1989)

“品格ある執事の道を追求し続けてきたスティーヴンスは、短い旅に出た。美しい田園風景の道すがら様々な思い出がよぎる。長年仕えたダーリントン卿への敬慕、執事の鑑だった亡父、女中頭への淡い想い、二つの大戦の間に邸内で催された重要な外交会議の数々。過ぎ去りし思い出は、輝きを増して胸のなかで生き続ける。失われつつある伝統的な英国を描いて世界中で大きな感動を呼んだ、英国最高の文学賞ブッカー賞受賞作”——というのが本書の最大公約数的紹介であろう。

勿論、この紹介文が述べていることは嘘偽りではない。しかし、*A Pale View of Hills*、*An Artist of the Floating World* とイシグロ作品に接してきた読み手としては、それはあくまで小説の一番外枠に位置付けられたもの（表層的プロット）に過ぎないことを重々承知しており、その内側・深層に組み込まれている／イシグロが仕掛けているものの正体を解明することが、「カズオ・イシグロを読む」知的作業に他ならない。

物語は終始、執事スティーヴンスの一人称一視点で進んでいく。1956年7月の6日間、彼が現在の主人（米国資産家のファラディ氏）の車を借りてコーンウォールを目指す道中、これまでの体験が入れ子構造的に次々と回顧されていくが、旅行中の見聞は寧ろ狂言回し的存在に過ぎず、過去の出来事が微細に追想再現される為の契機となっている。その追想の中で中心となるのは、嘗てダーリントン・ホールで仕えていた——ホールの元来の所有者であった——政界の名士ダーリントン卿と、そこで女中頭を務めていたミス・ケントンの二人である。

追想についてはほぼ時系列に沿って展開し、前半は執事としての気概や誇りが中心的に言及される。旅行一日目（DAY ONE – EVENING *Salisbury*）、眼前に広がる英国の田園風景についてスティーヴンスは、“It is, I believe, a quality that will mark out the English landscape to any objective observer as the most deeply satisfying in the world, and this quality is probably best summed up by the term ‘greatness’. For it is true, when I stood on that high ledge this morning and viewed the land before me, I distinctly felt that rare, yet unmistakable feeling – the feeling that one is in the presence of greatness” (28-29) と讃え、この「偉大さ」を生み出す背景的要因については、“[W]hat precisely is this ‘greatness’? Just where, or in what, does it lie? I am quite aware it would take a far wiser head than mine to answer such a question, but if I were forced to hazard a guess, I would say that it is the very *lack* of obvious drama or spectacle that sets the beauty of our land apart. What is pertinent is the calmness of that beauty, its sense of restraint.” (29) と分析する。さらに、この分析対象を執事の仕事に向けて偉大な執事とはどんな存在かを事細かに述べていき、この章の最後で、自らの地位に相応しい「品格」が必要不可欠なのだ結論付ける：

[L]et me now posit this: ‘dignity’ has to do crucially with a butler’s ability not to abandon the professional being he inhabits. ...The great butlers are great by virtue of their ability to inhabit their professional role and inhabit it to the utmost. ...It is sometimes said that butlers only truly exist in England. Other countries, whatever title is actually used, have only manservants. I tend to believe this is true. Continentals are unable to be butlers because they are as a breed incapable of the emotional restraint which only the English race is capable of. ...We English have an important advantage over foreigners in this respect and it is for this

reason that when you think of a great butler, he is bound, almost by definition, to be an Englishman.  
(43-44)

英国の風景には外国の風景には持ちえない「品格」があり、そしてこの品格は、執事のあるべき姿にも必要不可欠なものである。執事には感情の抑制が求められ、大陸の人々にはその抑制が叶わないが故に、偉大な執事足るには英国人が絶対的優位に立っている――。

一步間違えば我田引水が過ぎて鼻もちならぬ snobbery に陥るところだが、息の長い――回りくどいというか、言明を避ける慎重な――言い回しで語られるが故に、ステイーヴンスの言説がそれほど独善的に響かないのが、イシグロの筆致の巧みさである。この語り口は、謂わば名優や作家の口跡を彷彿させ――文学作品では、タイプは全く異なるが筆者は太宰治『駆け込み訴え』を想起する――淡々と語られながらも、豊かな音楽的響きすら感じさせる見事なものである。文体の素晴らしさについては、例えば Bryson が ‘What the reader gets is a quiet, spare narrative, often full of melancholy and irony, disarmingly unflashy in its presentation and yet clearly constructed with immense care.’<sup>1</sup> と、Kamine が ‘Slowly and carefully he (=Ishiguro) lays bare the butler’s inner thoughts, intertwining past and present, truth and evasion, seeming at times to meander yet inevitably closing in on the series of admissions at the novel’s heart.’<sup>2</sup> と称賛している通りである。

ダーリントン卿は第二次大戦前夜から戦後にかけて政治的に重大な失敗を犯しており、物語が進むにつれてそれがおいおい明らかになってくる。ステイーヴンスもその事実は認めているものの、それでもなお卿の高潔な人柄や高貴さを賛美して止まない。卿への崇拜は嘗ての大英帝国の栄光への肯定と讃嘆に重なって見えてくるのだが、英国人は元より、少なからぬ読者がこのノスタルジックな回顧にほだされ、酔わされるに違いない。そのダーリントン卿のもとで、ステイーヴンスは執事として二つの大きな仕事を遂行した。

一つは、1923 年 3 月、ヴェルサイユ条約による対独制裁の緩和を提唱する非公式の国際会議開催である (DAY TWO - MORNING *Salisbury*)。会議最終日にアメリカのルイス氏が、今日の国際問題は到底アマチュア紳士の手には負えるものではなくなっていると、会そのものの存在意義を批判するような発言をすると、それを受けて卿はこう反論する: “Let me say this. What you describe as “amateurism”, sir, is what I think most of us here still prefer to call “honour”. . . . I believe I have a good idea of what you mean by “professionalism”. It appears to mean getting one’s way by cheating and manipulating. It means ordering one’s priorities according to greed and advantage rather than the desire to see goodness and justice prevail in the world. If that is the “professionalism” you refer to, sir, I don’t much care for it and have no wish to acquire it.” (107)。芥川龍之介に倣って言えば、「英国的な、余りに英国的な」卿の思想であり、その卿に奉職することを誇りとするステイーヴンスは、執事の仕事をこう定義する:

Let us establish this quite clearly: a butler’s duty is to provide good service. It is not to meddle in the great affairs of the nation. The fact is, such great affairs will always be beyond the understanding of those such as you and me, and those of us who wish to make our mark must realize that we best do so by concentrating on what *is* within our realm; that is to say, by devoting our attention to providing the best

possible service to those great gentlemen in whose hands the destiny of civilization truly lies. (209)

そして、優れた執事足るには「忠誠心」が不可欠の特質であると唱え、“‘This employer embodies all that I find noble and admirable. I will hereafter devote myself to serving him.’ This is loyalty *intelligently* bestowed....[O]ur best course will always be to put our trust in an employer we judge to be wise and honourable, and to devote our energies to the task of serving him to the best of our ability.” (210-211) と独白する。

もう一つの大きな仕事は、第二次世界大戦前夜の 1936 年、駐英独逸大使と英国首相を迎えて行われた極秘会議開催である。これを聞きつけたカーディナル——彼の父はダーリントン卿の旧友で、彼自身は今は新聞記者——が、卿はドイツ人にいいように利用されているだけだとスティーヴンスを諭す。そして、1923 年の会議におけるルイスの姿勢に言及して、カーディナルはこう語る：“I remember coming here years ago, and there was this American chap here. We were having a big conference, my father was involved in organizing it. I remember this American chap, even drunker than I am now, he got up at the dinner table in front of the whole company. And he pointed at his lordship and called him an amateur. Called him a bungling amateur and said he was out of his depth. Well, I have to say, Stevens, that American chap was quite right. It’s a fact of life. Today’s world is too foul a place for fine and noble instincts. You’ve seen it yourself, haven’t you, Stevens? The way they’ve manipulated something fine and noble. You’ve seen it yourself, haven’t you?” (234)

スティーヴンスが忠誠心の全てを注ぎ込み英国的偉大さと品格の権化と信じているダーリントン卿が、単なる ‘an amateur’ に過ぎなかったと全否定されてしまうのは、スティーヴンスにとっては自分の人格をも否定され、それまで堅持してきたアイデンティティが崩壊するに等しい衝撃であったに違いない。スティーヴンスを、すでに過去のものとなってしまった価値観にいつまでも拘泥し、それなしでは人生の意義を見失ってしまう人間と捉えるなら、*An Artist of the Floating World* のオノと大同小異の主人公と見做すことが出来るだろう。しかし、スケールの大きさや誇り高き矜持の点で遥かに風格があり浪漫性が強く、これが、オノに比べて読み手がより強く共感を抱き易い要因となっている。

ただ、強い自己防衛の本能から事実を歪曲し、隠蔽し、曖昧にぼやかす「信頼できない語り手 unreliable narrator」という点では、*A Pale View of Hills* のエツコや *An Artist of the Floating World* のオノと五十歩百歩である。例えば Wall は、‘Let me be perfectly clear’, ‘I should say’, ‘I should point out’, ‘Let me make it immediately clear’, ‘I feel I should explain’ といった言葉を多用することの真意を、以下のように指摘している：‘The connection between such phrases and Stevens’s unreliability is evident: Stevens is defending against questions that he thinks the narratee might ask, questions that hint at anxieties that he has not expressed and has possibly repressed.’<sup>3</sup> また、本書を歴史的文脈で捉える Lang は、スティーヴンスは紛れもなく ‘unreliable narrator’ であり、ダーリントン・ホールで行われた非公式政治会合の実像を次のように分析している： “[O]ne sketched by Stevens in his narration, and one laid out for the public record in the form of postwar perceptions of Darlington’s role in the war. As readers of the novel, we receive a less full version of the public record, and that only through Stevens’s reaction to it, but we see enough to understand

how vastly differently the two sets of historical accounts – Stevens’s version and postwar accounts of Darlington’s role – really are.<sup>4</sup>

では、このようなスティーヴンスの語りから何が伺えるかと言うと、それは彼の葛藤と逡巡である。スティーヴンスが唱える「品格」(dignity)とは執事としての職業倫理であるわけだが、彼は「品格」を英国らしさ、言い換えれば英国人——但し特権階級の人々——の特権的属性と解釈している。とすれば、彼の旅行とは即ち「品格」「偉大さ」を問い直す過程であり、道中目にする美しい風景の静謐さを偉大だと賛美し、そこに寡黙かつ滅私奉公的に使える執事の偉大さを重ね合わせている。‘DAY ONE’の中でスティーヴンスが語る言葉をもう一度引用する：

‘[D]ignity’ has to do crucially with a butler’s ability not to abandon the professional being he inhabits. ... The great butlers are great by virtue of their ability to inhabit their professional role and inhabit it to the utmost. ... It is sometimes said that butlers only truly exist in England. ... We English have an important advantage over foreigners in this respect and it is for this reason that when you think of a great butler, he is bound, almost definition, to be an Englishman. (43-44)

嘗ての主ダーリントン卿を誇り、卿に使える執事と云う職業を誇り、ひいては英国的なるものを誇るスティーヴンスの語りの奥に垣間見えるもの——イシグロが意図しているもの——を、Graverはこう指摘する：‘Mr. Ishiguro’s command of Stevens’ corseted idiom is masterly, and nowhere more tellingly so than in the way he controls the progressive revelation of unintended ironic meaning. Undemeath what Stevens says, something else is being said, and the something else eventually turns out to be a moving series of chilly revelations of the butler’s buried life – and, by implication, a powerful critique of the social machine in which he is a cog.’<sup>5</sup>。またO’Brienは、postcolonial politicsの観点から、以下のように自説を展開する：‘One significant strand of the myth which Ishiguro attempts to subvert is the notion of benevolent paternalism which was invoked to legitimate the deployment of power by the British ruling class, both at home and abroad. The coercive terms of this myth are exposed ironically through the narration of Stevens, whose failure to find personal fulfillment is directly proportional to his commitment to the ideal of the faithful servant. ... [D]ignity, like the Empire it served, is predicated on surrendering the dictates of individual conscience and “natural” human feeling to the authority of a rigidly (if arbitrarily) stratified social hierarchy.’<sup>6</sup>

他方、スティーヴンスと女中頭ミス・ケントンとの恋の顛末はどう描かれているだろうか。

そもそも、何故彼が主人の車を借りて旅をすることになったかと言うと、それはミス・ケントンからの手紙を読み、彼女が不幸な家庭生活を送っていて密かにダーリントン・ホールに戻ってきたがっていると推察（一人合点）し、彼女に会って職場復帰を促すためだった——というのは、スティーヴンスが自分に必死に言い聞かせている自己弁明であり、私的感情を一切吐露してはならない執事というペルソナの下に密かに隠し続けてきた彼女への思慕が、ダーリントン卿亡き今、遂に可視化されたとと言えるかもしれない。道中、ダーリントン卿を巡るエピソードと並行して、屋敷を切り盛りする際のケントン嬢に関わる様々なエピソードが思い起こされていくわけだが、自分を恋い



慕っていたケントンの本心に気づけなかった——あるいは、気づかない振りをしていた——野暮天ぶりを懸命に取り繕おうとするうろたえ振りが、ある意味みっともなく人間臭くて微笑ましい。

先に触れた 1936 年の会議の楽屋裏では、実はスティーブンスとケントンの「関係」が重大な局面を迎えていた。会議の夜、ケントンはスティーブンスに前々から知らせておいたように外出の予定があったのだが、帰ってきて実は結婚の申し込みを受けたと告白する。ところが会議のことが気になって気もそぞろのスティーブンスの態度に、ケントンは心底腹を立ててしまう。暫くのち、客の応対におおわらわのスティーブンスがケントンの部屋の近くを通りかかった時、ドアの周辺から明かりが漏れていることに気づいて立ち止まる：

As I approached Miss Kenton's door, I saw from the light seeping around its edges that she was still within. And that was the moment, I am now sure, that has remained so persistently lodged in my memory – that moment as I paused in the dimness of the corridor, the tray in my hands, an ever-growing conviction mounting within me that just a few yards away, on the other side of that door, Miss Kenton was at that moment crying. As I recall, there was no real evidence to account for this conviction – I had certainly not heard any sounds of crying – and yet I remember being quite certain that were I to knock and enter, I would discover her in tears. (237)

通常なら、旅の最後にスティーブンスがケントンと再会する場面が当然クライマックスとなるのだが、何とイングリブはその場面を全てカットしている。章は、‘DAY FOUR – AFTERNOON *Little Compton, Cornwall*’ から‘DAY SIX – EVENING *Weymouth*’ へと 2 日間時間がとび、実際に会った場面や遣り取りは、6 日目の夜にスティーブンスが追想するという形で描かれる構成は、ある意味大胆である。しかし、*A Pale View of Hills* でエツコが自分の離婚や渡英する理由を全く語らなかったように、物語の根幹に関わる出来事をテキストの外部に位置付けるというのは、イングリブらしいアプローチと言えよう。

何度か家出をされたことがあるとお聞きしていますが、貴女の生活は本当は幸福とは言えないのではないですか、とスティーブンスに問われたケントンはこう答える：

“[O]ne day I realized I loved my husband. You spend so much time with someone, you find you get used to him. He's a kind, steady man, and yes, Stevens, I've grown to love him.”

Miss Kenton fell silent again for a moment. Then she went on:

“But that doesn't mean to say, of course, there aren't occasions now and then – extremely desolate occasions – when you think to yourself: “What a terrible mistake I've made with my life.” And you get to thinking about a different life, a *better* life you might have had. For instance, I get to thinking about a life I might have had with you, Mr Stevens. And I suppose that's when I get angry over some trivial little thing and leave. But each time I do so, I realize before long – my rightful place is with my husband. After all, there's no turning back the clock now.” (251)

この言葉を聞いたスティーブンスは、胸が張り裂けんばかりに傷んでいるものの、微笑みを浮かべながら “You're very correct, Mrs Benn. As you say, it is too late to turn back the clock.” (p.252) と応える。

バスに乗り込む時のケントンの目には涙が溢れており、ミセス・ベンとなった彼女が浮かべている涙と、二十年前にスティーヴンスにつれない仕打ちを受けて部屋で浮かべていた（であろう）涙が此処で重なり、本書の一つのクライマックスを成している。この場面について Phelan は、‘Stevens’s knocking and Miss Kenton’s answer give a twist to the reader’s desire: although the emotional connection is not complete, something new has happened between them. Although Miss Kenton does not know all that Stevens is feeling, she does understand what it means for him to knock, however tentatively, and she can feel the tenderness with which he treats her throughout the scene. Her tears, then, signify her own recognition that if he’d acted this way twenty years before, her life would be different. In that important respect, her knowledge catches up with ours.’<sup>7</sup> と評言しているが、百人百様の解釈を許容しうる文学性豊かな名場面と言えよう。

スティーヴンスはミス・ケントンを見送ったのち、ダーリントン・ホール勤務時代に彼女が自分に寄せていた恋心に応えようとしなかった大きな過ち、鈍感さ、愚かさをようやく認識し、栈橋の明かりが灯り始めるころ、海を見つめながら涙する。と、そこで偶々出会った年配の男と言葉を交わし、落ち込んでいるスティーヴンスの様子を見た彼からこう諭される：‘Now, look, mate, I’m not sure I follow everything you’re saying. But if you ask me, your attitude’s all wrong, see? Don’t keep looking back all the time, you’re bound to get depressed. And all right, you can’t do your job as well as you used to. But it’s the same for all of us, see?... You’ve got to enjoy yourself. The evening’s the best part of the day. You’ve done your day’s work. Now you can put your feet up and enjoy it.’ (256)。そして男が去って暫くした後、スティーヴンスはこう心の中で独り言ちる：

[T]he happiness with which the pleasure-seekers gathering on this pier greeted this small event would tend to vouch for the correctness of my companion’s words; for a great many people, the evening is the most enjoyable part of the day. Perhaps, then, there is something to his advice that I should cease looking back so much, that I should adopt a more positive outlook and try to make the best of what remains of my day.” (256)

‘the remains of the day’ とは、一日の終りであり、人生の黄昏に差し掛かったスティーヴンスの人生であり、‘greatness’ を誇った大英帝国の終焉であり、それをオーヴァーラップしている。映画の譬えでいうなら、それまでは第二次大戦前後の英国史とダーリントン卿の盛衰を望遠のロングショットで捉えていたカメラが、スティーヴンスにズームして超クローズアップで彼の潤んだ瞳や老いを示す皺のひだを生々しく映し出す。しかし、夕暮れの美しく暖かい光が彼を包んでいるので決して酷薄な印象は与えず、寧ろ優しく慈しむような感触を付与しており、実に素晴らしい、映像的喚起力に溢れた場面に昇華している。

さらにイングロは、此処でもう一つ仕掛けを施している。実は ‘DAY THREE – MORNING Taunton, Somerset’ で、現在の主人ファラディ氏——彼は米国人で気さくな性格——と上手くジョークを交わすことが出来ず、もっと練習が必要だと大真面目で反省する場面があるのだが、これが最

後にもう一度引き合いに出される。本篇最後のパラグラフはこう結ばれる：

It occurs to me, furthermore, that bantering is hardly an unreasonable duty for an employer to expect a professional to perform. I have of course already devoted much time to developing my bantering skills, but it is possible I have never previously approached the task with the commitment I might have done. Perhaps, then, when I return to Darlington Hall tomorrow – Mr Farraday will not himself be back for a further week – I will begin practising with renewed effort. I should hope, then, that by the time of my employer's return, I shall be in a position to pleasantly surprise him. (258)

ミス・ケントンとの再会によって決定的打撃を受けたことがダーリントン卿晩年の失墜や自分自身の老いと重なり合い、スティーヴンスを失意のどん底に陥らせた。しかし、彼が未来への希望をもう一度取り戻す姿を、明日ダーリントン・ホールに帰ったらジョークの練習に取り組んでみようという新たな「決意」でもって暗示する——ユーモアとウィットに富んだ、実に小粋なエンディングである。

イシグロが第二次大戦前後の英国上流社会の変貌を描く時、それはあくまでイメージとしての「英国」である。イシグロ自身色々なインタビューで史実や正確なディテールに興味はないと語っているように、実体験の無いイシグロが描く「英国」は当然の如く美化・理想化された、あるいはリアリティを欠く人工的イメージとして甘美な記憶や幻想に変質しており、例えば E. M. Forster が *Howards End* で描いた「英国」とは、似て非なるものである。故に、リアリズムと幻想の微妙な境界線を浮遊する感覚こそがイシグロ作品の真骨頂であり、知的なユーモアや洗練された気品、オブラートに包まれた辛辣な皮肉を楽しむことが最大の楽しみであろうと、筆者は考えている。

この小説の魅力の大きな要因の一つが巧まざるユーモアであることは言を俟たないが、Graver も以下のように評している：‘Much of this is dryly, deliciously funny, not so much because Stevens is witty or notably perceptive (he is neither) but because in his impassive formality he is so breathtakingly true to type, so very much the familiar product of the suppressive and now anachronistic social system that has produced him and to which he is so intensely loyal.’<sup>8</sup>。ちなみに筆者が一番共感し、本書の魅力を凝縮した批評は丸谷才一の手になるものだと考えているのだが、その一文を以下の紹介する：

これは十分に悲劇的な物語で、現代イギリスの衰へた倫理と風俗に対する洞察の力は恐ろしいばかりだ。これだけ丁寧に歴史とつきあひながら、しかしなまなましくは決してなく社会をとらへる方法は、わたしを驚かす。殊に、登場人物に対する優しいあつかひがすばらしい。イシグロは執事、女中頭、貴族を、ユーモアのこもった筆致で描きながら、しかし彼らの悲劇も物語ってゆく。あるいは、悲劇を語りながら、ユーモアを忘れない。わたしはその余裕のある態度を望み見て、イシグロが川端康成にではなくディケンズに師事してゐることを喜んだ。<sup>9</sup>

(原文は旧字旧かな)

惚れ惚れするような流麗で上質の文体で綴られ、と同時に精緻に組み立てられた物語構造にはただただ讃嘆するしかないのだが、「悲劇を語りながらユーモアを忘れない余裕のある態度」が、本作を成熟した現代の「古典」足るべき作品に昇華していると言えよう。

## 2.4 El Angel Exterminador : *The Unconsoled* (1995)

世界的ピアニストのライダーは、中欧のある町に招待される。「木曜の夕べ」という催しで弾くことになっているらしいのだが、演奏会の趣旨・日程・会場・演目等一切が明らかにされておらず、関係者に問い合わせても一向にらちがあかない。

初めて訪れる町の筈なのに、ホテルのポーターから紹介された彼の娘ゾフィーと孫息子ボリスは、どうやらライダーの妻と息子らしいし、この後も、ライダーが過去に出逢った人々が次々と現われ、時間と空間がどんどん捩じれていく中でライダーは迷宮の中を彷徨い始める…。

*The Remains of the Day* で世界的名声を博してから6年。磨き上げられた端正な文体と繊細で緊密な作品世界が読者を魅了した作風から一転して、カフカの不条理世界の中で展開するシュールで実験的な作風は、これがあのカズオ・イシグロの新作なのかと、読み手に大きな困惑と驚きと——人によっては失望を——をもたらし、中にはJames Woodのように ‘Kazuo Ishiguro’s new novel has the virtue of being unlike anything else; it invents its own category of badness’<sup>1</sup> と酷評した人も居るほどである。では、これまでの（一見）リアリズム的作風と、どこがそれほどまでに異なっているのかを検証してみる。

まず、時間と空間が大きく歪んでいることである。ライダーがホテルに着いて部屋に案内される際、エレベーターでほんの数階昇るだけなのに、ポーターは何と数頁に亘って延々と喋り続ける。いざ部屋へ入ってまどろみ始めると、この部屋は自分が幼少時に使っていたのと同じの寝室であると感じく（“The room I was now in, I realised, was the very room that had served as my bedroom during the two years my parents and I had lived at my aunt’s house on the borders of England and Wales. I looked again around the room, then, lowering myself back down, stared once more at the ceiling. It had been recently re-plastered and re-painted, its dimensions had been enlarged, the cornices had been removed, the decorations around the light fitting had been entirely altered. But it was unmistakably the same ceiling I had so often stared up at from my narrow creaking bed of those days.” (16)）。滞在第一日目から想定外の出来事がたて続けに起こり、挙句の果ては真夜中だというのに自分を主賓とする晩餐会に引っ張り出され、ようやくのことで途中で抜け出してみると宴会場は同じホテル内の一室であることに気づく——等々、枚挙に暇が無い。Passano がこの世界を ‘[T]here is no basis in anything resembling real time, real behavior, or real manner.’<sup>2</sup> と要約し、Lewis が町の空間を ‘a painting by Giorgio di Chirico and the impossible geography of a print by M. C. Escher’<sup>3</sup> と準えているように、これはもう完全にシュールリアリズムの領域に突入している。

次に主人公の語り。例えば *The Remains of the Day* と比べてみると、一人称一視点で語られているものの、ライダーに聞こえる筈のない第三者の会話が聞き取れていて「神視点」に拡張されている（56-61）し、Kakutani が指摘しているように narrative の有り様がまるで異なっている（“The biggest difference between the two men, it turns out, concerns the novels they star in. Where *The Remains of the Day* was a narrative tour de force attesting to Mr. Ishiguro’s virtuosic control of language, tone and character, *The*

*Unconsoled* remains an awkward if admirably ambitious experiment weighed down by its own schematic structure.’<sup>4</sup> )。

そしてもう一つは——ある意味これが最大の特徴かもしれないが——論理的一貫性が完全に欠落していることで、例えば Michael Wood は、‘Every scene is inconsequential. No matter what has transpired previously, Ryder continues on almost obliviously.’<sup>5</sup> と指摘している。

これらの要素が混然混沌となり、多種多彩な登場人物が勝手気儘かつ冗漫に延々と語り——冒頭のポーターのように一人の独白が数頁に及ぶのはさら——荒唐無稽なエピソードがブラックコメディ的というか野放図アナーキーに展開するので、本書は極めて読みづらく、プロットを見失わずに辿っていくのは至難の業である（ちなみに筆者は初めて本書に接した時、イシグロは私家版『重力の虹』<sup>6</sup> を目論んだのかと、糾弾したくなったほどである）。

では、本書はどう読むべきなのか、一体どのような解釈が可能なのだろうか？

ライダーが町に到着した夜、気分転換にホテル近くの映画館にソフィーとレイトショーを観に行く場面を見てみる：

Most of the advertisements were for local businesses and seemed to go on interminably. When the main feature finally started we had been seated for at least half an hour, and I saw with some relief it was to be the science fiction classic, *2001: A Space Odyssey* – a favourite of mine which I never tired of seeing. As soon as those impressive opening shots of a prehistoric world appeared on the screen, I could feel myself relaxing, and I was soon comfortably absorbed in the film. We were well into the central section of the narrative – with Clint Eastwood and Yul Brynner on board the spaceship bound for Jupiter – when I heard Sophie say beside me:

‘But the weather could change. Just like that.’ (93-94)

スタンリー・キューブリック監督の SF 映画の金字塔『2001 年宇宙の旅』には、勿論クリント・イーストウッドもユル・ブリンナーも出演しておらず、ましてや、“We were approaching that section of the film in which the astronauts first suspect the motives of the computer, HAL, central to every aspect of life aboard the spaceship. Clint Eastwood was stalking the claustrophobic corridors with a terse expression and a long-barrelled gun.” (98) と、イーストウッドがダーティ・ハリーばりにコンピューターに立ち向かっていく場面などあるわけがない。ではこの場面は何を意味しているのか、イシグロが何をどういう意図で仕掛けているのだろうか？一つのアプローチは、ライダーが彷徨する町を ‘alternate world’ と捉える読み方である。例えば Allen は、‘Imagine an alternate world in which life is not a dream but in which the dream is your life – in other words, where you must live your life by the inexplicable logic and ever-changing rules imposed by the dream itself.’<sup>7</sup> と提唱しているし、Gussow は、『2001 年』の場面を引き合いに出してこう論じている： ‘In one early cue to the reader that this is a contradictory, alternate world, Ryder goes to see one of his favorite movies, *2001: A Space Odyssey*, and speaks about the performances of Clint Eastwood and Yul Brynner. The author knows, of course, that these actors had no connection with the Stanley Kubrick film, but in the world of the book, he said, there would be a different

version of the movie. Everything has been tipped off balance in an attempt to “acclimatize the reader to a new set of rules.””<sup>8</sup>

イシグロは忘却と意識の狭間を彷徨う人間を常に主題としてきたが、では、本作における忘却（過去）は、前3作のようなフラッシュバック、あるいは Allen や Gussow が唱えるパラレルワールドと見做すのが適切なのだろうか？これについては、イシグロが Steinberg とのインタビューで述べているように、「過去のこだま、未来の先触れ、自分の未来に対する畏れの投影」だという見解に、筆者はすんなり納得する（‘I wanted to have someone just turn up in some landscape where he would meet people who are not literally parts of himself but are echoes of his past, harbingers of his future and projections of his fears about what he might become.’<sup>9</sup>）。つまりこの物語は、ライダーの一生を4日間の滞在に凝縮したものであり、両親との不和、妻との別離、幼年時代への退行願望、芸術や審美的なものを論ずることの不毛等々、ライダーがこれまで巡り合ってきた人々と体験してきた出来事が、シュールな悪夢そのものの世界の中で蠢いているのである。

では、イシグロは——小説好きならすぐさま類似点に気づくカフカ『城』同様——癒しようのないペシミズムを描くために本書を書いたのだろうか？ここで再度注目したいのが、本書のタイトルである。An Unconsoled なら苦悩（過去／記憶）に苛まれるライダーに焦点が当てられていることを意味するが、The Unconsoled と題されているということは、ライダーのみならず、苦悩し癒しを求めている人々全体を示唆しているのではないだろうか。ライダーの人生の過去はボリス（幼少期）とステファン（青年期）に、未来はプロツキー（老年期）に投影され、中年期にあるライダー自身は、演奏会を立派に勤める事で両親との関係を修復することを切望している。また、Cusk が ‘the specters of human unhappiness, a community of woes whose attempt to form a secure collective consciousness is continually sabotaged by personal failure.’<sup>10</sup> と述べているように、unconsoled の領域はライダー個人に留まらず、町の人々全体に及んでいると思われる。この点に関しては Lewis の明晰な分析——‘[V]irtually every character in the novel is looking to be consoled, either by loved ones, through the satisfaction of a demand or in the pursuit of a valued activity. Yet it is the fate of the citizens of this nameless town to remain unconsoled, unsatisfied, and unceasingly chasing goals they cannot reach.’<sup>11</sup> ——が示唆に富み、個人の苦悩を主題とした A Pale View of Hills, An Artist of the Floating World, The Remains of the Day から、一つの世代の苦悩を対象とした When We Were Orphans と Never Let Me Go 、そして世界全体を包含せんとした The Buried Giant へと作品視野が大きく広がっていく分岐点作品として、今後ますます重要視される問題作だと筆者は確信している。

筆者の勝手な憶測だが、イシグロは前3作品、とりわけ The Remains of the Day が絶賛を博したのは、従来の物語を（一見）忠実に踏襲していた点が受け入れやすかったからだ、と見抜いていたのだろう。しかし、日本であれ英国であれ、戦争の実体験を持たないイシグロにとってこれらはあくまで単なる素材であって、自分が心血を注いだのは、その素材から導き出されるべき人間の存在の曖昧さと、時間・空間を交錯させながら物語を紡ぐ際の描写力だったはずである。

柴田元幸は、The Remains of the Day 以降のイシグロ作品の方向性について、こう述べる：「記憶は捏造する」「運命は不可避である」といった中心的テーマはさまざまな形で変奏しつつけてきた一

方、作品世界の手触りは一作ごとに大きく変えてきたのである。たとえば、リアリズム／非リアリズムという観点から考えるなら、『日の名残り』が〈リアリズムの作法を遵守せよ〉というルールにのっとって書かれていたとすれば、次作『充たされざる者』は〈リアリズムの作法を極力無視せよ〉というルールに従っているかのような書きぶりだった。(中略)大きな流れとしては、『日の名残り』までは、要するに現実に関何かが起きたのかを解き明かすこともある程度大きな要素だったのに対し、その後は次第に、一人の人間の頭の中で起きていることが主要な関心事になってきたとも言える」<sup>12</sup>。

最後に、一つ面白い感想を紹介してこの項の結びにする。

*TIME* 誌が組んだサマー・リーディング特集記事の中に、編集委員の Lev Grossman と Radhika Jones の対談があり、そこで Jones は自分の *The Unconsoled* 体験をこう語っている：‘I read *The Unconsoled* on the Trans-Siberian Railroad between Beijing and Moscow. The trip was 12 days long, so I needed a big book. I had no idea what *The Unconsoled* was about and only later realized that people regard it as virtually unreadable—it’s narrated in a sort of dream logic, where absurd things keep happening in this very matter-of-fact way. But that made it ideal for the railroad, where you’re suspended in time across this vast, remote landscape. So I remember loving the book—it made perfect sense to me. Of course, I can never read it again, because the spell would be broken.’<sup>13</sup>

確かにこの作品を最大限に味わうには、自分を逃げ場のないカフカの状況に追い込んで——例えば、ルイス・ブニエール監督『皆殺しの天使』のように——読むのが、一番いい「読書法」なのかもしれない。

## 2.5 Au Revoir les Enfants: *When We Were Orphans* (2000)

1910年代、上海の租界。クリストファー・バンクスが10歳の時、英国の貿易会社に勤めている父親が、出勤した後忽然と行方不明になった。その数週間後、今度は反アヘン運動に熱心だった美しい母親がいなくなった。両親が相次いで失踪した後、クリストファーはロンドンに住む伯母に引き取られる。長じてケンブリッジ大学を卒業すると、幼い頃から憧れていた私立探偵を職として幾多の難事件を解決して名声を博し、ロンドン社交界でも一目置かれるセレブとなる。しかし彼は、優雅な生活の中でも両親のことを片時も忘れたことはなく、再び上海を訪れて自ら搜索活動を始めののだが、そこで見たものは魔界のような上海のもう一つの顔と、余りにおぞましい真相であった――。

*The Remains of the Day* の大成功のあとに、時空が歪んだ迷宮世界を主人公が延々と彷徨する難解な大作 *The Unconsold* で多くの読者を途方に暮れさせたイングロが今回手がけたのは、何と「探偵小説」。しかし探偵小説とは言っても、ホームズ譚のような伝統的名探偵物語を予測しているとその期待は完膚なまでに裏切られ、読者はまたもやカフカの不条理世界の中に投げ出される。手法的には *The Unconsold* の同工異曲版と受け取ることができ、Jaggi は、‘reworking of the innovative technique of the *The Unconsold* – dubbed “appropriation” by the author – where, as in a dream, other characters feature as projections of the narrator’s fears and desires, people from his past or himself at different stages of life’<sup>1</sup> と評している。

物語の「現在」は1958年のロンドン。今や中年になったクリストファーが、上海で暮らしていた幼年時代（1910年代）や大学卒業後にロンドンで暮らしていた青年期（1920年代）、両親搜索のため再訪した国際的緊張感高まる上海（1930年代後半）等のことを追想していく。時系列がリニアに進行する代わりに、異なる時空間を行き来しながら幾層にも重なり合っていく展開も、すっかりお馴染みの趣向である。

PART ONE *London, 24th July 1930* でバンクスが旧友に誘われてあるパーティに出かけると、見知らぬ老人から声をかけられる。職業を問われたバンクスが探偵になりたいと答えると、老人はこう語る：“‘[A] lot of young men dream of becoming detectives. I dare say I did once, in my more fanciful moments. One feels so idealistic at your age. Longs to be the great detective of the day. To root out single-handedly all the evil in the world.’” (15-16)。絵空事とは言え、ホームズに代表される名探偵が鮮やかな手腕で難事件を解決して平穏な日常を取り戻すことで多くの人に安寧を感じさせたように、バンクスもまた世界に失われた秩序を修復するという大望を抱いていた。老人の言葉は、いみじくもそのようなバンクスの野心を言い当てており、Kakutani もバンクスが幼い頃から探偵という職業に憧憬を抱いていた点に触れて以下のように指摘している：‘The young Christopher and his best friend, a Japanese boy named Akira, used to play at being detectives, and as a grown-up, Christopher tells us, he has gone on to achieve renown in that very profession as a kind of latter-day Sherlock Holmes. Just as the detective story genre offers readers the consolations of an orderly narrative in which reason and logic will triumph, so



detective work offers Christopher the illusion that he is using his acumen to restore order to the world around him.<sup>2</sup>

PART TWO *London, 15th May 1931* でバンクスは女友達サラと偶然出会い、意図せずして彼女に対して上海時代の思い出を口にしていたことについて、後日彼はこう思い返す：

[O]ver this past year, I have become increasingly preoccupied with my memories, a preoccupation encouraged by the discovery that these memories – of my childhood, of my parents – have lately begun to blur. A number of times recently I have found myself struggling to recall something that only two or three years ago I believed was ingrained in my mind for ever. (67)

上海で両親と過ごした楽しい日々の記憶が曖昧模糊とした状態になりつつあることを憂慮したバンクスは、自分のアイデンティティを回復するためにも、再び上海租界を訪れて父と母の二つの失踪事件を解決することを決意する。過去の思い出がぼんやりとして次第に薄れていくと云う主題は、PART ONE から PART THREE までの通奏低音となっており、言い換えれば、PART THREE までは三幕芝居の第一幕として、幾分長めの助走としての役割を担っている。

PART FOUR *Cathay Hotel, Shanghai, 20th September 1937* に入ると主人公は一路上海に向かい、物語も謎解きの色合いが濃厚になっていくわけだが、実はこの辺りから通常の探偵小説の定石から大きく逸脱した展開となっていく。まず、捜査・推理の具体的過程が全く描かれないうし、両親は大きな組織に拉致されて上海のどこかにまだ監禁されているという推理には、何の根拠も示されない。描かれるのはただ、主人公が盲目的確信に基づいて、闇雲というか行き当たりばったりで探索する姿のみである。両親が捕らえられていると思しき屋敷の情報を得て現場に向うと、途中で道に迷ってしまい、挙句の果てはどこまでも入り組む迷路のような建物の中をただ右往左往するばかりで、*The Unconsoled* の続編とも言うべきラビリンスがまたも展開する。右往左往しているさなかにバンクスは、今は日本軍兵士となって捕らえられ衰弱きった幼馴染のアキラと偶然再会する。言葉を交わしながら彼に諭すように “One mustn’t get too nostalgic for childhood.” と語りかけると、アキラはこう応答する：“Important. Very important. Nostalgic. When we nostalgic, we remember. A world better than this world we discover when we grow. We remember and wish good world come back again. So very important.” (263)。

*A Pale View of Hills* から一貫して、イシグロ作品の中心主題は「記憶」である。往々にして「記憶」は——*An Artist of the Floating World* のオノが最たる例だが——自分に都合のように歪曲されたり、敢えて触れない（語らない）負の側面をもつものとして提示される。しかし本作における記憶は、失われた美や理想を復元・保持するための「装置」として擁護されている。イシグロ自身も Mackenzie とのインタビューの中で、ノスタルジーについて ‘Nothing wrong with nostalgia. It is a much-maligned emotion. The English don’t like it, under-rate it, because it harks back to empire days and to guilt about the empire. But nostalgia is the emotional equivalent of idealism. You use memory to go back to a place better than the one you find yourself in. I am trying to give nostalgia a better name.’ と肯定的に擁護しているし、孤児 (orphans) のメタファーについては ‘Which refers to that moment in our lives when we come out of the

sheltered bubble of childhood and discover that the world is not the cozy place that we had previously been taught to believe.<sup>3</sup>と述べている。

バンクスは捕虜となっていたアキラ共々日本のハセガワ大佐に救出され、バンクスと大佐はこう言葉を交わす：

‘This soldier. You had met him somewhere previously?’

‘I thought I had. I thought he was a friend of mine from my childhood. But now, I’m not so certain. I’m beginning to see now, many things aren’t as I supposed.’

The colonel nodded. ‘Our childhood seems so far away now. All this’ – he gestured out of the vehicle – ‘so much suffering. One of our Japanese poets, a court lady many years ago, wrote of how sad this was. She wrote of how our childhood becomes like a foreign land once we have grown.’

‘Well, Colonel, it’s hardly a foreign land to me. In many ways, it’s where I’ve continued to live all my life. It’s only now I’ve started to make my journey from it.’ (277)

ノスタルジーという揺籃期的記憶から引きずり出され、よるべない「孤児」として生きることを余儀なくされるバンクスの偽らざる心境を表している言葉である。

そして最後に、残酷な真実が明らかになる。バンクスは、一連の事件の黒幕は幼少期に自分を可愛がってくれたフィリップ叔父さん（父の元同僚）ではないかと推理して彼を追っていたが、フィリップ自らがバンクスの元を訪れてきて、事件の真相をこう語る：

“[N]ow do you see how the world really is? You see what made possible your comfortable life in England? How you were able to become a celebrated detective? A detective! What good is that to anyone? Stolen jewels, aristocrats murdered for their inheritance. Do you suppose that’s all there is to contend with? Your mother, she wanted you to live in your enchanted world for ever. But it’s impossible. In the end it has to shatter. It’s a miracle it survived so long for you.” (294)

自分が君主として小さな王国に君臨してられる幼年期とは、何と純粋で、無垢で、甘美な時代であったことか。本書の主題は、この「失われた過去を求める *À la recherche du temps perdu*」行為に伴うノスタルジアであり、そのノスタルジアを *When We Were Orphans* という題名に象徴させ、主人公が過去へ過去へと遡っていくプロセスを探偵小説の装いで語っていく。かつてはあんなにも美しく輝いていて、何ら瑕瑾が無かったかに思えた過去——しかしそれは、あくまで *nostalgia* というヴェールに包まれた思い込み、過度の美化、幻想に過ぎなかった。自らの良心に従いより大きな組織に反抗した硬骨の士と思っていた父は、実は情婦を作ってマニラに逃げた浮気者に過ぎなかった。その美貌と高貴な理念を誰からも褒めそやされた母は、父が出奔した後の生活費を賄うべく、自ら大金持ちの困り物として身を落としていた。自他共に名探偵を任じていた筈の主人公は、幼い頃にアキラと夢中で興じていた“探偵ごっこ”の延長を行っていた哀れな道化に過ぎなかった。*nostalgia* というヴェールをはがしてみると、これでもかこれでもかと醜悪な現実が露呈され、あんなにも美しかった——とかつては思えた——世界が音を立てて崩壊するさまを、読み手はバンクスと共に体感していくことになる。

最終章、物語はこう結ばれる：

[O]ur fate is to face the world as orphans, chasing through long years the shadows of vanished parents. There is nothing for it but to try and see through our missions to the end, as best we can, for until we do so, we will be permitted no calm. (313)

Shaffer は物語の結末について、‘Banks, now fifty-three years old and rheumatic, is settling into late middle age and attempts to sum up his life. All of Ishiguro’s novels end in this poignantly understated way, leaving the reader to grapple with the question of whether the protagonist’s life has been as successful or complete as he or she would have us believe.’<sup>4</sup> と、これまで同様作品内で完全に完結せず、ある程度読み手に委ねられることを指摘している。また、Wood は、‘The novel’s highest achievement is the gentle way it offers Christopher’s tale as a surreal allegory of the ways in which we are the prisoners of our childhoods, the criminals of our pasts, always guilty with memory.’<sup>5</sup> と、イシグロが拘泥する「記憶」の問題が本作でどう扱われているかを要約している。

確かに本作は *The Unconsoled* 同様に重く暗い話であり、一種の iconoclastic な物語と受け取れる。しかし筆者は、パンドラの匣ではないが、崩壊した世界の瓦礫の中から放たれる一筋の光と、絶望の奥から微かな希望が感じ取れ、これ以降のイシグロ作品の重要な転換点を成していると考えている。そういう意味で、三村の、「『孤児』は我々が生き続けるために必要なのは、合理的で理性的な見方を徹底するだけではなく、時にはそこを幻想で少しずつふさいで足場を作ってゆくことだと示している。そしてイシグロはこれからも、正気を失いそうなほどのこの恐ろしい深淵に誰よりも近づいて、可能な限り直視しながら、我々には「大丈夫」と何事もなかったかのようにその作品を通じて優しく声をかけてくれるだろう」<sup>6</sup> という評言に、深く賛同している。

*The Remains of the Day* 風の構成で幕が開き、第二幕は探偵小説のパスティシェから不条理劇へと変貌し、第三幕で「孤児のように世界に立ち向かうのが我々の運命なのだ」と観客（読者）に決めの台詞を投げかける。人間の存在と自我と記憶の曖昧さをこのような形で提示するイシグロは、やはり只者ではない。

## 2.6 Children of Men: *Never Let Me Go* (2005)

——キャシー・Hは、優秀な「介護人」として「提供者」の世話をしている。彼女は全寮制の学校ヘールシャム (Hailsham) の出身で、そこで共に生活したルースやトミーの介護を手掛けることとなり、仕事の合間や勤務を離れた時、折に触れてヘールシャムでの日々を回顧する。図画工作に極端に力をいれた授業、毎週の健康診断、「保護官」と呼ばれる教師たちの不思議な対応。彼女の追想が進むにつれ、ヘールシャムに隠された驚くべき真実が明らかになっていく——。

平井は本書におけるイングロの手法について、「読み手は作中の話者と対峙するのではなく、語り手と寄り添って迷路を歩み続けることになり、そこから立ち上がってくるサスペンス性やミステリー感が、作品に、より効果的に作用することになる。しかも、作中の子どもたちが真実にめざめるスピードと、読者のそれとのあいだには、わずかなズレが仕掛けられ、その間隙から、子どもたちが、なにも知らないことにたいする悲哀が、読者の胸に伝わってくるのである」<sup>1</sup>と分析している。また Wood は ‘Ishiguro’s real interest is not in what we discover but in what his characters discover, and how it will affect them. He wants us to inhabit their ignorance, not ours.’<sup>2</sup> と、Kakutani は ‘Mr. Ishiguro’s art of withholding – his pared-down, Pintereque prose, his masterful narrative control, his virtuosic use of understatement and elision – is put in the service of a far-out science fiction plot involving clones and organ transplants.’<sup>3</sup> と指摘していて、デビュー作からずっとその語り口 (narrative) の巧みさを称揚されてきたイングロは、本書において殆ど完璧の域に到達したことは疑う余地が無い。

では、その語り口の素晴らしさを味わいながら、本書の魅力をキャシー・H.と一緒に——時には彼女に半歩先行しながら——ゆっくりと辿っていくことにしよう。

### PART ONE (Chapter 1 - Chapter 9)

物語は、Kathy H. の一人称一視点で進んでいく。*The Remains of the Day* の幾分気取った物々しさとも、*The Unconsoled* の晦渋さとも、*When We Were Orphans* の自己陶醉とも無縁な平易な語り口は、読み手にキャシーを等身大的に感じさせる自然な親近感を醸成する。物語冒頭、現在担当している一人の「提供者」の介護をしながら感じたことを、キャシーはこう物語る：

Sometimes he’d make me say things over and over; things I’d told him only the day before, he’d ask about like I’d never told him....At first I thought this was just the drugs, but then I realised his mind was clear enough. What he wanted was not just to hear about Hailsham, but to *remember* Hailsham, just like it had been his own childhood. He knew he was close to completing and so that’s what he was doing: getting me to describe things to him, so they’d really sink in, so that maybe during those sleepless nights, with the drugs and the pain and the exhaustion, the line would blur between what were my memories and what were his. That was when I first understood, really understood, just how lucky we’d been – Tommy, Ruth, me, all the rest of us. (Chapter 1 p. 5-6)

「記憶」と「存在」というイングロ作品の通奏低音たる主題が、早くも此処でさりげなく導入され

ている。

無邪気に思春期を過ごす子供たちと謎めいた館、保護官、「マダム」の存在——などを書くときやから英国ゴシックロマンを想起させるが、確かに似通った雰囲気はある。そんなある日、定期的に施設を訪れる女性（通称マダム）に子供たちが他愛もない悪戯をしかけたところ、マダムは思いもよらない反応を示す：“*Madame was afraid of us. But she was afraid of us in the same way someone might be afraid of spiders. We hadn't been ready for that. It had never occurred to us to wonder how we would feel, being seen like that, being the spiders.*” (Chapter 3 p.35)。ヘールシャムに居る子供たちが「大人」たちと異なっている——しかも根本的に——ことはおいおいと分かってくるが（特に第7章で）、キャシー達が抱いている、自分たちが「大人」とは異なっているという違和感とそこから派生する疎外感、思春期にいる子供たちなら誰も抱く畏怖心や恐れ of の気持ちと重なる部分が多い。たとえ作品設定が SF 的であっても、読み手は往々にしてその前提条件を忘れ、恰も古典的ビルドゥングス・ロマンを読んでいるような感覚に陥るのは、本作において子どもたちの普遍的な心情を瑞々しく描くインシグロの筆力の為せる業に他ならない。

本書の題名 *Never Let Me Go* は、(架空の) 女性歌手 Judy Bridgewater のアルバム *Songs After Dark* の3曲目に入っている ‘*Never Let Me Go*’ をキャシーがひどく気に入っていることに由来しており (“What was so special about this song?...[W]hat I'd imagine was a woman who'd been told she couldn't have babies, who'd really wanted them all her life. Then there's a sort of miracle and she has a baby, and she holds this baby very close to her and walks around singing: 'Baby, never let me go...'” (Chapter 6 p. 70))、これに関連した印象深い場面がその後に出てくる。ある晴れた日の午後、忘れ物を取りに寮に戻ったキャシーは、その際に半ば衝動に駆られてカセットをプレーヤーに差し込んで再生する：

Maybe the volume had been turned right up by whoever had been using it last, I don't know. But it was much louder than I usually had it and that was probably why I didn't hear her before I did. Or maybe I'd just got complacent by then. Anyway, what I was doing was swaying about slowly in time to the song, holding an imaginary baby to my breast. In fact, to make it all the more embarrassing, it was one of those times I'd grabbed a pillow to stand in for the baby, and I was doing this slow dance, my eyes closed, singing along softly each time those lines came around again:

‘Oh baby, *baby*, never let me go...’

The song was almost over when something made me realise I wasn't alone, and I opened my eyes to find myself staring at Madame framed in the doorway. (Chapter 6 p. 70-71)

インシグロ作品にはしばしば音楽や映画への言及がみられるが、本作で架空の歌手が唄う架空の楽曲をわざわざ設定したのは、この場面を描きたかったが故ではないか——そう思わせるに足る非常に印象的で、本作を象徴する美しいシーンとなっている。

現在 31 歳となっているキャシーの回想は淡々と進んでいき、13 歳から 16 歳にかけてのヘールシャムで暮らす最後の数年間になると、自分の「存在」の実態が朧げながら分かってくる。ここでも、キャシー達が感じる不安と、「子供」が成長する際に今まで隠れていた／見えなかった世界の实態・醜さが露わになってくることで抱く不安が、ほぼ重なって感じられる。勿論キャシー達の場合は余

りにも特殊な事例ではあるのだが、キャシーの悩みやおののきは、小説世界内の事象であると同時に、その外枠にある現実世界の普遍的真理に達していると云う、二重構造の世界になっていることに読み手は気づかされる。

ヘールシャムでの最後の一年。ある生徒がアメリカに行って映画俳優になりたいと言ったのを受け、保護官のルーシー先生が驚愕の真実を生徒に告げる：“Your lives are set out for you. You’ll become adults, then before you’re old, before you’re even middle-aged, you’ll start to donate your vital organs. That’s what each of you was created to do. You’re not like the actors you watch on your videos, you’re not even like me. You were brought into this world for a purpose, and your futures, all of them, have been decided.” (Chapter 7 p.80)

壮年期はおろか結婚生活すら望めず、他者——自分たちのようなクローンではない存在、即ち人間——に奉仕する為にのみこの世に生を受けてきたというのは、子供たちのみならず読み手にとっても衝撃的な真実である。人間（読み手）にとっても己の人生が思いのままにならぬことなど至極当然なわけであり、であるからこそ、キャシーたちが置かれている境遇は全くの絵空事他人事とは到底思えず、痛みと切実さ伴って迫ってくるのである。

## PART TWO (Chapter 10 - Chapter 17)

ヘールシャムを卒業すると生徒は様々な施設へ移って散り散りになるが、キャシーは ‘cottage’ と呼ばれる、何年も前に廃業した農場を利用した施設で新たな生活を始める。ルースとトミーやヘールシャムで仲が良かった生徒の多くがコテージに来ている中、ある夜キャシーはルースに次のような告白をする：“Ruth, I wanted to ask you. Do you ever get so you just really have to do it? With anybody almost?... Maybe it’s just me anyway. There might be something not quite right with me, down there. Because sometimes I just really, really need to do it.” (Chapter 11 p.126)。ルースが密かに心配している自分の強い性欲については、後に大きな意味を持つようになる。

第2部で物語の核となるのは「ポシブル」の存在であり、キャシーはこう述べる：“Since each of us was copied at some point from a normal person, there must be, for each of us, somewhere out there, a model getting on with his or her life. This meant, at least in theory, you’d be able to find the person you were modelled from. That’s why, when you were out there yourself – in the towns, shopping centres, transport cafes – you kept an eye out for ‘possible’ – the people who might have been the models for you and your friends.” (Chapter 12 p.137)。

コテージで一緒に生活しているクリシーとロドニーが、ある日町でルースのポシブルと思しき人を見かけたと告げたことから、クリシー、ロドニー、ルース、トミー、キャシーの5人が車で「ポシブル」を探しに行く話がまとまる。最初は、苦勞して見つけたポシブルの存在に心浮き立つが、近くでよく見て話をさり気なく盗み聞きしてみるとルースとは似ても似つかぬ人で、到底ルースのポシブルでは有り得ないと一同落胆する。皆はルースを慰めるが、ここでのルースの激しい反応が衝撃的である：

‘I didn’t want to say when you first told me about this. But look, it was never on. They don’t ever, ever, use

people like that woman. Think about it. Why would she want to? We all know it, so why don't we all face it. We're not modelled from that sort... We're modelled from *trash*. Junkies, prostitutes, winos, tramps. Convicts, maybe, just so long as they aren't psychos. That's what we come from...If you want to look for possibles, if you want to do it properly, then you look in the gutter. You look in rubbish bins. Look down the toilet, that's where you'll find where we all came from.' (Chapter 14 p.164)

イシグロの前作ではないが、「孤児」の如く必死にポシブル（「親」）の存在を追い求め、かすかな希望が仄見えたかと思うと、「親」とは縁遠い人間であったことを知って落胆する。読み手はキャシーたちのようにクローン（＝孤児）ではないにしても、ルースの切実な願いとそれが裏切られた時の怒りを、痛いほど生々しく感じ取ると同時に、生きていくこと——青春を過ごすこと——の辛さと切なさを体感する。

ポシブルを探す小旅行には、実はもう一つ重要な附随的出来事があった。コテージに戻るにはまだ少し時間に余裕があるので各自自由気儘に過ごそうということになり、キャシーはトミーと一緒に古物商でブリッジウォーターのテープを探すことにする。その時の気持ちを、キャシーはこう思い返す：“When I think of that moment now, standing with Tommy in the little side-street about to begin our search, I feel a warmth welling up through me. Everything suddenly felt perfect: an hour set aside, stretching ahead of us, and there wasn't a better way to spend it. I had to really hold myself back from giggling stupidly, or jumping up and down on the pavement like a little kid....That moment when we decided to go searching for my lost tape, it was like suddenly every cloud had blown away, and we had nothing but fun and laughter before us.” (Chapter 15 pp.168-169)。 *The Remains of the Day* では用いられなかった平易な文体が、却ってキャシーの率直で真摯な思いを生き生きと伝えてくる。遂にテープを見つけた瞬間は、“I didn't exclaim, the way I'd been doing when I'd come across other items that had mildly excited me. I stood there quite still, looking at the plastic case, unsure whether or not I was delighted. (Chapter 15 p.169-170) と語られ、また、テープが戻ってきた実感については、“[I]t was only later, when we were back at the Cottages and I was alone in my room, that I really appreciated having the tape – and that song – back again. Even then, it was mainly a nostalgia thing, and today, if I happen to get the tape out and look at it, it brings back memories of that afternoon in Norfolk every bit as much as it does our Hailsham days.” (Chapter 15 pp.171) と語られる。

この場面でキャシーが——イシグロが——‘nostalgia’ という言葉を用いている点に注目したい。イシグロ作品に共通して内在するモチーフは、記憶の曖昧さ、およびそれを抱く人間の存在の曖昧さであることは本稿で何度も触れてきたが、本作においては *When We Were Orphans* 同様、「記憶」は一貫して肯定的な存在として捉えられており、その肯定性を象徴するのがこの ‘nostalgia’ という言葉である。

イシグロは2006年に *The Guardian* 紙のインタビューで、*Never Let Me Go* 成立過程について以下のように語っている：“Throughout the 1990s I kept writing pieces of a story about an unusual group of “students” in the English countryside. ...They lived in wrecked farmhouses, and though they did a few typically student-like things. ...Some strange fate hung over these young people, but again, I didn't know

precisely what it was. ...Then one morning around five years ago, I was listening to an argument on the radio about advances in biotechnology and the last pieces of the jigsaw fell into place. I could finally see the story I'd been looking for: something simple, but very fundamental, about the sadness of the human condition.<sup>4</sup>。

一旦中断された「学生」を主人公とする習作、そして *The Unconsoled* と *When We Were Orphans* を経てして本作へと至る十数年間の創作活動の軌跡を概観すると、そこに「理想主義への感情的等価物たるノスタルジア」(Nostalgia is the emotional equivalent of idealism.<sup>5</sup>) という共通主題を筆者は見出す。ライダーとバンクスが帰趨するところは青年期や幼年期の幸福な記憶(ノスタルジア)であったが、今度は青年期・幼年期それ自体を主題として、ノスタルジアとその陰に潜む 'sadness of the human condition' を描いたのが本作であると解釈することが出来るだろう。また同じインタビューで全寮制学校を舞台にした点について、'The boarding school setting, I might add, appealed to me because it struck me as a physical manifestation of the way all children are separated off from the adult world, and are drip-fed little pieces of information about the world that awaits them, often with generous doses of deception – kindly meant or otherwise.'<sup>6</sup> と述べているように、社会から隔離され牧歌的に幸福生活を子供たちが過ごせる「舞台設定」として採用したことが分かる。しかし、キャシーたちはいつまでもこのエデンの園的記憶の中にとどまることは許されず、O'Neil の言うようにエクソダスを余儀なくされるのである ('Ishiguro's imagining of the children's misshapen little world is profoundly thoughtful, and their hesitant progression into knowledge of their plight is an extreme and heartbreaking version of the exodus of all children from the innocence in which the benevolent but fraudulent adult world conspires to place them.'<sup>7</sup>)。

コテージに戻る前、キャシーとトミーが駐車場で他の3人を待っている間、(第11章で言及されていた)キャシーの強い性衝動についてトミーが触れる。何故キャシーがポルノ雑誌を見たがるのか不思議に思っていたトミーは、実はポルノ雑誌でポシブルを探す為ではないのかと推測し、でも何故雑誌のモデルが自分のポシブルだと考えるのかと問うと、彼女はこう答える：

'It's just that sometimes, every now and again, I get these really strong feelings when I want to have sex. Sometimes it just comes over me and for an hour or two it's scary....That's why I started thinking, well, it has to come from somewhere. It must be to do with the way I am....So I thought if I find her picture, in one of those magazines, it'll at least explain it. I wouldn't want to go and find her or anything. It would just, you know, kind of explain why I am the way I am.' (Chapter 15 p.179)。

思春期の女性が抱く性への憧憬や畏怖やおののきは不可避的なものであるが、子供を作れないキャシーたちクローンにとって、セックスの持つ意味合いは通常人と根本的に異なる。自分の旺盛な性欲は「ポシブル」に由来するもので、ポルノ雑誌に載るような人こそ自分の「ポシブル」に違いないと考えるキャシーの思いは、荒唐無稽な想像と切り捨てられない切迫感を伴って読み手の心を強く撃つ。

この後キャシーはコテージを去り、介護人の訓練を始めることを決意するところで第2部は終わる。



### PART THREE (Chapter 18 - Chapter 23)

第2部半ばに、‘deferral’（猶予期間）について語られる場面がある。ルースのボシブルをキャシー達5人が探しに行った折、クリシーがこんな話を聞いたと切り出す：“[S]ome Hailsham students in the past, in special circumstances, had managed to get a deferral. That this was something you could do if you were a Hailsham student. You could ask for your donations to be put back by three, even four years. It wasn’t easy, but just sometimes they’d let you do it. So long as you could convince them. So long as you *qualified*.” (Chapter 13 p.150)。男女が心底愛し合っていてそのことを実証できれば、「提供」が始まるまでの数年間を一緒に暮らせるよう「猶予期間」がもらえる——クリシーから聞いたこの話が第3部の核となり、物語は意外な方向へ舵を切る。

キャシーは介護人としてルース、後にトミーの世話を担当し、トミーが「提供」の猶予を受けられるよう、藁にも縋る思いで必死の努力をする。提供の猶予を申請するならセックスをしていないことがマイナス要因になりはしないかと懸念し、トミーと性交を試みていくわけだが、ここでキャシーはある思いに捕らわれる：

[E]ven that first time, there was something there, a feeling, right there alongside our sense that this was a beginning, a gateway we were passing through. I didn’t want to acknowledge it for a long time, and even when I did, I tried to persuade myself it was something that would go away along with his various aches and pains. What I mean is, right from that first time, there was something in Tommy’s manner that was tinged with sadness, that seemed to say: ‘Yes, we’re doing this now and I’m glad we’re doing it now. But what a pity we left it so late.’ (Chapter 20 p.234-235)

ルースがトミーと付き合っていたときから、実はキャシーとトミーは心の深奥で共鳴しており、猶予を得る為ではあるものの、ようやく念願叶って一緒になれた嬉しさ——そしてその歓喜の念の裏に忍び込む ‘what a pity we left it so late.’ という切ない思い。限りなく純化された愛が此処に凝縮されているような、震えるほど切ない思いが伝わってくる。

文字通り心と体が一つとなったキャシーとトミーは、かつてヘールシャムで恐れられた存在であったマダムの住処へ猶予の依頼に赴くのだが、そこに居たマダムと元主任保護官のエミリ先生が語ったことは、二人——および読み手——にとって余りにも過酷な「真実」であった。エミリ先生は、マダムことマリ・クロードと自分が心血を注いで運営したヘールシャムの存在意義をこう語る：

‘[W]e demonstrated to the world that if students were reared in humane, cultivated environments, it was possible for them to grow to be as sensitive and intelligent as any ordinary human being. Before that, all clones – or *students*, as we preferred to call you – existed only to supply medical science....Shadowy objects in test tubes....Suddenly there were all these new possibilities laid before us, all these ways to cure so many previously incurable conditions. This was what the world noticed the most, wanted the most. And for a long time, people preferred to believe these organs appeared from nowhere, or at most that they grew in a kind of vacuum.’ (Chapter 22 p.256-257)。

貧困国で臓器売買が密かに行われている現実を鑑みれば、物語の設定——マダムが語るヘールシ

ヤムの創立目的と存在意義——を SF 的絵空事と一笑に付すことは出来ないし、そもそも「通常の人間」と「ヘルシヤムの子供たち、即ち臓器提供者」が二項対立的に共生している有り様は、例えばアメリカにおける白人と黒人、ドイツにおけるゲルマン民族とユダヤ人、あるいは古代ギリシアの「市民」と「奴隷」というように古今東西遍く存在してきた歴史的事実である。しかし、だからと言ってイングロは、この長編において社会派的問題提起をしようとしているのではないと、筆者は考える。この点について、幾つか評言や分析を紹介してみたい。

Kakutani は、人間の必然的死と純粋性の喪失についての思索である—— ‘The result, amazingly enough, is not the lurid thriller the subject matter might suggest. Rather, it’s an oblique and elegiac meditation on mortality and lost innocence: a portrait of adolescence as that hinge moment in life when self-knowledge brings intimations of one’s destiny, when the shedding of childhood dreams can lead to disillusionment, rebellion, newfound resolve or an ambivalent acceptance of a preordained fate.’<sup>8</sup> ——と主張する。他方 Atwood は、クローンを人間のメタファーと解釈せず、キャシーたちが自分たちの人生を宿命として享受し、抵抗や脱走を試みないことを小説の弱点として批判する： ‘The children’s poignant desire to be patted on the head – to be a “good carer,” keeping those from whom organs are being taken from becoming too distressed; to be a “good donor,” someone who makes it through all four “donations” – is heartbreaking. This is what traps them in their cage: None of them thinks about running away or revenging themselves upon the “normal” members of society.’<sup>9</sup>。

イングロはこれまでに長崎や英国を舞台とした物語を手掛けてきたわけだが、彼にとって「長崎」や「英国」は単なる素材、つまり文学的テーマを盛り込むための器に過ぎず、クローンにしても本気で SF 小説を書こうと思ったわけでは決してあるまい。実際イングロは、*The Guardian* 紙のインタビューで次のように語っている： ‘I found that having clones as central characters made it very easy to allude to some of the oldest questions in literature; questions which in recent years have become a little awkward to raise in fiction. “What does it mean to be human?” “What is the soul?” “What is the purpose for which we’ve been created, and should we try to fulfill it?” In books from past eras – in Dostoevsky or Tolstoy, say – characters would debate these issues for 20 pages at a time and no one would complain. But in our present era, novelists have struggled to find an appropriate vocabulary – an appropriate tone, perhaps – to discuss these questions without sounding pompous or archaic. The introduction of clones – or robots, or super-computers, I suppose – as main characters can reawaken these questions for modern readers in a natural and economic way.’

<sup>10</sup>。敢えて SF 的設定をすることでリアルに物語を描く制約から解き放たれ、かつて世界文学が真正面から取り組んでいた「人間とは何か」「魂とは何か」という問題に対して、寓意性と象徴性を高める手法を用いて果敢に挑んでいくことこそ、イングロの真意だったのである。以下は全くの私的感慨だが、「猶予」を得るために良き「クローン」にならねばと努力するキャシー達の姿からは、本物の「人間」になりたいと願うピノキオを連想し、はたまた「人間」以上に「人間」らしく真摯にひたむきに生きる姿からは、リドリー・スコット監督のカルト的傑作 *Blade Runner* のレプリカント、ロイ・バティの姿を重ね合わせたりもした。

「人間」とは他者の為に懸命に生きられる存在である——とするならば、キャシーはこの物語に出てくる人間——例えばヘイルシャムのマダムや教師たち——よりも遥かに「人間」らしい存在である。イシグロは、生の営みが必然的に内包する哀しさや切なさを繊細且つ感傷過多にならない抑制の効いた筆致で描いていくが、忘れてならないのは此处でもやはり「記憶」の問題が取り上げられていることである。‘Never Let Me Go’の曲に合わせて一人踊っているとマダムがそれを見て涙を流していた場面（第6章）を思い起こし、キャシーはマダムに改めて問う。“赤ちゃんを産めない体の女の人が、奇蹟が起こって赤ちゃんを授かる。嬉しくて赤ちゃんを抱き締め、と同時に、自分がこの赤ちゃんから引き離されるような不測の事態が起きるのではないかと恐れ、‘Oh baby, baby, never let me go’と唄う”——そういう私の心を読んで、あの時マダムは涙を流したのではないですか、と。するとマダムは、こう答える：

‘When I watched you dancing that day, I saw something else. I saw a new world coming rapidly. More scientific, efficient, yes. More cures for the old sicknesses. Very good. But a harsh, cruel world. And I saw a little girl, her eyes tightly closed, holding to her breast the old kind world, one that she knew in her heart could not remain, and she was holding it and pleading, never let her go. That is what I saw. It wasn’t really you, what you were doing, I know that. But I saw you and it broke my heart. And I’ve never forgotten.’  
(Chapter 22 p. 266-267)

イシグロ作品が常に問いかける「記憶」の意義と意味について、平井はこう述べる：「イシグロの従来の作品におけるように、キャシーの語りの真偽を問うべき根拠はどこにもない。その中に、いくばくかの自己愛をとまなう脚色や弁護が潜んでいるとしても、それは〈人の常〉のことであり、語りの真偽を問うことは、『わたしを離さないで』では、重要な問題ではないと思われる。とすれば、これまで〈記憶の捏造〉という点に比重のかかっていたイシグロ作品に、〈記憶の価値〉についての新たな視野が開かれたと言ってもいいのだろうか。ロマンチックなラブ・ストーリー、あるいはヒューマン・ストーリーの側面が際立つのも、そのことと無関係ではない」<sup>11</sup>。また、Kerr はこう述べる：‘The theme of cloning lets him push to the limit ideas he’s nurtured in earlier fiction about memory and the human self; the school’s hothouse seclusion makes it an ideal lab for his fascination with cliques, loyalty and friendship. The voice he’s written for Kathy H. is a feat of imaginative sympathy and technique. He works out intricate ways of showing her naïveté, her liabilities as an interpreter of what she sees, but also her deductive smarts, her sensitivity to pain and her need for affection. She has a capacity to grow and love that is heroic under the circumstances.’<sup>12</sup>。

キャシーが大切にしてきた記憶の真実は、彼女の思い入れ——かくあって欲しいと願っていた姿——から余りにかけ離れたものであった。しかし、キャシーの語る物語にここまで耳を傾けてきた聞き手（読み手）は、‘Oh baby, baby, never let me go’と唄うキャシーの姿を見てマダムが涙を流した理由がキャシーの期待に反したものであっても、失意に追い打ちをかけるような絶望感を抱いたりはない。たとえ、一方的なキャシーの思い込み——言葉は悪いがキャシーの記憶改竄——であったとしても、そのような美化された記憶を持てたことは結果的に良かったのだ、と感じる読み手は決して筆者だけではない筈である。

キャシーは、数日前提供者の一人と話していた時のことを思い出す：“I was talking to one of my donors a few days ago who was complaining about how memories, even your most precious ones, fade surprisingly quickly. But I don’t go along with that. The memories I value most, I don’t see them ever fading. I lost Ruth, then I lost Tommy, but I won’t lose my memories of them.” (Chapter 23 p.280)。キャシーも、トミーも、ルースも、一般人からすると所詮幾らでも代替可能なクローンに過ぎないのかもしれないが、キャシーがトミーやルースの記憶を有し続ける限り、トミーやルースがこの世に生きた証は残り、その生の輝きもまだ褪せることはない。

物語のラスト、キャシーはドライブをしている時、吹き飛ばされてきたゴミが有刺鉄線に引っかかっているさまを眺めているうちにこう思いに耽る：

I was thinking about the rubbish, the flapping plastic in the branches, the shore-line of odd stuff caught along the fencing, and I half-closed my eyes and imagined this was the spot where everything I’d ever lost since my childhood had washed up, and I was now standing here in front of it, and if I waited long enough, a tiny figure would appear on the horizon across the field, and gradually get laughter until I’d see it was Tommy, and he’d wave, maybe even call. The fantasy never got beyond that – I didn’t let it – and though the tears rolled down my face, I wasn’t sobbing or out of control. I just waited a bit, then turned back to the car, to drive off to whatever it was I supposed to be. (Chapter 23 p.282)

Atwood が “Tellingly, two words recur again and again. One, as you might expect, is “normal.” The other is “supposed,” as in the last words of the book: “wherever it was that I was supposed to be going.” Who defines “normal”? Who tells us what we are supposed to be doing? These questions always become more pressing in times of stress; unless I’m much mistaken, they’ll loom ever larger in the next few years. *Never Let Me Go* is unlikely to be everybody’s cup of tea. The people in it aren’t heroic. The ending is not comforting. Nevertheless, this is a brilliantly executed book by a master craftsman who has chosen a difficult subject: ourselves, seen through a glass, darkly.”<sup>13</sup> と記しているように、キャシーの存在（運命）について考えることは、そのまま読み手一人一人が自分自身のアイデンティティを問い直す作業に繋がっていくことなのかもしれない。

## 2.7 Before Midnight: *Nocturnes Five Stories of Music and Nightfall* (2009)

イシグロ初の短編集は、「音楽と夕暮れをめぐる五つの物語」という副題を持つ。五編の舞台設定は各々ベネチア、ロンドン、モールバン、ハリウッド、アドリア海岸とばらばらだが、「音楽」がどの作品でも重要なモチーフとして扱われ、イシグロはインタビューで ‘I conceived the book holistically, almost as a piece of music in five movements. Like a cycle, the collection begins and ends in the same place – Italy – and it contains modulations of tone that would be awkward within a single narrative.’<sup>1</sup> と語っている。隅々まで精緻に構成された——特に *The Remains of the Day* 以降の——長編が堂々たる symphony (交響曲) だとすれば、人生の機微を含蓄のあるユーモアと、時には切なさや哀感を漂わせながら知的で軽妙な筆致で描いたこの短編集は、divertimento (嬉遊曲) と呼ぶべき洒脱さを湛えた作品群と呼べるだろう。

### “Crooner”

サンマルコ広場のカフェで観光客相手に演奏するバンドでギターを弾く「私」が、亡き母が大ファンだった歌手トニー・ガーディナーを偶々見かけたことから物語は始まる。カムバックを図る米国の歌手トニーは、27 年連れ添った妻リンディへの贈り物として歌を唄いたいので、その伴奏を「私」に依頼する (“I want to do something very romantic. I want to serenade her....After dark, it’ll be perfect. The lamps on the walls light things up just right. You and me in a gondola, she comes to the window. All her favourite numbers.” (12))。

しかしこの歌は、新婚旅行以来 27 年振りにベネチアを訪れた記念日のために唄われるのではなく、二人はまだ愛し合っているにも関わらず、トニーがもう一度カムバックするために別れるその節目の為に唄われるというのである。妻が大好きだった楽曲を、全盛期と変わらぬ素晴らしさで夫が唄っても、時間の推移によって「歌」を巡る状況は変わってしまっている厳然たる事実——。時の流れに抗うために、昔と変わっていないことを証明するために唄うトニーの姿に、筆者には一瞬 “Can’t repeat the past?...Why of course you can!” と叫ぶ *Gatsby* が重なって見えるのだが、「音楽」と「夕暮れ」という本短編集の「調」を設定し、時間と記憶という「第一主題」を提示する「第一楽章」となっている。

### “Come Rain or Come Shine”

チャーリーとエミリー夫妻、そして学生時代からこの二人の良き友人であるレイモンド。夫婦関係が冷え切ってしまった二人の愛の修復のために、私 (レイモンド) が否応なく一仕事させられる悲喜劇である。タイトルがまずハロルド・アーレンの手になる有名なスタンダード・ナンバーであり、ガーディナーもステージで歌ったであろうミュージカルとジャズの名曲の数々が本文中に散りばめられていることもあって、雰囲気的に第一篇からスムーズに繋がっていく。

しかし “Crooner” がヴィットリオ・デ・シーカのイタリア映画の味わいとするなら、本編はウディ・アレン調に、饒舌 (例えば、チャーリーが空港から電話で延々と喋る場面) とスラップスティ

ック（例えば、「私」がエミリーのメモを偶然見てしまったことを偽装するドタバタ劇）とロマンティック・コメディがブレンドされた一篇である。だから筆者は、ウディ・アレンの傑作 *Manhattan* の舞台をニューヨークからロンドンに、音楽はガーシュインからサラ・ヴォーンの ‘April in Paris’ に置き換えた作品として楽しんだ。エンディング——“This was Sarah Vaughan’s 1954 version of ‘April in Paris’, with Clifford Brown on trumpet. So I knew it was a long track, at least eight minutes. I felt pleased about that, because I knew after the song ended, we wouldn’t dance any more...But for another few minutes at least, we were safe, and we kept dancing under the starlit sky.” (86)——も映画そのもので、「音楽」と「夕暮れ」の余韻が美しく、心地良く残る。

### “Malvern Hills”

ミュージシャン志望の「私」は、姉夫婦がモールヴァン・ヒルズで経営しているカフェで夏の間だけ住み込みの手伝いをしている。そのカフェに来店したのが、ティールとゾーニャ夫妻。二人はコンビを組み、レストランなどでスイス民謡を演奏し歌うミュージシャンで、久方ぶりに夫婦水入らずで旅行を楽しんでいる。自分の未来にまだ漠たる希望と可能性を信じている「私」と、夢をあきらめ現実的な生き方を選択した中年夫婦との出会い——この背景となるのが風光明媚な丘の夕暮れであり、そこに流れる音楽が「私」が夫婦に弾いて聞かせる自作の曲と云う趣向である。

夫妻にギターを弾き語りした翌朝、ゾーニャは別れに際しこんな風に語る：“‘If Tilo were here, he would say to you, never be discouraged. He would say, of course, you must go to London and try and form your band....That is what Tilo would say to you. Because that is his way.’ ‘And what would you say?’ ‘I would like to say the same. Because you are young and talented. But I am not so certain. As it is, life will bring enough disappointments. If on top, you have such dreams as this ...’” (122)。語り手の「私」と一組の「夫婦」の人生が一瞬交錯する瞬間を切り取る手法は、ここまでの三篇のいずれにも共通しているのだが、ただ本篇が幾分見劣りして見えるのは、エキセントリックな性格として描かれている妻ゾーニャの人物造形が充分でないことに起因する。読み手がゾーニャの人間像を咀嚼しきれないまま物語が閉じるので、何かもどかしさが拭えないのが残念である。

### “Nocturnes”

売れないサクソ奏者の「私」（スティーヴ）が、整形すれば売れっ子の花形プレーヤーになれると妻やマネージャーから言いくるめられ、手術を受けたのち一流ホテルで療養している。隣室に居るのが同じく整形手術を受けた女優（“Crooner”に登場したリンディ・ガードナー）で、お互い顔を包帯でぐるぐる巻きにした状態なので奇妙な親近感が湧いたのか、いつしか話し相手となる。リンディの誘いで深夜のホテルを探索徘徊し、果ては彼女の度を過ぎた悪ふざけに巻き込まれて騒動になる——。

題名から予想されるようなロマンティックな物語とは正反対の、ナンセンス・コメディ。Ring Lardner を模倣したような語り口がまず絶妙で、“[M]y shoe hit something very hard jutting of the ground. I could feel a pain in my foot,...and saw the nail on my big toe rearing up from the flesh like it was doing a

Hitler-style salute.”(130) といった気の利いたくすぐりが楽しいし、後半の展開はスラップスティックそのもので、*The Unconsole*d を彷彿させる不条理性も加味されて独特の可笑しさに溢れている (Kakutani: ‘[T]his is all meant to be some sort of weird dream sequences – detailing Steve’s subconscious fears about being a loser – but it’s done so maladroitly that it reads like a farcical send-up of the Kafkaesque passages in the author’s ambitious, if awkward, 1995 novel *The Unconsole*d.’<sup>2</sup> )。

ただ、ドタバタ調で展開しながらも、その合間に一瞬人生の深淵が垣間見えるような場面を挿入するのはやはりイシグロならではの上手さで、前夫トニーが唄う CD に合わせてリンディが踊る場面 (142) や、リンディがスティーヴの吹く ‘Nearness of You’ を聞いた感想を述べる場面 (158) など、音楽が持つ力と神秘さがホテルの部屋という人工的空間に満ちていく様が巧みに描写されている。

### “Cellists”

観光客相手のバンドでサクスを吹いている「私」が、ある日、客の中にかつての同僚だったチェロ奏者ティボールを見かける。時間は7年前の夏に遡り、米人女性エロイーズ・マコーマックが、ティボールにチェロのレッスンを申し出る話が展開していく。

本編は他の四篇とは構成がやや異なっており、まず夫婦が登場しないし、物語は「私」の一人称一視点によってではなく、第三者の視点でティボールと女性の交流が語られていく。しかし、これまでの物語と同じく、時の流れが人間にもたらす理不尽で残酷な作用を縦軸とし、赤の他人を一瞬にして結びつける音楽の不思議な力を横軸として、展開する。エロイーズがティボールに “‘You have it. Most definitely. You have...potential.’” (p.195) と語る場面は、“Malvern Hills” でゾーニャが「私」に語る場面を彷彿させるし、レッスン中に語る感想・考察には含蓄がある：“‘[W]hen you played me the Rachmaninov yesterday, you were remembering an emotion. It was love, romantic love....You play that passage like it’s the memory of love. You’re so young, and yet you know desertion, abandonment. That’s why you play that third movement the way you do. Most cellists, they play it with joy. But for you, it’s not about joy, it’s about the memory of a joyful time that’s gone for ever.’” (p.204-205) 。

最後は、老年を迎えつつある平凡な楽士（「私」）が7年の月日を体に刻んだティボールと再会する場面に再び戻り、二人に通り過ぎていった時間の長さや重みを瞬時に体感させて、余韻嫋々たるエンディングを設けている。

水準以上の出来映えではあるのだが、これまでの傑作長編と比べると物足りなさを感じるのも確かであり、Kakutani ( ‘These stories ... do not share the exquisite narrative command, the carefully modulated irony or the elliptical subtlety of Mr. Ishiguro’s strongest works like *The Remains of the Day* and *Never Let Me Go*.’<sup>3</sup> ) や Hitchens ( ‘*Never Let Me Go* was so orchestrated as to slowly gather pace and rhythm from its varied sections. But these five too-easy pieces are neither absorbingly serious nor engagingly frivolous.’<sup>4</sup> ) の批判的言辞にも賛同してしまうのである。

## 2.8 Mia Eoniotita ke mia Mera: *The Buried Giant* (2015)

イシグロの最新長編は、アーサー王伝説を下敷きにして、鬼や竜が跋扈するファンタジー世界を舞台とした異色作である。かつてブリトン人とサクソン人との間に繰り広げられた血塗られた殺戮の歴史を人々の記憶から抹消するため、アーサー王は魔術師マーリンに命じて雌竜クエリグの息を霧として国全体に覆わせ、人々から戦争の記憶を消し去った——というのが「前史」としてあり、ブリトン人のアクセルとベアトリスの老夫婦が旅に出かけるところから物語が始まる。

You would have searched a long time for the sort of winding lane or tranquil meadow for which England later became celebrated. There were instead miles of desolate, uncultivated land; here and there rough-hewn paths over craggy hills or bleak moorland. (3)

イシグロの新作はアーサー王伝説を下敷きにしている、と云う予備知識を持って臨んだのに、キヤメロットの威風など殆ど感じられない「アーサー王以後」の物語なのだということが、この冒頭の数行ですぐに感じられる。

もう少し読み進めると、語りの方法論がこれまでとは全く異なっていることに気づく。従来の一人称一視点ではなく、“神の視点”を持つ語り手が、荒野を捉える大俯瞰からアクセルにぐっとズームインし、そして “[T]hese (=Axl and Beatrice) were not their exact or full names, but for ease, this is how we will refer to them. I would say this couple lived an isolated life, but in those days few were “isolated” in any sense we would understand.” (4) と続けていく。この数頁後には “You may wonder why Axl did not turn to his fellow villagers for assistance in recalling the past.” (7) という語りかけも出てきて、Oates は ‘With the first paragraph Ishiguro strikes a note of postmodernist detachment, establishing a distance between reader and text; we are aware throughout the novel of a narrative self-consciously *narrated*, in contrast to the seeming artlessness of the first-person voices of Ishiguro’s most notable previous novels, *The Remains of the Day* and *Never Let Me Go*. Here (contemporary) reader and (contemporary) author are conjoined as in a tourist’s overview of sixth-century England.’<sup>1</sup> と、指摘している。ところが、後に初めてエドウィンが現れる場面（第4章）は、描出話法によってエドウィンの視点で語られ、読み手はイシグロの意図を掴みかねて幾分当惑させられる。この点について Kakutani は、こう指摘している: ‘Instead of one reliable narrator, as he’s often used in the past, Mr. Ishiguro moves from one character’s point of view to another’s, but his prose remains flat-footed throughout – vaguely inflected with a forced old-timeyness that’s more mannered than convincing.’<sup>2</sup>

アクセルは “Had they always lived like this, just the two of them, at the periphery of the community? Or had things once been quite different? ...[T]he more he concentrated, the fainter the fragments seemed to grow. Perhaps these were just an elderly fool’s imaginings. Perhaps it was that God had never given them children.” (6-7) と、自分たちに子供がいたことさえも曖昧になってしまっていて、ベアトリスともどもほんの



数日前の記憶でさえ不確かになっている。そこでベアトリスがアクセルに “You’ve long set your heart against it, Axl, I know. But it’s time now to think on it anew. There’s a journey we must go on, and no more delay. ...A journey to our son’s village.” (18) と説得し、二人は息子を探す旅に出る。

大平野を抜けて森に入り、ローマ人が遺した長い道を二人が辿っていくと嵐の気配が漂ってきたので、古い廃屋で雨宿りをする。そこには手に兎を持つ小柄な老婆と、痩せて背の高い船頭が居て、老婆は “夫だけ島に渡し、自分は浜に置き去りにされた” と船頭を詰り、船頭は “島では皆独りきりで暮らしているが、二人が強い愛情で結ばれているなら一緒に暮らせる” と語る（この老婆は第 11 章で、船頭は最終第 17 章で再び登場する）。ベアトリスが船頭に “You spoke of the need to discover if their bond of love is such as to allow them to dwell together on the island. Well, sir, I was wondering this. How do you question them to discover what you must?” と問うと、彼はこう答える：

“If it’s a couple such as you speak of, who claim their bond is so strong, then I must ask them to put their most cherished memories before me. ... [W]hen travelers speak of their most cherished memories, it’s impossible for them to disguise the truth. A couple may claim to be bonded by love, but we boatmen may see instead resentment, anger, even hatred. Or a great barrenness. Sometimes a fear of loneliness and nothing more. Abiding love that has endured the years—that we see only rarely.” (43-44)

廃屋を後にして雨の中旅を再開すると、ベアトリスは二人の愛がしおれてしまったらどうしようとアクセルに訴え、二人はこう会話を交わす：

“How can our love wither? Isn’t it stronger now than when we were foolish young lovers?”

“But Axl, we can’t even remember those days. Or any of the years between. We don’t remember our fierce quarrels or the small moments we enjoyed and treasured. We don’t remember our son or why he’s away from us.”

“We can make all those memories come back, princess. Besides, the feeling in my heart for you will be there just the same, no matter what I remember or forget. Don’t you feel the same, princess?” (45)

本書においては、イングロが一貫して問い続ける「記憶」に加えて「愛」が導入され、*Never Let Me Go* の ‘deferral’ をちょっと連想させられたりもする。

二人は柵と濠で守られたサクソン人の村にやってくる。そこで顔見知りである村の長老アイバーが、記憶が消える原因は「神ご自身がお忘れになったのではないか」と村に立ち寄った旅人が語っていたと話す。この話を聞いたアクセルとベアトリスは、翌日こう語りあう：

“Do you suppose there’s any truth in it, Axl? What Ivor was saying last night about the mist, that it was God himself making us forget. ... It was just a thought. That perhaps God is angry about something we’ve done. Or maybe he’s not angry, but ashamed.”

“A curious thought, princess. But if it’s as you say, why doesn’t he punish us? Why makes us forget like fools even things that happened the hour before?”

“Perhaps God’s so deeply ashamed of us, of something we did, that he’s wishing himself to forget. And as the stranger told Ivor, when God won’t remember, it’s no wonder we’re unable to do so.” (76)

ここで、「記憶」「愛」に加えて「神」という概念も導入される。人智を超えて俯瞰的に人間の営み

を眺める視点はこれまで存在しなかったもので、イシグロが本作において新しい領域に足を踏み入れていることが感じ取れる。

二人が旅を続けていくと、様々な人物が登場して合流する——幼少期にブリトン人に育てられ、今はサクソン人の勇猛な戦士として名を馳せているウィスタン。鬼がある村を襲ったときに攫われ、ウィスタンが連れ戻したものの、悪鬼に嘯まれると悪鬼になるというサクソン人の迷信のせいで窮地に追い込まれる少年エドウィン。そしてアーサー王の甥にして伝説の騎士ガウェイン卿。

ベアトリスが治療を受けるためジョナス神父に会いに一同が修道院に立ち寄ると、神父は、雌竜クエリグの息が霧となって大地を覆い人間の記憶を奪っているとベアトリスに語る：

“Mistress, you seem happy to know the truth about this thing you call the mist. ... Yet are you so certain, good mistress, you wish to be free of this mist? Is it not better some things remain hidden from our minds?”

“It may be so for some, father, but not for us. Axl and I wish to have again the happy moments we shared together. To be robbed of them is as if a thief came in the night and took what’s most precious from us.”

“Yet the mist covers all memories, the bad as well as the good. Isn’t that so, mistress?”

“We’ll have the bad ones come back too, even if they make us weep or shake with anger. For isn’t it the life we’ve shared?” (157)

5人（とガウェイン卿の老馬ホレス）が共に旅をする様は一見ファンタジー小説の装いだが、では本書は、J. R. R. Tolkien の *The Lord of the Rings* と同タイプの冒険譚と考えてよいのだろうか？この点について、例えば Gainman は ‘The excitement that the book would deliver were this a more formulaic or crowd-pleasing novel are, here, when they appear, not exciting, perhaps because they would be young people’s adventures, and this is, at its heart, a book about two people who are now past all adventure.’<sup>3</sup> と人生の黄昏を迎えた老夫婦の旅が核になっていることを指摘し、また Holland は Tolkien との関連性について、‘[T]he palpable debt Ishiguro owes to the literary tradition established by *The Lord of the Rings* only makes his adaptation of it stranger and more hallucinatory. The role of Tolkien in *The Buried Giant* is akin to that of Wodehouse in *The Remains of the Day*: less a model than a fixed point to be destabilised.’<sup>4</sup> とユニークな観点で述べている。

イシグロは *TIME* 誌のインタビューで、Grossman から *Never Let Me Go* から本作まで10年も間隔があいた理由を問われると、‘I couldn’t get started. I just couldn’t get a story to fit the questions I wanted to deal with.’<sup>5</sup> と答えている。*A Pale View of Hills*, *An Artist of the Floating World*, *The Remains of the Day* までは、個人（主人公）の記憶を探る物語の「器」としてナガサキや戦後日本、第二次大戦前後の英国を用いたが、結果的に一部の批評家からはリアリスト作家という誤解を生んでしまった。そこで、*The Unconsoled* では打って変わってカフカの不条理小説という「器」で、主人公のみならず彼の両親や彼に関わる「慰めを得られざる人々 *The Unconsoled*」全体を対象とした。そしてこれ以降、*When*

*We Were Orphans* では探偵小説の「器」の中で幼年時代を未だに追い続ける人々を、*Never Let Me Go* ではクローン人間の為に作られたヘイルシャムという「器」で育った若者たちの青春群像を描いてきた。そして今回、個々の人間やコミュニティからさらに対象視野を広げて社会全体を包括的に捉え得る「器」を思索していた際、14世紀に書かれた詩 *Sir Gawain and the Green Knight* に出遭ったのが創作の契機となった——以上が、筆者の考えるイシグロ創作の軌跡である。Grossman とのインタビューでは、今回の ‘the questions I wanted to deal with’ とは ‘When is it better for a society to just agree to forget some bad things, so they don’t disintegrate into civil war or disorder or chaos?’ であり、特定の国の物語として書くことを望まなかったので、‘I wanted to take a little step back from these specific cases and try and look at this in a slightly more abstract or slightly more metaphorical level.’<sup>6</sup> と述べている。

旅が進むにつれて、各々の過去が読み手にも少しずつ露わになってくる。かつてブリトン人がサクソン人を虐殺したことに対する憎悪を忘れていないウィスタンは、エドウィンにブリトン人に対する憎しみの感情を移植／保持させ、ブリトン人に復讐する次世代の剣士として育てようとする。そして人々の記憶を消し去る霧を作り出している雌竜クエリグを殺すことで、ブリトン人がサクソン人に対して行った残虐の記憶を蘇らそうとする。一方ガウエイン卿はというと、竜を殺すのは自分にしか果たし得ない使命であると公言していたのは、実は民族間の傷を癒すために竜を生き永らえさせ戦いの記憶を消し去ることが目的であった。ウィスタンはガウエイン卿を倒し竜の首も刎ねた結果、人々の記憶は蘇り始め、アクセルとウィスタンはこう語る：

“You and I longed for Querig’s end, thinking only of our own dear memories. Yet who knows what old hatreds will loosen across the land now? We must hope God yet finds a way to preserve the bonds between our peoples, yet custom and suspicion have always divided us. Who knows what will come when quick-tongued men make ancient grievances rhyme with fresh desire for land and conquest?”

“How right to fear it, sir,” Wistan said. “The giant, once well buried, now stirs. When soon he rises, as surely he will, the friendly bonds between us will prove as knots young girls make with stems of small flowers.” (297)

そしてウィスタンは、アクセルたちと共に時間を過ごしたことで意志が弱くなってしまったので、エドウィンを自分に代わる者とする と付け加える：‘I’ll soon offer in my place one trained by my own hand, one with a will far cleaner than mine.’ (297)

ここで終わっていたら、神話的な悲劇というか汎宇宙的なフォーカスを保持して物語が閉じられるのだが、最後はもう一度老夫婦に焦点が移り、読み手に保留されていた幾つかの謎が解明される。アクセルとベアトリスの間の忘れられた過去——かつてベアトリスが不貞を働き、アクセルにも別の女がいて、そのことで息子が親の元を去り疫病に倒れてしまった——が蘇る。記憶が戻った二人が行き着いた先は島を望む海岸べりで、そこに第2章で出てきた船頭が再び登場する。二人は一緒に島へ連れて行ってくれと頼み、アクセルとベアトリスはこう言葉を交わす：

“Tell me, princess, ...Are you glad of the mist’s fading?”

“It may bring horrors to this land. Yet for us it fades just in time.”

“I was wondering, princess. Could it be our love would never have grown so strong down the years had the mist not robbed us the way it did? Perhaps it allowed old wounds to heal.” (316)

アクセルとベアトリスは、霧に記憶を奪われたことによって、却って二人の愛が強固になった。「忘却」という安全装置が消滅した今、民族間・国家間の憎悪と殺戮は再び始まることになるだろうが、個人の間では真実の愛と赦しが萌芽し、それが世界の争いを消滅させる可能性は持ちえないだろうか？——二人の言葉は、そのようなイシグロの祈りと願いを象徴しているかのようである。

*The Remains of the Day* と *Never Let Me Go* が絶賛評で埋め尽くされたのに対し、本作は *The Unconsoled* ほどではないにしても、賛否両論相半ばした。Kakutani は、‘Mr. Ishiguro seems to have renounced the qualities – precision, elliptical understatement and indirection – that lent his two masterworks, *The Remains of the Day* and *Never Let Me Go*, a tensile strength, and he’s instead embraced a fablelike primitivism that hobbles his instinctive talents. Worse, he has failed here to create a persuasive or fully imagined fictional world.’<sup>7</sup> とかなり手厳しい評価を下しているし、Gaiman も ‘Fantasy and historical fiction and myth here run together with the Matter of Britain, in a novel that’s easy to admire, to respect and to enjoy, but difficult to love.’<sup>8</sup> と、手放しの絶賛にまでは至っていない。これは恐らく、本書が allegorical reading を読み手に要求する点に由来するものであり、例えば Preston は、霧の存在から Camus *La Peste* を連想し、‘We can view the “buried giant” as the way history has been swept over any number of genocides, from Armenia to Rwanda. It may even be an explanation for the disappearance of the Britons – killed not by marauding Saxons, but by their own guilt.’<sup>9</sup> と述べている。

では筆者はこの小説をどう読んだかというと、イシグロが人間の暴力をここまでストレートに描いたのは初めてであり、世界を——これまでのように個人の内的世界の延長ではなく——敷衍的かつ俯瞰的に捉えようとしたのも初めてで、現代世界に渦巻いている動乱のパルスを作品の中に取り込もうとするイシグロの野心と意欲を強く感じる。ただそれを、ストレートな戯画や哄笑的ファースとして描くのではなく、様々な読みを許容する多層多元構造的の世界として提示したのが実にイシグロらしいし、そこにこそ本書の魅力がある。故井上ひさしが「9.11」の勃発に衝撃を受け、暴力の連鎖は断ち切れるかを主題として傑作戯曲『ムサシ』を生み出したように、集団による記憶の継承の是非と云う極めて現代的（同時代的）でアクチュアルな問題に真正面から取り組んだ結果の産物——筆者は、そう受け止めている。

### 3 The Abyss beneath Our Illusory Sense of Connection with the World

#### 3.1 My Twentieth Century Evening

2017年10月5日、The Swedish Academy は本年度のノーベル文学賞をカズオ・イシグロに授与すると発表し、その受賞理由は「感情に強く訴える小説で、人が世界と繋がっているという幻想の下に潜む深淵を明るみにしてきた」というものであった（The Nobel Prize in Literature 2017 was awarded to Kazuo Ishiguro “who, in novels of great emotional force, has uncovered the abyss beneath our illusory sense of connection with the world”）。ちなみにニューヨーク・タイムズ紙は受賞報道の中で、‘Ishiguro, the first writer of Japanese birth to win the Nobel since Kenzaburo Oe in 1994, is an artist of restraint and equipoise. None of his novels is the same as the last, yet he has achieved over the course of his career a remarkable consistency of affect. He creates worlds that are clear in a sentence-by-sentence way, but in which the big picture recedes against the horizon. His novels are about discovery and revelation, and how slowly they arrive even for the most meticulous observer.’<sup>1</sup> と記し、彼の作品の特徴と個性を巧みに要約している。

その2か月後、イシグロは授賞式に先立つ12月7日に、ストックホルムで記念講演を行った。“My Twentieth Century Evening and Other Small Breakthroughs” と題するレクチャーでは、作家としてデビューするに至った経緯や、作品の創作裏話、あるいは重要なテーマである「記憶と忘却」等を率直に語っている。この中から、本稿に関連が深い項目について三つ紹介しておきたい。

1983年春、*A Pale View of Hills* の出来映えに自分なりに誇りを感じていたものの、最初のTVドラマ脚本と方法論の面で余りに似通っていることにある日気づいた。文学ならではの表現形態とは何かを模索していたところ、風邪に寝込んだとき偶々ブルーストの『失われた時を求めて』を手にとったことで、自分独自の方法論に目覚めた：

[M]y wish now was to write fiction that could work properly *only on the page*. ...How could written fiction hope to survive against the might of cinema and television if it didn't offer something unique, something the other forms couldn't do? ...If I could go from one passage to the next according to the narrator's thought associations and drifting memories, I could compose in something like the way an abstract painter might choose to place shapes and colours around a canvas. I could place a scene from two days ago right beside one from twenty years earlier, and ask the reader to ponder the relationship between the two. In such a way, I began to think, I might suggest the many layers of self-deception and denial that shrouded any person's view of their own self and of their past.<sup>2</sup>

この次に手掛ける *An Artist of the Floating World* 以降、イシグロ作品の基底となる独自の方法論が開花する予兆が語られている。

1999年10月、ドイツの詩人ホイブナーが代表を務める国際アウシュビッツ委員会から招かれ、

ポーランドのアウシュビッツ強制収容所跡地を訪れる。跡地は厳しい気候にさらされて損壊が激しく、管理している人は覆いを取り付けて保存すべきなのか、そのまま朽ち果てさせるべきかのディレンマを抱えていると教えられる。第二次大戦の体験・記憶などは親の世代のみに属するものだと思ってきたが、朽ち果てつつある収容地を自分の目を見て、親の記憶を次世代に伝えるのが作家としての義務だと強く感じる。そのすぐ後に東京で講演をした折、これから（稲葉註：この時点では *The Unconsoled* が最新作）個人の過去との折り合いといった領域を扱っていくのかと聴衆から質問を受け、用意していたものとは全く異なる答えを咄嗟に口にする：

[I]n the future, what I really wished to do was to write a story about how a nation or a community faced these same questions. Does a nation remember and forget in much the same way as an individual does? Or are there important differences? What exactly are the memories of a nation? Where are they kept? How are they shaped and controlled? Are there times when forgetting is the only way to stop cycles of violence, or to stop a society disintegrating into chaos or war? On the other hand, can stable, free nations really be built on foundations of wilful amnesia and frustrated justice? I heard myself telling the questioner that I wanted to find a way to write about these things, but that for the moment, unfortunately, I couldn't think how I'd do it.<sup>3</sup>

この時点では「残念ながら、今はまだ書く方法が見つかっていない」と答えたイングロだが、それから16年を経て「書く方法」が見出された作品は、*The Buried Giant* という形に結実することになった。

2001年のとある夜。イングロは妻ローナと一緒に一本の映画(VHS)を自宅で見始めた。その映画とは、演題になっている *Twentieth Century*（邦題『特急二十世紀』、1933年制作・公開、監督：ハワード・ホークス、主演・ジョン・バリモア、キャロル・ロンバード）で、この映画を見た夜が自分のターニングポイントになったと語る。ホークスは大好きな監督だし、バリモアも大好きな俳優なのに、何故か作品にのめりこむことが出来ない。その理由をあれこれと考え、そこから一つの啓示を得る：

The thought came to me – as I continued to stare at John Barrymore – that all good stories, never mind how radical or traditional their mode of telling, had to contain relationships that are important to us; that move us, amuse us, anger us, surprise us. Perhaps in future, if I attended more to my relationships, my characters would take care of themselves. ...I see it now as a turning point, comparable with the others I've been describing to you today. From then on, I began to build my stories in a different way. When writing my novel *Never Let Me Go*, for instance, I set off from the start by thinking about its central relationships triangle, and then the other relationships that fanned out from it.<sup>4</sup>

*Twentieth Century* を観てから4年後、イングロの——筆者を含め多くの人がそう評価する——最高傑作 *Never Let Me Go* が送り出される。とすれば、私たちはハワード・ホークスやジョン・バリモアに感謝しなければならないのかもしれない。

### 3.2 What Is World Literature?

ハーヴァード大学で比較文学論を研究している David Damrosch が著した、*What Is World Literature?* という名著がある。この書でダムロッシュは「世界文学とは何か？」という途方もなく大きな問題を論じ、彼なりの結論として次のような解答を提示している：

1. World literature is an elliptical refraction of national literatures.
2. World literature is writing that gains in translation.
3. World literature is not a set canon of texts but a mode of reading: a form of detached engagement with worlds beyond our own place and time.<sup>1</sup>

ダムロッシュが主張していることをごく簡単にまとめると、「世界文学の特徴は可変性に在り、翻訳というフィルターを通して、発祥文化を超えた別の土壌の中でより多くを得ることが出来る。他方、可変性が乏しく翻訳のフィルターを通すと貧しくなってしまう作品は、ローカルな国民文学にとどまって世界文学とは成り得ない」ということになる。

従来の原典 (canon) 至上主義的「読み」の枠にとらわれず、時代と空間を超越して普遍性・汎世界性を有するものが世界文学であると云う観点に立った場合、紛れもなくイシグロ作品は「世界文学」であると筆者は確信している。

そもそもイシグロの文体は、奇を衒わず癖の無い文体であるから、英語以外の言語に翻訳しやすい、英語圏の人間にしか理解不能なローカリズムの要素も少ない。例えば、*The Remains of the Day* を、主人公を殿様に律儀なほど忠実に使える家臣に置き換えれば日本でも充分成立する。あるいは、*Never Let Me Go* だと、最初は人間に奉仕するために造り出されたクローンの過酷な運命という SF 的設定に衝撃を受けるが、読み進めていくうちに、キャシーやトミーたちの青春群像が、いつの時代にもどこにでもある普遍的で身近な関係性にどんどん引き込まれていく。本稿で繰り返し言及してきたように、第二次大戦前後の英国やクローン人間専門の施設は寓話的な設定に過ぎず、イシグロ作品の魅力は、そのような状況下で育まれる人間関係を繊細な筆致で描くことにこそ在り、大仰に言えば、彼の文学は或る状況下で人はどう生きるかを問う思考実験的な哲学小説とも言える。*Never Let Me Go* を論じた際に引用したイシグロの発言に再度触れれば、かつて世界文学が取り組んできた「人間とは何か」「魂とは何か」と云う問題に対して、寓意性と象徴性を高める手法によって果敢に挑んでいるのがカズオ・イシグロなのである。

彼がノーベル賞記念講演で語った「全ての優れた物語を成立させる条件」(all good stories had to contain relationships that are important to us; that move us, amuse us, anger us, surprise us.) を満たすイシグロ文学こそ、時代と空間を超越して普遍性・汎世界性を有する「世界文学」と呼ぶに相応しいものではないだろうか。

## お わ り に

*When We Were Orphans* にこんな場面がある。両親を亡くし自分の養女として受け入れることにしたジェニファーを慰めようと、バンクスがこう語りかける：

‘It’s very difficult sometimes, I know. It’s as though your whole world’s collapsed around you. But I’ll say this for you, Jenny. You’re making a marvellous job of putting the pieces together again. You really are.

I know it can never be quite the same, but I know you have it in you to go on now and build a happy future for yourself. And I’ll always be here to help you, I want you to know that.’ (Ch. 11 p. 149)

「君は、壊れた欠片をもう一度繋ぎ合わせるという素晴らしい努力をしているんだ」とジェニファーを励ますバンクスは、新たな姿勢で過去に対峙してその意味と意義を捉えなおし、幸福な未来を再構築しようとする人間の営みの姿を象徴している——筆者の目にはそう映る。過去を取り戻すことが出来ない客観的事実を認めつつも、過去を想起する者のみが成し得る再創造の意義を、イシグロは信じているに違いない。

だからこそ、イシグロ作品はこんなにも人を惹きつけてやまない。翻訳家の柴田元幸は、こう述べる：「記憶という実はきわめて曖昧なものを通して、人が自分の過去と、さらには自分自身と向きあうことの困難と英雄性を主たるテーマに、読み応えある物語を端正な文章で綴った作品を着実に発表してきた。(中略) 組織や世界を牽引していくいわゆるヒーローではなく、組織やより上位の個人に仕える人間のささやかな英雄性にこの人は目を向けてきた。多くの読者の共感を得てきた一因もそこにあるのだと思う」<sup>1</sup>。

この拙稿に取り組むに当たり、もう一度まっさらな目でイシグロ作品を刊行順に熟読玩味し、気になる箇所、心を引かれる一節があればその都度立ち止まって、暫し考察に浸ってきた。読めば読むほど、読み返す度に、作品の奥から仄見える静謐で穏やかな光に魅了され、時には癒され、時には畏怖の念を感じ、新たな発見をしてきた。その人と同時代を生きる幸せ、その新作を待つことが出来る僥倖をこれほど強く感じさせてくれる作家は、筆者の場合 Kazuo Ishiguro をおいて他には居ない。

蛇足を一つ。本稿のタイトル、および “2. Memory, an Unreliable Thing” の個々の章に付した副題は、いずれも映画題名もしくはそのもじりである (Notes にオリジナルタイトルを付記)。大の映画好きのイシグロに習って戯れてみたので御寛容のほどを。

最後に、ノーベル文学賞授与の発表に際してスウェーデン・アカデミー事務次官サラ・ダニウスが述べた言葉を引用して、本稿の結びとしたい。

If you mix Jane Austen and Franz Kafka, then you have Kazuo Ishiguro – but you have to add a little bit of Marcel Proust into the mix, and then you stir, but not too much, and then you have his writings.<sup>2</sup>



## Notes

はじめに

- 1 Kazuo Ishiguro, *A Pale View of Hills*, p. 156.

### 1. 石黒一雄から Kazuo Ishiguro へ (1954- )

- 1 Bill Bryson, 'Between Two Worlds', *The New York Times*, (April 29, 1990).

### 2. Memory, an Unreliable Thing (1982- )

#### 2.1 Nagasaki Mon Amour: *A Pale View of Hills* (1982)

- 1 Dylan Krider, 'Rooted in a Small Space: An Interview with Kazuo Ishiguro', *Kenyon Review* 20, (1998), p. 150.
- 2 Gregory Mason, 'An Interview with Kazuo Ishiguro', *Contemporary Literature* 30, (1989), p. 336.
- 3 Brian W. Shaffer, *Understanding Kazuo Ishiguro*. (University of South Carolina Press, 1998), p. 36-37.
- 4 Cynthia Wong, 'The Shame of Memory: Blanchot's Self-Dispossession in Ishiguro's *A Pale View of Hills*', *CLIO: A Journal of Literature, History, and the Philosophy of History* 24 (1995), p.142-143.
- 5 Mason, p. 337.
- 6 Edith Milton, 'In a Japan Like Limbo', *New York Times Book Review*, (May 9, 1982).

#### 2.2 Late Autumn: *An Artist of the Floating World* (1986)

- 1 柴田元幸「幸福な記憶から外にでること」『ユリイカ』(青土社、2017年12月号)、p. 27.
- 2 Mason, 'An Interview with Kazuo Ishiguro', *Contemporary Literature* 30, (1989), p. 345.
- 3 Margaret Scanlan, 'Mistaken Identities: First-Person Narration in Kazuo Ishiguro', *Journal of Narrative and Life History*, 3:2 & 3 (1993), p.141.

#### 2.3 Pride and Preoccupation: *The Remains of the Day* (1989)

- 1 Bill Bryson, 'Between Two Worlds', *The New York Times*, (April 29, 1990).
- 2 Mark Kamine, 'A Servant of Self-Deceit', *The New Leader* (November 13, 1989), p.21.
- 3 Kathleen Wall, 'The Remains of the Day and Its Challenges to Theories of Unreliable Narration', *Journal of Narrative Technique* 24 (1994), p.24.
- 4 James M. Lang, 'Public Memory, Private History: Kazuo Ishiguro's *The Remains of the Day*', *CLIO: A Journal of Literature, History, and the Philosophy of History* 29:2 (2000), p.151.
- 5 Lawrence Graver, 'What the Butler Saw', *The New York Times* (October 8, 1989).
- 6 Susie O'Brien, 'Serving a New World Order: Postcolonial Politics in Kazuo Ishiguro's *The Remains of the Day*', *Modern Fiction Studies* 42:4 (1996), p.789-790.
- 7 James Phelan and Mary Patricia Martin, "'The Lessons of Weymouth': Homodiegesis, Unreliability, Ethics, and *The Remains of the Day*', *Narratologies: New Perspectives on Narrative Analysis* (Columbus, OH: Ohio State University Press, 1999), p.105-106.
- 8 Graver (1989).
- 9 丸谷才一「海を見ながら泣く執事 現在のイギリスに対する愛惜と洞察」『週刊朝日』(朝

日新聞社、1990年11月16日号)、p. 125-126.

2.4 El Angel Exterminador: *The Unconsoled* (1995)

- 1 James Wood, 'Ishiguro in the Underworld', *The Guardian* (May 5, 1995), p. 5.
- 2 Vince Passano, 'New Flash from an Old Isle', *Harper's* (October, 1995), p.74.
- 3 Barry Lewis, *Kazuo Ishiguro* (Manchester: Manchester University Press, 2000), p. 108.
- 4 Michiko Kakutani, 'From Kazuo Ishiguro, A New Annoying Hero' *The New York Times* (October 17, 1995).
- 5 Michael Wood, 'The Discourse of Others', *Children of Silence: Studies in Contemporary Fiction* (London: Pimlico, 1995), p. 173.
- 6 Thomas Pynchon, *Gravity's Rainbow* (1973).
- 7 Brooke Allen, 'Leaving Behind Daydreams for Nightmares', *Wall Street Journal* (October 11, 1995).
- 8 Mel Gussow, 'Forsaking the Specific To Dive Into Dreams' *The New York Times* (November 2, 1995).
- 9 Sybil Steinberg, 'A Book About Our World', *Publisher's Weekly* (September 18, 1995), p. 105.
- 10 Rachel Cusk, 'Journey to the End of the Day', *The Times* (May 11, 1995).
- 11 Lewis, (2000), p. 123.
- 12 柴田元幸、『わたしを離さないで』解説 (早川書房、2006年) p. 346-347.
- 13 Lev Grossman and Radhika Jones, 'Paging Summer', *TIME* (July 8-15, 2013), p.100.

2.5 Au Revoir les Enfants: *When We Were Orphans* (2000)

- 1 Maya Jaggi, 'In Search of Lost Crimes', *The Guardian* (April 1, 2000).
- 2 Michiko Kakutani, 'The Case He Can' Solve: A Detective's Delusions', *The New York Times* (September 19, 2000).
- 3 Suzie Mackenzie, 'Between Two Worlds', *The Guardian* (March 25, 2000).
- 4 Brian W. Shaffer, 'When We Were Orphans', *World Literature Today* 74.3 (Summer, 2000), p.595.
- 5 James Wood, 'The Unconsoled', *The New Republic* 223.16 (October 16, 2000), p. 148.
- 6 三村たかひろ、『より良きノスタルジアのために』『ユリイカ』(青土社、2017年) p. 184.

2.6 Children of Men: *Never Let Me Go* (2005)

- 1 平井杏子、『カズオ・イシグロ 境界のない世界』(水声社、2011年) p. 194-195.
- 2 James Wood, 'The Human Difference', *The New Republic* (May 16, 2005), p. 36.
- 3 Michiko Kakutani, 'Sealed in a World That's Not as It Seems', *The New York Times* (April 4, 2005).
- 4 Kazuo Ishiguro, 'Future Imperfect', *The Guardian* (March 25, 2006).
- 5 Suzie Mackenzie, 'Between Two Worlds', *The Guardian* (March 25, 2000).
- 6 Ishiguro, (2006).
- 7 Joseph O'Neill, 'Never Let Me Go', *The Atlantic Monthly* 295.4 (May, 2005), p. 123.
- 8 Kakutani, (2005).
- 9 Margaret Atwood, 'Brave New World', *Slate* (April 1, 2005).
- 10 Ishiguro, (2006).

- 11 平井、(2011 年) p. 184.
  - 12 Sarah Kerr, 'When They Were Orphans', *The New York Times* (April 17, 2005).
  - 13 Atwood, (2005).
  - 2.7 Before Midnight: *Nocturnes Five Stories of Music and Nightfall* (2009)
    - 1 Tom Fleming, 'Heartbreak in Five Movements', *The Guardian* (May 10, 2009).
    - 2 Michiko Kakutani, 'Two Storytellers, singing the Blues', *The New York Times* (October 22, 2009).
    - 3 Kakutani, (2009).
    - 4 Christopher Hitchens, 'Fade to Black', *The New York Times* (October 4, 2009).
  - 2.8 Mia Eoniotita ke mia Mera: *The Buried Giant* (2015)
    - 1 Joyce Carol Oates, 'The Remains of the Britons', *The New York Review of Books* (April 2, 2015).
    - 2 Michiko Kakutani, 'In The Buried Giant, Ishiguro Revisits Memory and Denial', *The New York Times* (February 23, 2015).
    - 3 Neil Gaiman, 'Kazuo Ishiguro's *The Buried Giant*', *The New York Times* (February 25, 2015).
    - 4 Tom Holland, 'Kazuo Ishiguro ventures into Tolkien Territory', *The Guardian* (March 4, 2015).
    - 5 Lev Grossman, 'The Return of the King', *TIME* (March 9, 2015), p.50.
    - 6 Grossman, (2015), p.50.
    - 7 Kakutani, (2015).
    - 8 Gaiman, (2015).
    - 9 Alex Preston, 'Game of Thrones with a Conscience', *The Guardian* (March 1, 2015).
  - 3. The Abyss beneath Our Illusory Sense of Connection with the World**
  - 3.1 My Twentieth Century Evening
    - 1 Dwight Garner, 'Kazuo Ishiguro, a Nobel Winner Whose Characters Are Caught Between Worlds' *The New York Times* (October 5, 2017).
    - 2 Kazuo Ishiguro, *My Twentieth Century Evening and Other Small Breakthroughs* The Nobel Lecture (Faber and Faber, 2017), p.15-17.
    - 3 Ishiguro, (2017), p. 25.
    - 4 Ishiguro, (2017), p.29.
  - 3.2 What Is World Literature?
    - 1 David Damrosch, *What Is World Literature?* (Princeton University Press, 2003), p. 281.
- おわりに
- 1 柴田元幸、「ささやかな英雄性 共感呼ぶ」(朝日新聞、2017 年 10 月 9 日) .
  - 2 Dwight Garner, 'Kazuo Ishiguro, a Nobel Winner Whose Characters Are Caught Between Worlds' *The New York Times* (October 5, 2017).

- The Unbearable Lightness of Being (『存在の耐えられない軽さ』 原作：ミラン・クンデラ、監督：フィリップ・カウフマン／米／1988 年)
- 2.1 Hiroshima Mon Amour (『二十四時間の情事』 監督：アラン・レネ／日＝仏／1959 年)
- 2.2 Late Spring (『晩春』 監督：小津安二郎／日／1949 年)
- 2.3 Pride and Prejudice (『プライドと偏見』 原作：ジェーン・オースティン、監督：ジョー・ライト／英／2005 年)
- 2.4 El Angel Exterminador (『皆殺しの天使』 監督：ルイス・ブニュエル／メキシコ／1962 年)
- 2.5 Au Revoir les Enfants (『さよなら子供たち』 監督：レイ・マル／仏／1987 年)
- 2.6 Children of Men (『トゥモロー・ワールド』 監督：アルフォンソ・キュアロン／英＝米／2006 年)
- 2.7 Before Midnight (『ビフォア・ミッドナイト』 監督：リチャード・リンクレイター／米／2013 年)
- 2.8 Mia Eoniotita ke mia Mera (『永遠と一日』 監督：テオ・アンゲロプロス、ギリシア＝仏＝伊／1998 年)

# BIBLIOGRAPHY

## I. Works by Ishiguro

### A. Novels

*A Pale View of Hills.* London: Faber and Faber, 1982.

*An Artist of the Floating World.* London: Faber and Faber, 1986.

*The Remains of the Day.* London: Faber and Faber, 1989.

*The Unconsoled.* London: Faber and Faber, 1995.

*When We Were Orphans.* London: Faber and Faber, 2000.

*Never Let Me Go.* London: Faber and Faber, 2005.

*The Buried Giant.* London: Faber and Faber, 2015.

### B. Short Story Collections

*Nocturnes Five Stories of Music and Nightfall.* London: Faber and Faber, 2009.

### C. Short Stories

“A Strange and Sometimes Sadness”, *Introduction 7: Stories by New Writers*, Faber and Faber, 1981.

“Waiting for J”, *Introduction 7: Stories by New Writers*, Faber and Faber, 1981.

“Getting Poisoned”, *Introduction 7: Stories by New Writers*, Faber and Faber, 1981.

“A Family Supper”, *Quatro* 1981.

“Summer after the War”, *Granta* 7, 1983.

“October, 1948”, *Granta* 17, 1985.

“A Village After Dark”, *The New Yorker*, May 21 2001.

### D. The Nobel Lecture

*My Twentieth Century Evening and Other Small Breakthroughs.* London: Faber and Faber, 2017.

## 邦訳一覧

- “A Strange and Sometimes Sadness” 1981 未邦訳
- “Waiting for J” 1981 未邦訳
- “Getting Poisoned” 1981 未邦訳
- “A Family Supper” 1981 「ある家族の夕餉」出淵博訳 『すばる』1984年2月号
- A Pale View of Hills* 1982 『女たちの遠い夏』小野寺健訳 筑摩書房、1984年；『遠い山なみの光』早川文庫、2001年（同訳者による改題・改訳）
- “Summer after the War” 1983 「戦争のすんだ夏」小野寺健訳 『Esquire 日本語版』1990年12月号
- “October, 1948” 1985 未邦訳
- An Artist of the Floating World* 1986 『浮世の画家』飛田茂雄訳 中央公論社、1988年；早川文庫、2006年
- The Remains of the Day* 1989 『日の名残り』土屋政雄訳 中央公論社、1990年；早川文庫、2001年
- “The Gourmet” 1993 「ザ・グルメ」（テレビ脚本）柴田元幸訳 『MONKEY』vol.10 2016年
- The Unconsoled* 1995 『充たされざる者』古賀林幸訳 中央公論社、1997年；早川文庫、2007年
- When We Were Orphans* 2000 『わたしたちが孤児だったころ』入江真佐子訳 早川書房、2001年；早川文庫、2006年
- “A Village After Dark” 2001 「日の暮れた村」柴田元幸訳 『紙の空から』晶文社、2006年
- Never Let Me Go* 2005 『わたしを離さないで』土屋政雄訳 早川書房、2006年；早川文庫、2008年
- Nocturnes: Five Stories of Music and Nightfall* 2009 『夜想曲集 音楽と夕暮れをめぐる五つの物語』土屋政雄訳 早川書房、2009年；早川文庫、2011年
- The Buried Giant* 2015 『忘れられた巨人』土屋政雄訳 早川書房、2015年；早川文庫、2017年

## II. Works on Ishiguro

### A. Books Devoted to Kazuo Ishiguro

- Beedham, Matthew. *The Novels of Kazuo Ishiguro*. Hampshire: Palgrave Macmillan, 2010.
- Herbert, Marilyn. *Bookclub-in-a-Box Discusses Never Let Me Go, the Novel by Kazuo Ishiguro*. Tronto: Bookclub-in-a-Box, 2008.
- Lewis, Barry. *Kazuo Ishiguro*. Manchester: Manchester University Press, 2000.
- Matthews, Sean & Groes, Sebastian (ed.). *Kazuo Ishiguro: Contemporary Critical Perspectives*. N.Y. and London: The Continuum International Publishing, 2009.
- Parkes, Adam. *Kazuo Ishiguro's The Remains of the Day: A Reader's Guide*, N. Y. and London: The Continuum International Publishing, 2001.
- Perry, Mike. *Narratives of Memory and Identity: The Novels of Kazuo Ishiguro*. Frankfurt: Peter Lang, 1999.
- Peters Sarah. "Remains of the Day", *Kazuo Ishiguro*. London: York Press, 2000.
- Shaffer, Brian W., *Understanding Kazuo Ishiguro*. Columbia, SC: University of South Carolina Press, 1998
- Shaffer, Brian W. & Wong, Cynthia F. ed. *Conversations with Kazuo Ishiguro*. Mississippi: University Press of Mississippi, 2008
- Sim, Wai-chew. *Globalization and Dislocation in the Novels of Kazuo Ishiguro*. N.Y.: Edwin Mellen Press, 2006.
- Sim, Wai-chew. *Kazuo Ishiguro: A Routledge Guide*. N.Y. and London: Routledge, 2010.
- Wang, Ching-chih. *Homeless Strangers in the Novels of Kazuo Ishiguro: Floating Characters in a Floating World*. UK: Edwin Mellen Press, 2009.
- Wong, Cynthia F., *Kazuo Ishiguro*. Plymouth: Northcote House, 2000

平井杏子『カズオ・イシグロ 境界のない世界』水声社、2011 年  
小池昌代+阿部公彦+平井杏子+中川僚子+遠藤不比人+新井潤美+藤田由季美+木下卓+岩田託子+武井博美『カズオ・イシグロの世界』水声社、2017 年  
『ユリイカ』カズオ・イシグロの世界 青土社、2017 年 12 月号

### B. Selected Essays of the Fiction of Kazuo Ishiguro

- Allen, Brooke. 'Leaving Behind Daydreams for Nightmares', *Wall Street Journal* (October 11, 1995).
- Atwood, Margaret. 'Brave New World', *Slate* (April 1, 2005).
- Bryson, Bill. 'Between Two Worlds', *The New York Times*, (April 29, 1990).

- Cusk, Rachel. 'Journey to the End of the Day', *The Times* (May 11, 1995).
- De Jongh, Nicholas. 'Life after the Bomb', *Guardian* (February 22, 1982).
- Fleming, Tom. 'Heartbreak in Five Movements', *Guardian* (May 10, 2009).
- Gaiman, Neil. 'Kazuo Ishiguro's *The Buried Giant*', *The New York Times* (February 25, 2015).
- Garner, Dwight. 'Kazuo Ishiguro, a Nobel Winner Whose Characters Are Caught Between Worlds' *The New York Times* (October 5, 2017).
- Graver, Lawrence. 'What the Butler Saw', *The New York Times* (October 8, 1989).
- Grossman, Lev and Jones, Radhika. 'Paging Summer', *TIME* (July 8-15, 2013).
- Grossman, Lev. 'The Return of the King', *TIME* (March 9, 2015).
- Gussow, Mel. 'Forsaking the Specific To Dive Into Dreams' *The New York Times* (November 2, 1995).
- Hitchens, Christopher. 'Fade to Black', *The New York Times* (October 4, 2009).
- Holland, Tom. 'Kazuo Ishiguro ventures into Tolkien Territory', *The Guardian* (March 4, 2015).
- Jaggi, Maya. 'In Search of Lost Crimes', *Guardian* (April 1, 2000).
- Kakutani, Michiko. 'From Kazuo Ishiguro, A New Annoying Hero' *The New York Times* (October 17, 1995).
- . 'The Case He Can' Solve: A Detective's Delusions', *The New York Times* (September 19, 2000).
- . 'Sealed in a World That's Not as It Seems', *The New York Times* (April 4, 2005).
- . 'Two Storytellers, singing the Blues', *The New York Times* (October 22, 2009).
- . 'In The Buried Giant, Ishiguro Revisits Memory and Denial', *The New York Times* (February 23, 2015).
- Kamine, Mark. 'A Servant of Self-Deceit', *The New Leader* (November 13, 1989).
- Kerr, Sarah. 'When They Were Orphans', *The New York Times* (April 17, 2005).
- Krider, Dylan. 'Rooted in a Small Space: An Interview with Kazuo Ishiguro', *Kenyon Review* 20, (1998).
- Lang, James M.. 'Public Memory, Private History: Kazuo Ishiguro's *The Remains of the Day*', *CLIO: A Journal of Literature, History, and the Philosophy of History* 29:2 (2000).
- Mackenzie, Suzie. 'Between Two Worlds', *Guardian* (March 25, 2000).
- Mason, Gregory. 'An Interview with Kazuo Ishiguro', *Contemporary Literature* 30, (1989).
- Milton, Edith. 'In a Japan Like Limbo', *New York Times Book Review*, (May 9, 1982).
- Menand, Louis. 'Anxious in Dreamland', *New York Times Book Review*, (October 15, 1995).
- Morton, Kathryn. 'After the War Was Lost', *New York Times Book Review*, (June 8, 1986).
- Oates, Joyce Carol. 'The Remains of the Britons', *The New York Review of Books* (April 2, 2015).
- O'Brien, Susie. 'Serving a New World Order: Postcolonial Politics in Kazuo Ishiguro's *The Remains of the Day*', *Modern Fiction Studies* 42:4 (1996).
- O'Neill, Joseph. 'Never Let Me Go', *The Atlantic Monthly* 295.4 (May, 2005).
- Passano, Vince. 'New Flash from an Old Isle', *Harper's* (October, 1995).
- Phelan, James and Martin, Mary Patricia. "'The Lessons of Weymouth": Homodiegesis, Unreliability,



- Ethics, and *The Remains of the Day*', *Narratologies: New Perspectives on Narrative Analysis* (Columbus, OH: Ohio State University Press, 1999).
- Preston, Alex. 'Game of Thrones with a Conscience', *The Guardian* (March 1, 2015).
- Scanlan, Margaret. 'Mistaken Identities: First-Person Narration in Kazuo Ishiguro', *Journal of Narrative and Life History*, 3:2 & 3 (1993).
- Shaffer, Brian W.. 'When We Were Orphans', *World Literature Today* 74.3 (Summer, 2000).
- Steinberg, Sybil. 'A Book About Our World', *Publisher's Weekly* (September 18, 1995).
- Wall, Kathleen. 'The Remains of the Day and Its Challenges to Theories of Unreliable Narration', *Journal of Narrative Technique* 24 (1994).
- Wong, Cynthia. 'The Shame of Memory: Blanchot's Self-Dispossession in Ishiguro's *A Pale View of Hills*', *CLIO: A Journal of Literature, History, and the Philosophy of History* 24 (1995).
- Wood, James. 'Ishiguro in the Underworld', *The Guardian* (May 5, 1995).
- . 'The Unconsoled', *The New Republic* 223.16 (October 16, 2000).
- . 'The Human Difference', *The New Republic* (May 16, 2005).
- Wood, Michael. 'The Discourse of Others', *Children of Silence: Studies in Contemporary Fiction* (London: Pimlico, 1995).
- . 'Sleepless Nights', *New York Review of Books* (December 21, 1995).



## 岩崎賞受賞者およびタイトル一覧

### 第1回（昭和57年度）

富士根 秀 雄（大野高等学校） “EXPRESS YOURSELF SERIES”

### 第2回（昭和58年度）

松 田 通 彦（若狭高等学校） 「言語活動を中心にした英語Ⅱ指導の一試案」

### 第3回（昭和59年度）

小 林 誠（藤島高等学校） 「生き生きした英語授業実践のための一試論」

### 第4回（昭和60年度）

堀 治 市（武生高等学校） 「自由英作文 第2集」

### 第5回（昭和61年度）

加 藤 英 和（丹南高等学校） 「英語の語法研究覚書（5）」

### 第6回（昭和62年度）

大野高等学校英語科

「英語Ⅰ・英語Ⅱ・英語ⅢBにおける英文音読についての研究」

内 藤 徹（丹南高等学校）

“A Study on the Correlation between Listening and Reading”

### 第7回（昭和63年度）

十 郎 壽 夫（三国高等学校）

「西むく侍 教室で伝えたい「比較文化」の話あれこれ」

### 第8回（平成元年度）

高 島 嘉 子（高志高等学校） “A Study of Tense”

### 第9回（平成2年度）

応募作なし

### 第10回（平成3年度）

片 野 正 人（丹生高等学校） “ELLIPSIS PHENOMENA IN THE ENGLISH”

### 第11回（平成4年度）

該当作なし

### 第12回（平成5年度）

内 藤 徹（鯖江高等学校） 「STRUCTURE SHEET の試みとその効果」

第13回（平成6年度） 応募作なし

第14回（平成7年度） 応募作なし

第15回（平成8年度）

芝 和 身（敦賀気比高等学校）

“Motivational Strategies For the Foreign Language Classroom”

第16回（平成9年度）

田 渕 宏 明（小浜水産高校） 「内言を豊かにする言語活動の試み」

第17回（平成10年度）

丸岡高等学校英語科

“A Study of Systematic and Continuous Team-Teaching for Developing Students'  
Communicative Competence Writing-Centered Team-teaching”

第18回（平成11年度） 該当作なし

第19回（平成12年度）

稲 葉 芳 明（大野高等学校） 「生徒に読ませたい12篇の歌（詩）」

第20回（平成13年度）

八 田 秀 樹（武生第六中学校）

「実践的コミュニケーション能力の向上をめざした授業づくり」

第21回（平成14年度） 該当作なし

第22回（平成15年度） 該当作なし

第23回（平成16年度）

山 田 晴 美（盲学校）

“Evaluating Student Communicative Abilities in the 'Oral communication I' & 'Oral  
Communication II' Subjects in Japanese Local High Schools: Some Suggestion for  
improvement”

第24回（平成17年度） 応募作なし

第25回（平成18年度）

今 川 佳 紀（福井商業高等学校）

“Effective Ways of Enlarging Opportunities to Learn Communicative English through  
information and communication technology”

第26回（平成19年度）

該当作なし

第27回（平成20年度）

該当作なし

第28回（平成21年度）

稲 葉 芳 明（金津高等学校）

「幻影師ミルハウザー ～*Millhauser the Illusionist*～」

第29回（平成22年度）

応募作なし

第30回（平成23年度）

応募作なし

第31回（平成24年度）

応募作なし

第32回（平成25年度）

該当作なし

第33回（平成26年度）

応募作なし

第34回（平成27年度）

応募作なし

第35回（平成28年度）

稲 葉 芳 明（大野高等学校）

「The shop-soiled Galahad ～フィリップ・マーロウ：陋巷を行く、陋劣でない男～」

三 仙 真 也（藤島高等学校）

「英語ディベートの指導を通じた英語運用力と論理的思考力の育成」

第36回（平成29年度）

応募作なし

## 第37回岩崎賞論文募集要項

下記の要領で、第37回岩崎賞論文を募集しております。奮ってご応募下さい。

- 1) 内 容
- ① 英語教育に関する研究および実践記録
  - ② 英語学・英米文学に関する研究
  - ③ 英語一般に関する研究

※研究発表校指定等で発表したものをまとめなおして応募するのも可。

和文の場合は横書きで、400字詰め原稿用紙120枚程度、ワープロ使用の場合は1ページ44字×36行で、30ページ程度を最大とする。  
英文の場合はタイプ（ダブルスペース）で40枚程度（1枚65～66ストローク×25行）までとする。

2) 締 切 平成30年11月30日（金）

3) 送 り 先 〒918-8114 福井市羽水1丁目302  
福井県立羽水高等学校内  
福井県英語研究会事務局 宛



## 英研総会講演者一覧

平成29年 6月 9日（金） 福井県国際交流会館

演 題： 「英語落語の授業への活用」

講 師： 大 島 希巳江 氏 （神奈川大学教授）

平成28年 6月10日（金） 福井県国際交流会館

演 題： 「CAN-DO による授業改革」

講 師： 阿 野 幸 一 氏 （文教大学教授）

平成27年 6月10日（水） 福井県国際交流会館

演 題： 「高校英語教育と大学入試はどう変わるか」

講 師： 吉 田 研 作 氏 （上智大学特任教授）

平成26年 6月11日（水） 福井県国際交流会館

演 題： 「『英語の福井』のブランド構築に向けて」

講 師： 松 本 茂 氏 （立教大学教授）

平成25年 6月14日（金） 福井県国際交流会館

演 題： 「グローバル時代の英語教育」

講 師： 岡 秀 夫 氏 （目白大学教授）

平成24年 6月15日（金） 福井県国際交流会館

演 題： 「変わりゆく英語—変化に対応する英語教育のために」

講 師： 八 木 克 正 氏 （関西学院大学教授）

平成23年 6月17日（金） 福井県国際交流会館

演 題： 「万能主義的英語教育のすすめ」

講 師： 斎 藤 兆 史 氏 （東京大学教授）

平成22年 6月17日（木） 福井県国際交流会館

演 題： 「コーパスからわかる英語語彙指導のポイント」

講 師： 投 野 由紀夫 氏 （東京外国語大学教授）

平成21年 6月18日（木） 福井県国際交流会館

演 題： 「〈英語を英語で教える〉とはどういうことなのか」

講 師： 松 本 茂 氏 （立教大学教授）

平成20年 6月20日(金) 福井県国際交流会館

演 題: 「英語授業に関する反省(普段感じていること)」

講 師: 竹 中 広 信 氏 (駿台予備学校講師)

平成19年 6月15日(金) 福井県国際交流会館

演 題: 「日本語らしさ、英語らしさ」

講 師: 池 上 嘉 彦 氏 (昭和女子大学教授)

平成18年 6月16日(金) 福井県国際交流会館

演 題: 「日本の英語教育の現状と課題」

講 師: 和 田 稔 氏 (明海大学外国語学部教授)

平成17年 6月17日(金) 福井県国際交流会館

演 題: 「アクション・リサーチでの授業改善」

講 師: 佐 野 正 之 氏 (帝京大学文学部教育学科教授)

平成16年 6月18日(金) 福井県国際交流会館

演 題: 「英語が使える日本人の育成における英語教師の役割」

講 師: 渡 邊 時 夫 氏 (清泉女学院大学教授)

平成15年 6月20日(金) 福井県国際交流会館

演 題: 「プレゼンテーション指導の進め方とその効用」

講 師: 酒 井 志 延 氏 (千葉商科大学商経学部助教授)

平成14年 6月21日(金) 福井県国際交流会館

演 題: “Global Education and EFL: Teaching for a Better World”

講 師: Mr. Kip A. Cates (鳥取大学外国人教師)

平成13年 6月22日(金) 福井県国際交流会館

演 題: “P.E. in English, Math in English, Science in English”

講 師: Dr. Mike Bostwick (加藤学園バイリンガル教育ディレクター)

平成12年 6月16日(金) 福井県国際交流会館

演 題: 「ことばの世界とことばの教育ー認知科学からの提言」

講 師: 大 津 由紀雄 氏 (慶応大学教授)

平成11年 6月17日(木) 福井県国際交流会館

演 題: 「コミュニケーション能力の育成と単語・文法指導」

講 師: 阿 部 一 氏 (獨協大学教授)



- 平成10年 6月15日(月) 福井県職員会館  
演題 「英語教育でもっとやってほしいこと」  
講師 金谷 憲 氏 (東京学芸大学教授)
- 平成 9年 5月23日(金) 福井県職員会館  
演題 「これからの英語教育について」  
講師 茨山 良夫 氏 (福井大学教授)
- 平成 8年 6月14日(金) 福井県職員会館  
演題 「川は流れるー大海原にー情報発信のライティング」  
講師 藤枝 宏 壽 氏 (福井医科大学教授)
- 平成 7年 6月9日(金) 福井市フェニックスプラザ  
演題 “A PROFICIENCY-ORIENTED APPROACH TO WRITING”  
講師 中田 清一 氏 (青山学院大学教授)
- 平成 6年 6月10日(金) 福井商工会議所ビル  
演題 「異文化間コミュニケーション： アメリカの教壇からNHK英会話講師まで」  
講師 小川 邦彦 氏 (山梨大学教授)
- 平成 5年 6月18日(金) 福井市商工会館  
演題 “Seventy Years of Oral Communication”  
講師 伊村 元道 氏 (玉川大学教授)
- 平成 4年 6月19日(金) 福井市商工会館  
演題 “Teaching English to Promote International Understanding”  
講師 石井 敏 氏 (大妻女子大学教授)
- 平成 3年 6月14日(金) 福井市商工会館  
演題 「異文化を読むーコミュニケーションの視点からー」  
講師 岡部 朗一 氏 (南山大学教授)
- 平成 2年 6月15日(金) 福井市商工会館  
演題 「外国を読む」  
講師 外山 滋比古 氏 (昭和女子大学教授)
- 平成 元年 6月23日(金) 福井市商工会館  
演題 「英語教育に課せられた今日的課題ー学習指導要領の改訂の視点から」  
講師 小池 生夫 氏 (慶應義塾大学教授)

- 昭和63年 6月15日(金) 福井県民会館  
 演題 “Team Teaching: A Theoretical Look and Its Application”  
 講師 和田稔氏 (文部省初等教育中等教育局中学校課程教科調査官)
- 昭和62年 6月12日(金) 福井県民会館  
 演題 「今、英語教育に望まれるもの」  
 講師 橋本光郎氏 (青山学院大学教授)
- 昭和61年 6月7日(金) 福井県民会館  
 演題 「英語教育と辞書」  
 講師 小島義郎氏 (早稲田大学教授)
- 昭和60年 6月4日(火) 労働福祉会館  
 演題 “Trends and Problem in Japanese Education”  
 講師 Carl.B.Becker氏 (天理大学助教授)
- 昭和59年 6月8日(金) 福井厚生年金会館  
 演題 「不明」  
 講師 吉田研作氏 (上智大学)
- 昭和58年 6月8日(金) 福井厚生年金会館  
 演題 「英語の音について」  
 講師 高橋敏彦氏 (国際教育交換協議会(CIEE)企画主任)
- 昭和57年 6月8日(火) 福井市民福祉会館  
 演題 「英語教育とは何だろうー横文字編集長の英語教育論」  
 講師 巳野保嘉治氏  
 (日本工業新聞論説委員・英文経済月刊誌 BUSINESS JAPAN 編集長)
- 昭和56年 6月2日(火) 至民中学校、福井市農協社支所ホール  
 演題 「英語を聞くこと、話すこと」  
 講師 長崎玄弥氏

# 福井県英語研究会歴代役員一覧

(2006年～2017年)

		2006（H18）		2007（H19）		2008（H20）	
会 長		金牧 廣（勝 山 高）		澤本 啓一（敦賀工業高）		松田 通彦（高 志 高）	
副 会 長		土田純一朗（森 田 中）		土田純一朗（森 田 中）		岡本 章（松 陵 中）	
		大下ひとみ（武 生 東 高）		大下ひとみ（武 生 東 高）		橋本 栄二（敦 賀 高）	
企画部	部 長	澤田 則義（大 野 高）		澤田 則義（大 野 高）		澤田 則義（大 野 高）	
	副部長	斎藤 将親（大 野 東 高）		広瀬 泰司（陽 明 中）		広瀬 泰司（陽 明 中）	
放送テスト部	部 長	尾形 俊弘（武 生 一 中）		濱野 則子（鯖 江 高）		濱野 則子（鯖 江 高）	
	副部長	濱野 則子（鯖 江 高）		森 一生（丹 南 高）		森 一生（丹 南 高）	
		森 一生（丹 南 高）		高松三七子（鯖 江 中）		高松三七子（東 陽 中）	
広報部	部 長	北川 一（高 志 高）		北川 一（高 志 高）		北川 一（高 志 高）	
	副部長	笹木 英俊（大 野 高）		笹木 英俊（大 野 高）		笹木 英俊（大 野 高）	
研究部	部 長	山内 悟（勝 山 高）		竹本 俊穂（高 志 高）		竹本 俊穂（高 志 高）	
	副部長	竹本 俊穂（高 志 高）		清水 慈昭（丹 南 高）		清水 慈昭（丹 南 高）	
				今川 佳紀（福井商業高）		今川 佳紀（福井商業高）	
監 事		三田村隆泰（武生商業高）		三田村隆泰（武生商業高）		岩本 公信（武生商業高）	
		松田亜紀子（羽 水 高）		鈴木 千文（武 生 高）		内藤 俊治（福井商業高）	
教 育 庁		佐々木栄秀		佐々木栄秀		佐々木栄秀	
		水谷 善長		水谷 善長		尾形 俊弘	
教育研究所		杉俣 佳弘		杉俣 佳弘		杉俣 佳弘	
事 務 局 長		山口 正純（丸 岡 高）		山口 正純（丸 岡 高）		馬谷 康熙（鯖 江 高）	
庶 務		高倉 泰希（丸 岡 高）		高倉 泰希（丸 岡 高）		飯田 倫代（鯖 江 高）	
会 計		杉山 正晃（丸 岡 高）		杉山 正晃（丸 岡 高）		吉田 愛子（鯖 江 高）	

		2009 (H21)	2010 (H22)	2011 (H23)
会 長		坂本 伸子 (金 津 高)	坂本 伸子 (金 津 高)	片野 正人 (武生商業高)
副 会 長		山口 和代 (武 生 三 中) 森下 秀樹 (丸岡高城東分校)	馬場 朝子 (川 西 中) 森下 秀樹 (三 国 高)	馬場 朝子 (足 羽 一 中) 森下 秀樹 (三 国 高)
企 画 部	部 長	澤田 則義 (大 野 高)	澤田 則義 (藤 島 高)	澤田 則義 (藤 島 高)
	副部長	広瀬 泰司 (陽 明 中)	広瀬 泰司 (陽 明 中)	広瀬 泰司 (陽 明 中)
放 送 テ ス ト 部	部 長	濱野 則子 (鯖 江 高)	森 一生 (丹 南 高)	森 一生 (丹 南 高)
	副部長	森 一生 (丹 南 高)	高松三七子 (東 陽 中)	高松三七子 (東 陽 中)
		高松三七子 (東 陽 中)	高津 和幸 (嶺 北 養 護)	高津 和幸 (嶺 北 養 護)
広 報 部	部 長	笹木 英俊 (大 野 高)	笹木 英俊 (大 野 高)	笹木 英俊 (大 野 高)
	副部長	島田 敏宏 (三 国 高)	島田 敏宏 (三 国 高)	島田 敏宏 (三 国 高)
研 究 部	部 長	清水 慈昭 (丹 南 高)	清水 慈昭 (丹 南 高)	清水 慈昭 (丹 南 高)
	副部長	森本 浩司 (武 生 高)	森本 浩司 (武 生 高)	森本 浩司 (武 生 東 高)
		今川 佳紀 (福井商業高)	酒井 睦夫 (明 道 中)	酒井 睦夫 (明 道 中)
監 事		岩本 公信 (武生商業高)	岩本 公信 (高 志 高)	野村あゆみ (鯖 江 高)
		内藤 俊治 (福井商業高)	内藤 俊治 (教育研究所)	宮西 芳弘 (福井商業高)
教 育 庁		佐々木栄秀	今川 佳紀	竹本 俊穂
		尾形 俊弘	尾形 俊弘	尾形 俊弘
教育研究所		山森 義弘	竹本 俊穂	磯野 和之
事 務 局 長		杉俣 佳弘 (鯖 江 高)	稲葉 芳明 (金 津 高)	稲葉 芳明 (金 津 高)
庶 務		馬谷 康熙 (鯖 江 高)	高倉 泰希 (金 津 高)	高倉 泰希 (金 津 高)
会 計		野村あゆみ (鯖 江 高)	石津 麻美 (金 津 高)	石津 麻美 (金 津 高)
				矢尾百々衣 (金 津 高)

		2012（H24）		2013（H25）		2014（H26）	
会 長		片野 正人（武生商業高）		片野 正人（武生商業高）		片野 正人（武 生 高）	
副 会 長		岩崎 紳二（福井大学付属中）		岩崎 紳二（福井大学付属中）		松田 新一（進 明 中）	
		荒川 治和（羽 水 高）		木下久仁雄（道 守 高）		木下久仁雄（道 守 高）	
企画部	部 長	澤田 則義（藤 島 高）		澤田 則義（大 野 高）		澤田 則義（藤 島 高）	
	副部長	広瀬 泰司（陽 明 中）		広瀬 泰司（開 成 中）		広瀬 泰司（開 成 中）	
放送テスト部	部 長	森 一生（丹 南 高）		森 一生（丹 南 高）		森 一生（丹 南 高）	
	副部長	高松三七子（東 陽 中）		高松三七子（東 陽 中）		高松三七子（朝 日 中）	
		高津 和幸（嶺 北 養 護）		林 淳子（福井商業高）		林 淳子（福井商業高）	
広報部	部 長	笹木 英俊（大 野 高）		笹木 英俊（藤 島 高）		笹木 英俊（藤 島 高）	
	副部長	島田 敏宏（三 国 高）		島田 敏宏（三 国 高）		稲葉 芳明（金 津 高）	
研究部	部 長	森本 浩司（武 生 東 高）		森本 浩司（武 生 東 高）		森本 浩司（武 生 東 高）	
	副部長	辻 智生（敦 賀 高）		辻 智生（敦 賀 高）		村 昭信（金 津 高）	
		酒井 睦夫（明 道 中）		村 昭信（丸 岡 高）		辻 智生（敦 賀 高）	
監 事		野村あゆみ（鯖 江 高）		石津 麻美（福井東特別支援）		荻野 哲央（道 守 高）	
		荻野 哲央（道 守 高）		荻野 哲央（道 守 高）		三田村弘美（丹 生 高）	
教 育 庁		竹本 俊穂		竹本 俊穂		竹本 俊穂	
		尾形 俊弘		西 健		西 健	
教育研究所		磯野 和之		磯野 和之		森 美穂	
事 務 局 長		鈴木 秀人（丹 生 高）		鈴木 秀人（丹 生 高）		藤田 裕彦（高 志 高）	
庶 務		吉田 充宏（丹 生 高）		吉田 充宏（丹 生 高）		上杉三陽子（高 志 高）	
会 計		木下久仁雄（丹 生 高）		三田村弘美（丹 生 高）		西川 潤也（高 志 高）	
		三田村弘美（丹 生 高）				山本 美好（高 志 高）	

		2015（H27）		2016（H28）		2017（H29）	
会 長		片野 正人（武 生 高）		水戸守 寿（武 生 東 高）		松田 新一（進 明 中）	
副 会 長		松田 新一（進 明 中）		松田 新一（進 明 中）		勝木 博一（嶺南東特別支援）	
		田中 宏明（敦 賀 高）		勝木 博一（嶺南東特別支援）		水谷 善長（武生第三中）	
企 画 部	部 長	澤田 則義（藤 島 高）		西口 佳光（丹 生 高）		西口 佳光（丹 生 高）	
	副 部 長	広瀬 泰司（開 成 中）		広瀬 泰司（開 成 中）		山口 隆子（丹 生 高）	
放 送 テ ス ト 部	部 長	森 一生（武 生 東 高）		加藤 修（三 国 中）		加藤 修（三 国 中）	
	副 部 長	林 淳子（福井商業高）		伊藤美智子（敦 賀 高）		伊藤美智子（敦 賀 高）	
		伊藤美智子（南越特別支援）		渡邊衣咲子（松 陵 中）		野崎 恵美（社 中）	
広 報 部	部 長	稲葉 芳明（大 野 高）		稲葉 芳明（大 野 高）		稲葉 芳明（大 野 高）	
	副 部 長	笹木 英俊（藤 島 高）		笹木 英俊（藤 島 高）		鈴木 秀人（羽 水 高）	
研 究 部	部 長	辻 智生（敦 賀 高）		辻 智生（敦 賀 高）		辻 智生（敦 賀 高）	
	副 部 長	村 昭信（金 津 高）		村 昭信（金 津 高）		村 昭信（金 津 高）	
						水木 毅（武 生 東 高）	
監 事		三田村弘美（丹 生 高）		三田村弘美（丹 生 高）		三田村弘美（丹 生 高）	
		北川 一（金 津 高）		北川 一（金 津 高）		北川 一（金 津 高）	
教 育 庁		浅井 裕規		岩本 公信		岩本 公信	
		西 健		上田外史彦		上田外史彦	
教育研究所		木下 弥		富田 秀明		澤田 則義	
事 務 局 長		藤田 裕彦（高 志 高）		中村 珠美（福井商業高）		中村 珠美（福井商業高）	
庶 務		杉山 正晃（高 志 高）		渡辺さゆり（福井商業高）		伊藤 仁美（福井商業高）	
会 計		山本 美好（高 志 高）		石田 洋志（福井商業高）		石田 洋志（福井商業高）	
		高島 理恵（高 志 高）					